

最弱無敗の神装機竜——四天の竜——

パンティー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

四天の竜を操る者現れし時、世界は振り子のように再び動く。

それが、破滅であるか、希望であるか、ルクス達全ての人間に託された。

「さあ、お楽しみはこれからだ！」

*この小説は、投稿者が「遊戯王 ARC-V」に出てくる「四天の竜」と装甲機竜ドラッグナイドを混ぜたら面白そう。と、思っただけの小説です。批判、アドバイス、どしどしお願いします。

目次

設定	1
一章	
Part 1 出愛	6
Part 2 決闘、スタート!	18
Part 3 転入、そして新たな生活	44
Part 4 過去の傷、未来への笑顔	68
Part 5 描け天空の虹彩(アーク)!	100
Part 6 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》	118
二章	
Part 7 ランディング&ランアウェイ	133
Part 8 マインドクラッシュ!(1)	151
Part 8 マインドクラッシュ!(2)	166
Part 9 鍵の少女と秘眼の竜(1)	188
Part 9 鍵の少女と秘眼の竜(2)	206
Part 9 鍵の少女と秘眼の竜(3)	214
Part 10 《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》(1)	228
Part 10 《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》(2)	239
三章	
Part 11 学園最強	260
Part 12 宣戦布告	275
Part 13 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》(1)	

コラボ	Part 2	387
コラボ	Part 1	373
Part 6	終炎の剣	351
Part 5	終焉神獣	331
Part 4	少年の過去	318
306	Part 3	289
	《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》(2)	

設定

名前：ジークⅡザン・フロリア・エリック・ルーカス

スペル：SieggⅡXan・Floria・Elick・Rucca

S

性別：男

身長：170cm

体重：60kg

夢：将来、ドラッグナイド装甲機竜が皆を笑顔に出来る世界にすること

好きなこと：笑顔

苦手なこと：怒り、悲しみ

二つ名：『道化師』

口癖：「さあ、お楽しみはこれからだ！」

『ジーク』

お気楽でプレイボーイの青年。人格を四つも持っていて、普段は「ジーク」の部分が出ている。よく、名前が長いと言われている。

瞳は深碧色で黒髪、前髪の一部が赤い色。首からペンデュラムを下げている。肩には赤い刺青が入っている。

機竜の腕はそこそこでプレイスタイルは、「エンタメ」。相手と互角の戦いを演じて、皆を笑顔にさせるこそが彼の信条。そのため、夢は『将来、ドラッグナイド装甲機竜が皆を笑顔に出来る世界にすること』。だが、ジークはこの夢に取り憑かかれています『誰かを笑わせないといけない』、『自分は度外視してでも笑わせなければ』という感じに『自分自身が勘定に

入っていない』。彼は元々、旧帝国の時に拉致された者。体中が傷だらけで、腹に抉ったような傷があり、そこには元々『旧帝国の烙印』があった。しかし、それでも彼は旧帝国の人間を恨まない。「何かしらの事情があった」、「仕方がないこと」で彼は許してしまう。こんな夢を持った理由は、目の前で仲間を殺され、仲間と引き離されたことに原因がある。

ルクスとフィルフィとは遊び仲間みたいな感じで、付き合いは長い。クルルシファー以上の秘密主義であり、常に掴み所のない話し方を好む。『神算鬼謀』と言われる程の戦略を立てるのが得意で、ルクスやセリスを上回るほど。

第六遺跡『箱庭』の中の構造、鍵エクスの管理者が遺跡ルインに与える影響などを知っている。しかも、バルゼリッドからは『裏切り者』ダブルクロスと呼ばれると口調も性格も激変するなど、帝国の内部事情を知っている節を見せている。

元ネタは、遊戯王 ARC-Vの『神遊矢』。

『フローリア』

第二の人格。

性格はジークとは反対で、寡黙で感情を表に出さない。しかし、ジークの事を気にかけたたり、リーシャに助言をしたりなど、根は優しく争いを好まない。瞳は黒、前髪も若干変わっており赤かったのが青に変わっている。

『エリック』

第三の人格。

常に元気だが、他の人格からは「アホ」等言われている。髪色は金色で、瞳は翡翠色。

『ルーカス』

第四の人格。

サディスト、超ドS、ゲス野郎。髪色は紫で、瞳は紫色。

神装機竜：「オッドアイズ・ドラゴン」

スペック

- ・機動力：C+
- ・耐久力：E
- ・制御力：A
- ・出力：D
- ・遠距離火力：E+
- ・近接戦闘力：C-
- ・特性：飛翔型
- ・武装：機竜爪剣×4、機竜牙剣、《V・F・D》
- ・特殊武装：《スパイラルフレイム》
- ・神装：《天空の虹彩》：進化の神装。

詠唱：

「さあ、拍手でお迎えください！ 本日の主役、世にも珍しい二色の目をもつ竜！ 《オッドアイズ・ドラゴン》！」

概要：

使用している神装機竜の「オッドアイズ・ドラゴン」は余り強くない。性能事態が汎用機竜と同等であるため、正しく「最弱の神装機竜」。詠唱となっているが、それは彼が勝手に付けたモノで、本来はない。

ソード・デバイス
機攻殻剣：

赤い柄と同じ色の鞘に納めている。柄部分は赤、青、緑、紫の宝石が埋め込まれている。

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」

スペック

- ・機動力：B
- ・耐久力：C+
- ・制御力：B
- ・出力：A
- ・遠距離火力：B+
- ・近接戦闘力：B
- ・特性：飛翔型
- ・武装：《V・F・D》ザ・ビースト
- ・特殊武装：《スパイラルフレイム》、《虹咆哮》リアクション・フォース

詠唱符：

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！ 現れる、雄々しくも美しく輝く二色のまなこ！ 《オツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

概要：

《オツドアイズ・ドラゴン》の真の姿。神装《天空の虹彩》スカイ・アイリスを使用した時のみこちらの姿になる。オールラウンダー型で出力も《オツドアイズ・ドラゴン》の十数倍ほどで神装機竜の名に相応しい力^{ふさわ}を発現する。

「ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」

スペック

- ・機動力：C
- ・耐久力：C+
- ・制御力：B+
- ・出力：B
- ・遠距離火力：B
- ・近接戦闘力：C+
- ・特性：特製型
- ・武装：《V・F・D》ザ・ビースト、《機竜竜尾》ワイヤーテイル

・特殊武装：《シャイニーバースト》

概要：

《オッドアイズ・ドラゴン》の特装型の姿。特装型の機攻殻剣ソード・デバイスと《オッドアイズ・ドラゴン》があればこの姿になれる。全体的に《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》に負けているが、その代わりに特装型の特性を持ち合わせている。

「技」

影撃：ジークの十八番。一投目の機竜爪剣ダガを投げて、瞬時に二投目を神速制御クイックドロウで投擲する。そうすることで、二投目が一投目の陰に隠れる。

対奥義：旧帝国から伝わる三大奥義に対抗するための技。

《超越制御》ビヨンド・スラッシュ：神速制御クイックドロウと永久連環エンドアクションの組み合わせ。一撃をして二撃。二撃目の速さは神速制御を超える。

一章

Part 1 出愛

「待てえええええっ！」

「おーい、待ってくれー！」

二つの叫び声が、立ち並ぶ建物に反響する。五つの市街区から成る、十字型の城塞都市、『クロスフィード』。その中心の中央通りを、三つの影が走っていた。先を行く影の片方は、小さなポシエットを啜えた、虎模様の猫。それを全力で、二つの少年の影が追っている。

一つは首輪をつけた銀髪の少年——ルクス・アーカディア。

もう一つは、黒髪に前髪の一部だけ赤い、深碧の瞳を持つ首から青色のペンデュラムを吊下げる少年——ジークⅡザン・フローリア・エリック・ルーカス。

何故、彼らが猫を追いかけているのかというと。昨晚、運悪く寢床のなかった彼らを、快く泊めてくれた酒屋の娘。その女の子が持っていたポシエットがこの猫に盗られたからだ。女の子には無理しなくていい、と言われたが、ジークとルクスはそれを断り、全力疾走している。

目の前に坂道が見えてきた、ここでペースダウンする猫を捕まえ——

「……おや、坊やたちじゃないか？ 久しぶりだな。今度はうちで働いてくれるか？ この時季、種まきの人手が足らなくてのう……」

「ごめんなさい！ 今ちよつと手が離せなくて、また今度——」

「また今度やるよ！」

道の脇にいた老人に呼び止められ、ジークとルクスは失速する。律儀に挨拶した後、また全力でダッシュする。だが、次は遠目に、恰幅のいいおばさんの姿が見えた。

「おや、ルクスとジークじゃないか？ 今度うちの食堂も手伝っておくれよ。もうすぐアティスマータ新王国の建国記念日だからね。パーティー用の料理、あんたたちもちよつとは作れただろ？」

「そのときにはお伺いしますから！」

「ごめんさい！」

その後も沢山の人から声をかけられ、ルクスがベルトのポーチから取り出した手帳とペンでメモるが、次から次へとキリがない。

「ああ、ルクス！ 猫が行っちゃたよ！」

既に猫は坂道を越え、家の屋根に登っていた。

「ああもう！ 僕が対応するからジークに任せた！」

「OK、任された」

そう言うと、二人の行動は早かった。ルクスは腰を落とし手を前で組むと踏み台役を、ジークはその手に乗っかり飛ぶ。

「あと二度上げて」

「細かいよ！」

ジークの注文にルクスは答える。二人の息の合った動きでジークは屋根に乗ることに成功した。それを観ていた人達が拍手を送るが、それに返す余裕が無い。

ジークは屋根を飛びながら移動する。すると、急に大きな敷地に出た。最初は軍の駐屯所かと思っただが、この中央一番街区では、確か別の場所だったはずだ。まあ、言い訳はできるか。そう思っていると、猫はポシエットを啞えたまま、更に建物の屋根に登った。

「ちよ、行くな！」

ジークも、塀を蹴って屋根に飛び移る。多分、この時のジークの心情は意地に近いものだっただろう。

「さあー、ここまでだ！」

足場が少なくなつたところで、ジークはじりじりと猫に近づく。先に動いたのはジークだ。

「ニヤッ！」

さすがに猫の速さには負けるが、元から狙いは少女のポシエット。肩掛け紐に指を絡ませ、引つ張る。ついに猫は啞えていたポシエットを離した。

「おっしや！」

なんとか取り戻せたことにジークは安堵する。起き上がって辺り

を確かめると、既に夕方になっていた。ルクスと合流するべく足を動かす。

「さて。戻るか——」

ジークが屋根から降りようと思ったとき、
ピシッ！

という、不穏な音を聞いた。

「おう……」

ジークは音の発生源、屋根に手をついたジークが体重を預けている、一点を見つめ悩ましい音を出した。

「ま、まさか！」

慌てて、ジークはその場を離れるが、遅かった。ピシピシッと、手の下で生まれた亀裂は、加速度的に勢いを増し、砕ける。

「なんでええええっ!?!」

体重が消える感覚と共に、ジークは落下した。

バシヤアアアアツ……! !

一秒後、ジークは着水する。

「うええええっ! おぶっ! ……ん?」

どうやら下は水だった。いや、自分の腰の下が温かいのを見ると、お湯だろう。木綿のズボンが濡れてしまったが、それよりもそれに気づいた。天上の破片が落下しすぐ近くにいた、小柄の少女の上に——

「危ねえ!」

ジークは素早く飛んで、少女を突き飛ばし、覆い被さった。

「いっつう……」

破片が頭にぶつかった。血は多分出ていないだろう。

「……おい」

「ん? ……あれ?」

ジークは呼びかけられた方向に目を向けると、肌色があつた。視界を覆う、白色の湯気にランプで淡く照らされた大理石の柱と、壁が見

える。ジークは此処がどんな場所か一瞬で理解した。

そう、浴場だ。

そして、顔を上げると湯気の向こうで少女たちがびくつとした。それに、ジークは苦笑いで返す。

「おい変態。死ぬ前に、何か言うことはないか?」

再び少女の口から、物騒な言葉が飛んでくる。まあ、怒るのも無理はない。だがまあ、次の一言で自分の運命は決まってしまうのか。とりあえず相手の事を見ることにした。

鮮やかな金髪に、勝ち気な赤い瞳が印象的な少女。か細い体躯とは裏腹に、ある種の老成した笑みが、その口元に浮かんでいる。色白の滑らかな肌は、入浴のせいで上気し、頬まで赤く染まっていた。

ううん、これは――。

ジークは羽織っていた上着を少女に掛けると、

「お譲さん^{デレ}、お怪我はないか?」

「……は?」

ジークは少女の手を取り、肩膝を立ちになり恭しく言葉を出した。目の前の少女はポカンとなっている。

「全体的には子供……いや、まだ幼い感じなのに、胸は結構ある。実に素晴らしい――結婚してくれ!」

「……!」

ジークの渾身の告白に少女は真っ赤になる。逆にジークは決まったとドヤ顔だ。周囲の少女たちは「キヤー!」と、黄色い声を出す。

「ふっ、決まつ――ブヘラア!」

ジークが呟いた次の瞬間、宙を舞った。鼻から鮮血をまき散らしながら着水する。少女がジークの顔面に向かって拳を見舞ったからだ。

「お、お前! なな、何を考えているんだ!」

少女はジークの上着で体を隠しながら拳を怒りで振るわせる。

「な、何がいけなかったんだ!」

「お前は今ので良かったと思ってるのか!」

「え、うん」

ジークは鼻を押さえながら頷く。目の前の少女は「ダメだ」と言い

たげな表情をする。

「おーい、ジーク！」

「うん？ あ、ルクス！」

上から聞き慣れた声がすると思つて顔を上げると、案の定にルクスが開いた天上の穴からこちらに声をかけていた。

「どうしてこんな所にいるんだ？」

「こつちの方に行つたつて聞いて。後、さつきジークの叫び声が聞こえて来た。それよりも、なんでこんな所にいるの!？」

「あー滑つた」

背後で少女が「違うだろ」と目で訴えて来るが、この時のジークは気づかなかつた。

「とりあえずここから出てくるから先に外で待つててくれ」

「わかつた！」

そう言うと、ルクスは姿を消した。

「お前、逃げられると思つているのか？」

背後にいる少女は怒気を含んだ声で言つてくる。

「さあ、なんとかなるんじゃない？」

「ふんっ！ もう少して三和音トライアドが騒ぎを聞き付けて来る。そしたら

——」

「まずは今の自分の姿を見てからいいなよ？」

「——っ！」

ジークが言つた瞬間、少女たちはたじろいだ。出来た隙をジークは見逃さない、少女たちを縫うようにして浴場の扉まで行く。

「ごめんね！」

ジークは最後に謝ると浴場から思いっきり駆けだした。走つている最中に見たこの建物の内部。廊下に敷かれた、高級感のある赤絨毯。パーティ会場のような広い食堂、遊戯室、無数の客室。所々に置いてある、上品な絵画と調度品。

「んん？ この建物って——」

最初に思つた大浴場つき的高级宿かと思つたが、それにしても広過ぎる。そんな事を思っていると、目の前に少女たちが現れた。

「あつ！ いたわ！ うちの子の胸を触った痴漢はこつちよ！ 早く槍を持ってきて！」

「待った！ 押し倒した事は認めるが胸を触った覚えはないぞっ!?!」

そう言いながらもジークは逃走を止めない。追いかけたら逃げなくなるのがやはり人間の心理なのか。

「さあ、後少しだ！ このまま突っ切る——」

この建物のエントランスと思われる場所に着いた時、

「むっ!?!」

ジークは立ち止まり、エントランスの中心部——そこにいる三人の、帯剣した少女を見つめた。

「王立士官学園校則、第十八条」

静かな声が、その三人のひとり。凛々しい顔の蒼髪の少女から、発せられる。容姿も雰囲気も違うが、制服と腰に差している剣帯だけが、共通していた。

「学園の内外を問わず、上官の許可なく機攻殻剣を抜くことを禁ずる。ただし現行犯の確認、あるいは自身に危険が及ぶ場合のみ、抜剣と装甲機竜の使用を許可する」

「……え!?! 今、なんて言った？ 機攻殻剣と——装甲機竜だど!?!」

蒼髪の少女から発せられた言葉にジークは驚愕の声を出す。なんでこの名が——？

「さあ、やるぞ。テイルファー！ ノクト！」

「おっけー！」

「Yes, My Lord. ですが、一応気をつけてください。シヤリス」

シヤリスと呼ばれた蒼髪の少女と、その両脇に佇んでいた、二人の少女。その三人が、一斉に剣の鞘を払った。銀色の刀身に、輝く銀線が浮かんだ剣——機攻殻剣を。

「——ッ!?!」

ジークの顔に焦りが浮かぶ。

「——来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ、
《ワイバーン》！」

シャリスが詠唱を言った瞬間、振るった剣先が揺らめき、そこに高
速で光の粒子が集まった。

「接続・開始」

シャリスが纏ったのは、機械の竜だった。無数の部品が連結され、
シャリスの両腕、両脚、胴、頭へと、一つの竜になった。

「装甲機竜!? なぜ——」

ジークが呆気にとられていると、シャリスはやれやれと呆れ顔で
言った。

「おやおや、ここがどこかもわからず忍び込んだのかい？ だが、
すつとぼけても無駄だよ、変質者くん。諦めてそこに土下座したま
え。今なら鞭打ち十発くらいで済ませよう」

「うんうん。覗きは犯罪だよー」

「Yes, My Lord. どちらにしろ、処罰します」

リーダー格らしいシャリスの言葉に、軽い調子の少女、テイル
ファート、冷静な雰囲気少女、ノクトが同意する。二人もシャリス
の《ワイバーン》とは違う機体を身に纏っている。

「ちよっ！ やばくない!?!」

逃走犯を捕まえるためとはいえ、生身の人間に使っていい装備では
ない。

「はっー!」

《ワイバーン》がシャリスの掛け声と共に飛翔する。脚部と背中の
両翼の装甲から、光を帯びた風を噴出。一気にエントランスから、二
階の吹き抜けにいるジークを襲う。そして、金属の装甲で覆われた腕
を思いつきり振る。

「うぬおおおおっ!?!」

とっさに、ジークは横転してかわす。ジークがいた場所は、バラバ
ラに砕け散っていた。

「しまったっ！ スピードを抑え過ぎたか?」

「逆なんですけどっ！ 死んじやうから俺!?!」

シヤリスにツツコミを入れつつ、ジークは階段を転げるように降りる。だが、今まで入り口にいた陸戦用の装甲機竜^{ドラグナイド}。翡翠色の《ワイアーム》を装着したティルファーが、即座に行く手を塞いできた。「ひやつふううう。あーあー、てすてす。その変態さんに告ぐ。今なら罪は軽いよー?」

「それ言うなら機竜を解除してから言ってくれないかな!」

ツツコミを入れるジークだが、実際には余裕がない。シヤリスが纏う飛翔汎用型《ワイバーン》は、飛翔性こそがポテンシャル。そのため、屋内ではそこまで脅威ではない。だが、陸戦汎用型《ワイアーム》は厚い装甲に覆われた四肢、複数の可変フレームにより高い機動性を持ち、屋内での戦闘、近接戦闘に最も適した性質を持つ機竜だからだ。「まー何でもいいから、大人しくなつてよ。変に暴れるとかえって危ないんだよ」

「いや、むしろ殺されそうなんだけどっ!」

ジークは階段から一階に飛び降りる。だが――、

「おおっとー! ここは通さないよー!」

ティルファーは即座に《ワイアーム》を動かした。身に纏った装甲ごと、階段の手すりを軸に側転し、着地した。

「てやつー!」

その装甲を纏ったティルファーの右腕が、振り下ろされる。

「ふおおおおっ!」

バアン! という破碎音と共に、木製の床が砕け、粉塵が舞い上がる。だが、ジークは《ワイアーム》の脇をヘッドスライディングするように滑り、回避した。《ワイアーム》の背後に回ったジークは、再び逃走する。しかし――、

「まだまだ!」

「がつ!」

ティルファーは裏拳を見舞う。ジークは腕を前にして防ぐが、軽々と弾き飛ばされ入り口付近まで転がる。

「あ、やつべー! ついやっちゃった!」

「大丈夫だ! あの程度では多分死んでない!」

「だといいんだけど。——あれ?」

《ワイアーム》を纏ったテイルファーが、背後を見て、首を傾げる。消えていたのだ。たった今、目の前で弾き飛ばされたはずの、ジークの姿が。

「……まさか、わざと攻撃を受けたのか!?!」

「えっ……?」

シャリスはジークの行動に気づき、そして戦慄した。ジークは《ワイアーム》の背後に回り裏拳を受ける、そして弾き飛ばされる。常人が受ければ当然、大怪我になる威力を、ジークは地面を転がることでダメージを地面に逃がしたのだ。

「そして、そのまま起き上がって逃走。テイルファーがあそこで攻撃をしてくることを計算されていたのか」

「むうっ……」

まさか自分自身も逃走の計画に入れられていたことに不満げな顔を作り、ジークを追いかけたとき、

「追うなよ、テイルファー」

シャリスの冷静な声が、テイルファーを止めた。

「でもでも……このまま逃がしたら——」

「大丈夫だ。ノクトが既に動いている。取り逃しはしない」

シャリスはテイルファーを宥めつつ、周囲に視線を彷徨わせる。

「だが、どういうことだ? 生身で逃げ切るだ……。しかも、瞬時に私たちを逃走の手段に使うなど。まるで、私たちの三種の機竜の特性を、見抜いたかのような——何者なんだあの少年は?」

真剣な声音で、ただ、そう呟いた。

?

「いってー、腕折れたかな?」

屋内から脱出したジークは、攻撃を受けた腕を擦りながら呟く。後少しでここから逃げられる。事態が収まったら謝りに来よう。

そんな事を考えながら門に向っていると、眼前を何か擦過した。

「止まってください」

そう、落ち着いた声音でジークに静止の言葉をかけてきた。ジーク

は首をそちらに向けると特装汎用型《ドレイク》を纏った少女、ノクトと呼ばれていた少女が機竜息銃プレスガンをジークに向けていた。先程、ジークの眼前を擦過したのは機竜息銃プレスガンから射出した弾丸だ。

「おう、マジか……」

ジークの頬に一筋の汗が流れる。特装型の汎用機竜《ドレイク》は、索敵、迷彩、支援、補助、修復などの特殊機能を備えた機竜であり、基本性能こそやや低めなものの、特定状況下での強さは、他の二種を凌駕する。その特性の一つである頭部に装着されたゴーグルにより、暗闇の中でもジークを視認できる。この状況で逃走など難しい。

「もう一度だけ警告をします。止まりなさい。止まらないと撃ちます。止まっていれば優しく撃ちます」

「優しくって、どういうこと!?!」

ジークは疑問に思ったことを口にした。

「Yes. 死ななければいいなあ。的な意味です」

「気持ちだけの問題だったんだ!?!」

「Yes. あと、なるべく苦しめないといいなあ。的な意味でもあります」

「何かもう殺してもやむなしって空気なんだけど!?!」

だめだ、こりゃ。ジークは天を見上げた、月がこちらに降り注いでいる。まるで諦めろとでも言いたげだ。

「わかった。降参、投降するよ」

「Yes. では、腰に差している剣をこちらに投げてください」

領きベルトを緩め、腰に差している剣を胸の前に掲げ、少女に投げ渡——

「おっと、指が滑った」

さず。ジークは指で剣の鰐つばを弾き、刀身を出す。

「ツ……」

瞬間、ノクトが装甲のゴーグルを、自分の手で遮った。何故か？

その答えはジークが持っている剣の刀身に、月の月光が反射したのだ。感度を上げているゴーグルでは眩し過ぎる。

「Yes. 《ドレイク》の特性を知っているようですね。ですが、

それだけじゃ——」

《ドレイク》のゴーグルを通して得られる視界感度は、すぐに調整できる。ノクトが再び機竜^{プレスガン}息銃の照準を合わせるため、手で覆っていた顔を晒したとき、

「——!?!」

眼前に、ジークが迫っていた。

「くっ……」

慌てて装甲碗を上げるが、遅い。ジークが先に動いた。腕をノクトに振るう。

「パアアン！」

「くあっ……い！」

鋭い音と共に、ノクトはその場に膝をついた。ジークは両手をノクトの前で打ち合わせ、『猫だまし』という威嚇の攻撃をした。ジークの思惑通り、ノクトは意識が刈り取られた。だが、すぐに回復をするだろう。

「ごめんね」

ジークは律儀に謝ると再び逃げる。

「おし、これでなんとか——」

ノクトを退け、これで障害はない。逃げちゃっていいはずはないんだが。向こうが落ち着いたら、ちゃんとわけを話して謝ろう。

「——」

そう思ったとき、気づけば目の前に、少女がいた。そして、その少女の足元に見知りの人物——、ルクスが倒れ伏している。

「ルクス——!」

ジークは弾かれたかのように走り、友人の所まで近づくと、

「日頃の恨みだ——!」

蹴った。

「最近、色んな女の子にモテてるからって調子に乗り上がって!

おりゃ! そりゃ! どうだ! 俺の恨みは効くか!?!」

ジークは怒りの形相でルクスを軽く蹴る。気絶しているルクスは

「うぐっ！」としか言わない。

「——夢中の所、ちよつといいかしら?」

「ん……?」

ルクスを蹴るのに夢中になっていたジークは透き通った声に我に帰る。

ジークの見たその少女は、美しかった。すらりとした細身の身体と、端正な顔立ちに、冷たい瞳。まるで完璧な美術品のように、少女は緊張も緩みも見せず、ルクスの前に立っていた。

「その可愛らしい覗き魔さんのお仲間さんかしら? なら、大人しく捕まってくれるとありがたいんだけど?」

「ううむ、友達だけど。捕まると俺もルクスも後が困るんだよなあ」
そう言い、ジークはルクスを拾い上げ肩に乗つける。そして、無理やり突っ切るため姿勢を低く下げる。

「彼を置いてけば貴方なら逃げ切るんじゃないかしら?」

「いやーやっぱり友達は捨てて行けない、しよっ!」

ジークは少女の目の前まで走ると、左にフェイント、そして右へターン。少女は反応できていない。抜き去った。ジークがそう確信した瞬間——、

「——甘いわね」

少女の声と同時に、天地が反転した。

「おわ——!?!」

一瞬の疑問の後に、全身に衝撃が走る。一体、何が——。

「それじゃ、後は任せたわ。私はお風呂に行ってくるから。もう覗き魔はいないわよね?」

淡々とした声が聞こえた直後、ジークの視界が暗転する。それが、少女に投げ飛ばされた衝撃によるものだと気づいたのは、後で目覚めてからのことだった。

ジークが気絶する瞬間、最後に見た物は——、

(あ、黒だ)

少女の下着だった。

Part 2 決闘、スタート!

「はっ!…ここは……」

薄暗い地下室で、ジークは目を覚ました。石壁と鉄格子で囲われた、ベッドとトイレひとつの簡素な独房。

「おはよう、なのかな? 多分、朝だと思うよ。ジーク」

隣の独房から聞き慣れた声がすると思つて首をそちらに向かせると、昔からの友人、ルクス・アーカディアが苦笑いをしながら挨拶をしてきた。

「ルクス。おはようつて言つておくよ。ああ、くそ。持ち物が全て持つてかれてらー」

ジークは持ち物を確認し、苦い顔をした。腰に差していた機攻殻剣ソード・デバイスはもちろん。雑用道具の工具一式、猫から取り返したポシエツトまでなくなっている。何故か、仕事の予定が書いてある手帳だけはある。

「そうだね、僕の機攻殻剣ソード・デバイスも持つてかれてる。それより、なんか脇腹が痛いんだけど」

ルクスは脇腹を押えている。昨晚、ジークが蹴った所だ。

「ふーん。まあ、気のせいじゃない?」

ルクス、知らなくても幸せなことはあるんだ。

「まいったなあ。今日も仕事の予約が入つてたのに……」

ルクスが溜め息混じりにぼやく、よくよく考えればそれどこではないことに気づく。

「ていうか、僕たちの正体もバレたよね」

「そうだなー、俺は別にバレても平気だけど。ルクスはやばいよな」
ルクスの特徴的な——旧皇帝一族に受け継がれる白銀の髪。そして、新王家の恩赦を受けた『咎人とがびと』を示す、黒い首輪。圧政を敷いてきたアーカディア旧帝国の生き残りであるルクスは、アティスマータ新王国の恩赦によつて条件付きで釈放された。条件とは、『あらゆる国民の雑用を引き受ける』という契約を交わしたのが、つい五年前のことだ。

「ルクス、次の依頼場所つてどこだっけ?」

「えっとー……」

ルクスは手帳を見て言う。

【仕事場】 城塞都市『クロスファイード』・アカ王立士官学園

【依頼主】 学園長、レリイ・アイングラム

【仕事内容】 新王国・第四機竜格納庫の機竜整備

「んー、完全に行けないよなー」

一度仕事をさぼると、借金が増える。それが嫌なジークは、不満を口に出していると――。

「その心配はいらんぞ」

「うわっ……!?!」

「うおっ……!?!」

ふいに聞こえた声に、ジークとルクスはドキツとする。いつの間にか鉄格子の向こうに、ひとりの少女が立っていた。髪の一部を黒色のリボンでくくった金髪と、剣先のような鋭い真紅の瞳。ルクスより小柄で、色白の少女。しかし、少女の存在感は、恐ろしく強かった。不敵で、絶対的で、同時に誰も寄せ付けない、強烈な自信をまとうている。

「昨晩は助けてくれてありがとう。ついでに素晴らしい口説き文句だったぞ? 思わず惚れてしまいそうになるほどな」

誰も寄せ付けないオーラをばんばん出す少女。しかし、この男は関係なかった。

「覚えてくれてありがとうお譲レさん。デイもしかして、俺に会いに来てくれたのかな?」

ジークは鉄格子の中で肩膝を突き、外にいる少女に口説く。

「な、何を言っているんだ?! おい、そこのお前! 何なんだこの男は!」

リーシャは顔を真っ赤にし、ジークの隣の独房にいるルクスに睨みつけるように言った。

「はは、ジークはいつもこの調子なんです。悪い奴じゃないんです

けどね……」

それに対し、ルクスは苦笑いで返す。普段の雑用時でも、ジークは雑用先の女の子を口説いている。高身長で、男なのに威張り散らさないことで女性陣にはかなりの人気がある。だが、これをジークは知らない。

「それより、さつき心配はいらないって」

話が逸れてるのを、ルクスは舵を取る。それに気づいた少女はこほんつと咳きこむ。

「ふっ。まあお前たちには言いたいことは死ぬほどあるけどな。その前に、学園長から話があるそう。ついて来い」

どこか影のある笑みをジークたちに向けると、金髪の少女は牢の鍵を開ける。

「……学園長、つて?」

「ほう。純粹そうな顔をして、口も立つようだな。知らずに忍びこんだとでも言うつもりか? この学園の女子寮に」

「まさか……?」

少女の返答に、ジークは慌てて手帳を取り出し、ルクスが言った依頼主をもう一度見直す。

【依頼主】学園長、レリイ・アイングラム

学園長……学園長!?

「……って、王立士官学園!」

「え……、ええええええつ!」

ジークは驚きの余り、手帳をその手から落とした。隣のルクスは驚愕で口が開いている。

「リーズシャルテ・アティスマータ」

「……?」

半ば呆然と立っていたジークとルクスに、目の前の少女は、言葉と笑みが送られてきた。

「わたしの名だよ。新王国第一王女——通称、朱の戦姫。五年前に帝国を滅ぼした、新王国の姫だ。よろしくな」

ぼん、とにこやかに少女から肩を叩かれる。その目は、半分笑って

いなかった。

「えええええええつ!?!」

ジークとルクスの叫びが、地下牢に反響した。

?

「ふう……。それじゃ結局、今回は不幸な事故、ということでのいのよね? ルクス・アーカディア君? ジーク君?」

「すみません。レレイさん」

「面目ないです。それより——」

学園長室へ通されたジークとルクスは、この騒ぎに至った経緯を話していた。

「レレイさん。前に会った時よりもお美しくなっておりまして感動いたしました。どうですか? 今度食事ディナーでも?」

ジークはいつもの調子でレレイに口説く。実際にレレイ学園長は、まだ若い。年の頃は二十代後半ほどだろうか? 教師といっても差し支えない風貌の女性は、名をレレイ・アイングラムと名乗った。アイングラム家と呼ばれてる、国家と直接関わるほどの販路を持つ旧帝国から続く貴族。その財閥の令嬢、つまり生粋の箱入りお嬢様のひとり、というわけだ。

そして——ジークとルクスの、数少ない顔見知りでもあった。

「ふふ、嬉しい事を言ってくれるのね。でも、残念だけど遠慮しておくわ」

「いえ、嬉しく思ってくれただけでも俺は嬉しいです」

ジークの良いところは、しつこくないことだろうか。断れたらすぐに止める、それが人気の一つである。

「さて、本題に入るわ」

レレイは仕事先であるこの学園そのものの説明をする。

ここは、アテイスマータ新王国の管理する、機竜ドラグナイト使い士官候補生の学園。いわゆる士官——武官と文官を含めた、役人の中でも序列の高い人間を育成する場所であり、更に詳しく言えば——。

「装甲機竜ドラッグライドに携わる人間を育成する学園、ですか……？」

「そういうことになるわ」

ルクスの問いに、レリイ学園長は笑顔で頷く。

「装甲機竜ドラッグライドが、遺跡ルインから発掘されて十余年。私たち女性は、旧帝国が敷いてきた男尊女卑の風潮と制度により、その使用は、ほとんど禁じられてきたわ。でも——」

レリイが言葉を区切ったところで、ジークの隣にいたリーズシャルテが、ふっと口を開く。

「五年前のクーデターで新王国が設立したのを境に、その認識は一変。操縦に使う運動性はともかく、機体制御自体の相性適性、女の方が遥かに上というデータが報告され、以後——」

「専門の育成機関を設立し、他国に負けない機竜ドラッグナイト使いの士官を揃えるべく、その育成に力を注いでいる——ってとこかな」

「……その通りだ」

リーズシャルテの言葉に重ねるようにジークは補足を加えた。リーズシャルテは不服そうに眼を細め、ジークを睨めつけるが、ジークはどこ吹く風と肩を竦ませる。

「そういう訳だから。この学園にある、新王国第四機竜格納庫。それがあなたたちの働き口だから、今日から週三回、通ってもらおうわ。ドラッグナイト機竜使いとしてのお仕事は、まだ考えてるから、そもいずれ——」

「学園長。少しいいか？」

話がまとまりかけたとき、ふいにリーズシャルテが、手を突き出し、話しに割り込んできた。

「話はわかった。だが、わたしわたしたちはまだ、この男を認めただけではないのだが？」

鋭い眼差しでジークを見据え、言う。

「わたしの疑いは晴れてないぞ。この男は覗き魔、痴漢、下着ドロの変態で犯罪者だ。それに未婚の女性、会ったばかりのわたしに口説くそんな『男』をこの学園に働かせるなど、あり得ない！」

「でも、嬉しかったら？」

「嬉しくない！ というか、まずは軍に突き出す方が先だ。司法の

場で裁かれ、死刑にでもなつてしまえ！」

「お、落ち着きましよう、ジークも悪気が——!?!」

ルクスが反論しようとするが、リーズシャルテにじろつと睨まれ、口をつぐむ。

「うーん、そうねえ。今回の事件を、事故か故意かどうか言われると、誰にも証明はできないのよね。——なら、ここはドラグナイト機竜使いとしての決闘で決めるのはどう?」

「なっ!?!」

レリイが出した提案、それを聞いた三人の反応は様々だ。驚きに目を開くルクス、「うーん」と、悩んでいるジーク、そして——、

「ふっ」

リーズシャルテは、小さく鼻で笑った。

「何を言ったかと思えば、まさかこんなジャックジークと戦えだ」と

「あら、そうは言うけど、彼は『道化師』と言われるぐらい王都のトーナメントでは有名よ?」

レリイは悪戯っぽい笑みを作り返す。

「はっ! 面白い、もしこいつがわたしに勝ったらこいつの告白を承諾し、結婚してやってもいい——」

「言ったな?」

嘲りを含んだ笑みで言うリーズシャルテの声よりも、ジークの声が学園長室に響いた。ルクスが見た、ジークの顔は満面な笑顔だった。

「いいぜ、その決闘を承諾する」

そう言つてジークは学園長室の扉まで行く。そして、扉のドアノブをひねつた瞬間、

「きゃあっ……!?!」

ばたばたと、ドア越しに集まっていた女生徒たちが、部屋になだれ込んで山を作った。どうやら、噂で聞いたジークたちの処遇が気になって、外で聞き耳を立てていたらしい。

「さあ、学園中に伝えろ! 観客は多いほど盛り上がる。新王国の姫との結婚か、はたまた処刑台か。もちろん、逃げないよな? 朱の戦姫」

きゃあああつ。と、それを聞いた女生徒たちは、楽しそうな声を上げて去っていく。

「大変なことになったわよ！ リーズシャルテ様が、今回の痴漢と、結婚を賭けた決闘を——」

「相手は、『道化師』だそうよ？ 詳しいこと、誰か知ってる？」

「そもそも、誰なの？ その下着ドロの人って」

「見た目は好みなんですけれど——惜しいですわね」

部屋から出て行く女生徒たちにルクスは絶句する。あの勢いだと、決闘の前には、学園中に話が伝わっているだろう。

ジークは相変わらず満面な笑顔だ。

「さあ、決闘デュエルをしましょう。リーズシャルテ様」

まるで、ダンスでも誘うかのようにジークはリーズシャルテに手を伸ばす。

「くっ……ふんっ！ わたしが勝てばお前は処刑台行きだ！ お前こそ逃げるなよ！」

リーズシャルテはジークの手を払いのけ、学園長室を出て行った。

「大変なことになったのに楽しそうだね」

ルクスは笑顔のジークに呆れ声で言う。

「いやー面白そうだ」

からからと笑って返すジーク。はああ、とルクスはため息をした。

？

「もう、兄さんたちは何をやっているんですか？ 呆れました」

学園の来客用応接室。先程、学園長に「寄って欲しい」と言われたので来てみると、見覚えのある、大人しそうな黒髪の少女。もうひとり、ルクスと同じ銀髪を持ち、同じ首輪をつけた少女だった。高貴なアンティークドールのような、優美で落ち着いた雰囲気は、兄のルクスよりも、どこか大人びて見える。

「ほ、僕は何もやってないよ！」

「いやーやっちゃいました。ごめんなさい」

ジークは素直に、ルクスの実妹、アイリ・アーカディアに謝った。アイリは、ジークが茶化さず真面目に謝る数少ない人物の一人である。謝るジークを見たアイリは、嘆息と同時に肩を竦め、隣の少女に視線を移した。

「彼女は——、」

「ノクトだったけな？」

ジークは昨晩に蒼髪の少女、シャリスが言っていた名前を口に出す。

「Yes. 覚えていてくれてありがとうございます。一年生のノクト・リーフレット……と、申します。アイリとは女子寮での同居人です」

「ジークさんは相変わらず記憶力がいいですね」

「女の子にかぎるだけだな！」

「ビツ！と親指を立てる。もうちよと他でも頑張ってほしいなあ、という言葉をルクスは呑み込んだ。

「昨晩は失礼しました。どうやら、あなたは本当に、猫に取られたポシエットを追いかけていただけらしいですね。変態扱いしてしまい、申し訳ありませんでした」

「いいよ、あれはここが学園だと知らずに勝手に勝手に入った俺の自業自得さ。それよりも俺と食事で——ぐえっ！」

「あたりかまわず口説かないでください」

アイリに襟首を引っ張られジークは苦しそうな音をだす。

「本題に入りましょうか」

こほんと咳払いをして、アイリはソファアに腰かける。つられるようにジークとルクスが対面に座ると、ノクトはポットから、ティーカップにお茶を注いでくれた。ジークは受け取ると「ありがとうございます」と短く答え、お茶を一口飲んだ。

「うん、美味しい。ありがとうございます、久しぶりに美味しいお茶を飲めたよ」

「Yes. ありがとうございます」

「あの、二人で楽しくお話しているところ、申し訳ないんですが。

こちらにも意識を向けてください」

笑顔でお茶の感想を言うジークに、ジト目で見ていたアイリが、不機嫌そうに呟く。

「ジークさんには、なんとしてでも、リーズシャルテ様に勝っていただかなくてはなりません。ですが——」

と、言いかけてアイリは口籠もる。

「あの子は、強いんだろうね」

アイリが言わなくても、ジークにはわかっていた。あの自信と雰囲気、^{オーラ}相当な実力がないと纏えない。

「私たち学園の生徒は、トーナメントへの参戦は認められていません。軍事力の秘匿のためでもあります。士官候補生の生徒が負けたら、恰好がつきませんしね」

「そうになると、なんかこの学園でトーナメントみたいなのがありそうだね」

「ええ、代わりに校内戦というものが、この学園で定期的にあるんですけど。リーズシャルテ様は、現在無敗です。更に神装機竜を使い初めてからは、圧倒的な強さで連勝を続けています」

神装機竜。機竜の中でも特別な力を持つそれを操れるということ、
は、確かな強敵だ。

「まあ、でも俺も神装機竜持つてるし。なんとかなるつしよ」

ルクスとアイリは、ジークが神装機竜を持っていることを知っているが、知らなかったノクトは驚愕の表情をする。

「さてと、じゃあ決闘^{デュエル}の準備をしますかね」

そう言って、ジークは立ち上がる。

「勝ちの目はあるのですか？」

「うーん、五分五分かな」

扉まで進んだジークは、ドアノブに手をかけて止まる。ルクスたちが凝視していると、ジークは振り返り——

「俺の機攻殻剣^{ソッド・デバイス}ってどこ？」

はああ、とアイリはため息をし、ルクスは苦笑いをした。

?

「それでは新王国第一王女リーズシャルテ対、ジークⅡザン・フロリア・エリック・ルーカスの、機竜対抗試合を、これより執り行うー」
審判役の教官の声と同時に、舞台が歓声と熱狂に包まれる。学園敷地内にある、装甲機竜ドラグライドの演習場。周囲を円状に石壁で囲い、中には土を敷いた広いリングがある。見た目は旧時代のコロシウムといったところか。その中心に、リーズシャルテとジークは対峙していた。

「ひゅー、盛り上がってるねー」

生徒が大勢いる観客席は、生徒の機竜ドラグナイト使い数名が、常に障壁を展開しているので巻き添えを心配する必要がなさそうだ。

学園の離れにある機竜格納庫へ向かい、ジークの機攻殻剣ソード・デバイスを返してもらった後、ジークは装衣に着替え、リーズシャルテの前に現れた。

「ジークと言ったか？ 名前が長いな」

「うん？ なんだよ急に」

「まあいい、理由を知りたいか？」

「ああ、あのことね。まあ悪い事をしたと思ってるよ」

「わたしが何故、お前に——ってきつきから何を一人でごちやごちや喋っている!？」

怒りの形相で声を荒げる。リーズシャルテはジークに向けて喋っているのだが、ジークはリーズシャルテとは違う方向を見ている。リーズシャルテに気がついたジークは、「おお悪い」と言った。

「今、『俺』と話していたんだ」

「はっ？」

ジークの口から出た言葉に、リーズシャルテは面食らったような表情をした。

「俺ってさー、多重人格なんだよねー」

苦笑いをしながら頭をかく。

「お前、何者なんだ？」

「俺？ 俺はねー」

ジークは悪戯ぽく笑うと、機攻殻剣ソード・デバイスに手をかけた。

「決闘者だよ」
デュエリスト

審判役の教官が、接続をジークとリーズシャルテに促すと。赤、青、緑、紫の宝石が柄に埋め込まれてる機攻殻剣を抜刀する。

「さあ、拍手でお迎えください！ 本日の主役、世にも珍しい二色の目を持つ龍！ 《オツドアイズ・ドラゴン》!!」

機竜を目の前に転送するための詠唱符。バスコード 契約者の声を認識した刀身の銀線が、青白い光を帯びた。キーン。と、ジークの前に光の粒子が集まり、赤の機竜が姿を現す。

「接続・開始」
コネク ト オン

更に眩くと、瞬時にその装甲が開かれ、ジークの身体を覆う。頭、両腕、肩、腰、両脚、そして、尾、武装。ジークが纏った機竜は、いわゆる汎用機竜と呼ばれる三種、飛翔型、ワイバリン 陸戦型、ワイアーム 特装型とは、全く外見が異なる。すらっと、している赤の装甲は美しいが、瞬時に対面の、巨大な威圧感に吞まれてしまう。

「なんだ、その神装機竜は名だけか？」

「ツ……………」

瞬間、ジークは目を見張った。ジークの《オツドアイズ・ドラゴン》より更に巨大な、赤の機竜が、そこにあった。

「新王国の王族専用機。神装機竜——《ティアマト》。この機竜は、そこいらのものとはわけが違うぞ？」

「……………すげえよ。その機竜から君の強さが全身に伝わってくる」

神装機竜。それは、世界でそれぞれ一種しか存在が確認されていない、希少種の装甲機竜。ドラッグライド その機体性能は、汎用機竜を遥かにしのぐ。だが——、同時に精神力と体力の消耗、精神何度もケタ違いだ。それを操っている目の前の少女は、相当な実力を持っている。無二の才能と弛まぬ努力の証明だ。

ジークは、機竜牙剣と特殊武装を転送する。賑やかに騒いでいた観

客が、静まり返る。はち切れんばかりの緊張感の中、それを破るように、甲高いベルの音が、リングに響いた。

「バトルスタート」
「模擬戦・開始！」

審判の声と同時に、二機の装甲機竜ドラグライダーが動きだす。先に動いたのは、《ティアマト》を纏ったリーズシャルテだ。

「いきなり撃つか！」

リーズシャルテは機竜専用の武装、機竜息砲キャノンを構える。動力たるフォースコアは、家屋一軒をゆうに吹き飛ばせる威力を持つ。だが、同時に弱点も存在する。それは、発射までに『溜め』を要する分、回避行動までに十分な距離を空けられるか、防御の体勢を取られてしまう。ジークとリーズシャルテには距離がある、これでは簡単に避けられるが――。

「ふっ……い！」

そんなジークの思惑を読んだように、リーズシャルテが笑う。そして、ジークに合わせていたキャノンの照準を、すっと、その横に逸らし、

ダウンッ！

発射した。

威嚇か？そう思っているジークの横を砲撃は通過す――、

「――ッ!?!」

ふいに、大型の鎚ハンマーを振り抜かれたような衝撃が、ジークの横腹に走った。《オッドアイズ・ドラゴン》ごと、側方に弾かれ、突き飛ばされる。

「これは……!?!」

ジークが弾き出された先、それは、リーズシャルテがあえて照準を逸らして撃った、機竜息砲キャノンの軌道上！

完全に虚を突かれた、回避不可能のタイミング。だが――！

「――《スパイラルフレイルム》！」

ジークは砲撃に向かって、《オッドアイズ・ドラゴン》の特殊武装、

《スパイラルフレイム》を撃った。開始早々から溜めていたエネルギーを放出し、機竜息砲の砲撃を爆発させる。それにより生じた爆風で弾き飛ばされる。

「つ、うつ……！」

吹き飛ばされ、空中を回転するジーク目掛けて、更に高速の何かが飛んでくる。《オッドアイズ・ドラゴン》の尾に、エネルギーを集約させると尾を振るい、四つの飛来物を弾き飛ばす。その何かは、上空に佇む、リーズシャルテの周囲へと戻った。

「ふーそれが《ティアマト》の特殊武装、《空挺要塞》か」

「ふむ。思ったよりできるな」

リーズシャルテの周りを、巨大な鏃型の物体が四つ、浮いていた。《空挺要塞》と呼ばれている特殊武装は、《ティアマト》が制御する、小型の竜線型金属で、それ自体が推進力を持つ、遠隔投擲兵器だ。リーズシャルテは、《空挺要塞》を使って先程、ジークを一撃で仕留めようとしたいた。

「しかし、不思議だな。その機竜、本当に神装機竜か？」

リーズシャルテは《オッドアイズ・ドラゴン》を纏うジークに、怪訝な顔で問う。

「特殊武装の威力も、エネルギーの出力も汎用機竜と変わらないのだが？」

「へえー、あの一撃でそこまで見抜いたか。そう、俺の《オッドアイズ・ドラゴン》は汎用機竜と同じ出力でしか戦えない。さしずめ、『最弱の神装機竜』、といったところか」

装甲も薄く、特殊武装の《スパイラルフレイム》も威力は機竜息砲並だ。

「ふつ、神装機竜使いだからと聞いて期待したが、これでは拍子ぬけだな。まあ、ここでリタイアすれば処刑台とはいかなくても、牢獄で我慢してやら——」

「それはどうか？」

嘲笑いを含んだリーズシャルテの言葉をジークは不敵に笑って返した。

「さっきの一撃で決めようとしていたが、俺は無傷で乗り切ったぞ？それに俺はまだ余力を残している。それに、ここでリタイアするほど、俺の《オッドアイズ・ドラゴン》は《ティアマト》に劣ってはいないぜ」

リーズシャルテはジークの言葉に、ひくりと眉を引きつらせる。そして、頬どころか顔全体を赤らめて、ぶるぶると機竜ごと全身を震わせた。リーズシャルテは、ジークに『舐められてる』と、思ったのだろう。

「はっ。なるほど。ただの馬鹿ではないらしいな——この大馬鹿者め！」

リーズシャルテがいきなり、機攻殻剣ソイド・デバイスを天に掲げ、叫ぶ。

「《ティアマト》よ！ 本性を現せ！」

声と同時に、周囲の観客席で、大きなざわめきが波紋のように広がっていく。直後、《ティアマト》の周囲にパシツと光が走り、何かが転送されてくる。普段は負担が大きいいため、使用を避けている付属武装サイドウエポン。さつき構えていたキャノンよりも、更に二回りほど大きな主砲。それが《ティアマト》の右肩と左腕部に、連結——接続された。

「……やばいって」

ジークの頬に一筋の汗が流れる。七つの砲口を持つ、巨大な砲身。女神ティマトは、魔物の軍勢を生み従え、更に自身も七つ首の竜と化す。

(さあてと、こちらは……)

ジークは頭に装備されてる装甲に意識を向ける。

ペンデュラムスケール [2] [5]

簡素な文字と、数字がジークの頭に情報として流れてきた。

(まだ、アイツの出番ではなさそうだな)

瞬時に、ジークは意識を目の前のリーズシャルテに向ける。

「踊りは得意か？ ジーク」

絶対の自信と、威圧の笑み。優雅な声を上げ、リーズシャルテが

ソード・デバイス
機攻殻剣を構える。

「わたしのダンスは少々荒っぽい。楽しませてくれよ」

「いいぜ、ダンスは得意だ。お転婆娘でも楽しませてやるよ」

俺にあるアイリから得た《ティアマト》の情報、主砲の
《七つの竜頭》^{セブンスヘッド}、先程まで四つだった《空挺要塞》^{レギオン}の数も増え、四倍の
——計十六機の投擲兵器。そして、重力操作の神装《天声》^{スプレッシャー}。

「いくぞ！ 今度は俺のターンだ！」

そう強く、叫び。計十六機の《空挺要塞》^{レギオン}が、一斉にジークに殺到した。

？

「ジークさん……」

「あちゃー。もう無理だよ！ 先生に言って、止めさせないと——！」

「まさか、こんな戦いが起こってしまうとは。すまない、ジーク君」
リーズシャルテの猛攻が始まったその模擬戦を、三和音と、合流したアイリとルクスは観客席で見守っていた。

「気に病む必要はないですよ。シャリス先輩」

ふいに、隣にいたルクスの妹——アイリが、そうシャリスに声をかける。

「こんな事になってしまったのは、ジークさんの自業自得。いつもなりふり構わず口説くのが悪いんです」

「まあまあ、許してあげてよアイリ。誰とも仲良くできるのがジークの良いところだよ」

真顔だが、薄らと微笑むアイリに、ルクスは苦笑いで宥める。

「君達は彼とどういった関係なんだい？」

シャリスが問うと、ルクスとアイリは考え込む仕草をする。

「ジークとは、宮廷に住んでいた時から仲が良かった気がします」

「では、彼も貴族なのかい？」

「いえ、貴族ではありません。私たちも、ジークさんが誰なのか良く

わからないんです」

ルクスとアイリからは、曖昧な答えしか返ってこなかった。

「……そういえば、彼は『道化師』、と言われているね。トーナメントに出ている『無敗の最弱』のルクス君なら、『道化師』つという異名が彼に付いた理由を知っているだろうか？」

『無敗の最弱』。それが、ルクスに付けられた異名だ。一度も攻撃をせず、引き分けて勝つプレイスタイルからそう言われるようになった。

一方、ジークの方は――、

「ジークは、これまでの試合を全敗しています」

「……え？」

ルクスから出た言葉に、シャリスだけではなくノクトやテイルフアーまでもが耳を疑った。

「互角に戦い、そして負ける。それが彼の、ジークのプレイスタイル『エンタメ』。勝ち負けより観客が楽しめているかがジークの優先事項らしいです」

それが『道化師』、ジークの異名だ。

「じゃあ、ジーク君はこの試合も負ける気なのかい？」

「それはどうでしょう。もしかしたらジークさんの本気をここで見るかもしれませんよ？」

アイリはそう言って、そつと中央のリングを指さした。瞬間、大きなよめきと共に、それが見えた。

？

「く……ッ！」

「ぐう……ッ！」

二つのくぐもった声が、演習場のリングに流れる激しい熱風に流される。

発射された後、それ自身の推進力で攻撃を行う、《空挺要塞》。計十六機を、ジークは機竜牙剣と《オッドアイズ・ドラゴン》の尾で弾き、

避けていた。充填された《七つの竜頭》^{セブンスヘッズ}は、撃つ直前で《スパイラルフレイム》を撃ち、照準をずらして対処していた。

「やるねー！」

「お前こそなー！」

激しい戦闘をやっているのにもかかわらず、ジークとリーズシャルテの顔には笑みが浮かんでいた。

（おもしろい！ おもしろいぞ、ジーク！）

二つの赤い機竜がぶつかり合う度に、産毛が騒ぐ。汗が頬を伝うのがわからないほど、目の前に集中している。それが、観客にも感化されたのか、観客席に座っている生徒も笑顔で声援を送っている。

「《スパイラルフレイム》！」

《七つの竜頭》^{セブンスヘッズ}を向けられた瞬間、ジークは《空挺要塞》^{レギオン}を避け、《スパイラルフレイム》^{パイラルフレイム}を撃った。

「ふっ！ 同じ手はそう何度もくらわんぞー！」

機攻殻剣^{ソッド・デバイス}を振り、《空挺要塞》^{レギオン}を操った。操った先には《スパイラルフレイム》^{パイラルフレイム}の軌道上だ。

バァン！

激しい爆発音と共に、《空挺要塞》^{レギオン}の一機が爆発した。

「まじかつー！」

今の攻撃、防がれたということは一、

「《七つの竜頭》^{セブンスヘッズ}！」

爆発の中から七つの砲身が、ジークを捉えた。

「しまっ——」

赤い閃光が、《オッドアイズ・ドラゴン》^{ドラゴン}に直撃する。

「うおおおおおおああああー！」

かろうじて防いだ機竜牙剣^{プレイド}に、エネルギーをフルパワーで送る。しかし、機竜牙剣^{プレイド}の刀身に亀裂が走る。そして、爆発した。

「ジークー！」

「ジークさんー！」

観客席からルクスとアイリの声がする。

「——ッ!?!」

リーズシャルテは見つめていた爆炎の中から異変を感じ、再び《七つの竜頭》セブンスヘッドを構えた。煙の中から、上空に出てきたモノを狙う。

「これは——!?!」

だが、それは《オッドアイズ・ドラゴン》ではなかった。特殊武装、《スパイラルフレイム》だ!

「こつちだア!」

はっ! と、声が出た方に視線を向けると。そこには片腕をなくした《オッドアイズ・ドラゴン》と、額から血を流しているジークの姿があった。

「ハアアア!」

残っている片腕で、機竜爪刃ダガールを投擲する。

「くう……!」

リーズシャルテは障壁を張り、一投目を防ぐ。しかし、上空に弾いた一投目の陰から、二投目が眼前に迫っていた。ジークは、一投目は弾かれると予感をし、二投目が一投目の陰に隠れるように投げたのだ。

回避が——間に合わない。

「舐めるな!」

だが、リーズシャルテが機攻殻剣ソード・デバイスを振るい、眼前を指すと、機竜爪刃ダガールは見えない力に弾かれたように、軌道を変え、地面へと落下していく。

(これは……神装!)

その不可解な現象に、ジークが顔色を変え後ろに下がった瞬間、リーズシャルテは息を吸った。

「逃がさん! 神の名の下にひれ伏せ! 《天 声》!」スプレッシャー

瞬間、今まで高速で宙を舞っていた《オッドアイズ・ドラゴン》が、地面に落ちる。とつさに踏みこたえた装甲脚が、その足場ごと沈み込んだ。

「これが重力操作の神装かっ!?!」

だが、気づいたところで、既に状況は詰んでいた。

「——終わりだ。おもしろかったぞ、ジーク」

再び、《七つの竜頭》セブンスヘッドがジークを捉える。

「……ふっ」

そんな絶望的状况、ジークは笑った。

「何がおかしい?」

リーズシャルテが怪訝そうな表情で、ジークに問う。

「終わり? いいやまだだ」

ジークの瞳には諦めの感情はない、むしろ、「もつと楽しませてやる」と言いたげな目だ。押さえつけられている手を上空に、人差し指を向ける。

「さあ、お楽しみはこれからだ!」

リーズシャルテは顔を上げると、そこにはダガーが眼前に迫っていた!

「なっ……!?!」

何故? 一体、何処から? リーズシャルテは考え、目の前に迫っている機竜爪刃ダガーが先程、ジークが投げた一投目だと気づいた。

そう、ジークは《ティアマト》の神装を利用したのだ。障壁によって弾かれた機竜爪刃ダガーは、重力を操る《天声》スプレッシャーによって垂直に落下する!

全てを計算に入れたジークの奇襲に、リーズシャルテは戦慄した。

「ちい……っ!」

舌打ちをし、リーズシャルテは障壁で機竜爪刃ダガーを弾く。

「——」
だが、《天声》スプレッシャーの制御コントロールが疎かになり《オッドアイズ・ドラゴン》にかかっていた重力が消えた。

「うおおおおおー!」

一気にジークは、中空にいるリーズシャルテの所まで飛翔する。落ちてきた《スパイラルフレーム》を片腕でキャッチする。

「しまっ——」

負けを確信し、次に来る衝撃に目を瞑ったリーズシャルテ。だが、その衝撃は来ず、ジークはリーズシャルテの脇を通った。

「機竜咆哮！」
ハウリングロア

ジークの《オッドアイズ・ドラゴン》の前面に、渦状の衝撃波が展開される。幻創フォース・コア機格から発生させた衝撃波により、敵の投擲攻撃を弾く、機竜ドラッグナイト使いの基本技術スキルそれにより攻撃の軌道が逸れ、光弾は演習場ではなく、周囲の空き地に降り注いだ。

ダウンッ……！

一瞬遅れて、轟音と衝撃波が連続して弾けた。爆風で木々がなぎ倒され、激しく土煙りが立ちこめる。観客席から、女生徒たちの悲鳴が聞こえてきた。

「なんだ……っ!？」

リーズシャルテも背後を振り返ると、決して起きるはずのない、異変が起きた。

ギイイイエエエエエエエエエエアアアアアッ！

「……!?! この声は——!」

雲を縦に貫き、獣の絶叫が降りてくる。演習場の高い空から、人ならざる闖入者が、突っ込んで来た。

？

機竜ドラッグナイト使いが敵として警戒に値するのは、同じ機竜ドラッグナイト使いだけではない。いや、それよりもよほど気をつけなくてはならない、人の天敵が、今の世界にはいた。

幻神獣。
アピス

遺跡ルインから出現する、謎の幻獣。ほとんどの大国では、遺跡ルインの近くに砦や関所、城塞都市を幾重にも置き、機竜ドラッグナイト使いを配備して、不測の事態に備えている。

だが——、

「きゃあああっ!?!」

「な、何でこんなところに、いきなり幻神獣アピスが——!」

スがこちらに合流した。

「俺の《オッドアイズ・ドラゴン》は既に半壊状態、リーズシャルテ様も神装を使つて既に疲労困憊。それにルクスじゃあ幻神獣アビスをしとめ切れない。そこで、俺とルクスであの二体を抑えますから《テイアマト》の主セブンスヘッズ 砲で貫いてください」

ルクスに目配らせると、「わかった」と言つて頷いた。

「皆を助けるため、よろしくお願いします」

そう言い残し、ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》を操り、幻神獣アビスに突撃した。

「お、おい！ ちよつと待て!? ジーク！」

勝手に作戦を決められ、リーズシャルテは齒噛みする。だが実際、《テイアマト》は極度の消耗により、可動限界が近づいていた。確かにあと一発、全力最大の砲撃を撃つ余力しかない。

「リーズシャルテ様。いつもあんな感じのジークですが、やる時はやる奴です。だからジークを信用してやってください」

ルクスもそう言い残し、幻神獣アビスに向かつて飛翔する。

「ふっ。ならお前の作戦に乗らせてもらうぞ」

一人取り残されたリーズシャルテは、不敵に笑つて《七つの竜頭》セブンスヘッズにエネルギーを充填させる。

？

ガーゴイルが羽根型の光弾をばらまき、無数の爆発が起きた直後。観客席とその周囲は、恐怖と混乱ではなく、ジークとルクスに歓声を送っていた。

「ジークさん、頑張ってください！」

「幻神獣アビスなんかやつつけちゃえ！」

「頑張れー！」

初めて目の当たりにする実戦にも関わらず、女生徒たちは落ち着いていた。それを離れて眺めながら、三和音トライアドの三人と、アイリが集まっていた。アイリは身体が弱く、文官志望であるため、機攻殻剣ソード・デスアイズと

ドラッグライド
装甲機竜を持つていない。故に、彼女を守るように、三人が機竜を身に纏い、上部に障壁を張っていた。

「流石はジークさんです。パニック状態の生徒たちを落ち着かせましたか」

アイリは周囲を見渡し、感嘆な声を出す。それを見たノクトは、微かに頷き、

「Yes. ————ですが、大丈夫でしょうか？ 幻神獣一体と汎用機竜で戦闘する場合、最低でも上級階層ハイクラスの使い手が三名、中級ミドルなら七名が必要。下級ロウならば十数名以上を以て、撤退か拠点防衛のみの交戦が可能と言われています。ましてや、不意を突かれた、この状況では———」

「確かにね」

蒼髪の凛々しい少女、シャリスは周囲を見渡しして同意する。

「彼の判断は正しい。幻神獣アビースの力を見て、動揺してしまった生徒など、使い物にならない。一度恐怖に侵食された兵は、そのとき戦闘には参加してはならないのさ。私の父が言っていたよ」

「それより、ジーク君たち。大丈夫かなあ？」

ティルファアの不安げな呟きに、シャリスも頷いた。

「大丈夫ですよ」

シャリスたちの緊張と不安とは反対に、アイリは落ち着いて空を見上げ、呟く。

「負けませんよ。兄さんたちなら———」

？

「ギイエアアアアアアアア！」

「うおおおおお！」

演習場の上空で、光が舞っていた。ガーゴイルが両腕から高速で爪を繰り出し、ジークは残った《オッドアイズ・ドラゴン》の片腕、尾で弾き、いなす。息もつかせぬ勢いで繰り出される連撃は、ひとつひとつを完璧に防いでなお、受けた装甲がその度に軋むほどの威力だ。

衝撃で体勢が崩れた上から、お構いなしに叩きつけられる。間合いを切ったジークを追って、弧の軌道を描き、ガーゴイルが猛追する。幻神獣アビスの黒と《オッドアイズ・ドラゴン》の赤、《ワイバーン》の蒼。三色の軌跡が中空で幾度となく交わり、激しい火花が散った。

「……ッー！」

不意に均衡が崩れた。突きだされた合金の爪、それを空中で宙返りをし、エネルギーを帯びた《オッドアイズ・ドラゴン》の尾で、幻神獣アビスを弾いた。

「《スパイラルフレイム》！」

そこに間髪入れず、特殊武装《スパイラルフレイム》を撃った。

「ギッ……!?!」

防戦一方に徹していたジークの急な変調について行けず、幻神獣アビスは攻撃をくらう。しかし——、

「……やはりだめか」

幻神獣アビスの硬質の身体には、《スパイラルフレイム》の攻撃は通じなかった。

『ルクス、そっちは大丈夫か?』

『うん、なんとかなってる』

ジークは、竜声でルクスと連絡する。

『幻神獣アビス同士で挟む。出来るか?』

『まかせて』

プツツと竜声を切ると、目の前の幻神獣アビスに意識を向ける。

「さあ、来い！」

そう言い、幻神獣アビスに背を向け飛翔する。肉食動物と似ている幻神獣アビスは、背を向け飛んでいるジークを追う。

「くっ……!」

背後から殺到する羽根型の光弾を、なんとか避けながら飛翔していると、目の前から《ワイバーン》を纏ったルクス、その背後に幻神獣アビスがこちらに向かっている。

「——今だっ！」

そう叫び、ジークとルクスは下に落ちた。

「ギイイイイイ!?」

「ギエアツ!?」

すると、ジークの頭上で幻神獣同士がぶつかり合う音がする。だが、これだけでは押さええつけないには足りない。

「ハアアアアアアツ!」

ジークは、推進出力を最大に切り替え、二体のガーゴイルに突進した。

「ギアアアアアアアアア!」

ガーゴイルはその凶牙を《オッドアイズ・ドラゴン》の片腕の装甲に突き立てた。それだけではない、もう一体は紫色に光る爪をジークの顔面に向かって放つ。障壁をいとも簡単に突き破り、眼前まで迫る。首だけ動かし避けるが、頬を掠めた。

「リーズシャルテ様! 撃ってください!」

ジークは、リーズシャルテに竜声で捲くし立てるように言った。

「馬鹿を言うな! お前も当たる——!」

「リーズシャルテ! 俺を信じろ!」

そう言っている間にも《オッドアイズ・ドラゴン》の装甲に亀裂が生じて行く。

「早くしろ!」

「くっ! 《七つの竜頭》!」

《ティアマト》の主砲が、幻神獣二体とジークに迫る。

「機竜解放!」

ジークが言うと、《オッドアイズ・ドラゴン》の片腕が本体から外れた。幻神獣を蹴ってその場を離脱する。

「——ギ!」

ガーゴイルの動揺が、極大の閃光にかき消された。

アアアアアアアアアアアツ!

断末魔の残響をまき散らし、ガーゴイルが爆散した。パラパラと、黒い金属の破片が降り注ぐとは別に、《オッドアイズ・ドラゴン》を

纏ったジークは演習場の壁にぶつかり地面に落ちる。僅かだが、
《七つの主砲》の閃光に触れていたのだ。

「おい、ジーク！」

《ティアマト》を解除し、リーズシャルテはジークに駆け寄る。

「……」

最大火力の主砲に触れた衝撃に、ジークの疲労と体力は、限界を超えていた。気絶はしていたが、息はある。そのことにリーズシャルテは安堵し、胸を撫で下ろした。そして、歓喜と興奮の収まらない生徒たちに向けて、リーズシャルテは息を吸った。

「聞け！ この場にいる者よ！ 新王国の王女であるわたしから、重大な話がある！」

こうして、ジークたち彼らの手によって幻神獣からの危機を逃れることに成功した。

Part 3 転入、そして新たな生活

模擬戦の後に、湯浴みをするのは、リーズシャルテの日課だ。戦闘の後の精神が昂ぶる。無駄のない、しかし、年頃の少女らしい起伏のある肌の上を、熱い水滴が流れ落ちていく。

「ふうう……」

戦闘直後の高揚感、勝利の満足感。それを何度もリーズシャルテは味わってきた。

（でも——、なんだろう？ この気持ち……）

しかし、そのどれも、今日の感覚は違っていた。

『リーズシャルテ！ 俺を信じろ！』

幻神獣アピスが襲撃してきたあのととき、ジークは自身が傷つくのをかえりみず学園アカデミーの女生徒を助けた。戦闘もそうだ。あれほど綺麗に輝き、『負けた』と思った男など見たことがない。

（ああゆう男も、いるんだな）

新王国が設立され、その王女となったリーズシャルテにとって、旧帝国の象徴である『男』など自分の敵、あるいは、踏み台に過ぎない存在だと思っていた。旧帝国へのクーデターを計画した自分の父親からすらも、愛情を感じたことはない。恋愛感情などというのも、一度も抱いたことはなかった。

でも——。

（これを見られてしまったのが、あいつでよかったかもしれないな）
自分の下腹部、へそのすぐ下を指先で撫でながら、リーズシャルテは、もどかしい気持ちになる。知られてはならない秘密だったのに、今は嬉しいとすら思えるのが、不思議だった。

「……結婚かあ」

決闘の前に契約した、『負けたら結婚』。試合自体は幻神獣アピスの乱入により引き分けだが、乱入がなかったら負けていた。

「ッ……！」

リーズシャルテは『結婚』という文字に、急に恥ずかしくなりお湯を含ませたタオルで、誤魔化すように顔を拭う。

「ジーク……か」

形のいい少女の唇が、眩くと自然に綻んだ。

「男の中にも、頼りになるヤツがいるんだな……」

その一言で、リーズシャルテは、自分の感情に気づいた。初めて、『人』で、欲しいものを見つけたのだと。

？

燃えるような茜色が、窓から差す部屋にリーズシャルテは入る。

「あ、リーズシャルテ様」

部屋には、先客がいた。旧帝国の王族の証である、首輪をつけた銀髪の少年、ルクス・アーカディアだ。

「どうだ。ジークの容体は？」

「はい。先程、医師が来てもう大丈夫と言っていました」

ルクスからそう言われて、リーズシャルテは「そうか」、と安堵した。

「それにしても——ジークの身体って傷だらけなんですね」

そう言つて、ルクスは視線をリーズシャルテからジークに戻した。

リーズシャルテも見ると、

「な、なんだこの傷の量」

思わず絶句してしまった。胸の包帯で隠れて見えない部分もあるが、ジークの身体は無数の裂傷の跡がある。腹には抉った様な深い傷の跡も。

「この傷は一体？」

「わかりません。五年以上も一緒にいますけど初めて知りました」

リーズシャルテはルクスに問うが、ルクスは首を横に振った。

「あ、さっきアイリに来て欲しいって言われていたので少しジークをお手伝いできますか？」

「ああわかった。まかせておけ」

ルクスは、リーズシャルテにお辞儀をすると部屋から出て行った。

「——」

取り残された、リーズシャルテは不思議に思つて裂傷痕を撫でる。

だが、その手を誰かの手が握った。

「——余り、『ジーク』の傷を撫でないくれないか？」

聞いた声だが、初めて聞く声かもしれない。リースシャルテは握られた手を辿ると、いつの間にか目覚めたのかジークがじつとリースシャルテを見つめていた。

「あ……。お、起きたのか!？」

ジークは身体をベットから起こすと、包帯を撫でた。

「やれやれ。無茶をするなどとはいつも言っているのに」

自分には言っているのに、まるで他人ごとのように言っている。

「お、おい。ジーク、一体どうした？」

「ジーク？ ああ、違うよ俺は『フローリア』」

「——え？」

目の前の『ジーク』が、急に『フローリア』と名乗ったことにリースシャルテは首を傾げた。

「ふむ、その反応だと『ジーク』から多重人格だと聞いてないのか？」

「……そう言えば、決闘でそんな事を言っていたな」

リースシャルテは思いだしたかのように呟いた。フローリアを良く見ると、瞳が深碧から黒に。髪形も変わっていて赤い部分が青くなっている。

「そう、今は『ジーク』が寝ているから意識の権限が俺に移ってる」

「じゃあ、お前は——」

「フローリア∥ザン・ジーク・エリック・ルーカス。この姿では初めてだね」

ふっと、フローリアは微笑んだ。

「さて、なぜ俺が出てきたかというところ。今回の幻神獣^{アビス}の出現についての、警告だ」

「警、告？」

無言で頷くフローリアの表情は、真剣だった。

「たしか、今は三年生がいなかったんだよな。で、決闘時に現れた幻神獣^{アビス}。不自然とは思わないか？」

「……たしかに」

言われて思い返してみると、不自然な点はたくさんある。城塞都市なのに警鐘が鳴ってない、リーズシャルテとジークが披露困憊しているタイミングで現れる。

「まあ、下手人は警鐘を鳴らさなかった王都警備隊、信用度も考えるところか。三年生がいないのを知っているから情報を流したと考えると、学園アカデミーにも裏切りはいるだろうな」

淡々と言うフローリアに、リーズシャルテは舌を巻いた。あの場で起きた数少ない情報で、ここまで推理するフローリアの頭の回転、冷静に判断する思考にだ。

「……なあ、一つ聞いていいか？」

リーズシャルテはふと浮かんだ疑問を、フローリアに問いかけた。

「その傷、さっきお前は『ジーク』って言ってたよな。それって、どう言うことだ？」

「……この傷は、旧帝——余計な事を言うなよフローリア」

急に、フローリアの言葉を遮るように怒気が含まれた声が、『フローリア』の口から出た。いつの間にか変わっていたのか、『ジーク』になっっていた。

『俺』が失礼しました、リーズシャルテ様。この傷は、ちよつと言えない事情がありました」

怒気が失せ、いつのも飄々とした声で謝罪の言葉を出す。

「あ、ああ平気だ。そ、それよりも、傷は痛むか？」

リーズシャルテは、どこか落ち着かない様子で、ジークの顔を覗き込むように見る。ジークはこくりと頷いた。

「ありがとうございます。俺みたいな奴、手当してくれて」

「何を言っている。お前はわたしたちを守ってくれた。それだけで手当する理由になるだろう」

「結構さっぱりしてますね。姫様は」

ジークがぎこちない笑顔を浮かべて言うと、

「ああ、そうだぞ。わたしはとても、実力のあるものには寛大で、鷹揚なお姫様なんだ」

リーズシャルテは嬉しそうに、愛らしい笑みを返してきた。彼女が

少し前までジークに抱いていた警戒と敵意は、すっかり消えてなくなつたらしい。幼いというより、純真無垢で正直な態度が、清々しかった。

「うんうん。なかなか使えるヤツじゃないか」

と、どこか頬を赤らめて頷く姫君に、ジークも自然と笑みをこぼしている。

「よし、ジーク。わたしはお前を全面的に信じよう。だから、わたしの秘密を話す」

リースシャルテはいきなり、そんなことを言ってきた。

「秘密すか？」

「そ、そうだ。わたしがお前に決闘を仕掛けた理由だ。アレを見られたからには、そのまま逃がすわけにいなかったんだ。だ、だから――」

「あー。その件は、その、すみません、全部見ちゃって。……でも、綺麗でしたよ？」

「お、思い出させるな馬鹿ッ！ わたしが言いたいの――」

赤くなつたリースシャルテに枕を投げられて、ジークは視界を塞がれた。えー、褒めたのにい。相変わらず、上手くないかない。そう思つて、ジークが目の前の枕を取ると――、

「そ、その――、これだ」

信じられない光景が、目の前に広がっていた。窓から差し込む夕陽の中で、リースシャルテの肌が見えていた。制服のブラウスを上まで捲り上げ、スカートをおろし、ほんの少しだけ、下着をずりさげ、めくれさせている。まるで、見て欲しいとでもいうように。西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリースシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。まあ、あれよ、エロいね！

「……そういうわけだ。これがお前に、決闘を挑んだ本当の理由だ。あのと風呂場で、これを見られたから――」

「……」

こうね、なんて言うの。幼さを残している体つきなのに、成長途中の少女の生々しい丸み。その未成熟な美しさ、いいよね！

「な、何を黙っているっ!? 何とか言ったらどうだ!?」

「似合ってます。その白い下着——」

「うわああああ!!? アホかお前ツ!? ドエロ! 死ねツ!」

褒めたのにまた失敗したよ! 何でよっ!? ジークが後悔しているうちに、顔から火を噴いたリーズシャルテが、慌ててスカートを引き上げる。だが、ジークには、それ以外のものもしっかり見えていた。

「その紋章は……、もしかして——旧帝国の?」

「……や、やっと気づいたか? ——ということは、まだ誰にも、このことは言っていないんだな?」

ジークが頷くと、服を直したリーズシャルテは、椅子に座った。黒い竜を象った、旧帝国の紋章。その烙印がリーズシャルテのへその下、下腹部にあったのだ。

「一体、どうして——」

「それはまだ教えられない。だけど、この紋章のことは、誰にも言わないでくれ。お願いだ。約束してくれるか?」

「……」

旧帝国の姫の身体に、旧帝国の印しるしがある。裏切りか、血統の詐称か。確かに知られれば、あらぬ疑いを招きかねない。それを見たジークも、自然と腹の傷に手を伸ばしていた。しかし、それに気づいた者はいなかった。

「大丈夫ですよ。誰にも言いませんって」

「本当か? 誓えるか?」

「ええ。俺の機攻ソード・デバイス劔に誓って」

ジークはこくりと頷いた。それを見たリーズシャルテは、ほっと息を漏らし、笑顔を見せた。

「あと、そのお……。——決闘前に約束したことなんだが」

「約束?」

「わ、忘れたとは言わせないぞ! ほら、私が負けたらお前の告白を承諾して、結婚するっていう——」

ああ、あったねそんなこと。幻神獣アビスに必死だったから忘れてたよ。

「試合は引き分けに終わったけど。その——け、結婚してやる！」

「——えええええっ!？」

リーズシャルテから出た言葉に、一瞬フリーズしたジークだが、驚愕の声を口に出した。だって、予想外過ぎるでしょ!？」

「お、落ち着きましよう! いいんですか? 俺みたいな仕事も安定してない一般市民で?」

「なんだよお前、国のお姫様が結婚してやるっていうのに嬉しくないのかよ」

「いや、嬉しいですけど」

不満げに頬を膨らませるリーズシャルテ。女心ってよくわかんないや。

「じゃ、じゃあ、友達ってことじゃダメですか?」

「うーん……まあ、お前がそう言うならそれでいいか」

納得いつてないリーズシャルテだが、友達で手を打ってくれた。

「えーとじゃあ、ほら」

「ん?」

ほうつと、溜息を吐いたジークに、リーズシャルテは手を差し出した。

「友達なら握手するのが当たり前だろ?」

そう言うリーズシャルテは、少し頬が赤らんでいた。

「……」

ジークはリーズシャルテの手を取る。その手はジークと比べると小さかったが、温かった。

「よろしくお願いします」

「うむ! よろしくだ!」

ジークとリーズシャルテは笑顔で挨拶を交わした。

「よし。ではこの件は一件落着だ。というわけで、ジークとルクスには明日から、正式にこの学園に来てもらうぞ」

「そういえば、元々そういう話でしたな」

色々あったが、これで本来の雑用仕事に戻る。ジークがそう思っ

たとき、

「あ、ちなみに整備士見習いの雑用は解約させたからな？ 明日からお前は、うちの学園に、士官候補生の生徒として通ってもらおう」

「あ、はい。わかりま——つて、ええええええええつ!？」

思わず、叫んでしまった。

「じよ、冗談っすよね……？ だって、ここって女学園——」

「そ、それと、わたしのことは級友らしく、『リーシャ』と呼んでくれ。後、二人きりの時は様は付けなくていいぞ。約束だからな」

どうやら止めることは出来ないらしい。リーシャのはにかんだ笑顔がそう物語っていた。

「わかったよ、リーシャ。あ、ルクスに会いたいから肩を貸してくれないか？」

「ああ、いいぞ」

まだ傷が残っているため、リーシャに肩を借りようと手を伸ばした。

「おわっ!？」

だが、リーシャは躓いてジークに向かって倒れる。まだ体力が回復していないジークは下敷きになるのが精一杯だった。

「いてて」

少女特有の良い香りがジークの鼻腔をくすぐる。

「お、お前——」

「ん……？ あ——」

リーシャから震える声がして下を向くと、ジークの右手がリーシャの胸を掴んでいた。顔を真っ赤に染め、プルプル震えるリーシャ。

「ま、待て！……ここ、これは不可抗力っていうもので——」

慌てて起き上がり、リーシャを宥める。だが——、

「このドエロ！ 死ね！」

「グフアア！」

リーシャから放たれた鋭いアッパー。ジークは部屋の扉を突き破り、廊下に投げ出された。多分、傷は開いた。

？

「——というわけで、彼らが今日からこの学園に通うことになった。名前を」

翌日の学園の校舎二階、二年生の教室の朝。担当クラスの女教官、ライグレイ・バルハートの紹介を受ける、『場違い』な者がいた。

「えっと、ルクス・アーカディアです。よろしくお願いします……」
とりあえず、ぎこちなく挨拶をするルクス。

「ジーク＝ザン・フローリア・エリック・ルーカス。なあ——俺の名前が長いと思った奴」

ジークは一拍置いて視線を全体に巡らせる。そして、

「——俺も思う」

ガクッ！

ジークが言った言葉に全体はずっこけそうになった。

「なんでそんなテンションで話せるの？」

「ルクスみたいにコミュニケーションで話せるのから」

呆れ顔で言うルクスに、肩を竦ませて返すジーク。だが——、

(やっべー、帰りにー)

ジークの心の中には、帰りたい気持ちが大半を占めていて、それを表情に出さないでいるのが精一杯だった。

そう、リーシャの強引と、『将来の共学化を検討しての試験入学』として、仮入学ながら許可を出した学園長のレリイによってジークとルクスはここにいるのだ。何気に、同じクラスにいるリーシャは笑顔でこちらを見ている。

小さなよめきが、教室中に満ちている時。

「……あ。ルーちゃんとジークんだ」

ジークとルクスが内心で帰りたいと思っていたら、ふいにそんな声が聞こえてきた。

「——え？」

「うん？」

教室の窓際の席にいた、桜色の髪を持つ少女。ふわりとした髪は、二つのリボンでまとめられ、少女のぼんやりとした雰囲気、よく合っている。そして、制服を大きく押し上げている豊かな胸が、どこか幼さの残る顔の少女に、不思議な魅力をもたらしていた。

「久しぶり、だね」

柔らかな声で、少女はルクスに微笑みかける。その間延びした喋り方と、独特な空気に、ジークとルクスは覚えがあった。

「えっと、もしかして、フィルファイ……？」

「うん、そうだよ」

ルクスの問いに、少女が頷き、確信する。

フィルファイ・アイングラム。大商家、アイングラム財閥の次女にして、ルクスの幼馴染みにして、ジークの友達でもある少女。更には、学園長——レリイ・アイングラムの実妹だ。

実際に会うのは、七年ぶりだろうか。当時、旧帝国とつき合いのあったアイングラム家で、歳が同じということもあり、ジークも入れて幼い頃はよく三人で一緒に遊んでいたことを、ジークは覚えてい

る。
「学園に通うんだ？ 嬉しいな。よろしくね、ルーちゃん、ジーク

ん」
「俺も久しぶりに会えて嬉しいよ。それに、前より可愛くなったね、
ファイちゃん」

あんまり嬉しくなさそうな棒読みで言うフィルファイと、ナチュラルに口説くジーク。もともとフィルファイは感情表現が苦手な女の子だということ、ジークとルクスは知っている。だが、こう見えて、本気で喜んでくれているのだろう。

「あ、うん。こちらこそ、よろしく」

ルクスがそう挨拶を交わすと、教官のライグレイが、「よし、ルクス。お前の席はその子の隣だ」と指さした。

「俺は——」

ジークも席を決めようと周りを見渡す。

「……」

先程からこちらに笑顔で視線を向けてくるリーシャと目があつた。リーシャの隣の席は、偶然にも空いている。

「えつとじやあ、俺はリーシャ様の隣でいいですか？」

ジークがライグレイに許可を取ると、「いいぞ」と言った。

「どうも。リーシャ様」

「うむ！ よく来たジーク——」

「ファイちゃん、でしょ？」

リーシャとジークが挨拶を交わしていると、窓側の方からそんな声が聞こえてきた。ジークは首だけ動かして見ると——、

「……えっ？ ここでその呼び方で呼ぶのッ!？」

「……」

こくつと、ファイルファイは頷いて肯定を示す。

（そ、そうだった……！）

（あー……そういえば）

と、ルクスは冷や汗と共に、ジークはぽつと思いだした。ファイルファイは、昔から気に入った相手に対しては、愛称で呼び、呼ばれる仲を求めてくる。ちなみに、ジークは「ジークくん」と呼ばれている。

「き、気持ちは嬉しいけど、さすがにここではさ……。一応ほら、僕たちももう、いい歳なんだし、士官候補生なんだし、学園なんだし……」

ルクスのことだから、見知らぬ同級生の前で恥ずかしいのだろう。しかし——

「……」

プイツ。言い訳するルクスを見て、ファイルファイはそっぽを向いた。ざわざわ、と、クラスメイトたちのどよめきが、聞こえてきた。

「皆、騒ぐな。授業を始めるぞ」

ライグレイの声で、教室はいったん落ち着きを取り戻す。だが、急な編成で、ジークとルクスの手元には、まだ教科書がなかった。

「ファイルファイさん。教科書、一緒に見せてくれない？」

「……」

無視されている。

「ファイ、フィルファイ。こ、これくらいでいいでしょ？ ほ、ほら、今は授業中だしさ……」

「……………」

無反応だ。焦っているルクス。面白い。

「……ねえ、ファイちゃんってば」

「何……？ ルーちゃん」

ルクスがどうにか声を絞り出すと、フィルファイはルクスに顔を向け、そう言った。

「きよ、教科書一緒に見せてもらってもいいかな……？」

「うん、いいよ」

その瞬間、くすくすと、教室中から笑い声が漏れる。

「かわいいー」「ファイちゃんだって」「あの二人、そういう仲だったんだ？」

そんな声がいくつも聞こえ、ルクスは顔が真っ赤になった。思わず、ジークも腹を押え、笑いを押し殺した。

「ふふ、くくく……！ あー、面白い。あ、リーシヤ様」

「——シヤ」

「……………え？」

「リーシヤって呼べ」

そう言っつて、リーシヤは頬を少し染め、目線を逸らす。

「え、でもあれは二人きりの場合……」

「い、いいだろ別に！ リーシヤの方がいいんだよ！」

えー、何その強引。

「えつとじゃあ、リーシヤ」

ジークは顔を近づける。自然とリーシヤの鼓動は上がった。

「ま、待てっ！ こんなクラスメイトの目の前でそんな——」

「寝癖が付いてるぞ」

「……………え？」

ジークは手をそつとリーシヤの頭に乗せて、寝癖を直す。

「やれやれ、女子なんだからもうちよつと気遣おうぜ」

そう微笑むジーク。クラスメイトも笑い声が漏れる。

「あ、リーシャ。教科書を見せてく——」

「こ、この……」

「ん？」

顔を真っ赤にし、プルプル震えるリーシャ。それを見て、ジークは首を傾げる。

「馬鹿者がー!!」

「へブライゴツ!?!」

リーシャの渾身の右ストレートが顔面にクリティカルヒットし、ジークは吹き飛んだ。

?

しかし、意外にもフィルフィとの恥ずかしいやりとりと、ジークが吹き飛ばされたのが功を奏したらしく、クラスメイトたちは一気に、ジークとルクスへの警戒を解いたようだった。

今は昼休み。ルクスの周りには、女生徒が集まって質問責めに合っていた。だが、逆にジークの周りには誰も寄ってこない。何故なら――

「ねえ、リーシャ。機嫌を直してよ」

「ヤダー」

即答である。朝の時に顔を殴られてからジークは、リーシャの機嫌直して忙しい。

「ねえ、なんでもやるからさー」

「――!」

ジークが言った瞬間、リーシャはピクツと反応を示した。

「お前今、なんでもやるって言ったよな?」

「……あ」

「やっべー、言っちゃった。」

「ふっ、ならばいいだろう。お前に――」

リーシャが何かを言おうとした瞬間、

「――忙しいそうなところ悪いけど、いいかしら？」

凜とした響き。透明感のある声が、教室の中に聞こえた。妖精のように美しい相貌の少女に、ジークとルクスは見覚えがあった。

クルルシファー・エインフォルク。北の大国、ユミル教国からの留学生であり、同じ士官候補生のクラスメイトだ。一昨日の事件で、ジークが投げ飛ばされ気絶させた、あの少女だった。

「クルルシファーか。用なら後にしろ。わたしは今、大事な話がある――」

リーシャが頬を膨らませて、そう抗議するが、

「ちよつと学園長から用事を頼まれたの。昼休みにその子を案内して欲しい場所があるって。だから借りていくわ。いいわね、ジーク君？ それと、ルクス君？」

「お、おう」

「えつと……、あ、はい」

案内の件は初耳だったが、助け舟だと思って、ジークは話に乗った。

「じゃあ、そういうことだから」

クルルシファーは、そう告げてルクスの手をそつとつかむと、廊下へと引つ張っていった。

「じゃあそういう事なんでー」

「あ、待てジークー！」

ジークも後を追うように教室を出て行く。背後でリーシャが言っていたが、今はスルーをする。

？

教室から廊下へ出て、階段を昇る。無人の屋上まで辿り着く。そこは、学園の景色を一望できる場所だった。

「ワー、ヒッローイ」

「余り気持ちが悪くないわね」

ジークの気持ちがかもってない声に冷静に突っ込んだクルルシファー。

「えっと、ありがとう。クルルシファーさん」

とりあえず一息ついたルクスは、まずお礼を言う。クルルシファー・エインフォルクの噂は、妹のアイリからも少しだけ聞いている。勉学も、体技も、装甲機竜ドラッグナイドの扱いも、全てにおいて一流の腕を持つ、異国の少女。その常人離れた美貌も含め、学園中の人間に、一目置かれている才女だ。

「助けてくれた……んだよね？ たぶん」

「子供っぽい顔の割に、意外と鋭いのね？」

「そ、それは関係ないでしょ!？」

「はっ！ ルクス、まさかお前ってまだ十歳を超えてない？」

「なんでジークまで言ってくるの!？ ていうかジークは僕と長い付き合いだよね!？」

ルクスが思わず顔を赤くすると、クルルシファーはくすつと笑い。「旧帝国の王子様のくせに、そうやってすぐムキになるところが、子供っぽいのよ。あなたも元はいえ皇族なのだから、こんな見え透いた挑発なんて、皮肉のひとつも交えて返してみて欲しかったわ」

「ワー、オットナー」

「……」

クルルシファーとジークの言葉に、ルクスがへこんでいると、「でも、それ以外は褒めているのよ？ 感心しているといってもいいわ。私の意図に気づいてくれて。手間が省けたわ」

「んーとじゃあ俺も?。」

「そうよ。話したいことがいくつもあるけど。まずはひとつよ」
そう言っつて、透き通った瞳を、ジークに向けてくる。

「どうして昨日——、あのとき倒してしまわなかったの?。」

「……それって、どっち? リーシャ? それとも、幻神獣?。」

「私は両方倒せたと思っているのだけど? あなたがその気になりさえすれば——」

見透かすようなクルルシファーの視線に、ジークは首を横に振つ

た。

「……無理だ、俺ってあんまり強くないし」

数秒の間を開けて、そう答えた。

「俺は機竜ドラッグナイド使いの公式模擬戦トリーナメントでは、一度も勝ってないし、むしろ全敗中だし」

相手と互角に戦い、そして負けるスタイルから名付けられた、『道化師』の二つ名。

「本当にそうかしら？ あなたもあなたの神装機竜はまだ全力じゃないんじゃないの？」

「あれが全力さ、俺の《オッドアイズ・ドラゴン》は汎用機竜ぐらいまでしか出力を出せないんだ」

そう言うと、クルルシファーはジト目を作り、

「……そう安心して。言いたくないことまで、無理に言えというつもりはないわ」

「あれ？もしかして信用されてない？」

ジークが笑みを作ると、クルルシファーは、心を読んだように言う。

「貴方も私と同じで隠し事をしている人よ。だいたいわかるわ」
なるほど、この人と俺は同じタイプらしい。

「クルルシファーさんは、機竜ドラッグナイド使いのことを学ぶために、ユミル教国から留学に來ているの？」

ルクスが何気なく聞く。

「それも、目的のひとつには違いないわね」

なんというか、とらえどころのない言い方を好むらしい。

「じゃあ、他にはどんな目的があるの？ 伯零令嬢だって聞いたけど、新王国と交流を結ぶためとか——」

「……ねえ、『黒き英雄』って、あなたたちは知ってる？」

ルクスの言葉を断ち切って、クルルシファーが尋ねてくる。

「えっ……？」

「たった一機の——正体不明の装甲機竜ドラッグライドを使い、帝国の装甲機竜ドラッグライド約千二百機のほぼ全てを破壊して、敗北へと追い込んだ怪物。所属も目的も不明。その使い手は、現在の新王国にその姿は確認されていない

「クルルシファアが区切ったところで今度は、ジークが口を開いた。『旧帝国にとっては滅びの悪魔、新王国にとっては、伝説の英雄として語り継がれている。新王国に住んでいるなら絶対は聞く噂だ』」

「……僕も、噂くらいなら、聞いたことはあるけど——」

「……………」

ルクスの答えに、クルルシファアは何も言わない。ただ静かに、屋上の手すりの前で、眼下の景色を見下ろしていた。

「あの……………」

「私からひとつ、あなたたちに雑用の依頼があるわ」

「え?」

「ん?」

「『黒き英雄』を探して。私は、その人に用があるの」

「……………!?!」

「ん、わかった」

ルクスは驚いたが、ジークは余り気にしなかった。

「じゃあ、改めてよろしく。クルルシファア・エインフォルクさん」

ジークは普段通りの笑顔でクルルシファアに手を伸ばす。

「ええ、よろしく」

クルルシファアもくすつと微笑んでジークの手をとる。

(ツ……………!?!)

クルルシファアとジークの手が触れ合った瞬間、ジークの脳内に電気が走った。

「……………? どうしたの、ジーク君? 訝しげな顔をして」

「つ……………! いや、いや、なんでもない」

クルルシファアの手を握って、少し険しい顔をしてしまったらしい。

「ゴーン! と、大きな鐘の音が、時計塔から響いてきた。」

「あ……………」

「午後の授業が始まるわね。次は装甲機竜^{ドラグライダー}の実技演習だから、急いだ方がいいわ」

それだけ言うと、クルルシファーは屋上から降りる階段へ、ゆつくと歩いていく。だが、手前で止まって振り返る。

「そういえば、あなたたちは、お昼は食べたの？」

「えっ……!？」

(そ、そういえば、まだだった！)

ジークもルクスも教室でリーシャの機嫌直しと質問責めで昼は何も食べてないのだ。そう意識した瞬間、きゅるる、とお腹が小さく鳴り、ルクスは顔を赤くする。

「がんばってね。可愛い雑用王子様」

クルルシファーはふつと微笑み、そのまま立ち去っていった。

「……………」

ルクスが項垂れているその脇で、ジークはずっとクルルシファーを見つめていた。

「彼女…もしかして……………」

だが、ジークの言葉は誰も聞こえず、風に流された。

？

「あーもう、疲れたああああ……………」

「文句を言うなよ。泊まれる屋根があるだけでありがたいと思え」

その日の夜。ジークとルクスは女子寮に併設された大浴場を、ごしごしと磨いていた。

「そもそもこの屋根を壊したのジークなんだからジークがやればいいじゃん」

「〜♪」

ジークは口笛を吹いて聞いてないふりをした。ルクスは恨めしい目線を送るがジークはどこ吹く風と口笛を吹き続ける。

『おい、ジーク』

「ん？…どうすったのフローリア」

ジークは声をかけられ、目線を上にあげるが、そこは虚空だった。しかし、ジークには見える。何故ならジークの多重人格の一つ、『フ

ローリア』だからだ。

『まさか本当にここに残る気か?』

「そうだけど」

『はあ、わかっているのか? ここは女学園なんだぞ?』

「いやでもさー、天国みたいなところだぜ?」

勉強に励みつつ、ルクスの借金を返せて、更には身の安全まで保証されている。そして何より——装甲機竜ドラグライダーの訓練が日常的に可能だということ。

「そういうお前こそ、女の子で興奮してんじゃないのか? この変態」

『ば、馬鹿なことを言うな! エリックじゃないんだし』

「ホントかな?」

ジークがフローリアと会話しているのを、離れたところで見ているルクス。

「また、フローリアとでも話しているのかな?」

ルクスにはフローリアの声はジークと入れ替わってないと聞こえないが、前に何回か入れ替わっているとところを見たことがし、この光景も何度か見たことがあるので、不思議には思わない。

「そう言えば、あと二人もいるらしいけど誰なんだろう?」

ルクスが呟いたところで、コンコンという軽いノックの後、脱衣所への扉が、いきなり開かれた。

「わ、わわっ!? ごめん! もうお風呂は終わってて、今はちよつと——!?!」

ルクスが慌てて、弁明の声を上げると——。

「期待に添えなくてごめんさい、兄さん。見たかったですか? 私たちの裸」

妹のアイリと、その友人である三和音トライアドの一年生、ノクトがいた。ちなみに、二人とも服はちゃんと着ている。狼狽しているルクスを見てジークはからかうように笑う。

「キヤー、ルクス君女子の裸でも想像してたのー(棒)」

「な、何言ってるんだよッ!?!」

「Yes. ですが、仕方ないかと。年頃の男性は、普段から何かと大変だと聞いてます。肉親に対して欲情するのは、果たしていかななものかと思いますが」

「何で僕が、裸を期待してたって前提になってるのさ!？」

「まあ、いいですけど。唯一の家族同士、今度一緒にお風呂でも入りますでしょうか？」

「アイリ……。恥ずかしいから、人前でそういう冗談言わないでくれる？」

ルクスが頬を赤らめて抗議すると、アイリも少し恥ずかしかったのか、こほん、と咳払いをして誤魔化した。

「それで、僕たちに何か用？ もう、今日の依頼はこのお風呂掃除で最後だから、急ぎの仕事じゃなければ、ちよつと待っててくれると――」

と、背筋を正したルクスに、アイリとノクトは、苦笑した。

「ええ、ちよつとしたお仕事です。後で女子寮の大広間に、まっすぐ来てください。寄り道禁止ですよ。それじゃ」

アイリがさらつと告げ、踵を返す。

「わかった。すぐ行くよ」

「Yes. 楽しみにしててください」

答えたルクスにお辞儀すると、ノクトもアイリと一緒に、浴場から出て行った。完全に姿が消えたのを確認したジーク。

「前に会った時より綺麗になったね、アイリ。今度、食事でも――」

「アイリに口説いたら全力で殴りに行くよ、ジーク？」

「……冗談だよ、ルクス」

ジークは溜め息と肩を竦ませた。

「それよりも、楽しみってなんだろう？」

ルクスは首を傾げて呟いたが、ジークは「さあ？」と言って結局わからなかった。

？

大浴場の掃除が終わり、依頼主の寮母さんにチェックをしてもらった後、ジークとルクスは休憩も入れず、アイリたちに言われた大広間へ向かっていた。

「そういえば、僕も皇族だったんだよな……」

「ん？ 何だよ急に」

「いや、ジークとも長い付き合いだなと思って」

ジークとはルクスが七歳まで宮廷で過ごしていた以前からの友人だ。王位継承を剥奪された後は城外で過ごしていたから合う機会がなかったが。十二歳の時に起こったクーデターで、一度は拘留されていたルクスとアイリだったが、その後は新王国の政権が誕生すると同時にルクスは咎人となり、牢獄から出られた。

そして、城の外で待っていたのが、ジークだった。

『よっ。久しぶりだな』

身長は抜かれ、全体的に大人になっていたジークだったが、性格は変わっておらず、昔からの友人が生きていたことにルクスは安堵した。その後は、ルクスの借金を返すためにジークに協力してもらい、一緒に暮らしていた。

「ねえ、ジークは僕が宮廷に住んでいた時から居たよね？」

「そうだけど」

「ジークは、何で宮廷に居たの？」

「……なんとなくさ」

ジークは、はぶらかすように言った。

「……えっと、大広間だったっけ？」

階段を降りた広間に、アイリとノクトの姿が見えた。

「ちゃんと寄り道しないで来てくれましたね。兄さんたち」

「Yes. 早く来てくださって助かりました。では、こちらへ来てください。みんながお待ちかねです」

「みんな？」

ルクスが首を傾げて尋ねるが無視され、アイリがルクス、ノクトがジークの手を取る。そのまま渡り廊下を挟んで、食堂へ。

「ん？ 食堂は確かもう閉まってなかったっけ？」

食堂は閉まっている時間だ。ジークとルクスはそう思い、首を傾げて中に入ると、

「編入——おめでどう」

少女たちの声が、一斉に聞こえてきた。

「え……?」

正面を見ると、大きなテーブルの上に、たくさんの料理が載っていた。それも、ジークが見たことがない物がたくさんある。

「これって——まさか?」

「そう、君たちの編入祝いだよ」

ルクスの反応を見て、三和音トライアドのシヤリスが軽く微笑んだ。見れば、小さなパーティー会場のように食堂がセツティングされ、何人もの生徒たちが、そこに集まっていた。

リーズシャルテ、クルルシファア、フィルフィ。シヤリス、ティルファア、ノクトの三和音トライアド。そして、同じクラスの生徒数名と、ライグリー教官までもが隅に座っていた。

その光景は、ジークにとって一度も経験したこともなくて。まるで、憧れてたものが目の前に広がっていた。

「あの、もしかして——僕たちのために?」

「……まあ、私たちが寄り合って企画した、簡易的なものだからね。元王子の君たちをもてなすには、少し粗末かもしれないが、我慢してくれたまえ」

三年生のシヤリスが、そう言うと、

「うんうん。料理はみんなの手作りだけど、私が作ったヤツの味は期待しな——って、どうしたの? ジクっち?」

満面な笑顔でそう話していた二年のティルファアが、ジークの様子が変なことに気づいた。そして、この場にいる全員の視線がジークに集まる。

「ど、どうしたのですか、ジークさん? 何故、涙を流しているのですか?」

そう、ノクトが言う通りジークは眼から涙を流していた。

「い、いや。俺ってこういうの経験したことなくてさ、嬉しくて」
自分でも気づかなかったのか、ジークは服の裾で涙を拭う。それを
見ていた一同はぼかんとしていたが、

「おい！　なんだこの湿った空気は！」

奥の椅子に座っていたリーシャが、この雰囲気弾く様に立ち上がる。

「ここはもうお前の家なんだから遠慮をするな、だから泣くなよな。
そ、それに、私もこういったパーティとか行事みたいなのが苦手なん
だよ。だからその、お前が喜ぶのかよくわからん。でも、一応やつと
いた方がいいかと思ってな……。お疲れ……。いや、此度は大義であつ
たな。ジーク・ザン・フロリア・エリック・ルーカスよ」

恥ずかしそうに、少し視線を逸らしながら、呟く。その格好はジークが初めて見る、紅いドレスだった。

「Yes. リーズシャルテ様は、『あなたにお礼とお祝いをしたくて
企画しました。少しでも楽しんでくれれば嬉しいです』と、言いたい
ようです」

「ち、違うぞ?!　勝手に意識すんな！　一年のくせに！」

そのやりとりを見て、他の生徒たちから、どっと笑いが漏れる。

「……………」

あまりの驚きでしばらく固まっていたジークとルクスだが、ジーク
がリーシャの手を掴み、

「——ありがとう、リーシャ。俺らのことを考えてくれて、嬉しい
よ」

本当に嬉しそうに、自然な笑顔で、そう言った。

「い、いやっ……。まあそのなんだ。わたしも一品だけだが料理と
かやってみたんでな。えっと……」

と、頬を赤らめて慌て始めるリーシャを尻目に、シャリスがこほん
と咳払いをした。

「では、そろそろ乾杯といこうか？」

その一言に、皆がグラスにワインを注ぎ、掲げる。

賑やかな夜が、
更けていった。

Part 4 過去の傷、未来への笑顔

木々の隙間から木漏れ日が降り注ぐ、朝の学園にルクスは歩いていく。普段は、女生徒からの依頼をやっているのだが、今は学園からの依頼だ。

【仕事場】 王立士官学園アカデミー 機竜研究開発所・工房アトリエ

【依頼主】 機竜研究開発所長

【仕事内容】 機竜運用の試験テスト

アトリエ

工房というのは、学園敷地内の端にある、大きめの一戸建てのようだ。もともと、機竜の整備士見習いとして仕事に来たつもりなので、歓迎だ。

「——それにしても、どこに行ったんだろ？ ジーク」

朝起きて、アイリに呼ばれた後にアイリと別れ、ジークを呼びに行つたのだが、ジークが寝泊まりしている部屋に行っても不在だった。

「すみません。ルクス・アカディアです。約束のお仕事をしに——ん？」

軽くノックをして、大きめの声で挨拶をしていると、扉の向こうから何か聞こえてきた。

「——!？」

「——!」

「な、なんだ？」

許可を取らずにいきなり扉を開けるのは失礼だと思ったルクスは、扉に耳を当て中の話を聞くことにし——。

「フタエノキワミ、アー！」

「ちよっ!?! えええええっ!?!」

意味不明な絶叫と共にジークが扉を突き破ってルクスに向かって吹き飛んで来た。そのままルクスは下敷きにされ、数メートル先まで地面を滑った。

「死ねっ! このド変態!」

「お、落ち着けりーシャ! 俺は悪くない!」

目に涙を浮かべ、いつもは黒いリボンで括っている金髪は解け、白いガウンを乱しながら荒い呼吸をしているリーシャ。その反対にジークは、かなり狼狽している。

「何が悪くないだ！ 私の胸を触ったくせに！」

「でもあれは仕方なくない——か？」

ジークは尻に何か当たってる感触に気づき背後を見た。そこには、昔からの親友ルクスが目を回し倒れていた。

「あ、おい！ 大丈夫かルクス!？」

「う、ううん……」

立ちあがり揺さぶると、ルクスは意識を取り戻した。

「おはよう、ルクス」

「お、おはよう、ジーク。つて、リーシャ様？ 何故、ここに？」

「あーそれはなー」

ルクスに問われ、ジークは数秒考えると、チラツとリーシャの方を見た。助け舟を出されたリーシャは「はあ」とため息を漏らす。

「こんな所で話すのもあれだ、中に入れ」

そう言つて、リーシャは格納庫に入つて行く。ジークとルクスも立つて後を追おう。

「つて、勝手に許可なく入つていいの？」

「許可ならいま取つたぜ、ここの工房アトリエの所長はリーシャだ」

「……えっ？」

ルクスは信じられないといった風に首を傾げた。まあ、無理もない。正直、仕事用のガウンは着ているが、子供が遊んでいる服装にか見えない。裾とか垂れているし。

だが、ルクスが格納庫の中に入ると息を呑んだ。金属と油の匂いが立ちこめる、煉瓦造りの広い空間。無数の部品と工具が転がるその奥に、一機の怪物があつた。それは、《ワイバーン》と《ワイアーム》の半身を融合させたような、異様な機竜が、そこにあつた。

「ふっ。ルクス、なかなか挑発がうまいな。よし、乗つてやるぞ」

リーシャは得意げに笑うと、腰に差していた二本の機攻ソード・デバイス殻剣を、同時に抜き払つた。

「――降誕せよ。天地の対なる楔、穿たれし混沌の竜。《キメラティック・ワイバーン》！」

瞬間、工房の奥に見えた奇怪な機竜が、光子と化し、リーシャの背後に転送される。

「これは――!?!」

「リーシャ、接続までしなくてもいいんじゃないか?」

「そうだな。よし、戻れ」

リーシャが、同時に二本の機攻殻剣を振るい、鞘に納める。すると、召喚された機竜は、再び光の粒と化し、奥の倉庫へ戻っていった。

「……何ですか、あれ?」

目を丸くしたまま、ルクスが呟く。

「どうだ、驚いたか?」

ルクスの反応に気をよくしたリーシャが、両腕を組んで胸を張った。

「《キメラティック・ワイバーン》。わたしが開発した、世界初、オリジナルの装甲機竜だ」

「――!?!」

ルクスは、驚愕な顔をした。それを察したジークが口を開く。

「まあ、ルクスが驚くもわかるぞ。発見されてまだ十余年の装甲機竜はその原理も解明されていない。今までは既存の部品で取り換えするぐらいの調整しかできてなかったからな」

「こんな、全く別の機竜を作るレベルの改造なんて、世界のどこにも――。」

「幻玉鉄鋼と、幻想機核を加工できれば、他にもいろいろできそうなんだがな」

「だけどリーシャ、性能と出力はかなりだが、起動に二本の機攻殻剣を使わないといけないのは、ちよつとネックじゃないか? 動かせるのリーシャぐらいだぞ」

「ふっ。わたしは実力があるからな」

満足げに微笑んで、リーシャは作業台前の椅子に腰かけた。

「もつと評価しろ。わたしはな、新王国の姫という立場だから、お前

たちを編入させたりといった無茶を許されているわけではないんだぞ。この歳で個人の工房アトリエを任されるほどの実力を見せ、成果を出しているからだ。どうだ、驚いたか?」

「おーすごいすごい。まあ、俺も手伝ったんだがな」

ジークはリーシヤの頭を撫でる。

「ところで、あっちの奥にすごい焦げ跡っていうか、爆発された形跡みたいなものがあるんですけど……」

扉が壊れて開きっぱなしの部屋を指して、ルクスが聞くと、

「……失敗は成功の母だ」

微かな動揺を押さえ込んで、ジークとリーシヤは言い切った。深くつつこむのはやめにして、ルクスは先ほどから気になることを聞いてみることにした。

「あの、さっきからずっとここに居て当たり前みたいになってるんですけど、ジークは何故ここにいるんですか?」

「あーそれはあ……」

ジークはそう言つて、昨日のことを振り返った。

?

ジークとルクスのパーティが終わって、解散した後。ジークはとある人物を探して、寮内を歩いていた。

「どうしたのですか、ジークさん。誰かをお探しですか?」

歩きはじめて数十分たった頃、落ち着いた声音でジークに話しかけてきた、黒色の髪の少女、ノクト・リーフレットに出くわした。

「ノクト、ちょうどいいところに。姫様は見なかったかな?」

「Yes. リーズシャルテ様なら学園の工房アトリエにいると思います」

ジークが質問を投げかけると、ノクトは素早く答えてくれた。

「ありがとう。そう言えば、ノクトってティルファーとシヤリス先輩で自警団組んでるけど、どういう関係なんだい?」

何時も、ではないがよくこの三人で行動をしているところを見たことがるジークは何気なく聞いてみた。

「Yes. 私の家、リーフレット家はシャリスのバルトシフト家に仕える従者の一族で、シャリスとは昔からの仲です。ティルファアとは王都に軍服のアクセサリーを注文しに行った時に出会った友人です」

「なんほど、親友ね」

「ジークさんはいないのですか？」

「……え？」

ノクトからの予想外な質問に、ジークは抜けた声を出してしまった。「親友」など、一度も考えた事がない。ルクスやアイリ、ファイ、そしてリーシャなどがそれに当てはまるだろうが。

「うーん、ルクスやアイリ、ファイルファイとリーシャぐらいかなあ」

「……」

「——あれ？驚いた顔をしてどうしたの？」

ジークは、首を傾げた。何故なら、ノクトがジークの言葉が意外だったのか驚いた表情をしていたからだ。おかしな事は言っていない筈だが。

「あ、失礼しました。普段のジークさんならもっと友人が沢山いると思います」

「——」

一瞬、ジークは硬直した。だが、よくよく考えると確かに友達が少ない。

「では、私とも友達になってください」

ノクトはそう言っつて、すつと手を差し出した。もちろん、断る理由はない。

「ああ、よろしくノクト」

「Yes. よろしくです」

ジークとノクトは、自然と綻んだ。

「あ、そう言えばリーシャを探していたんだった」

「そうでしたね。工房は学園の離れにあります」

「協力、ありがとうな」

ジークは笑顔でノクトの頭を軽く撫でた後、ノクトの横を横切つ

た。その時、ノクトの頬が赤らんでいたのを、ジークは気付かなかつた。

？

学園から離れた所に大きな格納庫、工房アトリエと呼ばれている所にジークは立っていた。中は灯りがともっている。誰かがいる証拠だろう。

「あのー、ジークっていう者ですけど誰かいますか？」

扉を軽く叩いた後、聞こえるように言った。扉はすぐに開いた。

「あれ？　なんだ、ジークじゃないか」

そう扉を開けながら言ったのは、金色の髪を黒いリボンで二つに括ったリーシャだ。学園の制服の上から作業用と思わしきガウンを羽織っている。

「どうした、わたしに何か用でもあるのか？」

「んー別に用って訳ではないんだが、寝泊まりする部屋でリーシャのところ泊めさせてくんないかなっと思ってる」

「わ、わたしの部屋にか？」

「あ、ああそうだけど」

ジークの言葉にえらく狼狽するリーシャ。

(どうしたものか……あそこは普段使っていないんだが)

リーシャは基本、この工房アトリエで寝泊まりしている。寮の部屋は時々帰るぐらいで家具などほとんどない。

「ま、まあいいだろう。と、とりあえず外で話すのもなんだ、中に入れて」

出来るだけ平常心で、リーシャは頬を赤く染めながらジークを中に入れた。

「お邪魔しまーす」

「少しばかり散らかっているが、まあくつろいでいってくれ」

リーシャの言う通り、無数の部品と工具がそこらじゅうに転がっている。しかし、それだけではなかった。

(……不用心だなあ)

ちらつとソファを見ると下着が置いてあった。いくら学園が女子生徒しかいないとしてもあれは不用心過ぎる。

「なんでこんな夜遅くにここにいるんだ？」

ジークは下着から視線を逸らし、リーシャに質問を投げかけた。質問を投げかけられたリーシャは「良くぞ聞いた」と言いたげなように胸を張った。

「わたしはな、この工房アトリエの所長なんだ！」

「へー……それはすごい」

微妙な反応をしたジークに、リーシャはむっと頬を膨らませた。

「ジーク、信じてないな」

「いやだって、今のリーシャってまるで子供の遊びに見えるし」

羽織っているガウンは床に垂れていて、寸法があってないように見える。

「ぐぐぐつ……だが、これを見れば流石のお前も認めるはず！」

リーシャは悔しそうに歯噛みするが、奥の布がかかっている物に近寄ると布を払った。そこには、ジークの愛機、神装機竜《オッドアイズ・ドラゴン》があった。

「ふっ！ 見ろ、お前の《オッドアイズ》をわたしが直してやったんだぞ！」

両腕が消し飛んだ《オッドアイズ》は、決闘前の状態に戻って——
—なかった。

「なあにこれえ、全部攻撃タイプの武器じゃない！」

おつといけない、ついどつかのヒトデのAIBOが出てしまった。しかし、それも仕方がないだろう。《オッドアイズ》の両腕を直してくれたのはありがたいが、何故ドリルが付いているのだ。それに、全体的に鋭利なフォルムになっている。

「どうだ、カツコイイだろ？ 遺跡レインで見つかった中でも、希少なレアパーツなんだぞ」

「いや、たしかにカツコイイけどさ。機竜にカツコイイは関係ないかな？」

リーシャの「どうだ、カツコイイだろ？」オーラの瞳に、ジークは

苦笑いしながら反論する。だが、

「アホかお前は！ 装甲機竜ドラッグライドは機能性が一番、格好良さは二番目に重要なんだ！ それになんだお前の神装機竜はっ!？」

《オッドアイズ》の装甲を指しながらリーシャは言う。

「出力がないのはわかったが、何故強化をしない」

リーシャが言いたいことはわかっている。ジークは、汎用機竜と同じぐらいしかない出力の《オッドアイズ・ドラゴン》を、まったくと言っていいほどチューンを施していないのだ。

「あーまあ、それは《オッドアイズ》の神装、《天空の虹彩》スカイ・アイルリスが関係あるんだ」

「ほう？ 面白そうだ、言ってみせよ」

やはり、機竜を携わっている技術者は興味を示した。

「そのー……この神装はちよつとばかし特殊で『これ』といった限定した能力はないんだ。だから、俺にも把握しきれていない」
「だいたい、この神装を最後に使用したのはもうずっと昔だ。」

「というわけで、わるいけど元に戻してくれるとありがたいんだ」
それに、《オッドアイズ》を改造しないのは訳がある、どうしても曲げることが出来ない理由が。

「むー……しようがないなー。この改造には手間がかかったのにさ……」

それは改造のせいではないのか。そう思わないでもないジークだったが、リーシャは不機嫌そうにしながらも、何とか折れてくれた。

「えーと、これとこれと……」

リーシャが床に置いてある工具を拾っていると、その一つをひよいっとジークが持った。

「あ、おい——」

「俺も手伝うぜ」

「……あのなあ」

手の中でくるくると工具を回すジークを見ているリーシャは、呆れたように溜め息を漏らした。

「素人が機竜をいじると危ないんだぞ」

「おいおい普段《オッドアイズ》を整備しているのは誰だと思ってるんだ？ 俺だって機竜を整備しているんだぜ」

学園に入る前の雑用の時、専門の整備士に機竜の整備を頼むと金がバカみたいに吹っ飛ぶ。故に自分で出来るように勉強をし、資格まで取得した。ルクスの《ワイバーン》を整備しているのも俺だ。

「さあ、二人でやればすぐ終わるさ」

そうジークが言い切るとテキパキと《オッドアイズ》に付けられたパーツを外していく。工房社長のリーシャの目からも、ジークの腕は素人とはかけ離れた技術があるとわかる。

「まったく、お前は何者なんだ？」

呆れたように言い、リーシャもパーツを外すのに参加する。流石に手慣れている者が二人もいると、ものの数分で終了し、改造される前の《オッドアイズ・ドラゴン》に戻った。終わった後は小休憩がてらソファに座った。

「まったく、不思議だな」

「何がだ？」

ボソッと呟いた隣に座っているリーシャの言葉に、ジークは首を傾げる。

「なんで汎用機竜と同じ出力の《オッドアイズ》でわたしの《ティアマト》に勝てたか不思議でしようがない。お前ってまさか操作がもの凄く上手い——」

「いやいや、ルクスの方が機竜使いとしての技術は上だよ」

リーシャの言葉を、ジークは首を横に振った。

「けどまあ、強さの秘訣って言われると——俺は機竜と会話が出来ることかな」

「……はっ？」

面食らったような表情をしたリーシャに、ジークは悪戯っぽく微笑んだ。

「戦いで勝つには装甲機竜ドラッグライドだけでは勝てない。操作の技術だけでも、強力な武装、神装だけでも勝てはしない。全てが一体となってこそ意味をなす。そして、その勝利を築きあげる為に最も大切な物は——

「」
ジークは拳を自分の胸に当て。

「ここにある」

そう言った時のジークの表情は、どこか子供っぽくて、太陽のようだった。

「俺は機竜を信じ、機竜も俺を信じてくれた。だから俺はいつでも百パーセントの実力を発揮できる」

故に俺は機竜と会話が出来る、とジークは嬉しそうに言った。

「リーシャの《ティアマト》とも会話が出来るよ」

「ほ、本当かっ!？」

「ああ、もちろん」

興奮して目をキラキラ光らせているリーシャに、ジークは頷いた。

「待ってろー！すぐに《ティアマト》を出すからな！」

リーシャは工房アトリエの奥に立てかけてあった《ティアマト》の機攻殻サウンド・デバイス剣バスタードを持って来ると、詠唱符を言って接続した。

「どうだ？なんて言っているんだ？」

期待の眼差しを向けて来るリーシャに、ジークは苦笑いをしながらも《ティアマト》をじっと見た。そして、すぐに視線をリーシャに移した。

「いつも丁寧に整備してくれてありがとうだつてよ」

「ふふん、当たり前だとも。わたしは機竜が大好きだし、その中でも《ティアマト》は特別さ」

「ただし——」

機嫌良くなっているリーシャに、ジークは申し訳なさそうに一拍区切ると続きを話した。

「作業に集中し過ぎて夜遅くまで起きてほしくないってことと、戦鬪で余り無茶をしてほしくないってさ」

「うっ……」

ジークの指摘に、リーシャは戸惑った。まあ、戦鬪中に無茶をしているのはリーシャだけではないのだが。俺もよくフローリアに怒られるし。

「まあ、《ティアマト》はリーシャの事を認めているよ」
「そうか。だが、これからもよろしくな《ティアマト》」
リーシャは《ティアマト》にそう言った後、《ティアマト》を解除した。

「ほんじゃあ、休憩も挟んだ事だし作業の手伝いでもしますかね」
ジークは再び、工具を手取る。

「手伝ってくれるのか？」

「ああ、リーシャがやっている仕事も気になるしな」

「そ、そうか。なら、今わたしが作っている装甲機竜があるんだ」

そうリーシャが言うと、ジークの手を取って奥に向かった。焼け焦げている部屋には怪竜が置いてあった。丁度、《ワイバーン》と《ワイーム》を足したような機竜だ。

「リーシャ、これって」

「わたしの作り途中のオリジナル装甲機竜、《キメラティック・ワイバーン》なのだが問題点があつてな」

そう言つて、リーシャは思案顔になった。

「フォース・コア幻創機核は起動しているのだが、何故か全体まで行き通らないんだよな」

「ちよつと見ていいか？」

ジークがリーシャに許可を取るべく聞くと、「ああ、いいぞ」と二つ返事で許可を出してくれた。《キメラティック・ワイバーン》の至る所をチェックして行くと、驚いた部分と気になった部分があった。

「《ワイバーン》に《ワイーム》の可変フレームを与えて近接強化フォース・コアに幻創機核を二つ分で出力を大幅に上げているのか。だが機攻殻剣ソード・デバイスを両方使わないと動かなそうだな」

「ふむ、やはり目がいいな。このためにわたしは機攻殻剣二本を使用しての操作を習得したのだぞ」

ジークは更に気になったところを確かめるべく《キメラティック・ワイバーン》の回路を調べ、そして確信に至った。

「あーやっぱりな」

「な、何かわかったのか？」

「リーシャ、この機竜の回路の配線って元の機体と同じにしているね」

ジークが言いたい事をまとめると、《ワイバーン》は《ワイバーン》のまま、《ワイアーム》は《ワイアーム》のままという回路の配線だったのだ。

「俺の予想になっちゃうけど、元の機体と同じにしちゃうと回路はそのままだから幻創機核フオース・コアから送られるエネルギーが片方にしかないんだと思うよ。だから……」

ジークは少し、《キメラティック・ワイバーン》の回路をいじる。《ワイバーン》と《ワイアーム》の回路を混ぜた配線をすれば、つと

もうちよつとこつた事をすればもつと色々な事ができそうだが。

「——ジーク、やはりお前はすごいな」

「いやいや、リーシャの方がすごいって。俺はただちよつと回路をいじっただけで異なる装甲機竜ドラッグライドを使う発想なんて至らなかつたぜ」

この部屋に入る時に見た焦げ跡。それは、リーシャが努力を重ねた証拠だ。オリジナルの機竜を作るなど前代未聞のことだし、ここまで行くのも楽ではなかつただろう。何より、一生懸命に何かに熱中している姿が昔の自分と重なって見えた。

そうこうしているうちに、配線を終了した。

「ほんじゃあ、後は正常に動くか動作チェックだけだ」

ジークは二本の機攻殻剣ソッド・デバイスをリーシャに持たせ接続を促す。リーシャは機攻殻剣を抜剣し振るう。すると、《キメラティック・ワイバーン》は光った。

「どうだ、ジーク？」

「ん、大丈夫そう」

その後、障壁が正常に展開できるか等のテストをやった。

「ふーやっぱり、もう一人いると楽だなー」
機攻殻剣を鞘に納めると、リーシャはぐぐつと背伸びした。

「なら、これからも手伝ってやろうか？」

「なっ!? いいのか!」

「なに、一流の技術者の下で助手として働けるなんてこちらこそ願ったり叶ったりだよ」

他人の技術を見れる機会など、雑用の時にはなかった。だから、これらがとても新鮮に感じる。

「よし！ 今日からお前はわたしの助手だ！」

リーシャは嬉しそうにそう言った。

「ならばさっそくルクスの《ワイバーン》を改造するぞ！」

「許可なく改造はやめましょうね」

「うぐっ！ いいではないか！」

「だーめです」

ジークとリーシャは楽しげに会話を入れながらルクスの《ワイバーン》に調整を入れていった。

？

チチチチ……。

小鳥のさえずりが聞こえ、瞼の裏に、微かな日差しの温もりを感じる。

「うう……」

朝だ。と、ジークは、薄皮に覆われた意識の中で思う。昨日は、確かにリーシャと一緒に機竜の整備をしていたような……。

(ねむい……)

いつものこの時間なら起きているのだが、昨日の疲れが残っているのか、あとほんの少し、という気持ちで勝利手元の毛布を手繰り寄せようとする。

「んっ……」

ふにゆ、つという柔らかな感触が顔に当たると共に、そのな声が聞こえてきた。

「……ん？」

なんだろう、これ？と思ったがすぐに気のせいだろうと結論付き、更にこの感触を堪能するべく引き寄せる。仄かに香るいい匂いが鼻

腔をくすぐる。ほどよい柔らかさで顔を包まれ、気持ちいい。

その感触が心地よくて、ジークは目を閉じたまま、さらに強く顔を押しつけると――

「ん、んう……」

「……………は？」

目の前の声が、悩ましげなものに変わる。流石にジークも怪しくなり毛布ではなくナニかに手を伸ばす。ふにゆ、とした柔らかい弾力が返ってくる。

「んあ……」

そして、この悩ましげな声がある。バツ！と顔を上げ、ナニかを確かめる。

「……………Oh my god」

ジークの顔が、急激に青ざめた。鮮やかな金髪に、薄目に開けた、赤色の瞳を持つ少女。リーズシャルテ・アティスマータが、同じベット――否、同じソファの上――ジークの真横にいた。幅がないソファでは、完全に密着している、抱きしめあっている状態になってしまう。

「な、何で？」

「ふうあ、どうした？ ジーク――」

と、混乱するジークとは対照的にリーシャは可愛らしい欠伸をしたが、視線を下に――自身の胸を触っているジークの手を見た。学園の制服の上にガウンを着て、成長途中であるが大きめの胸をジーク腕が、形を崩していた。

「――ツ!？」

「ま、待て！ 違うぞ、これは――」

慌てて離れ、混乱する頭をなんとか動かして、昨夜起こった出来事を思い出す。確か――

『ふあ……』

可愛いらしい欠伸をして、舟を漕いでいた。

『おいおい、寝るならせめてソファで寝なよ』

そう言うジークも体力の限界で眠い。リーシャはもう後少しで完全に寝そうだ。

『よっ……いっしょよ……』

ジークはリーシャを持ち上げる（お姫様抱っこで）と、ソファにそっと置いた。そして、ソファにかけてあった毛布を手取る。

『ううう……眠い……』

眠気がついに勝って、ジークはソファに倒れる。

「あ、あれか!？」

思い出してしまったが、思い出したくなかった。恐る恐る顔を上げて、リーシャを見る。

「ま、まさかわたしの胸を触ったのか!？」

「——!」

リーシャは頬を赤く染め、ジークを見つめる。人は混乱すると、まともな思考が出来なくなる。

「……とても柔らかくって、ちょうどいい大きさの胸がとてもよかった——もう一度触っていいですか!」

「ツツツ!!!」

トマトのように顔が真っ赤に染まり、俯くリーシャ。ぷるぷると肩が震えだしたリーシャは顔をバツ!と弾かれたように上げると、涙目の目で——

「この、変態!!」

「フタエノキワミ、アー!」

顔面に、鋭い右ストレートが飛んで来て、ジークは格納庫の外まで飛ばされた。

?

「——ってことがあったんだ」

「はあ……昔からジークはお人好しだけど、もう少し考えて動きなよ」

「ルクス、その言葉はそっくりそのまま返すぜ」

「ぐっ！ 言い返せない」

ルクスも今朝がたフィルフィと一緒にベットの寝ていたからだ。椅子に座っているリーシャは恥ずかしかったのか、膝に顔を埋めていた。

「それにしても、いつの間にか機竜整備士の資格を持っていたんだね」

「取っておいて損はなかったからね」

まあ、他にも理由はあるんだが。そうこうしているうちに、落ち着いたリーシャは顔を持ち上げコホンツ！と咳払いをした。

「よし、じゃあそろそろ行くぞ」

「え？ ジーク、どこに行くの？」

「俺だって知らないよ」

首を横に振るうジークをよそに、リーシャは椅子から立ち上がり――

「決まっているだろ。何のためにジークとルクスの機竜を直したと思っているんだ？ お前たちの新たな仕事場だよ」

キラリと目を光らせるリーシャを見て、ジークとルクスは何か嫌な予感がした。

？

学園施設の一つ、演習場の控室にジークとルクスはリーシャに連れられて来た。機竜を装着するための専用着衣――装衣に着替えたり、軽い打ち合わせを行ったりするための、やや広めの部屋。そこに、十数名の装衣を身に纏った生徒たちと、クラスメイトのクルルシファーとフィルフィ。そして、シャリス、テイルファー、ノクトの三和音^{トライアド}だ。クラス、学年問わず集まっているのか、半分以上は初めて見る顔だった。

「本当に、彼を『騎士団^{シヴァレス}』に入れるつもりなんですか、リーシャ様？」

「当たり前だ。実力はこれから示してやる。そのために、ジークの神装機竜を直してきたんだからな」

名前の知らない長身の女子生徒が、ジークとルクスを見るなりそう言ったが、リーシャが制した。

「んんと——何の話をしているんだ？」

ジークは話の意図がわからず、首を傾げると、

「リーズシャルテ姫は、君をこの部隊に推薦したいそうだ」

「部隊？」

「うんうん、士官候補生でありながら、実技演習以外でも装甲機竜を扱える遊撃部隊。『騎士団』っていう特殊部隊だよージクっち」

三年生のシャリスと二年生のティルフアーが、説明をしてくれた。現在の新王国では、実戦を行える機竜使いの人材は、常に不足している。そこで、士官候補生でありながら、特別に戦闘許可を持つ、『騎士団』——遊撃部隊が設立され、日夜研鑽を積んでいるのだという。しかも、軍から任務を受け、報奨を得られるらしい。よって、ルクスには有用な場所になるとのことなのだが——

「だけどき、望めば誰でも入れるってわけじゃないのよね。この『騎士団』のはき。校内の成績で、総合して高い評価を得ていること。機竜使いの階層が、中級階層以上であること。そして、何より、現『騎士団』のメンバーの過半数が、その実力を認め、入団の賛成に投票すること」

そう小柄の女子生徒が、三つの入団条件を説明した。

「んー無理っぽくね？」

「うん、僕とジークはまだ編入して数日だから実技演習もろくにしないし——」

「俺にいたっては階層も無いしね」

ジークの今の言葉には、流石に『騎士団』の皆は驚いた表情をする。「流石に……」という雰囲気全体に広がるようにすると、

「平気だ」

と、リーシャが自身たっぷりに、この雰囲気断ち切った。

「先の二つの条件など、ただの前提に過ぎないな。ここにいるほどの生徒なら、もう知っているはずだぞ？ 一騎打ちでわたしと引き分け、単騎で幻神獣二体を抑えつけるタフネスさ。そして、もう片方は

『最弱の無敗』だ。戦力としては申し分ない」

「まあ、それはそうですが……」

リーシャの勢いに押され、長身の少女は口籠もる。

「でも、今は三年生たちがいないんだろ？ だったら帰って来た時に……」

「それは——逆だと思っわ」

ジークが言った言葉に、ふいに、今まで押し黙っていたクルルシファーが、ルクスの疑問に反応した。

「今だからこそ、あなた達を入団させるチャンスだと、お姫様は考えているのよ。三年の騎士団長の人が、かなりの男嫌いだから——」

「「え……？」」

「三年生、セリスティア・ラルグリス。公爵家の令嬢で、学園最強と呼ばれる実力者。人望もあって、大勢の生徒が彼女を慕っているわ。たぶん、あの人が今の学園にいたら、男を編入させるなんて話も、取り消されていた可能性が高いわね」

「セリスティア・ラルグリス？ あくあの四大か三大貴族ね」

ジークはその騎士団の団長の名前を聞いたとき、何か嫌な表情をした。

「え？ ジークってその人に会ったことあるの？」

「半年だけラルグリス家に世話になっただけさ。まあ、セリスティアとはちよつとした因縁相手だね」

これも初耳である。何時の間にジークは四大貴族の令嬢と会っていたのか。

「よし、今からチーム同士での、機竜対抗戦を執り行う。その結果を元に、ジークたちの入団の賛否を決めるといい」

そう言っつて、てきぱきと対戦相手を選びにかかる。

「あれ？ 俺の意志は完全に無視なんだろうか……？」

こうなると、断りずらそうだ。ルクスはフィルフィと会話を始めたため、ジークは手持ち無沙汰になってしまう。

「やりたくなさそうね」

ボーっと待っていると、クルルシファーが話しかけてきた。

「まあな。俺は私利私欲のために戦いたくないんだ」
報奨はとても良いが、ちよつとな……。

「おい、お前たち！ 話がまとまったぞ」

そんなことを考えているうちに、ぽんぽんとリーシャに肩を叩かれた。

「わたしとお前たちが組んで、相手のチームと戦うことになった。さあ、さっさと装衣に着替えてくれ」

「ん、わかった」

ジークはそう言うと、急に制服を脱ぎだした。ルクスは驚きに目を開き、女生徒は「キヤー」という黄色い声が上がったが――

「――って、制服の下に装衣を着ていたのか」

ジークの身体に裂傷痕があるのを知っているルクスとリーシャは、ジークがそれを女生徒に見せたくないと思察した。

「俺とルクスとリーシャでチームを組むのはわかったが、相手は誰なんだ？」

「Yes. この場にいる、初対面のメンバーたちのようです」

「おう、多いな。」

つまり、クルルシファー、フィルフィと三和音トライアドの三名を除く、この場にいる全員だ。

「二応言うけど、俺は《オッドアイズ》じゃなくて《ワイバーン》を使うからな」

「大丈夫だ、わたしの計算では勝てる。さあ、始めるぞー！」

お互いに準備を済ませ、演習場に出る。そして模擬戦が、始まった。

？

「なんなんだよー、もうー！」

あつという間に終わった、チーム對抗戦の直後。演習場の控え室に戻ったリーシャは、駄々っ子のように喚いていた。既に、『騎士団シヴァレス』のメンバーはほとんど着替えて退室し、中には見知った人物しかいない。

「そろそろ機嫌を直してください。一応勝ったじゃないですか？」
ルクスが困り顔で、そう宥めると、

「何で一番最初に脱落したのがジークなんだよ！　せつかくのチャンスが台無しじゃないか！　このバカー！」

やや涙目になりつつ、リーシャが声を上げる。少数に多数という圧倒的ハンデを覆して、勝利をしまいました。ちなみに、相手の機竜をやっつけたのは、全てリーシャだ。ルクスが敵の攻撃を回避し、そのうちにリーシャが全て打ち落とした。

ただ、一番最初にやられたのはジークだ。

生徒数人と互角に戦ったが、攻撃が被弾し墜落した。結果的に勝つたものの、多数決の投票で入団は却下され、リーシャは不機嫌になってしまったのだ。理由は、まあ言わなくてもわかるだろう。ジークは腕の傷と顔の傷を消毒している。ちなみに、ジークはもう制服に着替え終わっている（装衣の上から着込んでいるだけだが）。

「そ、そういえばこの後は、特にやることは無かった？」

つかつかと早足で、イスに座っているジークの前にやってくる。

「ああ、別に暇だけど？」

「じゃ、じゃあその。——今からわたしと、付き合ってくれ」

心なしか頬が赤くなっているリーシャの顔が、すぐ近くにあった。

「えー昨日から働き詰めで少し休みたいんだが」

「い、いいではないか！　あ、そう言えば——」

口を尖らせて言っていたリーシャが急に悪戯ほく口角を吊り上げた。

「そう言えば、昨日。お前はなんでもやるって言っていたな」

「は？　そんなこと言った覚えは——」

『ねえ、なんでもやるからさー』

あ、言ってた。

「なんでもやるって言ったよな？」

「うぐっ……！」

やめて!!　どうせエロいことするんでしょエロ同人みたいに!!

?

「なんだ、単なる買い物か……」

人通りの多い、十字型の城塞都市、クロスフィード。その整備された石畳の大通りを、ジークとリーシャは歩いていた。

「なにか言ったか？」

「いいや」

ジークより身長が低いリーシャを見下ろすように見ると、どこかリーシャもそわそわした様子で、町並みを眺めていた。

「リーシャって、よく街には出てたのか？」

「い、いや……、全然だな」

ジークの問いに、リーシャはかぶりを振った。

「最近アトリエは工房に引き籠もりっぱなしだったからな。装甲機竜ドラゲライドの改造で、忙しかったし……」

物珍しそうに周囲を見回しつつ、リーシャはちらりとジークに視線をやり、

「お、お前は、その……、よく出歩いているのか？ 他の、女の子たちと——」

もどかしげな口調で、そう聞いてきた。

「はは、そんな余裕があったらよかつたんだけどな。俺はルクスの借金を返すのに必死だし」

「そ、そっか……」

ジークが否定すると、リーシャはほっとしたように微笑みを浮かべ、

「よし、ではお互い初めて同士ということで、わたしがエスコートしてやろう！ 確か、この市街区にも、いいレストランがあつてだな……いや待て」

突然ピタツと動きを止めると、リーシャは、自分の制服をまさぐり、苦い表情をする。

「どうかしたのか？」

「う、うむ……。まあ、大丈夫だろ。わたしも王女だから、ツケも利

くはずだしな……」

「もしかして……財布忘れたのか？」

「うー……。その、今日は、たまたまだ……」

恥ずかしそうにうつむくリーシャに、ジークは苦笑いする。慌てている彼女を見て、少しだけ余裕が出てきたのだ。本当に、慣れていないんだな。よし——、ならここは俺なりのやり方で楽しませてやろう。そう、ジークは思ったのだ。

「よし、リーシャ。ここは俺にまかせろ！」

「え……？ あ、おい!？」

首を傾げるリーシャの手を取って、ジークは歩きだした。

数分後。ジークとリーシャは、学園に戻って食堂にいた。

「ほら、オムライスの出来上がりだ！」

香ばしいケチャップと卵の匂いを漂わせる料理が、テーブルにいるリーシャに皿に盛られて運ばれてくる。ジークも自分の料理を持って、リーシャの横に座った。

「お、お前って料理が出来たのか？」

「屋台で雑用を受け持ってた時期もあったし、雑用時の料理担当は俺だったからね」

ルクスに料理を教えたのも俺だ。

「どうだ？ リーシャ、美味いか？」

「う、うまい！ この半熟の卵と中のケチャップライスの絶妙のハーモニーが……」

リーシャはスプーンでオムライスを頬張りながら、ちらちらとジークの顔に、熱っぽい視線を送っている。ジークはオムライスを作るための材料を買うために、店に行った（調味料は学園にある物を使っている）。ジークも手持ちはあまりなかったが、リーシャを連れていたジークを見て、屋台の店員が、タダにしてくれたのだ。結局、リーシャと一緒にお礼を言って、ありがたくもらうことにしたのだが——。

「しかし、屋台にも顔が利くなんて、お前はこの都市の人間に、認められているんだな？」

「雑用の仕事で、顔が知られているだけだよ」

感心したような呟きに、ジークは苦笑いして答える。

「し、しかし、何かおかしいぞ……。わたしがジークに気に入られる予定だったのに、これじゃあ……。わたしの方が——」

小声で呟くりーシャに、ジークは首を傾げ、

「どうした？」

「い、いや、なんていうか——この辺が、さつきからトクトクしてな……！」

顔を赤らめ、胸の膨らみに手をやるりーシャを見て、

「どうした？ 熱でもあるのか？ 医療の知識は流石にないから、具合が悪くなったら、保健室まで連れていくからな」

「あ、うん……」

ぼーっとした表情で生返事をした後、りーシャはしばらくジークに、身体を預けていた。

「そういえば、すまなかったな。入団できなくて、数分たつてから、ジークが改めて言うと、

「気にするな。入隊の推薦は、五日後の来月にまたできるからな。明日の放課後から、さっそく連携の訓練というこう」

りーシャが満面の笑みで、そう返してきた。

「えー、まだ俺を『騎士団』^{シヴァレス}に入れる気かよー」

「当たり前だ。作戦はそうだな。お前とルクスが敵陣のど真ん中に突っ込み、私が援護するから片っ端から吹っ飛ばせ。ルクスも防御しているうちに、一機は落とすだろ」

「いやー少しハード過ぎじゃない……？ いろんな意味で」

りーシャが提案した案に、ジークは苦笑いした。とんだ作戦を考えしてくれるな、この姫様は！

「……それより、りーシャの、『キメラティック・ワイバーン』だけど……正常に動いてよかったな」

「ん？ 欲しくなったか？」

「いや、いいよ。二刀流は流石にりーシャ以外には出来そうにはないからな」

二機の機竜性能を合わせる発想と、機竜の特性を誰よりも把握している、一流の技術者と機竜使いドラグナイトのリーシャ意外には無理だろう。

「もつと使いやすいように改良をしたほうがいいじゃないか？ それこそ、学園の生徒にも扱えやすいようにさ。王女として——」

そう、自然に言葉が出た。ジークは永きに渡る、帝国の圧政に苦しんできた人達を見た。それから解き放たれた今だからこそ、他国に負けない強い国を引っ張る良き王女になって欲しい。民のことを、他人の気持ちを考える姫でいて欲しい。そんなジークの願望が、思わず出たのかもしれない。

「王女として?」

「あ、ああ……。新王国の姫として、その方がもつと、国民のためになるんじゃないか——」

「だけど、

「必要ない」

返ってきた声の冷たさに、ジークはぞつとした。怒りでも、悲しみでも、無気力ですらない。全ての色を失った、虚ろな声。

「ふつ。よく言われるよ。機竜開発の技術も、校内戦での成績も。王女として誇らしいとか、素晴らしい成果だとか、そのことで王都に呼び出される度に、わたしはうんざりする」

「どういう……。ことだ?」

「その前にわたしの問いに答えてくれ。王女とは、なんなんだ?」

たった一言、そうたった一言の簡潔シンプルな疑問。だが、それに対する答えを、ジークは返せなかった。

「クーデターを起こしたわたしの父、アテイスマータ伯は、そのときの怪我が元で、新王国の王座に座ることなく死んでしまった。だが、その英名は残り、わたしの叔母である、ラファイ女王が国を継いだ。そしてわたしは、亡き英傑の忘れ形見として、新王国の王女という座に就いた。わたしはただ、それだけの人間に過ぎない」

「そんなことは……」

「だが、国民はありがたがって、わたしという偶像を称えるんだよ。面白いだろ？ 笑える話だ。旧帝国が散々圧政を敷いてきたからな。代わりとして、わたしに王女らしい、立派な人格者であることを強要する。それができなければ責め立てる。お前にはその責任があるのだと、逃げるなど、使命を果たせと、わけのわからないことを言うてる」

「……………」

リーシャの口から発せられる言葉を、ジークはただ黙って聞いてい
るだけしか出来なかった。

「教えてくれないか？ ジーク。わたしに正しい王女の在り方とい
うものを」

「……………俺は——」

答える筈がなかった。王族でもない一般市民の自分には。

「わたしの腹に押された旧帝国の烙印を、覚えているか？」

リーシャが乾いた笑みを浮かべて言う。

「……………」

「国民の大半が賞賛し、称える。帝国を滅ぼした、歴史に残る英傑だ
と。父はクーデターが起きる何年も前から、帝国と対立し、その方針
に異を唱えていた。当然、帝国側の人間から恨みを買って、その息女
が誘拐されることなど、珍しくもないほどに——」

「……………まさか」

ジークがその想像に至ったとき、リーシャはふっと笑った。

「そう、わたしは旧帝国に捕らえられたんだ。五年前のあのときに
な。そして、クーデターの計画を密に進めていた父への取引材料にさ
れたが、結局——わたしは見捨てられた。この刻印は、旧帝国の所有
物にされた、その証だ」

「——ッ!？」

ジークの表情に緊張が走ると、リーシャは落ち着いた声で続ける。

「実際、父は英傑だったのだろう。あの帝国を倒すために、父は全て
の力を注いでクーデターを計画していたはずだ。娘の、わたしの命ひ
とつななかで、全てを台無しにするわけにはいかなかったんだろう。

わたしが軟禁されていたのは、たったふた月ほどだが、わたしは見捨てられ、伯爵令嬢でも何でもなくなった。母は病死していたが、妹がひとりいたから、クーデターが成功した暁には、あの子が新王家の王女となっていたはずだ。わたしの代わりにな」

「……………」

「しかし妹も、クーデターのときに殺されてしまったようだ。だから、子供のいなかった新王国女王の叔母は、救出されたわたしを養子に迎え、王女の座に就かせた。亡き父、英傑アティスマータ伯の忘れ形見として、共に国をまとめ上げるために。わたしが父に見捨てられ、旧帝国の烙印を押された、その事實は伏せられてな」

「……………」

あのととき——、ジークとリーシャが、初めて会ったとき。血眼でジークを消そうとした、その見られてはいけない秘密が理由だった。

「わたしはな、父のことが好きじゃなかったよ。今思えば、クーデターの危険から遠ざけるために、あえてわたしに対し、無関心を装っていたのかもしれない。わたしを見捨てた父の判断は、とても勇敢で、称えるべきことなのかもしれない。わたしが圧政に喘いでいた市民のひとりならば、皆と同じように父を敬愛し、賞賛したのかもしれない。だけど……………」

そう一度言葉を切って、リーシャはうつむき、

「わたしは……………」

声を詰まらせて、涙ぐむ。

「わたしは、助けて欲しかったよ」

「……………」

「国じゃなくて、わたしを選んで欲しかったんだ……。ダメなヤツだろ？ 捕らえられたわたしは、怖くて自害もできなかった。だから、わたしは新王国のお姫様じゃないし、そんな資格なんて、ないのさ」

だから、姫らしく振る舞うことを嫌っていたのか。資格がないと、他の誰でもない自分が、そう思ってしまったから。だけど——

「——ダメなヤツなんかじゃない」

「……え？」

リーシャは、唐突に呟いたジークの横顔を見た。その時の表情は、どこか寂しくて、怒りも入り混じっていた。

「俺の身体にある傷の事はまだ知らないよな？」

ジークの身体に無数の裂傷痕の話は、以前にジークのもう一人の人格、『フローリア』が話そうとしていたが、その話はジークが止めてしまった。

「この傷は、旧帝国の時に付けた傷だ」

「……」

リーシャは驚いた。ルクスから聞いた話では、ジークは旧帝国の時
には宮廷に住んでいたはずだ。ならば、傷を負うことはないはずだが

「わかってるよ、フローリア。これは俺のけじめだ」

一瞬、ジークは視線を横に逸らした。もしかしたら、『フローリア』
が心配したのかもしれない。

「俺は、もともと旧帝国の人間じゃなかったんだ」

「それは、どういう？」

ジークの言っている意味がわからなくて、リーシャは首を傾げた。
ならば、一体――。

「俺は誘拐されてここに来た」

真顔で告げられたジークの言葉に、リーシャは反応出来なかった。
誘拐、という言葉は旧帝国では良くある話だしリーシャ自身もその身
で体験したはずなのだが。

「親は生まれたときからいなかった。ただ、仲間がいたよ。あの時
は無邪気だった。毎日、ただひたすら仲間と装甲機竜ドラッグライドの練習にあきく
れていたよ。これが笑える話でさ、『ジークは操作技術が上手いから、
将来は皆を装甲機竜ドラッグライドで笑顔にさせて』だってよ。まったく、あの時は
単なるお遊び感覚だったのにさ」

ジークがそう言うと、制服の裾を捲り肩を見せた。そこには、掠れ
ている赤色の刺青が入っていた。

「これは仲間の証で、ね」

昔のことを楽しげに言うジークだったが――。

「ただ、仲間を目の前で殺されたよ」

それは、唐突の裏切りだった。

「信じていた帝国の人間に裏切られ、仲間の一人が殺された。他の仲間はなんとかその場を脱出しけど、離ればなれになってしまったよ」

「……お前は、帝国の人間を恨んでいるのか？」

「いや、恨んでないよ」

瞬間、リーシャはぞっと背筋が凍った。何故なら、笑顔でそう言ったのだから。

「彼らにも事情があったのさ、それは仕方がない」

そして、ジークは「それに……」と、続けて話を進めた。

「皆を笑顔にするっていう約束がある」

「……それが、お前が戦う理由か？」

「ああ。誰もが笑えればそれでいい、たとえば俺が勝負に負けたとしても」

言っていることは素晴らしい。だが――、

「それは間違っている!!」

リーシャは椅子から立ち上がり、捲くし立てるように言った。

「お前が、お前自身が入ってないではないか！」

誰もが笑顔になるならば、自身は負けてもいい。だが、それは間違っている。

「いいのさ。誰も傷つけず、俺だけが傷つくのなら。それにもう、俺は痛みには慣れてる」

ジークはそう言うと、自身の傷を撫でた。

「俺もリーシャと同じさ」

「同じ……?」

「俺の腹に抉った痕があっただろう」

こくりとリーシャは無言で頷いた。

「あれは旧帝国の烙印、『所有物の証』だ」

「……そうか」

別段、驚きはしなかった。旧帝国に拉致された時点で薄々予想できたからだ。

「対尋問訓練とか対人訓練とか色々やったよ」

そのおかげでこんな身体になってしまったが。

「あの日、クーデターのことをよく覚えている」
今でも脳裏に焼き付いている。

？

ゆらゆら一面に揺らめく、赤い炎。息を吸うだけで肺が焼かれそうになる。奪った機攻殻剣ソート・デバイスを杖にして燃え盛る城内を彷徨っていた。少年が彷徨っていた中で、まだ誰も会っていない。城内では死体しかない。

「はあ……はあ……」

窓から見える空には、無数の機械の竜が舞って落ちてゆく。数多の竜のその中心で、漆黒の暴竜が他を圧倒していた。

「……………」

少年は目の前にまだ生きている人を見つけた。

「久しぶりだな」

そう話しかけてきたのは、端正な顔立ちと、銀髪に灰色の瞳。友人のルクス・アーカディアにそっくりだが、違う。

「お前は、誰だ？」

少年は警戒の意味を込めて剣先を目の前の男に向けた。

「くくく。つれないな、友よ」

「俺はお前を知らない」

「だろうな『悪魔の申し子』よ。貴様らはいずれ世界を滅ぼす」
何を言っているんだ？ 『悪魔の申し子』？ 世界を滅ぼす？

「お前は俺の何を知っている？」

「全てを知っているよ」

男はそう言い不敵に笑うと、そのまま踵を返す。

「さあ踊れ、ジーク。貴様の呪はまだ始まったばかりだ」

「——ッ！ 待て！」

少年がそう叫ぶが、男は炎の中に消えた。

「……………」

少年がもう一度、空を見ると漆黒の暴竜がまだ戦っていた。

「……生きなければ」

生きなければ、約束がある。

生きなければ、仲間がまだ生きている可能性がある。

少年は、剣を自身の腹に突き立てた。剣先には、黒い竜を象った、旧帝国の烙印。

「——ッッッッ!!」

鋭い痛みに悶える。何度も突き刺したり、掻き回したりして紋章を消した。

「はあ……はあ……ぐう、あー！」

汗と血が床を濡らす。しかし、このままでは失血死する。少年は剣を炎で熱すると、傷口に当てた。

「ぐうう、がああー！」

意識が飛び、痛みで戻る。その連続で少年は壊れた。痛みは感じなくなり、体温も感じなくなった。だが、これでいい。この紋章があったら自分は一生、旧帝国の所有物だ。

そんなのはごめんだ！

「《オッドアイズ・ドラゴン》！」

少年は竜を呼ぶと、壁を破壊し空に飛翔した。

？

「俺は、逃げたのさ。自分から」

過去を話したジークは、苦笑いした。そこに一体どんな意味があったかはリーシャには読めなかった。

「リーシャは強いよ。自分から逃げず、重圧や責任に立ち向かって

いる」

ジークはそつとリーシャを抱きしめた。唐突な事に、リーシャはドキドキと心臓が高鳴ってしまう。

「俺はリーシャのそういう所が好きだよ」

「お、おおお前！ な、何を言っているんだ！」

唐突のジークの発言に、リーシャは赤面した。しかし、ジークは身体を離すと悪戯ほく笑う。

「ま、お互い似たものどうし仲良くしようぜ！」

さつきまでのジークはどこえやら。急に変わったことに、リーシャはポカンとした。

「……はあ、お前はシリアスなのか単なるアホなのかわからないな」呆れたようにリーシャはため息を漏らした。しかし、何故だが笑いが込み上げてくる。自然と綻んでしまった。

「よし、笑った。リーシャは笑顔の方がいいよ」

「ふっ、そうだな」

微笑んだ後、ジークは立ち上がった。

「さあ、今日はもう寝よう。昨日から働きっぱなしだ」

「そうだな。今日は楽しかったぞ」

「俺もさ。ありがとう、リーシャ」

その後は、食器を片づけリーシャの部屋で就寝した。

リーシャの部屋がベット以外何もなくて驚いたのはまた別の話。

？

ゴオオオン！

「うをおい!？」

「う、うるさいー！」

「あ、ごめん」

突如、一番街区の時計台から、大きな鐘の音が響いてきた。急な事に、ジークは素っ頓狂な叫びを上げ、リーシャは二段ベットの上から枕を投げた。

「この音は……!?!」

「時刻を告げる音ではないぞ? この音は……」
敵を襲来を告げる、警報だ。

「まさか——!?!」

「ジーク、行くぞ!」

素早く着替え、第四格納庫に向かった。

Part 5 描け天空の虹彩（アーク）！

城塞都市クロスフィード、第四機竜格納庫。学園の敷地内にあるその建物は、それ自体が広く、分厚い石壁のシェルターであり、同時に転送前の装甲機竜ドラッグライドの保管場所だ。有事の際は、ここが待機場所であり、避難場所にもなるという。

「では、全員が揃ったところで、士官候補生の諸君に通達する」
教官のライグレイは、集まった生徒を確認して言った。

「深夜未明、南西の遺跡ルインから幻神獣アピビースが出現された。斥侯の機竜ドラッグナイト使用の報告では、種類は大型の一体。三つの砦のうち、第一の砦は既に突破された」

話の内容から、ジークはかなり緊迫している状態だと察した。

「現在は第二、第三の砦に駐屯している、警備部隊の機竜ドラッグナイト使用数名が、討伐に向かっている。だが、敵は大型だ。突破され、城塞都市にまで被害が及ぶ可能性に備え、我々も迎撃部隊を編成し、戦闘に——」
ライグレイ教官のいっになく真剣の説明を、ジークは少し離れた所で聞いていた。

『予想通りの展開だな』

「そうだね」

ジークの横からフローリアが話しかけてきた。

「フローリアの予想通り——いや、言った通りになっただね」

『ああ』

「次の展開、相手の札は？」

『それを言ったら面白くないだろ？』

まあね、と言ってジークはライグレイ教官に意識を戻した。ちょうど話が終わったところだった。ジークはそのまま視線を横にずらすと、視界に見慣れた金髪の少女が機竜のチェックを行っていた。

「リーシャ。大丈夫か？」

「ん……？ お、なんだジーク。わたしの事を心配してくれるのか？」

「あたりまえだ。俺は『騎士団』シヴァアレスじゃないから出れない」

もうほとんどの生徒はここから出ていってしまっている。おそらくは、演習場で機竜を纏い、そのまま幻神獣アビスの討伐へ向かうのだろう。「よしジーク。それじゃ、行ってくるぞ」

リーシャは、ぽんと手を肩に置いた。大型の幻神獣アビスの襲来にもかかわらず、リーシャの表情には余裕があった。

「気をつけてな」

「平気だぞ。わたしは強いからな。しかし、お前が同行できなくて残念だよ。わたしが戦いの仕方というものを、この機会に教えてやろうと思ったのに」

「はは、それはまたの機会に」

リーシャの現在のモチベーションは完璧だ。この分なら大丈夫だろう。

(リーシャを守ってくれ……)

ジークは、格納庫を出て行くリーシャの腰に差さっている《テイアマト》ソード・デバイスの機攻殻剣に祈るようにジークは心の中で呟いた。

くるりと辺りに視線を這わせると、壁を背に佇んでいるクルルシファーと、それに話しかけていたルクスを見つけた。

「私たちは、今は戦うべき人間じゃない。そういう状況も起こって当然なもの。あなたは『騎士団』シヴァアレスに入団してもいない一般生徒。だから、戦えない自分のことを、気にする必要なんてないわ。後は、教官の指示に従うのね——」

クルルシファーの言葉が耳に入るなか、ジークは自身の機攻殻剣ソード・デバイスを見つめていた。

(……一応、調整をやっとくか)

胸にかかる悪い気持ちを拭うべく、ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》を呼び出し、調整を始めた。

?

「こいつが——例の幻神獣アビスか？」

城塞都市から三キロほど離れた、だだっ広い荒野。上空と大地から、『騎士団』のメンバー十数名は、幻神獣を確認する。

「知性をほぼ持たないスライム型、か……」

ゼリー状の半透明の身体の奥には、うっすらと赤黒い球体——核と呼ばれるものが見えていたが、それを当てるためには、分厚い粘液の層を突破しなくてはならない。

「よし、ぶっ放すぞ」

ふっと口元に笑みを浮かべ、部隊長を任されたリーシャが、機竜息砲を構える。

「いきなり撃つ気ですか!？」

背後にいた『騎士団』のひとり、怯えたようにそう叫ぶ。

「やってみなくちゃ始まらないだろ。行くぞー!」

リーシャは物怖じもせず、機竜息砲のトリガーを引く。

「ゴボツ……グバアツ!」

直後、衝撃が幻神獣の体表を波打たせる。そしてドバツと、その粘液が飛び散った。

「ツ……!」

十分な距離を取っていたため、粘液は『騎士団』たちには届かない。だが、地面に散った粘液が草に降りかかると、あつという間に溶けてしまった。それを見た三年生のシャリスは、竜声を使って、『騎士団』全体に声をかける。

『ヤツの身体に触れると、ああなってしまうようだね。機竜の障壁も、あまりアテにしない方が良さそうだ』

『Yes. 接近戦は避けた方が身のためです。全員、射撃武装の用意をするべきかと思えます。リーズシャルテ様』

ノクトが同意し、指示を仰ぐ。だが、リーシャの返事より先に、「ちよつと!?! そんなことより、見てよアレ!?!」

テイルファーが慌てた声で、手にしたブレードで一点を指す。そこには――、

「ゴポツ、ゴポポポ……」

リーシャの砲撃など意に介さず、幻神獣は前進を続けていた。い

や、攻撃に反応し、更に移動速度を増している。

「砲撃が、効いていない……?」

《キメラティック・ワイバーン》の砲撃で穿たれた穴は、十秒と経たず周囲の粘液で埋められていく。

「ちい……。どうやらあのデカブツの身体は、めんどくさそうな粘液でできてるな。衝撃や熱を周囲の体液全体に伝えて、威力を散らしているようだ」

リーシャは微かに舌打ちするも、平静を保っている。

「で、作戦はどうする? 部隊長殿」

隣に滞空するシャリスの問いに、リーシャは鼻を鳴らし、

「決まっている。核を目掛けて、主砲での一斉射撃だ。全員、二百メートルの距離を取って、エネルギーを最大充填しろ。離れ過ぎると威力が落ちる。秒読みはわたしがやる。いいな?」

竜声を使って、地上の『騎士団』シヴァレスたちにも声をかけると、リーシャは、自らのキャノンにもエネルギーを充填させる。

(これで、確実に倒せる。わたしたちの勝ちだ)

リーシャは勝利に確信し、秒読みを開始する。

「ゼロで斉射だ。5、4、3……」

リーシャの指示に従い、全機が最大充填したキャノンを構える。

「2、1、発射——!」

——イイイイイイイイ!

そのとき。どこかから、奇妙な笛の音が辺りに響いた。

?

「ッ——!」

《オッドアイズ・ドラゴン》を調整していたジークは弾かれたかのようになり、顔を背後に向けた。だが、格納庫内に異常は起きていない。それでも、ジークは空の一点を睨む。

「——時間がないな……」

再びジークは《オッドアイズ・ドラゴン》の調整に戻る。

『本当に戦うのか?』

「当たり前だ」

『いいのかい?』

《オッドアイズ・ドラゴン》の頭の装甲——ヘルメット部——を弄っているジークの背後からフローリアが話しかける。しかし、今回はフローリアだけではなかった。

『今、君が戦い行くと——』

『お前の正体が、ばれる可能性があるぞ』

ジークの耳朵を震わせる声は、ジークに似ているが違う。そして、その似て非なる容姿の二人がフローリアの横に並んで言ってきた。

「久しぶりに出てきてそれを言うか? エリック、ルーカス」

『重要な事だから僕らは言ったんだよ』

『そうだそうだ!』

片方は、前髪が紫色の髪色をした落ち着いている雰囲気の『ルーカス』。もう片方は、前髪が金髪の髪色をした、明るい性格の『エリック』。

「まあ、ばれてもいいんじゃないかな」

『嫌われるかもよ?』

『嫌われるな』

『ああ、絶対な』

上からルーカス、フローリア、エリックが順に頷きながら言うてる。

「それでもいい。誰かが傷つくよりかは」

ドオンッ!

ふいに、地鳴りのような振動が、格納庫を揺らす。

「よし、行くぞ」

ジークは機攻殻剣を鞘に納めた。

『後悔は?』

「ないね」

覚悟を決めた表情で、ジークは歩きだした。

?

「——以上が、私が遠距離から視認し、ノクトさんから竜声を介して聞いた、現在の戦況よ」

クルルシファーが持ち帰った事実には、待機中の生徒たちは、静まり返っていた。

「警備部隊隊長……ベルベット」

ジークはそつと服の上から傷を撫でた。大きく息を吸って、吐く。

ジークは頭の中でチェス盤を思い浮べた。

黒い捨て駒は幻神獣が約三十体と機竜使いが百二十機。そして、

騎士が一機。この騎士を倒せばこちらの勝ち。

方や、白い捨て駒はたった十数名の機竜使い。そして、王が一機。

王が敵の手にわたるか、倒されればこちらの負け。だが、捨て駒は半

壊状態。王だけで戦っていると言っても過言ではない。

一方的過ぎる。数の差、兵力、全てが負けている。これを覆すためには将軍が必要だ。それも飛びつきり強力なのが。

………。

………。

……カチリ——。

ジークの頭の中で、全ての歯車が噛み合った。勝利の方程式、盤をひっくり返す勝利へのシナリオ。

「さあ、ひっくり返そうか」

不敵な笑みを、ジークは顔に浮かべる。

「ダメです！」

「ん……？」

格納庫の出口へと歩き初めたジークだが、急にその足を止めた。何故なら、出口付近でアイリとルクスが言いあっているからだ。

「あの《ワイバーン》では、防御はできて、幻神獣は倒しきれませんし、もう一方の剣も使えない。今の兄さんに、できることなんてないんです」

「でも——」

「兄さんの気持ちはわかります。でも、この世界には、どうしようもないことだってあるんです。いくらがんばっても覆せないものが、いっぱいあるんです。私たち旧帝国の皇族は、それをいやというほど見てきたはず——」

《オッドアイズ・ドラゴン》

アイリの言葉を遮るように、ジークが《オッドアイズ・ドラゴン》を呼び、赤い神装機竜を纏った。

「ジークさん!?!」

「アイリ、君はわかってる筈だ。ここでこのチェスに勝たないと多くの犠牲を、屍を作る」

「……………」

ジークは一度、ルクスを見たが、再び出口に視線を戻した。

「先に行ってるぞ」

「うん、僕もすぐに行くよ」

ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》を操り、空に飛翔した。

?

「くっ……! はあっ！」

荒野の戦場で、死闘が繰り広げられていた。金属の鳥人型幻神獣^{アピビス}、ガーゴイル三十体の猛攻。合計十六機の《空挺要塞》^{レギオン}で相手を攪乱し、重力制御の神装《天声》^{スプレッシャー}で動きを封じ、最後に《七つの竜頭》^{セブンスヘッド}の最大砲撃で確実に葬る。ガーゴイル型の幻神獣^{アピビス}は、十数体となったが、

全てを倒す前にリーシャの体力が限界を迎えていた。

一気に戦況を覆すべく、親玉のベルベットに一騎打ちを挑んだ。しかし、ベルベットは旧帝国から伝わる、ドラッグナイト機竜使いの奥義——三奥義の一つ、『クイックドロウ神速制御』で逆にリーシャが倒されてしまった。

「これで目的は果たせた。後は城を陥落させるだけだ」

ベルベットは笛を吹き、自らの背後にアピス幻神獣を呼び戻す。リーシャには、抗う体力も機竜を動かすことも出来なかった。

(ついに、また来てしまったな、この時が……)

疲労と出血で混濁する意識の中、リーシャはふいに、声を聞いた。

『リーシャー!』

『——ジー、ク……?』

リーシャのみに限定した竜声が、既に動けない《ティアマト》を介して、聞こえてくる。夢か、幻聴か。最後に話せるなら、どちらでもいい。

『ふう……悪いな。やられてしまったよ。はは……』

『諦めるな! あと少しでいい、意識を持っていろ! そうすれば

——』

『わたしのことはいい、見捨ててくれ。気にしなくていい。——自惚れかもしれないが、わたしを助けにこなくていい、だから……』

おかげで、最後の力がわいてくる。

『代わりに聞いてくれ、わたしの秘密を、最後まで——』

?

『わたしはな。逃げたんだ。誇り高き伯爵家の令嬢として、そのまま死ぬことができなかったんだ』

虚ろな声が、竜声を介して、ジークに送られる。

『父に見捨てられたと知って、帝国の暗殺者になるか、死を選べと言われて。怖くて自害できなかった。だから、わたしは一度全てを捨てて、帝国の人間になる決意をしたんだ。わたしに王女の資格なんて——、初めからなかったんだ』

『……リーシャ』

『わたしは、お姫様のフリをするのが、辛かった。でも、わたしも本当は、そうなりたかったんだ。一度帝国に寝返った人間が、勝手なことを言ってるのかもしれない。でもな、わたしは今のみんな、好きなんだよ……。今度こそ、認められたいと思ったんだ』

『俺も——』

深呼吸をひとつした、ジークの声が返ってくる。

『俺からも話したいことがある。大切なことなんだ。リーシャに聞いて欲しい。だから——』

『ああごめん、もう時間がないみたいだ。それじゃ——』

リーシャは苦笑して、上空を仰ぎ見る。

『元気にやれよ、私の王子様』

？

「——さあ、死ぬがいい。お前のバラバラになった死体を王城に投げ込んで、攻め入ってやる！」

ベルベットが《エクス・ワイバーン》のキャノンを構える。それをどこか遠い目で、リーシャは見つめていた。

「はっ。悔しいなあ」

ぽろぽろと、大粒の涙を零して、高い空を仰ぐ。

「怖くても、今度は最後まで泣かずに、お姫様らしく振る舞えると、思ってたのにさ……」

終わった。キャノンが充填され、砲撃が放たれた。全てを焼き尽くす砲弾がリーシャに当たる直後——

「う、おおおおおー！」

絶叫と共に、赤い神装機竜《オッドアイズ・ドラゴン》に乗ったジークが砲弾にぶつかる。当たった衝撃で地面に叩きつけられ、そのまま転がった。

「ぐう……！」

ジークは立ち上がるが、《オッドアイズ・ドラゴン》は無数の傷が付

いており、額からは血が流れていて操縦者を守る装衣も無残にやぶれている。やぶれた装衣の下からは、裂傷痕が覗いている。

「ジーク……？ どう、して——」

「すまない、リーシャ。せっかく直したのに」

仰向けに倒れているリーシャに、ジークは申し訳なさそうに微笑む。

「これはこれは、誰かと思ったら。ジークじゃないか」

「久しぶりです、ベルベットさん」

中空に佇んでいるベルベットは嫌な笑みを浮かべた。

「王都から配属された警備部隊のあなたが、なんでその色をした機竜に乗っているのでしょうか？」

「王都から？ いや違うぞ、私は帝国から来たのだよ」

やはりこの男は旧帝国の復権を目論む反乱軍、その意志を宿すこの国の敵。

「新王国を裏切るつもりですか」

「裏切ったなどと、人間きの悪い事を言う。正道に立ち返ったのだよ。力を得てな」

勝ち誇ったようなベルベットの声が、ジークとリーシャに届く。

「それを言うならばジーク、まさか私たち帝国を裏切るつもりか？」
「……………」

押し黙るジーク。それを見たベルベットは更に嘲る。

「ふはははー！ どうした、何か言い返してみろよ？ ああそうだったな。奴隷はご主人様には逆らってはいけないかったんだよな！」

甲高い笑い声と同時に暴露されたジークの事実に、まったく知らなかった『騎士団^{シヴァレス}』のメンバーからは動揺の空気が流れる。

「なんだ？ お前はこれのお譲様たちがいい顔をして過ごしているのか？ ならば私が代わりに言っつてやろう。このジークという男はな、帝国が所有していた奴隷の一人でその手を汚してきたのだよ」

ベルベットの言う通りだ。ジークは帝国に反抗する人間を裏で葬ってきた。言われた事にただ順従に、犬のように。

「その身体にある傷は、私がやったものだ！ ああ、あれは楽しかつ

「ジーク……」

自分の突然の行動に、リーシャが目丸くしているのがわかる。だけど構うものか。ジークは我慢できなかった。

「俺をいくら侮辱したり罵ったりするのは構わない。だけど、リーシャを。俺の憧れのひとを——俺の好きな人を侮辱するなアツツ!!」
リーシャは絶句した。いつもはあんな明るい性格のジークが、今は怒りの表情して自分を守ってくれている。

「リーシャは俺が守る! お前らみたいな下劣な奴にこれ以上彼女から笑顔を奪わせない!」

そう言つて、ジークは特殊武装の《スパイラルフレイム》の銃口をベルベットに向ける。

「守つてみせるだど? はっ! 出来るものか、この数の差で!」

ベルベットは大剣を構える。それが、攻撃の合図なのか、背後で待っていた機竜の軍勢が、一斉に武装を構えた。

「ッ——!」

ジークはリーシャを抱えると、一気に推進装置をフルで動かしベルベットたちよりも上に飛翔する。

「ちい! 追え!」

「はっ!」

僅かに舌打ちをした後、ベルベットは指示を送った。笛も吹き、^{アピス}幻獣も動かす。

「ジーク!」

「……………」

「おい、聞いているのか! わたしを降ろせ!」

リーシャを抱えて飛んでいるジークは、リーシャを庇うように飛んでいるため、動きに制限がかかってしまう。致命的なダメージはくらつてないが、ジークの身体に掠り傷が徐々に増していく。しかし、ジークは顔色を一つも変えず、落ち着いて避けていく。

「舌を噛むから少し黙つてくれ」

ジークは怒っているが、その思考は痛いほど冷え切っていた。

「……5——」

ジークは《スパイラルフレイム》のトリガーを引き、ブレードを構え向ってくる《ワイバーン》の推進装置を撃ち抜いた。推進力を失った《ワイバーン》は地面に向かって落ちて行く。

「4……3……」

ブレードで振りかぶって来たのをエネルギーを纏った《オツドアイズ・ドラゴン》の尾で弾き飛ばし、腹に蹴りを入れ地面に叩き落とした。しかし、汎用機竜と同等の性能しか待たない《オツドアイズ・ドラゴン》には限界がある。装甲^{フレイム}に生じていた傷は徐々に大きくなり動きもやつとになってきた。

「——2……」

「何を企んでいるか知らんが。さあ、追い詰めたぞ。悪足掻きもここまでだ」

いつの間にか、ジークたちを囲むように幻神獣^{アピス}と装甲機竜^{ドラグライド}が配置されていた。

「ふんっ！ 手を煩わせてくれたな！ だが、ここま——」

「これは忠告だ」

ぞつとするほどの底冷えた声音で言うジークに、ベルベツトは黙らされた。ジークは冷徹な眼差しで言う。

「お前はベラベラ喋り過ぎだ。お陰で時間が稼げた」

「な、何を言っている」

「——1。さあ、ここからは俺のターンだ」

しかし、何も起こらない。怪訝な顔でベルンベツトはジークを凝視する。だが、ジークはただ不敵に笑う。

「時を喰らって加速しろ、《バハムート》」

瞬間、ジークとベルベツトの間に漆黒の機竜が通った。

バキン！

「——え？」

三機の装甲機竜^{ドラグライド}が、バラバラに弾け飛んだ。機竜牙剣^{ブレード}を持っていた

装甲腕、両肩にある幻創機核フォース・コア、そして腰に差していた機攻殻剣ソード・デバイス。攻撃、動力、制御の要である三点が、一瞬で粉碎されていた。それも一度に——三機同時に。

「な、に……!?!」

やられた男たちの目には、見えなかった。一体何が起こったのか。ただ、目にも止まらぬ速さでナニかが目の前を過ぎ去っただけだ。

「な、何者だっ!?!」

男たちは狼狽するが、ジークにはわかっていて。ジークの数少ない親友——

「よう、来るのが遅かったな。ルクス」

「無茶をし過ぎだよ。ジーク」

漆黒の神装機竜、《バハムート》を纏ったルクス・アーカディアが、同じ漆黒の色をした大剣を構えて佇んでいた。

「作戦通りってところかな」

「作戦、通りだと!?!」

ジークは逃げながら戦っているように見せて、あえてこのような陣形になるように誘導させた。背後から迫るルクスに気づかなかったため、確実に奇襲が成功する。

『神算鬼謀』——それがジークの最強の武器の一つである。勝つための計算力、思考能力ならばルクスさえも超える。

『う、狼狽えるな! ヤツは所詮、俺たちと同じ男の機竜使いだ!』
ベルベットが声を張り上げ、部下たちを叱咤する。

『ヤツに——男に長時間、神装機竜を扱えるほどの敵性はないはずだ! それに、ヤツは攻撃の直後、必ず動きが鈍っている! その隙を突け!』

「はっ!」

隊長の指示を受けた機竜使ドラッグナイトたちが、こんどはジークたちを囲み、再び襲いかかる。確かに、ルクスは《バハムート》の操作に疲れたように、数秒その動きを緩めていた。

だが——

「《暴 食》」
リロード・オン・ファイア

「ぐああああつ!!」

《バハムート》が紅く光ると、大剣を一閃し、間合いに入った七機の帝国の機竜を、一瞬で粉碎した。

「……馬鹿なツ!!」

再び動揺が、帝国軍の機竜使^{ドラグナイト}たちに走る。

「漆黒の神装機竜だと……。貴様……! まさか、お前が——あのクーデターの……!?!」

「そう、こいつがかの帝国千二百機をたったひとりで破壊した——『黒き英雄』。その本人さ」

そして、ジークがこのチェスに勝つための將軍^{クイーン}の一つだ。

「さあ、お披露目の瞬間——」

ジークは鞘から《オッドアイズ・ドラゴン》の機攻殻剣^{ソードデバイス}を抜いた。

「捨て駒^{ポーク}が將軍^{クイーン}になる瞬間さ」

瞬間、ジークが身に付けているペンデュラムが激しく輝いた。

?

「やってくれましたね。兄さん……」

数百mほど離れた、竜声が戦場にギリギリ届く距離で、アイリは戦場を見据えていた。

「何が起こっているのですか？ ルクスさんは……。あの黒い、神装機竜は——？」

普段は冷静なノクトが、声を震わせて尋ねる。

「はあ……。あれが、兄さんです。帝国最強の機竜、《バハムート》を駆る、最強の機竜使^{ドラグナイト}。五年前のクーデターで、千二百機の帝国軍機竜をたったひとりで破壊した——『黒き英雄』」

そう話している二人の前で、再び絶叫と爆音が木霊した。ルクスが目にも止まらぬ速さで振るった剣が、次々に機竜を落としていく。

《暴^{リロード・オン・ファイア}食》——あれが《バハムート》の持つ神装です。その能力は圧縮強化という、十秒間の魔法です」

先の五秒で、エネルギーや現象を数分の一まで減少させ、後の五秒

で、その力を爆発的に解放させる能力。

「先の五秒間、対象に流れる時間を数分の一に減速し、後の五秒間、数倍にまで加速する。故に、敵が攻撃の予備動作を見せた瞬間、加速させた斬撃で容易にそれを追い抜き、破壊する。それが『即撃』という、兄さんの技です」

ルクスの間合いでは、どの攻撃もこの技の前では無意味だ。相手が動く前には、既に決着が着いている。

「しかし、不思議です」

「——？ 何がですか、アイリ」

「ジークさんは、兄さんが『黒き英雄』だという事を知らない筈です。なのに、ジークさんはそれを知っていた」

ジークはあのクーデターには参加していなかった。ならばどこで『黒き英雄』を知ったのか？

「……！ アイリ、あれを見てください！」

「え？ 何ですか、ノク——ッ！」

思案していたアイリは息を呑んだ。何故なら、戦場となっている荒野の真上に、大きな光の輪が突如現れたのだから。

「な、何ですか。あれは？」

「わかりません。私もこれは初めて見ました」

徐々に輝きを増していく光の輪の中心には、ジークがいた。

？

「レディース&ジェントルメン！」

ジークは戦場と化しているこの場には似つかわしくない、大きな声で芝居のかかった台詞セリフを言った。当然、戦っているルクスや帝国の兵士のベルベットたちはジークを見る。

「これより我が相棒、《オッドアイズ・ドラゴン》は自身の神装により新たな姿に進化します！」

「——ッ!?!」

ジークがそう言った瞬間、ルクスを含むこの場にいる全員が驚愕し

た。姿を変える神装だと？そんな機竜事態を書き換える神装は聞いたことがない。

確かに、まだ装甲機竜ドラグライダーには多くの謎がある。重力を操る神装や圧縮強化の神装。しかし、『進化』の神装は聞いた事がない。

だが、当の本人は全員が驚愕しているのを知ってかしらさずか機攻殻剣ソード・デバイスを天に向かって突き刺した。

「《天空の虹彩》！」

瞬間、首から下げているペンデュラムが虹色に激しく輝く。

「揺れる、魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーケ！」

そして、空にジークが首から下げているのと同じペンデュラムが、倍以上の大きさになって出現した。それは勢い良く動きだし、天空に弧を描く。それが幾重にも重なって一つの光の輪を作りだした。

「——綺麗……」

ジークに抱きかかえられるように、光の輪を見ていたリーシャは無意識にその言葉が出た。だが、そう思ったのはリーシャだけではない。離れた場所から見ているアイリやノクトは勿論、『騎士団シヴァアレス』やルクス。そして、敵の筈のベルベットたちも虹色に輝く光の輪に魅了されていた。

ペンデュラムスケール 【1】 【8】

ヘルメット部の装甲から、赤と青の文字が直接頭に送られてきた。それを確認したジークは、剣を前に振った。それが合図なのか、《オツドアイズ・ドラゴン》に刻まれている傷が虹色に輝き、それが全体に広がっていく。そして、《オツドアイズ・ドラゴン》の装甲は勢い良く弾け飛んだ。

「なっ!？」

機竜の破壊。誰もがそう思った。しかし、弾け飛んだ《オツドアイズ・ドラゴン》の装甲は空中に留まり、再び《オツドアイズ・ドラゴン》の下に戻った。

カシャン！ カシャン！ カシャン！

装甲は組み合う。いや、それだけではない。光の輪から追加の装甲も転送され、それも組み合わさり新たな竜を創った。

振った機攻殻剣ソード・デバイスに、虹色に輝く『Pendulum』の文字が出現した。

「雄々しくも美しく輝く二色のまなこ！《オツドアイズ・ペンデユラム・ドラゴン》！」

最後に光が辺りに弾けた。余りの光りに、全員は目を手で覆った。光が収まり、手を退かすと、

一機の巨大な虹竜がその姿を現した。

Part 6 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》
ン》

光の中から現れた虹竜《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》、そこから出る威圧感にベルベットたちは慄いていた。

《オッドアイズ・ドラゴン》より大きな巨体。追加されたその装甲の厚さは薄かったすらりとした装甲フレームから、頑丈そうな鎧のような物になっっている。そして、推進装置から伸びた大きな二つの角。左右非対称の角には緑と赤の珠が埋め込まれている。

だが、最も目を惹くのは、搭乗者のジークの目だ。

左目が赤く変色している。まさしく虹彩異色オッドアイズ。機竜の名と同じ、それを自らも体現している。

「八年ぶりだな、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》」

ジークはまるで親友に話しかけるようにそう呟いた。そして、それに答えるように《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は小さく震えた。

（わかっている。お前も怒っているんだな……）

「——すう……」

ジークは思いつきり息を吸い。

「行くぞおおおおおおお！」

思いつきり開戦の宣言をした。その声はベルベットたちを振るわせるほどの気迫。

ジークは《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の両腕に機竜牙剣ブレードと特殊武装《スパイラルフレーム》を構え、ベルベットに向かって突進する。

「くっ——！」

ベルベットは大剣を水平に構え、ジークの一撃を防ぐ。汎用機竜と

同じ出力しか出せないこの神装機竜ならば、このまま弾き返しジークの胴体に刃を突き刺す。と、ベルベツトは考えた。そう考えた——だが。

「ッ——!?!」

弾き返せない。逆に押し返され、大きく距離を取られた。

「馬鹿か。機竜が変わったんだから当然出力も変わるだろ」

まるでジークは見透かしたかのように言う。

「クソ……! 困んで倒せ!」

命令を送ると、部下の機竜使い三名がジークを三方向から攻撃をした。

「——クイックドロウ神速制御」

一瞬、ジークが剣を一閃すると襲いかかってきたドラグライド装甲機竜の推進装置を三機同時に破壊した。

「なっ……!?!」

ベルベツトは驚愕している間にも、ジークは敵を倒していく。肉薄して推進装置を破壊。機竜爪刃を投擲してフォース・コア幻創機核を貫く。複数で来た場合はクイックドロウ神速制御で一蹴した。いつの間にか、たくさんいた部下は半分以上になっっている。

「これ以上の交戦は無意味。今すぐ投降をしてください」

ブレイド機竜牙剣をベルベツトに向けて、ジークは敢えて、諭すように言った。これが最後の警告のように。

「くっ……! 貴様は何故、新王国の味方をする!? 正義の味方に
もなったつもりか!?!」

「新王国? 正義の味方? いいや、違うぜ」

ジークは首を横に振った。リーシャが驚いたかのようにジークを見つめる。

「俺はいつだって約束のため。『誰もが笑える世界』、そのためならば俺は自分自身も犠牲にするし、誰にでも戦う」

ジークの狂信的な目に、ベルベツトは黙らせられた。

「……いいだろう」

ベルベツトは剣を構えた。

「私も我が野望のため、ここでお前を打ち砕く！ 我が仕えしアーカディア帝国の、大義の下に朽ち果ろ！」

お互い剣を構え、睨みあつたまま動かない。相手の出方を窺っているのだ。《バハムート》を纏ったルクスが帝国兵を倒す音が耳に入るが、集中している二人には意識外だ。

だが、それも終わつた。ルクスが倒した機竜の破片が目の前を擦過した。

「——クイックドロウ神速制御」

まったく同じタイミングで武器を振つた。

『クイックドロウ神速制御』。

肉体操作での制御に加え、精神操作の制御。一連の動作に、異なる二系統からの操作を完璧に重ねることで、ほんの一瞬、ワンアクション一動作のみ、目にも止まらぬ攻撃を繰り出す絶技。

ドラッグナイト機竜使いの三奥義は、新王国設立後も伝説として語り継がれており、そのひとつでも習得した者は、超一流の使いとして称えられる。

同時に抜き放たれた必殺の斬撃——だが、鋼の悲鳴と共に大きく上方に弾かれた。

「ッ!？」

咄嗟に背後に大きく跳躍。双方無事。必殺の一撃が弾かれたことに動揺はあつたものの、期せずして仕切り直しの機会を得たのだ。次こそは我が大剣によってズタズタにしてやると思ひ、ベルベットは再び推進装置を駆動させる。

ジークがそこで、驚愕の表情を浮かべた。

いけると思ひ、再び剣を突き込もうと駆ける。

——そしてベルベットは、ジークの驚愕の表情の意味をはき違えたことを知った。

ピシッ!

ベルベットの視界に灰色の機械の腕が見えた。それは宙を舞い地面に落下していく。それが、自身が纏っている《エクス・ワイバーン》だと知ったとき、すでに勝敗は決していた。

「ベルベットさんたら、腕を切られたのにも気づかずにこっちに踏み込んできたから、驚いて思わず笑っちゃうところでしたよ」

本当に驚いたかのように、ジークは何気なく言った。

「い、一体何が?」

それは見ていたリーシャやルクスですらわからなかった。

「対奥義『超越制御』——これがベルベットさんを斬った技の名前です」

「た、対奥義だと……」

「クイックドロウ神速制御とエンドアクション永久連環の合わせ技。一撃をして二撃。二撃目の速さはクイックドロウ神速制御を超えます。きつとベルベットさんの動体視力程度では、剣を弾いた一撃目しか視認できなかったんでしょね。二撃目でベルベットさんはすでに両腕を斬られていたんですよ」

「な、何故そんな技を?」

「何故? はは可笑しい事を言う」

ジークは首を傾げた。

「対抗策なんて考えるのが当たり前。それが友人が作った技だろうが」

ジークは一瞬、ちらつとルクスを見たがすぐにベルベットに戻した。

「さあ、チェックメイトだ」

《スパイラルフレーム》の銃口をベルベットに向ける。

「ま、守れ!」

ベルベットが号令をすると、生き残っている部下がベルベットを守るように立ちはだかった。ルクスが動いたがジークはそれを手で制した。

「《スパイラルフレーム》！」

迸る赤い閃光。しかし、キャノンと同等の威力しかないこの特殊武装ではこの守りを突き崩せない。

《オッドアイズ・ドラゴン》だった場合は――

「そのふた色の眼でとらえたすべてを焼き払え！」

左右非対称の角に埋め込まれている緑と赤の珠が激しく光る。

リアクション・フォース
「《虹 咆 哮》！」

リアクション・フォース
《虹 咆 哮》――この《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の

内部に搭載されている特殊武装の効果は単純。出力を倍加させる！

「螺旋のストライクバースト！」

放たれた赤の閃光は、黒い渦を纏い大きさも倍以上になった。

「う、うわあああああああ！」

兵士とベルベットは悲鳴と共に赤い閃光に巻き込まれた。機械の竜達は地上に落ちて行く。

「ふう……」

ジークは頬を伝う血と汗を拭った。地上に降り、機竜を解除する。それと同時に赤色だった左目が元の深碧色に戻った。リーシャをジークの腕から解放すると――

「うう……」

背後から呻き声が聞こえ、振り返る。

「ベルベットさん……」

そこには、至るところが傷だらけのベルベットがソード・デバイス機攻殻剣を杖に立っていた。

「まだだ。まだ戦いは終わってないぞ」

「もう、終わりです。既に兵は全滅、貴方も戦え――」

「黙れ！」

ベルベットは剣を構えた。背後で《バハムート》を解除したルクスが剣を抜いたが、ジークは手で制した。

「はあはあ、うおおおおおお！」

ベルベツトは地面を蹴り、剣をジークに突き刺した。ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》の機攻殻剣ソード・デバイスに手を当て——
そして、宙に赤い血飛沫が舞った。

？

「——っ！ 何故だ！ 何故なんだ！ 何故、貴様は剣を抜かない！」

「……………」

ベルベツトは驚愕に声を荒げた。ジークは剣を抜かずに鞘ごとその場に捨てた。そして、その空いた手でベルベツトの剣を受け止めた。

受け止めた手は、指は切れていないが皮膚を斬り裂き、血がその刀身に塗り込まれている。穂先ほさきも装衣を突き破り血が地面に小さな血だまりを作った。

「貴様は私を恨んでいる筈だ！ 貴様の身体を切り刻み、その腹に刻印をやったのも私だ！ なのに何故——」

「俺は、貴方を恨んではいません」

ジークは静かに、ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「旧帝国に裏切られ、仲間を殺された俺はもう用済みだった。捨てられそうだった俺を拾ってくれたのは、ベルベツトさん貴方です。貴方のお陰で、俺は生き延びルクスやフィルフィ、リーシャや学園の皆と出会えた」

ぬちゃ、と剣が腹から抜かれる。しかし、ジークの表情は変わらない。

「貴方はここで死ぬ命じゃない。罪を償い、この新王国のためにその腕をどうか振るってください」

「……………」

ジークの口から出たその言葉に、ベルベツトはその場に泣き崩れた。それを見たジークは、もう言うことは無いだろうと悟り、踵を返

す。そして、ジークの後ろにいたリーシャに笑顔で向かう。

「ジーク……」

「終わったぜ、リー、シャ」

「ッ——!?!」

急にジークは膝から崩れ落ちた。咄嗟にリーシャが動きその身体を地面に着く前に受け止めた。地面に滴り落ちる血。それが、リーシャの装衣を汚す。

「悪い、リーシャの装衣を汚しちゃった……」

「バカもの！ わたしの心配をする前に自分の心配をしろ！」

「はは、わりい——」

カクン、とジークの首が糸が切れた人形みたいに倒れた。よく見るとジークの表情は血の気が悪い。

「おい！ しっかりしろ！」

何度も揺するが、返事どころか身じろぎ一つもしない。

「リーシャ様！」

「ルクス、ジークが！」

リーシャは涙目になって、ジークの腹の傷を手で押さえ血を止めようとする。

「急いで運びましょう！」

ルクスも慌てて、ジークを担ぎ学園へと戻った。

？

『君が……ジークかい？』

黒い、自分と同じ顔をした少年が目の前で話しかけてきた。それは気配が機薄で、実際に透けて見えていた。

『あつたりまえだろ、フローリア！ こいつが四人目じゃなかったら俺らは見えねえし聞こえねえよ！』

黒い自分の横に今度は、緑色の自分が黒色の自分に捲くし立てるように話しかけていた。

「君達は……」

『僕らは君で、君は僕らだよ、ジーク』

俺が話しかけると、紫色の自分が返してきた。

『俺の名は、フローリア』

『エリックだ！』

『僕はルーカス』

自分と似た彼らは名前を名乗った。

「俺に何のよう？」

『俺らは君を助けにきた』

「助けに？」

『ああ、これから起きる世界崩壊を阻止するため俺らはお前と協力するー！』

「なんで、俺なんだ？」

『君じゃなければいけないんだ。僕らと同じ神装機竜を扱える君じゃなければ』

「……………」

言ってることは滅茶苦茶だ。しかし、なぜだか彼らは信用できる。

「——わかった」

『よし、これで契約は成立した。次は』

『俺らが知っている技！』

『僕らの機竜の情報を教えよう』

『『願わくば、平和のために』』

「ん、んん……っ、く」

小さな呻き声と共に、ジークは瞼を開けた。比較的新しい板張りの天井がまず見え、花と薬草、そして微かなアルコールの香りが、鼻腔をくすぐった。

「懐かしい」

あれが、俺が多重人格となった切っ掛けだった。

「んん……………」

「——あ？」

ジークが寝ている横で、小さな寝音が聞こえた。思わず横を向くと、そこには金髪の少女、リーシャが可愛らしい寝顔でこちらに向けて寝ていた。

「――」

気づけば、ジークはリーシャを抱き寄せていた。

「良かった」

リーシャに目立った外傷がなく、ジークは安堵のため息をした。ゆっくりと、リーシャの背中を撫でた。

「――人が見えている目の前で大胆の事はやめて貰いませんか」

「ちよつとこのままでもいいかい、アイリ」

背後で椅子に座っているルクスと同じ銀色の髪をしたアイリが、呆れたように言ってきた。

「はあ……過労と血が大量に出過ぎで気絶しただけなので大丈夫だと思います。リーシャ様には感謝してくださいね。ここにジークさんが連れてこられてずっと付きつきりで側にいましたから」

「うん、ありがとう」

「……一つ、質問をしていいですか？」

「ああ、いいよ」

アイリは一呼吸置いてから話す。

「ジークさんは、兄さんが『黒き英雄』と知っていたのですか？」

「うん、まあね」

「どこでそれを知ったんですか？」

「……」

「ジークさんは、クーデターには参加しなかった。ならば兄さんが『バハムート』の所有者とは知らない筈です。という事は、ジークさんが『黒き英雄』を知るすべは他人から聞くしか――」

「偶然さ」

ジークはアイリの言葉を遮る。

「ルクスがいつも珍しい機攻ソード・デバイス銃を持っていたから、と旧帝国の生き残りなのに釈放されているからってところから推測した」

「……本当に偶然なのですか？」

ジークは無言で頷いた。これ以上聞いても同じ回答しか来ないだろう。

「わかりました……学園長から言づてを預かってます。落ち着いたら、学園長室に来て欲しいそうです。兄さんとジークさんの大事な処遇に関わる、大事な話があると——」

「……わかった。ありがとう、アイリ」

「はい、お大事に」

アイリは立ち上がると、そつと歩いて医務室から出て行く。

(……十分ここにいたな)

たった数日。しかし、ジークにはとても長く感じた。旧帝国時代には奴隷として扱われ、余り人と関わってこなかった。新王国になって同年代の子と学べるとは夢にも思わなかった。

とても楽しかった。

しかし、自分はここに居ていいのか？

旧帝国の生き残り、それも奴隷の自分がこの学園に残ってしまったら彼女らに迷惑をかけてしまうのでは。

居るべきではない。それが正答だ。しかし——

「——」

ゆつくりと、ジークはベットから起き上がった。毛布をリーシャにかけて、制服に着替えジークは保健室をあとにした。

？

「レリイ学園長、失礼します」

ジークは学園長室のドアを軽く三回叩きドアノブを捻った。

「あら、ジーク君じゃないちょうど良かったは、君の処遇についてなんだけ——」

「はい。俺もその事で話しに来ました」

いつになく真剣なジークの表情に、レリイは興味を持ったらしく聞く姿勢を取った。

「俺をこの学園に残らさせて下さい」

頭を下げ、ジークはそうレリイに懇願した。

「理由を、聞いていいかしら？」

「俺にはまだ。ここでやるべきことが残されているんです」

ジークは頭を上げ、真剣な眼差しで学園長を見据える。

「この学園にいるリーシャ。いえ、彼女たちの笑顔を守って行きたいんです」

「……ふふそうね。あなたならそう言うと思っていたわ」

レリイは優しく微笑むと、背後の扉に視線を向けた。

「という事で、正式入学おめでとう！」

『おめでとう！』

バン！と、レリイの言葉が合図なのか学園長室の大扉が開き数名の見慣れた少女たちとクルルシファー、フィルフィ、アイリ、三和音^{トライアド}の三人。そして、最後にルクスが入ってきた。

「え……？」

てつきり学園長だけがいると思っていたジークは、意表を突かれて固まってしまう。

「やあ、元気そうで何よりだ。ジーク君」

「おー！ よかった起きて！ どうジクつち？ 私のこと覚えてる？」

「Yes. ただの疲労だそうなので、大丈夫かと思われます」

「シャリス先輩、ティルファー、ノクト……」

まず先に、三和音^{トライアド}の三人が。

「思ったより、平気そうね」

「おはよ、ジークくん」

「クルルシファーさん、フィーちゃん」

次に、クールな印象の細身の少女と、ふわふわした感じの胸の大きな少女。クルルシファー・エインフォルクとフィルフィ・アイングラム。

後ほど知ったことだが、ジークが気絶した後にクルルシファーが旧

帝国の兵士を縛って王国兵士に引き渡してくれたらしい。ルクスがもしものためにクルルシフアーを城塞付近に配備させていたらしい。

「元氣そうだね、ジーク」

「ちよつとな、ルクス」

最後に親友のルクスが、ジークに挨拶をした。

「ちなみに、ルクス君もこの学園に残ることに決定しているわよ」

「ええ、ちよつと無理やり感がありましたけど」

レリイがそう言うのとルクスは苦笑いした。

「という訳で、貴方たちをこの王立士官学園アカデミーに正式に入学することを許可します」

そして、小さな歓声と共に、ぱちぱちと割れんばかりの拍手が巻き起こる。しかし、それだけではこの騒動は終わらなかつた――

「ジークッ！」

息を荒げて、制服を乱したリーシャが学園長室のドアを荒く開けて入ってきた。

「お前、学園を去って行く気じゃないだろうな!？」

リーシャ以外は既に知っているのだが、何故か皆はにやけ顔で黙っている。お前らひでえな！

「もしかして、出て行けって言われたのか!? ま、待て！ 学園長、第一王女の権限でそれはさせないぞ！ ジークは我々を守るために傷ついてくれたのだ、ならばここを追い出す理由は――」

「あー」

噛みつくように言うリーシャに、流石にかわいそうだと感じたジークはおずおずと声をかけた。

「別に俺は出て行かないよ」

「……本当か？」

信じられないのか、リーシャは疑わしげな眼差しでジークを見る。

「ああ、本当だ」

「本当の本当か？」

「本当の本当だ」

「はあ……良かったー」

学園を去らずに済んだを聞いたリーシャは、安堵のため息と共にその場にへたりこんだ。それを見ていた皆はにやにやした顔でジークとリーシャを見ていた。本当にひでえな！

「さて、話は済んだし。今日はこれでお開きよ」
レリイがそう言つて、この騒動は幕を閉じた。

のではなく、まだ続きがあった。

「リーシャ、呼ばれたから来たぞ」

ジークは工房アトリエの扉を開け、工房アトリエの社長を呼んだ。しかし、返事が返つてこない。

「おーい！ 約束通り来たぞー！」
学園長室でジークとルクスの処遇が決定し終わった後、リーシャに、

『今晚、もし用事とかなかつたらなんだが……本当になかつたらだぞ！ あの、工房アトリエに来てくれ！』

そう言い残すと、リーシャは走り去ってしまった。

その後は別段やる事も無く、まだ病み上がりということもあり今日は依頼をやらなかった。夜になったので、まっすぐ約束通り工房アトリエに来た。

「いないのかな？」

「き、来たか！」

首を捻つてジークは工房アトリエの中を見回していると、奥の小さな部屋から制服姿のリーシャが現れた。

「で、何のようだ？」

「ああ、その。こほん」

目を泳がせているリーシャは、一回気持ちを落ち着かせるべく咳き込むと。真新しい鞆に納められた、『オッドアイズ・ドラゴン』の

機攻殻剣ソード・デバイスを手に、ジークの前に歩いてくる。

「ジーク＝ザン・フローリア・エリック・ルーカス。貴公の協力での城塞都市と、ひいては我が国を守ることができた。貴公の身に、確かな力と正義があることを、このわたしが認め、称えよう」

そう告げて、リーシャはそつと微笑みかける。

「というわけで、なんていうかな。まだ《オッドアイズ・ドラゴン》の剣も修理の途中だったんだが——、受け取ってくれるか？ わたしの剣を」

リーシャは頬を赤く染め、目を少しだけ逸らしながら、剣を差し出す。それを見た瞬間、ジークはふつと息を漏らして、跪いた。

「仰せのままに、我が姫君プリンセスよ」

ジークは剣を受け取る。

「それと、ジーク。あの時……そのお」

「あの時？」

「ああもう！ お前がわたしを守るために庇ってベルベットに言った言葉だ！」

『俺をいくら侮辱したり罵ったりするのは構わない。だけど、リーシャを。俺の憧れのひとを——俺の好きな人を侮辱するなアツツ!!』

ああ言った。あんな恥ずかしいセリフを言うとかどうゆう神経しているかって疑うよね。

「あ、ありがとう。嬉しかったぞ」

「まあ、守りたかったからね」

朗らかに、ジークは笑う。それを見たリーシャは頬を赤く染め、視線を逸らした。

「好き……なのか？」

「え？」

「わたしのことが、好きなのか！」

スカートの裾を掴まんで、上目遣いでジークに言う。一瞬、ジークはドキッと来たが、この時のジークはまだこの気持ちが変わらなかった。

「ああ、好きだよ。仲間として」

「——え？」

ジークが言った瞬間、リーシャの表情は凍った。

「え、だから仲間——っておわ！ あぶね！」

ジークの首に、《ティアマト》の機攻殻剣ソード・デバイスが振るわれた。ジークは咄嗟に首を曲げ避けた。

「うるさい！ だいたい、お前が悪い！ 何が『俺の好き』だよ！」

「だから仲間として好きなんだよ！」

「うるさいうるさい！」

「あ、あぶね！ うわあああああ！」

その日、夜空にジークの叫びとリーシャの怒声が響いた。リーシャを宥めるのにルクスを含んだ数人が必要だったとか。

二章

Part 7 ランディング&ランアウェイ

「……………」

ジークは息を潜め、草むらから周りを見渡している。

「見つけたー?」

女生徒の声が聞こえた瞬間、ジークはさつと身を低くした。

「見なかったわ。向こうの方に居るかもよ?」

「そうね」

女生徒二人が校内の方に行く。それを見たジークは安堵した。何故こうしているのか?それは得物を探している狩人から逃げているのだ。

ランアウェイ
逃走。ジークは現在、狩人から逃げている野ウサギに過ぎない。

「本当にこつちに来たのかい?」

「うん。さつきこつちにジクつちが行ったのを見たよー」

「Yes. 多分草むらに隠れたんだと思います」

聞き慣れた声が聞こえる。トライアド三和音のシャリス、テイルファー、ノクトだ。

(や、やばい!)

頬に汗が伝う。急いでこの場から逃げようと焦って軽率な動きになって、足もとの小枝に気づかなかった。

パキッ!

「……………」

おそろおそろ、視線を上を持ち上げると。

「あ、見つけた」

三人とジークの目線が重なった。

「は、ハロー?」

ジークは片手を上げ、ぎこちなく挨拶をする。

「見つけたー! ジクつちいたよー!」

ティルファアールが大声で言うと、遠くから地響きのような足音が聞こえる。

「もういやだあああああああ！」

ジークは泣き叫び走る。かれこれ三十分こんな感じだ。
なんでこうなっただっけ？

？

「ジーク君、ルクス君。学園生活の調子はどうかしら？」

五月になった放課後のある日。学園長室に二人の男子生徒がいた。

「何とか、うまくやれていると思います。初めはどうなるかと」

「依頼であくんな事やこくんな事をやらされるなんて……」

「ジーク、その言い方には語弊を招くよ」

ルクスはジークが言った言葉に苦笑いで返した。だが、ジークの言い分も正しい。買い物荷物持ち、着替えの手伝い、マッサージ、お茶会の話し相手などは、公私混同を超えて、ジークとルクスを執事か何かと勘違いしている可能性が高い。

ただ、王都から帰ってきた三年生たちのことはラッキーだった。帰ってきた三年生たちも、男のジークとルクスの存在に驚きつつ、リーシャと互角の実力を決闘で見せたことや、襲来した幻神獣アスピスから生徒たちを守ったという話を伝えられ、ジークとルクスの編入に異を唱える者は出ていない。

というより、一番凄かったのは、ジークの口説きコトバシだった。

『俺らを学園に残してくれたら、(特にルクスが)あくんな事や(特にルクスが)こくんな事をするぜ？ かわいいお嬢さんマイレディ』

雑用で磨かれたジークの大胆なセリフと演技は箱入りお嬢様たちの心を射貫いた。数人の三年生の女子生徒がジークのファンになったとか。

セリフに違和感を感じるだつて？ 気のせいだ。

「まあ、セリスさんの帰りが遅くなったおかげかもしれないけどね」
くすりと笑みを漏らして、レリイはそう最後につけ加える。

「セリスティア・ラルグリス。ああそう言えばあいつがいるんだっ
た」

ジークは溜め息と共に額に手を当てた。前にも、セリスティア・ラ
ルグリスの話が出た時にジークは嫌な表情をしていた。一体、彼女と
何が――

「でもね。今、あなた達に対する生徒たちの不満が、私のところにた
くさん集まっているの」

「えっ………？」

「何かしたっけなー？」

不安がジークとルクスの胸を過る。

「じゃーん！ はい、これよー！」

ババーン！と、レリイは満面の笑みで、机の上に分厚い紙の束を叩
きつけた。少なく見積もっても、百枚以上はあるだろうか。

「えっと………。もしかして、これ――」

「ワオー、すごいー！」

旧帝国の王子であった咎人のルクスは、新王国による恩赦としての
釈放と同時に、国民の誰からでも雑用を請け、仕事をしなければなら
なかった。現在は、『生徒を含む、この学園関係者の依頼をこなす』と
いう形で、行われていたのだが――。

「あなた達への雑用依頼。あまりに数が多過ぎるのよね……」

「こなしてるんですけどねー」

「あら、ジーク君？ 最近は工房アトリエに入り浸っているらしいじゃない
？」

「え、でもあれは機竜の整備で――」

「皆の依頼も平等にやるのも重要じゃない」

言い返せねえ………。

確かに、工房アトリエ社長のリーシャの助手になってから頻繁に行っている
気がする。リーシャが夜更かししてまで機竜の整備していないか心
配だから手伝いに行っているのだが、結局俺も集中して夜遅くまで整
備をしまい工房アトリエに泊まっている。

「と、いうわけで私から良かれと思っていい提案があるわ」

どこからか、女生徒の声が聞こえる。

「今、説明が終わったらしいわね」

「な、なんのですか?」

ジャンジャジャ〜ン! 今明かされる衝撃の事実ウ!

「私が企画した催し物^{イベント}——『ジーク君、ルクス君争奪戦』よ」

レリイはにやりと、悪戯っぽい笑顔でルールを説明する。

「ゲームの期限は、今から一時間。赤の依頼書をルクス君、青の依頼書をジーク君に預けるから、制限時間まで逃げ切れれば誰の命令も聞かずに済むわ。あ、装甲機竜^{ドラグライド}の装着は全員禁止だから、くれぐれもお譲様たちを怪我させちゃダメよ?」

「チヨ、チヨットマツテクダサイヨレリイサン、ソリヤナイレシヨ? ザツヨウサキロ、セイビガアルカラリーヨウニハモロレライケロ、カラズカエツテクルツテイツタジャナイデスカ(ちよ、ちよつと待つて下さいよレリイさん、そりやないでしょ? 雑用先の、整備があるから寮には戻れないけど、必ず帰って来るって言ったじゃないですか)」「じ、ジークがパニックして意味がわからない言葉を!」

「早く逃げないと、すぐに捕まっちゃうわよ?」

「ウゾダドンドコドーン! (嘘だそんなこと!)」

「ちよつ!?! ああ、もうっ!」

次の瞬間、ジークは学園長室を飛び出して、走り出す。後を追いかけるようにルクスも学園長室を飛び出した。

(うん? ちよつと待てよ……)

学園長室から飛び出したルクスは、出てくる時にちらつと見た『モノ』が気になった。しかし、もうすぐ傍まで女生徒たちが来ている。今は逃げることに集中しなければ。

かくして、レリイ学園長の企画である『ジーク、ルクス争奪戦』がスタートしたのだった。

?

ジークはスタートした瞬間からリーシャに追いかけて回されている。

「待てええええええええええ！」

「はえーよリーシャ！」

リーシャの走る速度は、どつかのランディングデュエリストのおじいちゃんと同じじゃないかと勘違いするほどの速さだ。

「ていうか、いつも依頼をやっているだろ!？」

ジークがそう言つて、説得しようとする、

「べ、別に、そんなことないだろ？ わ、わたしだって普段、これでも我慢してるんだし……。それにこれからのこともあるし、他の連中にお前を渡すわけには——」

頬を赤らめたリーシャ、少しだけ速度が落ちた。やるなら、今！

「リーシャー！」

「え——？ つて、ちよつ!？」

リーシャは驚愕の表情をした。何故なら、リーシャに向かってジークは走つて来ているのだから。

「あ、アホなのか!？」

捕まえて依頼書を奪えば一週間ジークを独占できる。リーシャはジークに手を伸ばす。

「——」

ジークと目線があう。すつと、ジークが視線を右に逸らした。

(右に逃げるつもりだな？ そうはさせないぞ！)

ジークの視線から右に逃げると予想し、先に逃げ道を遮るべく右に動く。だが——

「——あれ?」

リーシャは首を傾げた。ジークは右に逃げる。ならば、その先にいれば必ず来るはずだが、ジークは右に現れない。

「あばよリーシャー！」

「なつ!？」

背後からジークの声が聞こえ、振り返る。既にジークはリーシャから遠ざかっていた。

ジークは口説きや機竜の整備以外にも得意な物があった。それは、マジックだ。これは雑用の時に接待している客を満足させるために

覚えたものだが、意外にジークはマジックが得意。

さつきリーシャに使ったのは、視線だけで誘導させるミスディレクションというマジックの技だ。

とりあえず、リーシャからは逃れられた。これで少しはひと――

「あー。見つけたわよっ!」

廊下の角から現れた女生徒が、ジークを見て声を上げた。

「こっちこっち! みんな、捕まえるの手伝ってー!」

「ちよつと!? 三年生まで呼んじゃダメよ! 独占されちゃうじゃない!」

直後、ぞろぞろと数人の女生徒たちが、目の前に現れる。

「俺って人気者だなく。けど、今回ばかりは少しね……」

ジークはそう言つて、近場の窓に手をかけた。

「ちよ、ちよつと待つて!! ここつて、三階よつ!!」

女生徒たちの目が、驚きで丸くなる。

「では、お譲様^{レディ}たち。じゃあね♪」

直後、開いていた窓から、ジークが校舎の外に飛び降りた。

「ああつ!」

その場にいた女生徒たちから、小さな悲鳴が上がる。ジークは落下の途中で外壁を蹴り、向かいの木の枝を一瞬つかみ、落下の勢いを殺してから着地――グギッ!。

「ああ足首があ! 衛生兵ー! 衛生兵ー!」

着地に失敗したジークは悲鳴を上げる。だいぶ落下の衝撃は殺したものの、それでも着地した足から、強いしびれが身体を突き抜けた。「ふっ。だがまあ、これで時間は稼げた。どっかに身を隠して足を直す――」

「いたわ! こっちよ!」

「ちよいー! 足首を挫いたばっかなんですけど!」

騒ぎを聞きつけた女生徒たちが、あちこちから更に集まってきた。

「ああくそ! 逃げるしか選択しがないじゃん! ていうか、みんな容赦なさ過ぎだぜ!」

ジークは涙目になりながら必死に逃げた。

？

逃げ続けたジークだが、残り五分でついに壁際まで追いつめられた。目の前には三和音トライアドの三人とリーシャ、そして多くの女子生徒。絶對絶命の状態だ。

「ふふ、さあジーク君。大人しくお縄につきたまえ」

「そうだよー。大人しく捕まれば玩具おもちゃ……じゃなくて優しく弄ってあげるからねー」

「N.O. テイルファー、本音が出ていますよ」

「さあ、依頼書を寄こすのだ！」

そう彼女らは口々にそう言つて。こちららにじり寄ってくる。

「ま、待て！ 落ち着くんだ！ 依頼書は一つ、誰か一人しか満足できないだぜ？ ここは公平にジャンケンで——」

ジークは最後の悪あがきで、女子生徒に説得を試みる。しかし——

「問答無用！ みんな、依頼書を取りだせー！」

「おわあああああああ！」

シャリスのかけ声で、一斉に女生徒はジークを揉みくちやにした。ジーク一人に対し、十数人の女生徒だ。依頼書など、一瞬で取られてしまうだろう。だが——

「あれ？ 依頼書がない」

女生徒の誰かがそう言った。胸ポケットやズボンのポケットを調べてもジークが持っている青い依頼書は出てこない。

「フッフ、ハハハハハ！」

ジークはわざとらしく高笑いした。

「残念だったな！ 依頼書は最初から持ってなかったのさ！」

「えええええええ！」

ジークの言葉に、女生徒たちは驚愕の叫びを上げる。

そう、この瞬間。この瞬間こそが俺の狙いだっただのさ！

「俺の依頼書は学園長室に置いてきた！」

この催し物イベントが始まった時から計画した、勝利の方程式。俺の青い依

頼書は、学園長室のソファに置いてきた。それを知らずに追いかけてきた女生徒たち。時間ギリギリまで逃げ切れれば俺の勝ちだ！

ふふ、要らない所で『神算鬼謀』を使うって面白い。

「残念だったね！俺は先に学園長室に戻って勝利の美酒に酔いしれているぜ！あばよ！」

これで、俺は誰からも依頼を受けずに済む！

？

「うーん。何故か今日は皆さん騒がしいですね……」

ルクスの実妹であり、人形のように美しい容貌の少女は、首を傾げながら学園長室に向っていた。兄のルクスが学園長が用があると教えてくれたからである。

教えた当の本人のルクスは、女生徒を見ると途端に逃げていった。

「レリイ学園長、アイリです。兄さんから私に用があるって聞きましたので来ました」

学園長室の扉を軽く三回叩き中に聞こえるように言う。しかし、返事が返ってこない。

「……学園長、失礼します」

ドアノブを捻って部屋の中に入る。思った通り、中には誰もいなかった。

「まったく、用があると言ったのに……」

仕方がない。ここで待つことにしよう。そう思い、アイリはソファに座ろうと――

「ん？これは――」

座ろうとしたソファの上に、青い紙が置いてある。青い紙を手に持ち書いてある内容を確認する。

「ジークさんの……一週間独占権？」

考えるに、レリイさんが考えた催し物イベントでしょう。まったく、あの人は。

と、アイリは心の中で呆れのため息をすると、

「はははは！ 俺の勝ちだぜー！」

バンツ！と学園長室のドアが勢いよく開くと同時に、高笑いしているジークが中に入ってきた。当然、ジークとアイリの目線は合う。

「あれ？ それって……」

ジークがアイリの持つている青い依頼書を視界に捉えた直後、

「終了時刻です！ 今、依頼書を手にしている女生徒が、ジーク君とルクス君を一週間、自由にする権利が手に入ります！」

係員らしい女生徒の声が、甲高い鐘の音とともに、遠くから聞こえてくる。

「え？ 何でアイリがここにいるの？」

「に、兄さんに言われて……」

「くっ……！」

その場に崩れるジーク。そして――

「ルクス！ 俺を売ったのかアアア！ ルクスウウウウ！」

「え？ え？ 一体、どういうことですか？」

その場に崩れ、どっかの満足さんみたいな叫び声を上げるジークと、困惑のままジークの一週間独占権を奪ったアイリ。それを見たリーシャ達女生徒は、一体何があっただと首を捻った。

？

「と、いうことがありました。アイリさん」

「なるほど――じゃないですよ！」

ジークが数刻前に起こった出来事をダイジェストに言うと、アイリが鋭いツツコミを入れた。

「おお、ナイスツツコミ！」

「Yes. アイリ、ツツコミの才能がありますよ」

「あ、ありがとうございます――じゃなくて、話を逸らさないでくださいー！」

ジークとノクトが褒めると、アイリは嬉しそうに頬を赤らめたが、直ぐに戻ってまたツツコミを入れた。アイリ、やっぱりツツコミ才能

があるよ。

レリイ学園長が良かれと思って始めた『ジーク、ルクス争奪戦』の後、夕食を終えたジークはアイリに呼ばれた。ついでにルクスも引張ってきた。

ルクスの赤い依頼書は、クルルシファーが獲得したらしい。そして、その依頼は『一週間、恋人になる』という内容らしい。

「なんで兄さんは真っ先に私のところに来なかったんですか？　そうすれば兄妹の中だけで解決して、こんな騒ぎになることもなかったのに」

「僕も行こうと思ったんだけど。なかなか行けなくて……」

アイリは呆れと怒りが入り混じった大きなため息をつく。ジークは察するに、アイリは自分に助けに求めなかった兄の行動が、酷く不満だったらしい。

「くれぐれも目立たないように、と言ったでしょう？　おかげで私はさっきまでクラスメイトたちに——」

「『お兄さんって恋人できちゃったの!？』(ジーク裏声)」

「という質問責めにあってですね」

「うん、本当にごめん。っていうか、何で僕がクルルシファーさんに恋人役を頼まれたことを知っているのジークは!？」

裏声で女生徒の真似をしたジークに、ルクスは問い詰める。

「噂って一瞬で広まるものだけ」

にこやかに言うジークに、ルクスは項垂れた。

「しかし、個人的には意外でした。ルクスさんとおつき合いますというのは、クルルシファーさんの性格上、あり得ないと思っておりましたので」

冷静に感想を口にするノクト。しかし、ジークはノクトの感想とは違った。

「うーん、彼女は隠し事を好みそうなタイプだ。何かしら意図があつてのことだろう。前に話した時に『黒き英雄』に用があつたらしいからあ……ああ、そう言うことね」

一人、納得いったように頷くジークに三人は首を傾げた。それを

知ってか知らずかジークは勝手に話を進める。

「それで、ルクスはこれから彼女と、どんな楽しい時間を過ごす予定なのかな？」

「え、ええと——、たぶん今までの依頼と、基本的には変わらないんじゃないかな？」

何を考えているのか分からない不敵な笑みのジークに震えながら、ルクスはとりあえずそう言っておく。

「ふうん。まあいいですけど。兄さんも年頃の男性ですしね」

「い、いや、今回は別に、僕からクルルシファーさんに頼んだわけじゃないし！」

拗ねたように視線を逸らすアイリに、ルクスが慌てて弁明する。

「Yes. クルルシファーさんの真意もジークさんの考え事も測りかねますが、仕方のないことかと思われます」

「そう、でしょうか？」

ノクトのフォローに顔を上げるアイリを見て、ルクスは一瞬ほっとしかけるが、

「んーまあそれはそれとして、確かにルクスは女性の押しに弱そうだけど」

「ちよつと!? セっかくまとまりかけてたのに、何でまたそう言うこと言うの!?!」

「Yes. 私もそう思います」

「ノクトまでっ!?!」

ジークとノクトに、ルクスが再び困っていると、アイリは軽く咳払いをし、立ち上がる。

「その件はまた今度詳しく聞かせてもらおうとして、私もジークさんへの依頼を考えました」

「おう、今はアイリが依頼主だから何でも聞かぜ」
ジークは聞く姿勢でアイリを待つ。

「では一週間——」

アイリは一拍溜め。

「兄さんの執事をやってください」

「うんうん——え？」

頷いていたジークの首は止まり、表情が固まった。

「ですから、兄さんの執事になつてください」

「え、でも——」

「一週間独占権——忘れてませんか？」

「……はい」

ジークが反論しようとする、アイリは依頼書をチラつかせジークを無理やり頷かせた。

「では、明日からお願ひしますね。それより、兄さん、時間です。依頼の場所に行きましよう」

「あ……そ、そうだね」

不敵な笑みを浮かべるアイリに、ルクスは苦笑いで返事し部屋の外に出る。

「学園敷地内の依頼だと聞きましたが、夜分ですので、お気を付けて」

ノクトはそう言つて、ルクスたちを見送っている。アイリたちの姿が消えて、ジークは口を開いた。

「なあ、執事つて何するんだ？」

「教えて欲しいですか？」

「え……まあ、依頼だし」

「そうですね……」

ノクトは少し思案顔になる。数秒たち、ノクトは顔を上げ——

「では、報酬有りだったら」

「お、おう……」

「Yes. では、御教授しましょう」

嬉しそうに言うノクト。これはやっちゃまった感があるな。

？

「うーん、疲れたー」

椅子に座つて白紙の画用紙にペンを走らせているジークは身体を

伸ばした。ノクトから執事の仕事を教えてもらった後に複数枚の画用紙を持って誰もいない食堂に来たのだ。

そろばんで計算して、定規を画用紙に押し当てペンで線を描く。それを何度も繰り返すこと数時間は経っている。静寂が満たすジークしかない食堂に、ペンを走らせている音が響く。しかし、珍しい来訪者がきた。

「あら？ 珍しいわね」

声をかけられたジークは振り返る。そこにはすらりとした細見の身体と、端正な顔立ちに、冷たい瞳の少女。

「——クルルシファーさん」

「さん、は付けなくていいわよ」

ユミル教国からの留学生、クルルシファー・エインフォルクが興味深そうな目でこちらを見ていた。

「何をしているの？ 勉強ってわけではなさそうね」

クルルシファーは、そう言いながらジークの前の席に座った。

「あーちよつとした設計図を……」

「見てもいい？」

「ああ、いいよ」

どうぞ、と言ってジークは書き途中の設計図を見せた。

「これは……機竜牙剣？」

「いや、これは俺が考えた《V・F・D》システムの一つ、《D》だよ」

クルルシファーが見たジークの設計図、そこには見慣れた機竜が使う武器、機竜牙剣が描かれていた。しかし、よく見ると細かい部分が違う。

「《V・F・D》システム？」

「うん、雑用時からこのシステムは考えてたんだけど作れる機材が無くてね。学園に来てやっと作れるようになったんだ」

「……《D》ということはまだVとFが残っているわね」

「鋭いね。そう、《V》と《F》が今、半分完成している状態で格納庫に置いてあるよ。プログラムが終わって今は放置している状態

さ、明日には完成しているかな」
機竜息砲の《V》と機竜息銃の《F》、そして設計段階の機竜牙剣の《D》。

この三つを合わせて、《V・F・D》システム。

「なるほど。けど、なんでそんな物を作ろうと思ったの？」

「《オッドアイズ・ドラゴン》の火力不足を補うための予備武装さ」
ジークが使っている《オッドアイズ・ドラゴン》の欠点、出力が汎用機竜と同等しか出せない。それを補うためのオリジナル武装だ。

「それより、クルルシファーは何でこんなところに来たんだい？」

「あら、偶然よ？」

「偶然……ね」

ジークは目を細め、クルルシファーを見る。自分が疑われたことを悟ったクルルシファーは、溜め息をついた。

「はあ。貴方と話がしたくて探していたのよ」

「よかった。俺もクルルシファーと話がしたかったんだ」

アイリの部屋に居た時から思っていて、今日はもう遅いので明日と持ち越しをしていたのだが、早く済んでラッキーだった。

「そっちからどうぞ？」

「じゃあ、私から。貴方はいつまで実力を隠す気かしら？」

「別に隠しているわけじゃ——」

「そうかしら？」

今度は、クルルシファーが目を細めた。

「ジーク君の『神算鬼謀』と機竜の神装、《天空の虹彩》を使えば王都のトーナメントでも、姫様との模擬戦でも、ましてやあの『黒き英雄』のルクス君すら勝てたんじゃ——」

「俺は、勝利に興味はない」

遮るように、ジークは冷え切った声で言った。

「勝利よりも、もっと大切なことが俺にはある」

「……勝利が、誰かを守るとしても？」

「勝利は誰も守らないよ。勝った方は負けた方の全てを奪う。戦いに『善』はない、あるのは『悪』のみさ。それに、正義がなくなつて

世界は回るんだよ」

光が消え失せた瞳で、ジークは言う。その深い闇に、自分が入ってはいけない領域のようでクルルシファーは震えた。

何が一体、彼をここまでさせたのか。もし、彼が本気で戦ったら――

「んじゃあ、今度は俺ね」

先程とは一転、光がなかった瞳は光を取り戻し、明るい口調でジーク話す。

「ルクスに一週間、恋人役をやって貰うんだって？」

「ええ、そうよ」

「なるほど……」

「何か可笑しかった？」

変に笑みを作るジークに、クルルシファーは怪訝な眼差しを送る。

「前に話した時、ああ留学の話ね。確か、ドラッグナイト機竜使いのことを学ぶため、ともう一つあったね」

「さあ、そんなことを言ったかしら？」

「当ててやろうか？ そのもう一つ」

じーっと、ジークはクルルシファーの瞳を見つめる。まるで、こちらの心の中を覗いてるようだ。

「そうだなあ。在学中に、新王国で位の高い貴族と婚約を結ぶ。あるいは、結婚する。んで、ルクスはお家の方から来る誰かを誤魔化すため。ってところかな」

「ええ、そうよ。数日後。私の実家であるエインフォルク家から、城塞都市に従者が派遣されてくる手筈になっているわ。私の婚約の進捗を確認して、報告するためによ」

要は、そのやってくる従者を誤魔化すための、『恋人役』ということらしい。

「一言で言えば、政略結婚よ」

「だから誤魔化す、ね。わからないな。子孫と血を受け継ぐためならば仕方がないことでは」

「……………」

クルルシファアは驚いた。まさか、ジークからこんな言葉が出るとは思わなかったからだ。

「貴方って結構ドライなのね」

「一般人には貴族の風習とかがわからないだけさ」

神装機竜を持つている人間が、一般人と違うかわからないが。

「まあ、俺も一週間だけルクスの執事やることになったからよろしく」

「ええ、よろしく頼むわ」

その後は他愛のない世間話をして、部屋に戻った。何故だが部屋に居たリーシャが、機嫌が悪かった。

？

リーシャは怒りながら廊下を歩いていった。

「まったく、あいつは何処に行ったのだ！」

一人で寝ることが多かったリーシャは、ジークが私の助手になって一緒に寝ることが多くなった。自室では二段ベットだが、工房ではあの幅が狭いソファで添い寝をする。それが密かにリーシャの楽しみでもある。

しかし、一緒に寝ているだけでそれ以上は進展していない。リーシャとしては今の現状でも満足なのだが、最近はいいつも人気が出てきて私と過ごす時間が少なくなって若干不満なリーシャ。そこに舞い降りてきたのが、ジークの一週間の独占権だ。これをわたしが手に入れ、ジークとの距離を縮める。

「そういう計画の筈だったんだが——」

「なんでジークはわたしにくれなかったんだよー！」

独占権の依頼書は結局、ルクスの妹のアイリに渡ってしまい計画は水の泡だ。それに今日は、ジークは珍しく工房アトリエに顔を出さなかったしまだ部屋にも戻っていない。だからこうして、学園内を回ってジークを探しているのだ。

「ん？ 食堂に明かりが——誰かいるのか？」

渡り廊下の向こう側にある食堂から僅かだが光が漏れている。こんな夜遅くに一体誰が？そう思つてリーシャは渡り廊下を渡つて食堂の扉まで行く。扉の隙間から部屋の様子を覗くと――

「――恋人役をやつて貰うんだつて？」

「ええそうよ」

探している人物、ジークの声と――クラスメイトのユミル教国からの留学生、クルルシファーだろうか。二人の話声が聞こえる。

（――何だか……面白そうだな）

話の内容こそ聞こえないが、時々見せる二人の笑顔で面白そうだとリーシャは感じた。

「むう……」

見ている気分が悪くなる。胸がモヤモヤする。ジークがクルルシファーと話しているとイライラする気持ちが込み上げてくる。

気付けばリーシャは自室に向つていた。

寝間着のネグリジエに着替え、二段ベットの上に登り毛布を被る。

「ただいまー」

しばらく経つて、ジークは何事もなかったかのように、普通に戻つて来た。

「……楽しそうだったな」

「え？」

二段ベット上から顔だけを覗かせジークに言う。当のジークはわかつてないらしく首を傾げた。それを見たリーシャは更にイライラしてきた。

「食堂で、クルルシファーと話していたらどう？」

「あ、ああ……」

リーシャの冷たい言い方にジークは若干引き気味になった。

「何を話していたんだ？」

「い、いや別にこれといった会話はしていないが」

「……バカ」

ボソ、とリーシャは呟いた。誤魔化したジークに、ついに腹が立つた。

「え？ 今、なんて——」

「バカと言ったのだ、この大馬鹿者！」

「ぐふっ！」

リーシャは枕を掴んでジークの顔面に投げる。顔面に投げられたジークはくぐもった鈍い悲鳴を上げた。

「もう知らん！ 寝る！」

「お、おい！ リーシャ！」

ジークが何度も呼びかけるが、リーシャは不貞腐れて寝てしまった。気まぎれになったジークはルクスのいるファイルフィの部屋に泊まった。

Part 8 マインドクラッシュ！（1）

翌日の午後の授業は、実戦形式の演習だった。結局、リーシャと喧嘩をして仲直りしてないまま装衣に着替え、演習場に来た。

「それでは、今日は二週間後に行われる校内選抜戦へ向けての、実技訓練を中心に執り行う」

遺跡調査権を賭けた数ヶ月に一度の、校外対抗戦。その出場者を選ぶための校内選抜戦が、もうすぐ始まるうとしている。故に実戦に向けての訓練を、今日はする予定だったらしいのだが――。

「……本日は王都の軍より、三名の機竜ドラグナイト使いが臨時講師としていらしている。皆、この機械を逃さず、しっかりと学ぶように」

ライグリー教官の紹介で、演習場に男たちが入場する。装衣の上に、正規軍の外套マントを纏った男たち。厳つい顔の男を筆頭にした、二十代後半から三十代くらいの軍の臨時講師に、女生徒たちはひそひそと声を漏らした。

「初めてですね。こういう授業で、王都から『男性』が来るなんて――」

「……そもそも、予定にはありませんでしたわよね？　こんなの」

「なんか微妙な顔の人が多いわね。そりゃ、うちの王子様までとはいかなくてもさー」

「つていうか、なんかいやらしくない？　私たちを見る目が――」
ぴつたりとその身体にフィットする。装衣を纏った姿をジロジロと見られ、女生徒たちが困惑していると――。

「設立して間もない、女生徒だけの王立士官学園アカデミー。なるほど、女に甘い新王国の体制に依存し、普段からぬるま湯のような訓練をしているとみえる」

「まだ、教育課程中ですので」

先頭にいた厳つい男がどうやら、この三人のリーダー格のようだった。嘲けが含まれた厳つい男の言葉を、ライグリー教官は冷静に答える。

(なるほどね……)

ライグリー教官の事務的な口調と表情から、ジークはこの臨時講師たちが本来の予定にはなかったことを察した。

だが、そうなるよこの男たちが、わざわざ来た理由はなんだ？

(単なる嫌がらせか？ まあそれもあるな……三年生が帰って来て、あのセリスティアが帰って来ていない。偶然か？)

ジークは色々な憶測とそれを決定付ける材料を引き出す。

「ああ、なるほど」

導き出された答えに、ジークは納得して頷いた。それを隣で見ているルクスは――

(また一人で納得したように頷いているよ……)

雑用時もときどき見せたジークの一人納得。何を納得したのか聞くと、

『え？ 何もわかってないよ？』

そう言っただけジークは説明を勿体ぶる。

(いや、わかっているでしょ!? 声で言っているんだよ!)

勿体ぶられる側としては非常にイラ、と来る。

そんな事をルクスは心の中で叫んでいると、臨時講師とライグリー教官の話し合いが終わったらしく何人かに分かれて演習が始まった。

いや、演習というなの別物だった。

「おい貴様！ そんなぬるい動きじゃ、戦場じや的にしかならねえぞツ!? ふざけてるのか？ ああ!」

「どうした!? もうへばったのか？ その程度で機竜ドラグナイト使いが務まると思ってるのか!」

「甘えてるんじゃないぞ！ 人に教わるな！ 自分で考えてやり直せ!」

開始から十数分。例の臨時教官たちは、かなり荒っぽい絡み方で、女生徒たちを指導していた。それを見守るライグリー教官も、どこか落ち着かない様子だ。

「一体、どういうことなんだろう……?」

「セリスティア・ラルグリスがやっちゃまったんだよ」

「え？」

休憩中のルクスが観客席から、その様子を眩きジークがつまらなそうに答えると――。

「実は前々からあったらしいわよ。ああいった話は」

「え――？」

いつの間にか背後にいたクルルシファーが、そう静かに眩いた。今は三人とも休憩グループなので機竜は纏っていない。

「――隣、座ってもいい？」

「あ……、はい」

ルクスが頷くと、クルルシファーはそつとルクスの隣に腰を下ろす。そして、興味深そうな目でジークを見た。

「それじゃ、ジーク君。説明の続きをお願いするわ」

「え……」

嫌そうな表情をしたジークだが、「まあ暇だし」と思い改まって真つ直ぐに演習場を見据え、口を開く。

「端的に言ってしまうえば、彼らは仕返しなのさ」

「……？　なんでそんなことがわかるの？」

「先月から三年生が王都に演習に行っているだろ？　で、三年生の学園最強様が彼らを含む向こうの機竜ドラグナイト使いたちの顔を、完全に潰しちまっただらうよ。後先考ええね」

強けりやいいってもんじゃないんだよ。考えて行動しないとね。

「そんなもって、何故セリステイアだけが帰ってこないかというところ。まあどうせ向こうの計略でセリステイアだけ残るって言ったんだけど他の三年生は残ってくれなかったんだらうな」

「でも確か王都で逆賊が見つかったから残ったんじゃないんだっけ？」

「普通に考えて新王国の中でもっとも警備が固い王都で学生に頼む必要はない。さらに威厳を保つためなら逆にセリステイアを残さず自分たちで解決した方が結果が良い。ま、結論を言うと王都でプライドをボロボロにされた軍の男たち数名が、今回の臨時教官の件を強引にねじ込んで、実行してきた可能性が高い」

そうジークは自身の推理及び説明をし終えた。

「そんなの——ただの八つ当たりじゃないか」

セリスティアに歯が立たないので、他の未熟な機竜ドラッグナイト使いの女子生徒をしごき上げるといふ、憂さ晴らしの指導。もし、それが本当なら——

「私は噂程度しか聞いてなかったし、ジーク君の言ったことも含めて私も予想していたのだけれど、どうやら間違いではなさそうね」
そう言つてクルルシファーは演習場に視線を向けつつ、ゆつくりと立ち上がった。

「さ、休憩時間は終わりね。行きましようか？ 私たちも——」

「うん……」

ルクスとクルルシファーは、並んで演習場に戻る。それを後ろから見ていたジークは、ルクスと臨時教官の三人を見比べていた。

「——絶好のチャンスつてヤツだな」

ジークは不敵に笑つて、訓練に戻つた。

？

「キヤアアツ!？」

ルクスとクルルシファーが演習上に戻り、二人で訓練を始めようとしたとき、それは起こつた。機竜を纏つた女生徒のひとりが空中で撃ち落とされ、地面に叩きつけられたのだ。

「はははっ！ やはりこの程度か！ 栄えある士官候補生の名が泣くぞぞ？」

勝ち誇つたような声が、上空に佇む筋肉質の体をした男から聞こえてきた。

「危険な真似はやめていただきたい！」

ライグリーは上空の男を睨み、強い口調で諫めようとする。

「ライグリー殿こそ、過保護はやめていただけようか？ 我々は軍の厳しさを、こうして覚えさせているに過ぎない。女子の身だから甘くしていいという、その考えが根底にあつては、この国の軍事力に未来

はないだろう」

だが、男たちの顔には反省どころか、嘲りの笑みが浮かんでいた。

「く……！」

ライグレイは顔を顰めた。

「あ、あの……先生。私は別に、平気ですか——くっ！」

先ほど倒された、やや大人しめな少女が起き上がろうとしたが苦悶の表情をして再び倒れ込んでしまった。

「大丈夫かい？」

倒れ込んだ少女に、爽やかな笑顔でジークが来た。地面に膝を突き、倒れ込んだ少女と視線を合わせる。

「足、見てもいいかな？」

「は、はい……」

ジークは「ありがとう」と微笑んで、そつと丁寧に少女の足を持ち上げる。足首が腫れている。捻挫の可能性が高そうだ。

「医務室に行つて冷やした方がいいな——よつと」

「きやつ！」

少女を抱き上げると（お姫様抱っこ）出口の方に向かった。それを背後で見ていた臨時教官たちは嘲笑う。

「ははは！ 噂通りに『道化師』は女に優しいな！」

「まったくくだ！ やはりあの無能のベルベットの部下であつたな！」

ジークが演習場から出る間際、ルクスとすれ違った。その時、ジークはルクスに——

「——あとは任せませ」

後にルクスは語る

『怒らせてはいけない人を怒らせたらあんな感じだと思つ』
と——。

？

「わかつたわ。後は私に任せて頂戴」

「ありがとうございます。先生」

医務室に怪我をした少女を連れて行き、医務室の先生に少女を預けた。

「では、俺は演習場に戻ります」

「あの——」

一礼して医務室から出ようとしたジークを、少女が止めた。

「私のせいで……ごめんなさい」

少女は目に涙を溜め、ジークに謝罪をしたが、俯いてしまった。自分のせいで、ジークが臨時教官たちに馬鹿にされた。その責任を感じてしまったのだろう。しかし——

「大丈夫だよ」

にっこりとジークは微笑んで少女の涙を人差し指で拭った。

「俺ならあの程度の連中平気だし心配はいらない。それに今頃、ルクスがボコしているよ。だからほら、笑って。君みたいな可愛い子は笑顔の方がいい」

むにと、少女のほっぺを横に伸ばし「にー」とジークは笑う。

「に、にー……」

照れながらも少女は微笑んだ。それに満足したのかジークは手を放し少女の頭を撫でた。

「よしよし。笑った」

手を頭から離しジークは医務室から出て行く。

(俺の直感では、まだ何かありそうだな)

廊下を走りながら演習場に急ぐ。そして、演習場にジークが着いたとき、ジークの直感は当たっていた。

？

演習場では現在、ルクスと臨時教官の男三人の対三の模擬戦が繰り広げられていた。三対一というどう見ても不利な状況。しかし、やはりルクスは並の機竜ドラグナイト使いより強かった。

「おおかた、予想通りの展開だな」

ルクス専用の防御特化型《ワイバーン》には、無理やり取り付けたような重り用のパーツがある。ジークは機竜整備の知識は豊富だ。あれはどう見ても重量超過——制御不可能と判断するレベルの代物だ。

だが、ルクスはそれを物ともしない。本来ならば、飛翔すら難しい状態の筈なのに飛翔している。やはり機竜適性が高いルクスだからこそ可能にするのか。しかも相手の《ワイバーン》を纏った筋肉質の男が突っ込んでくると空中で一回転し、相手の背後につく。これは高度の技術でルクスだからこそ出来る技だ。

他の《ワイアーム》、《ドレイク》も簡単に対応されている。これならば勝つのはルクスだ。だが——

「まあ、そう簡単にはいかないよな」

《ドレイク》を纏っている厳つい男の動きが怪しい。狙撃銃砲でルクスを狙うにしても銃口の位置が低い。予測するに狙いは三和音のテイルフアーか。

(生徒を使った脅し、ね……)

わかり易いやり方だ。しかし、お人好しのルクスには効果は効くだろう。そつとジークは訓練用に支給された《ワイバーン》の機攻殻剣ソード・デバイスに手を掛ける。

「——来たれ」

ジークは柄グリッブにあるボタンを握りながら押し、声を上げる。

「力の象徴たる紋章の翼竜」

さらに詠唱符バスコードを呟きながら観客席の鉄格子まで駆ける。鉄格子を蹴って演習場に踊り出た瞬間、ライフルから銃弾が射出された。それにタイミングを合わせたように剣を抜く。

「我が剣に従い飛翔せよ、《ワイバーン》！」

蒼い機竜を纏ったジークは、《ワイバーン》の片腕に機竜牙剣アブレードを転送し、幻創機核フォース・コアから送られるエネルギーを刀身に纏わせブレードを振るう。

キーン。と甲高い音と共に弾丸は弾かれる。しかし、ただ弾いた訳ではない。撃った相手に返って来るように弾いた。

「なっ!?!」

《ドレイク》を纏っている厳つい男が、驚愕の声を上げた。自動的に守る障壁に弾丸が当たり、大きく吹き飛ばされる。一瞬にして起こった出来事に、臨時教官だけではなく女子生徒も呆気にとられ沈黙が演習場内を包んだ。やつとのこととで正気に戻った《ワイバーン》を纏った筋肉質の男が怒りの形相で怒鳴る。

「貴様、何をする!」

「それはこっちのセリフだ……」

怒鳴りつける臨時教官とは真反対に、ジークは冷静な口調で言う。しかし、そこには冷え切った怒りが滲んでいた。

「二度ならず二度までもここの女子生徒を攻撃するとは——いいだろう」

だが、急にジークは笑顔になった。ただ、そこにはいつもの優しい『道化師』の姿はない。

「最高のフアンサービスだ!」

ジークは機竜牙剣を納め代わりに、青色をした機竜息銃プレスガンを右手に、左手に赤色をした機竜息砲キャノン呼び出した。

「くっ!?! いいだろう貴様もついでにさらしものにしてくれる」

リーダー格の男が怒りの形相でライフルを構える。同時に仲間の二人もキャノンを構えた。ジークの背後は女生徒がいる。避ければ三人の一斉に射撃に女生徒たちが危ないため、ジークは絶対に避けないと踏んだのだろう。

三人がそれぞれトリガーを引く瞬間——

「——神速制御」

それよりも早くジークが機竜息銃プレスガンのトリガーを引いた。相手の武器を狙った高速射撃。狙い通り臨時教官が持っていた武器を当て、上に弾く。しかも、三人同時に——

「なっ!?!」「どういうことだ!?!」「一体何が!?!」

臨時教官たちは何が起きたかわかっていないらしく狼狽する。一瞬できた隙、それをジークは見逃さない。

赤色の機竜息砲キャノンのトリガーを引いた。

「ぐわああああ!？」

《ワイバーン》を纏っていた筋肉質の男ごと吹き飛ばした。

ジークが何かを呟くと、纏っている《ワイバーン》が微かに震えた。それを《ワイブーム》を纏っていた瘦軀の男は機竜の暴走だと察した。

「はっ! もう既に機竜が暴走しているじゃないか! これで――」

瘦軀の男が勝ち誇った表情からありえないと言いたげな表情をした。何故ならこちらに赤色の機竜息砲キャノンの銃口を突き付けられているのだから。機竜息砲キャノンの弱点は、火力と引き換えにその充填時間リロードが長いことだ。だが、ジークのキャノンはありえないほど速い。

次の瞬間、銃口から火が噴いた。

「ぐがああ!」

そして、ついに臨時教官はうち二人がやられ、残り一人になってしまった。

「ぐっ……くそっ!」

「次発装填完了」

悪態を吐くリーダー格の男だが、ジークは冷徹な眼差しでキャノンの銃口を向ける。

?

「す、すごい――」

観客席の前で障壁係をやっていた三和音トライアドのテイルファーが、戦いを観戦しつつそう呟く。臨時教官が自身を狙っていたことを看破しそれを防いだのは流石としか言いようがないが、目の前で起きている模擬戦に理解が追いつかない。

「どうしてジクっちは、あんなに早く撃つことができるんだろう? キャノンは充填速度が遅いはずなのに――」

「それは、ジークがあえて機竜を暴走させてるからだよ」

テイルファーの呟きに、いつの間にか《ワイバーン》を解除してい

たルクスが相槌を打つ。

「え？ ……それって、どゆこと？」

「三奥義の一つ——強制超過リコイルバーストって技なんだけど。これは意図的に機竜を暴走させて、自壊寸前の負荷と引き替えに放つ、超威力の絶技。肉体操作による全力の行動を、自らの精神操作により抑えることによつて、極限の溜めを作り出す」

全力の攻撃と、それを止める命令。本来矛盾する強力な操作を同時に行い、意図的に機竜を暴走させ、超威力の一撃を放つ。幻創フォース・コア機格から流れるエネルギーの制動を完璧に行わければ、機竜は途中で力を暴走させ、周囲や自分の身すら死の危険に晒す、禁忌の技。

「き、機竜を意図的に暴走!？」

ルクスの説明を聞かされたテイルファーは驚愕をした。しかし、ここに更に疑問が浮上してきた。ジークが本当に強制超過リコイルバーストを使ったとしよう。だが、ハイリスクハイリターンで得られる超威力の一撃を使用していない。

「——そういうことね」

今度はクルルシファーが納得したように頷いた。

「ジーク君は機竜を暴走させ、そこから一気に増幅した幻創フォース・コア機格から送られるエネルギーを超威力の一撃に変えるんじゃないかと、武器の充填に」

「そう、だからジークは連発でキャノン撃てた。強制超過リコイルバーストの応用

技——『零装填ゼロリバース』」

ジークの十八番、二投目を一投目に隠す『影撃』と並ぶほどの応用技。王都のトーナメントではほとんど見せない技なのでルクスもこんなに間近で見たのは初めてだった。

「凄いのは技だけじゃないぞー!」

この状況に気をよくしたのか、リーシャが満足げに腕を組み説明を始める。

「ジークが今手にしている武器、《V》バニッシャーと《F》フューラーはジークの知識に

わたしの知識を織り交ぜた世界で一つしかないオリジナル武器——」

「確か《V・F・D》ザ・ビーストシステムだったわね」

赤色のキャノン《V》パニッシャーは威力が通常のキャノンより強く。青色のブレスガン《F》フューラーは連射速度が上がっている。そこにジークの技量に合わせてリーシャが調整をした。

「……なんでお前が知っているんだ？」

リーシャはジト目でクルルシファーを睨む。

「昨日、食堂で少し話してただけよ」

「そう言えば、リーシャ様。ジークと何があつたんですか？」

ルクスが聞くとリーシャは不機嫌そうに頬を膨らませた。

「ジークがその女と楽しく話していたようだ」

「あら、別にたいした事は話してないわよ」

「嘘を言うな。恋人役がどうか言っていたぞ」

「あ、それ僕です」

「え……？」

リーシャはまだルクスがクルルシファーの恋人役というのを知らなかつたらしい。ルクスがリーシャに説明をすると、リーシャはたちまち顔を赤くした。

「じゃ、じゃあ昨日、食堂で話していたのは——」

「ルクス君が私の恋人役とジーク君がルクス君の執事役ってだけの会話だったわ」

「もしかして、わたしはジークに一方的に……わたしとしたことが」

リーシャは羞恥のあまり俯いてしまった。

「だ、大丈夫ですよ。ジークの事ですし怒っていませんて」

「だけど……」

「そうね、でもきちんとジーク君に謝った方がいいわ。彼は優しいからきつと許してくれるわよ」

「そう、だな……後でジークに謝るよ」

リーシャは頷き演習場で最後の一人となつた臨時教官と対峙しているジークを見た。

？

臨時教官の男三人とジークが始めた模擬戦——いや、もう模擬戦とは言えない一方的な鬪りは終盤へと差しかかっていた。ジークが《V》の銃口を厳つい男に向けて突き付けていた。

「さつき、ベルベットさんのことを無能と言ったな……」

普段の優しいジークでは想像出来ないほどの冷徹な声で脅すように言う。

「取り消せ」

「な、なにっ……!?!」

「お前らなど、あの人の足元にも及ばない」

ジークやルクスが化け物過ぎて見落としがちだが、ベルベット・バルトはこの二人にはない才能がある。それは軍隊百人超を指揮できるカリスマ。何年間も屈辱に耐えうる忍耐力とそれをバネにして三奥義の一つを習得する努力。

故にジークは、ベルベットを尊敬しているし、それを無能呼ばわれされれば怒るに決まっている。

「ふ、ふざけるなっ! 誰が取り消す——」

ガアアン!

臨時教官の言葉を掻き消すように《V》から放たれた砲弾が厳つい男の背後の壁に被弾した。そしてすぐに、零装填でチャージを終えると銃口をもう一度突き付けた。

「次は当てるぞ」

短い言葉だが、そこから感じとれるほどの意味。流石にライグリー教官も焦る。

「ジーク、よせ!」

だが、それでもジークは《V》のトリガーに僅かに力を込める。

「わかった、降参だ! 取り消す! だから——」

「バアアン!」

「ひいひいっ!?!」

ジークは大きい声で砲声を真似る。それにビビった厳つい男はその場へ垂れこんでしまった。

「お前程度に撃つかよ」

ジークは最後にそう言うと、機竜を解除して踵を返す。控え室に向かうドアにライグレイ教官は立っていた。

「ジーク＝ザン・フローリア・エリック・ルーカス。礼は一応言うが、やり過ぎだ」

怒るのでもなく、静かな口調で、ライグレイ教官は告げる。

「はい。以後、気をつけます」

ジークは短く返事をし、控室に入っていく。入ってすぐにルクスも来た。

「お疲れ、ジーク」

「お前もな、ルクス」

ジークは装衣を脱いで、また新しい装衣に着替えその上に制服を着た。

「相変わらず、その傷を見せたくないんだね」

「……まあな」

背を向けているためジークの表情は見えないが、余り良さそうな雰囲気ではない。

「先に行ってるぜ」

「あ……」

ジークはルクスの返事を待たず、控え室を出た。控え室を出ると先に着替え終わっていた女生徒が待っていた。

「やったね！ おかげで胸がすつとしたよ！ ジーク君」

「ねえねえ。放課後、私たちに機竜を教えてよ？ 先生」

「そうですね。是非教えてくださるとありがたいですわ」

横暴な臨時教官たちから解放され、安堵と喜びの笑みを浮かべる少女たちに、ジークは取り囲まれる。臨時教官三人に圧倒したジークの技量を見れば、誰でも教授を願うだろう。だが――

「悪い――俺は教えるのが得意じゃないんだ、ルクスに頼んでくれ」
いつもなら頼めば笑顔で承諾してくれるジークが、珍しく断った。ジークは女生徒の脇を通るように囲いから抜ける。暗い表情のジークに、誰も声をかけられない。

「お、おい！ ジーク！」

廊下を歩くジークを背後からリーシャが呼び止める。

「あ、あのこの後、空いてるか？ 話したいことが——」

「ごめんリーシャ。少し一人にさせてくれ」

ジークは振り返らず、リーシャにそう告げると廊下の向こうに消えた。そして、廊下にはリーシャだけが取り残された。

？

「はあ……」

リーシャと別れたジークは、日が落ち夕暮れの屋上に来た。柵に背を預け空を仰ぐ。臨時教官との模擬戦に勝ったはずなのに、ジークの表情はどこか浮かれない。

「勝っちまったあ……」

ジークは額に手を当て呻く。誰もいない屋上では独り言しかならない——『自身』を抜けば。

『彼女たち女生徒を守れたから良かったじゃないか』

「そう言う問題じゃないんだよ」

ジークという『個人』の中の第二人格、フローリア。ジークにしか見えない彼は慰めるように言った。

「——今回は運が良かった」

『まだ引きずっているのか……』

無言でジークは頷いた。

「はああ……」

大きなため息をした後、ジークは脱力しその場に座りこむ。

「……他人を使うのはあまり褒められたものではないよな」

ジークより先にルクスを臨時教官と戦わせたのには理由がある。それはルクスが女生徒を守って臨時教官に立ち向かう姿を見せることで、ジークとルクスの編入に疑問を思っていた一派にイメージアツプをさせることが狙いだった。

(きつとルクスならそんなの関係なく助けに行っただろうな)

俺って卑怯な奴だな、とジークは苦笑した。

「リーシヤにも悪いことをしちやったしなあ」

先程、廊下でリーシヤに呼び止められた時に冷たい言葉をぶつけてしまった。昨日のこともまだ仲直りしていないのにあんな事を言うてしまったら――。

「やっぱ……夢を叶えるのって難しいよ」

ぎゅつ、と右肩の赤いタトウを握りしめた。

Part 8 マインドクラッシュ！ (2)

ルクスがクルルシファアの『恋人』になってから、早くも三日が過ぎた。ジークは現在ルクスの部屋でルクスの服を選んでいる。

「いやーまさか、クルルシファアがあそこまで大胆とは」

「多分、クラスの皆に僕とクルルシファアさんの関係を『本物』と思わせるためだと思うよ……」

ことの発端は授業が終わった放課後のクラスでの出来事だ。クルルシファアがいつものように涼しげな微笑みで、

『今日はこれから、私とデートをして欲しいの』

しかもまだクラスメイトがいる大勢の教室でだ。それはもうクラス中は大騒ぎ。今はアイリの依頼でルクスの執事をやっているジークは急いでルクスを部屋まで連れて行き、身支度を整えさせる。

「どうかな？」

ルクスは壁に立て掛けられている鏡に、映っている自分を見て言う。ジークがチョイスしたのは、白のシャツに薄地の紺色のベスト、下はスラックスという見た目も良いが機動性も損なわれていないシンプルイズベストの服装だ。相手はユミルの伯爵令嬢でとびつきり美しい女性だ。目立つ服はNG、かといって学園の制服で行くのはダメだ。

ファッションは唯一の自己表現。ここだいじ、OK？

「いいんじゃないかな。けど俺からしたら地味すぎるぜ、もっと腕にシルバー巻くとかさー！」

「な、何言ってるんだよ!? 僕にそんな目立つ物——」

「もちろん冗談」

につこりと言うジークに、ルクスは項垂れた。しかも、ジークも普段着とは違う。全体的に真っ黒な服。所謂執事服という物に着替え終わっていた。

「まあ、俺の場合だと仕事服だから自己表現とか関係ないんだけどね」

ジークは雑用の時、接待でこういった服になることが多かったので様になっている。

「さあ行こうぜ王子様」

懐中時計を見ながらジークはルクスを促す。

「デートの開始だ」

？

部屋を出て校門の前で合流した。

「まずは、服を買いに行きましょう」

学園の敷地内を出て、一番街区の大通りに向かう。ジークは表向きはルクスの執事なので少し距離を開けて歩く。

ジークたちが行こうとしている場所は、城塞都市の中でも比較的裕福な客相手の商業区画だった。目につく店は、富裕層向けの高級宿やレストラン、仕立屋、修道院、施療院など。雑用の時はあまり来たことのない場所に、広い敷地の豪邸が建ち並んでいる。

戦いにおいて拠点は必ず必要だ。だからまず最初にやることは、都市を形成し人を呼ぶこと。人が来ればお金が行き来するし自然と貿易も盛んになる。貿易で得られた鉄は兵士の武器になるし、娯楽施設や飲食店が発展すれば兵士の癒しになる。

旧帝国から続くこの場所も、体制が変わったとしてもそれは変わらない。

「私は貴族という人たちが、好きじゃないのよ」

ふいにクルルシファーから放たれたその言葉が、ジークの耳に入ってきた。

（貴族が貴族を嫌う、ね）

名家の出身である彼女が、同じ貴族を嫌う。それは、単なる政略結婚への反感とは思えない。

（なーんか怪しいな……）

ジークは思考を巡らす。だが、視界に道の角から覗く綺麗な金髪と桃色の髪を捉えた。

「……………」

(見覚えあるんだよなあ……)
隠れているつもりなのだろうがバレバレだ。

「——(ん)よ」

苦笑いしていると、ふいにクルルシファーは足を止める。そこには、美しい看板と彫り物の飾りがついた、大きめの洋服屋があった。

「高そうなお店ですね」

「そう？ 元皇族のあなたにとっては、慣れているものだと思ったのだけど？」

ルクスが店を苦笑いと言うと、クルルシファーは微笑で返した。

「宮廷でいい服を着せてもらっていたのなんて、昔の話ですし。もう覚えてないですよ」

「じゃあ、あなたにとつてはあまり楽しいことではなさそうですね。早めに済ませましょう」

「俺は外で待つてるぞ」

ジークはルクスの執事だから中に入る必要はない。クルルシファーは先に店へと入る。ルクスはその後についていった。

(……気になるなー)

道の向こう側に見える異なる色の二つの髪。絶対に知っている人物だが、話しかけづらい。

「——ちよつといいかしら？」

「うおっ!？」

ずっと道の向こう側を見ていたから背後から話しかけて来たクルルシファーに、ジークは気付かなかつた。

「び、ビックリさせないでくれ」

「ふふ、ごめんなさいね」

ジークが頬に汗を浮かべながらクルルシファーに訴える。しかし、当の本人は微笑んで悪びれないようすで謝る。いや、本当にビックリしたよ。

「ルクスはどうしたよ。まだ中に居るだろ？」

「いまルクス君は服の採寸中よ」

「そう、んじやあお金は俺がはら——」

「平気よ。お金は私が前払いで払ったわ」

流石は貴族だな。このオーダーメイドの服って俺とルクスが三ヶ月働いてやっと買えるぐらいのお値段だったはず。

「それより、ジーク君は彼女と仲直りしたの？」

「……何だよ藪からステイツクに」

クルルシファアの質問に、ジークは少し目じりが上がった。それに気づいたクルルシファアは悪戯ほい笑みを浮かべる。

「あら、誤魔化さなくてもいいのよ？ お姫様と喧嘩をしているんでしょ？」

「どこでそれを知ったんだよ」

「ルクス君から聞いたの」

ほおう……ルクス君。後で覚えてろよ。

「で、仲直りはしたのかしら？」

「……………」

ジークは苦虫を噛み潰したような表情をする。

「その様子だと、どうやらまだ仲直りはしていないようね」

「……話しかけずらいんだよ」

冷たくジークはリーシャに当たってしまい、どうやったら話しかけていいのやら悩んでいるのだ。

「やれやれね。相手の事を思うばかりで話しかけることも出来ないなんて」

「どうゆうことだよ」

「あなたとお姫様は似たものどうしってことよ。少しは相手の事も察してあげなさい」

リーシャの気持ち。わからない。いつものなら俺の推理で人の心がだいたいは理解できるのに、リーシャだけはわがわがすると、胸がドキドキして推理が出来ないのだ。

「ルクス君もそうだけど、鈍感って大変よね」

クルルシファアはそう言い残しながら再び洋服屋に戻って行った。数十分後にはルクスも連れて戻ってきた。

「せっかく街に来たんだから、食事でもして帰りましょうか？ ここは、私が払うから」

「だめだめ、俺が払うよ」

高級商業区画を抜け、広めの通りに入る。日の暮れかけた時間帯のせいか辺りに人気はなく、薄暗かった。

「そういう男の子らしいところは、割と好きよ。けど、あなたたちのお財布事情じゃ厳しいじゃない？」

「何言ってるんだよ今はルクスの執事役だぜ？ それに財布の事なら安心しなよ」

ジークは懐から財布を取り出す。どこか緊張の緩んだ空気になった、そのとき――、

(なんだ……この臭い?)

どこか鼻を突くような臭いに、ジークは反応した。ルクスとクルルシファーを見てもどちらとも気づいた様子はない。

(俺しか嗅ぎ慣れてない臭い……)

該当する物がいくつかある、鉄と油だ。そして、これに関係するものをジークはやっている。

——機竜整備士だ。

「《オッドアイズ・ドラゴン》！」

ジークは腰に差している赤色の鞘からソード・デバイス機攻殻剣を抜く。『相棒』の名を叫ぶとジークの周りに光の粒子が集合し、赤いフレーム装甲を形成している。

「——！」

《オッドアイズ・ドラゴン》を纏うと瞬時にルクスとクルルシファーを庇うように移動する。

「機竜咆哮！」

ジークの目の前に渦状の障壁が出現した。直後、鞭むちのようなものが空気を薙ぎ渦状の障壁とぶつかる。

「ワイヤーテイル」

ドラッグナイト機竜使いか!?

ルクスがとつさに、腰から《ワイバーン》のソード・デバイス機攻殻剣を抜く。

「動くなッ！ 動くときと撃つ！」

だが、ほぼ同時に、周囲から現れた五機の装甲機竜が、ジークたちに向けて、機竜息銃プレスガンを構えていた。機竜を操るその五人は、頭を布で巻いた男たちだ。見慣れない粗野な印象は、まるで盗賊を思わせた。

「《ドレイク》が五機。これはやばいな」

「そうね。私とルクス君を庇った状態だとジーク君の動きが制限されるわね」

クルルシファアの言った通り、この狭い路地では飛行型の《オツドアイズ・ドラゴン》より特装型の《ドレイク》の方が強い。しかも、背後にルクスとクルルシファアを庇っている状態では動けない。圧倒的にこちらの不利。

「何故、俺らがわかった？」

「金属と油の臭いはいつも嗅いでるんでね」

先頭の男の質問に、ジークは隙を見せず答える。

「目的は誘拐か……」

すつとジークの目が細くなった。ジークの人外じみた思考能力だからこそ出来る能力、『神算鬼謀』。それがこの状況の打開案を構築する。

「……綺麗だな」

『は？』

突如、ジークから発せられた言葉に、盗賊は勿論ルクスやクルルシファアまでが驚きに間拔けな声が出る。だが、ジークだけが真剣な表情なのでシユール極まりない。

「ジーク、急にどうしたの？」

「流石にこの状況で悪ふざけはよしてくれない？」

ルクスとクルルシファアが怪訝な表情で言うが、ジークは無視をして言い続ける。

「機竜が綺麗だ。装甲から手に持っている武装までちゃんと手入れをされている」

「……？ それがどう——」

「お前らに機竜の整備をする余裕があるのか？」

ジークの瞳がじつと先頭の男を見据える。

「盗賊つてけつこう生計を立てるの大変じゃないのか？ それなのに、そこまで機竜を整備するのは不可能だし、誰か整備の知識を持っている奴はいるのか」

「くっ!? それは——」

「それに、こんな市街地で伯爵令嬢を狙うのはリスクが高い——お前ら、雇われたのか」

「——!」

ジークが言った瞬間、盗賊たちの雰囲気が一気に変わった。どうやら、当たりらしい。

「やれやれ。どれくらいの報酬を提示されたか知らないけど、それは間違いだぞ?」

「き、貴様に何がわかる!?!」

「落ち着けよ。今だから言うけど、ここの貴族は信用ならねえぞ。もし、お前たちが失敗すればトカゲの尻尾みたいに切り捨てるし、成功したとしてもちゃんと報酬が貰えるか——」

「だ、黙れ!」

盗賊は怒声を上げるがジークは涼しい顔で、更に畳み掛ける。

「まあ、お前らの機竜ドラクナイト使いの腕は認めるよ。この狭い路地で《ドレイク》を使うのは正解だし連携もとれている」

「う……そ、そうか?」

先程とは打って変わって、ジークは盗賊たちを褒める。盗賊は褒められるのが意外だったのか反応に困っている。

「けど、やはり野蛮だな。報酬に目が眩み、依頼者に良いようにコキ使われ切り捨てられる。残念な事だ、その腕も無意味に終わるとは——」

「黙れ黙れ黙れえ!!」

今度は盗賊たちに辛辣な言葉を言うと、盗賊はキレた。顔に巻き付けている布で顔は見えないが、多分青筋が浮き立っているだろう。

「お前らは、あの方に逆らえばどうなるか知らないからそんな事を言えるのだ! あの方はこの新王国でも絶大な権力を持っている!

四大貴族の権力を持つてすれば貴様らなど闇に——」

「なるほど。裏で糸を引いていたのは四大貴族か」

「はっ……!?!」

悪戯ぽく笑うジークに、盗賊はしまったという驚愕の声を上げる。驚愕したのは盗賊だけではなく、ジークの背後でルクスとクルルシファーも驚いていた。今の会話で相手の特徴を見抜き、しかも裏で糸を引いている者さえ聞き出す。

飴と鞭。ジークは盗賊に辛辣な言葉と褒め言葉を交互に言うことで盗賊の心理状況に余裕をなくし、まともに考えられないところでジークは誘導したのだ。

「くっそ……!?! 早く女を縛れ、男は殺してしまえ!」

先頭の男が周りにいる盗賊に命令する。しかし、もう遅い。

「残念だけど、それは無理かな」

苦笑いするジークに、先頭の男は不安に駆られる。この男は、危険だと。

「な、何が出来るこの状況で! いい加減な事を言うのも——ぐがあッ!?!」

言いかけた先頭の男が、いきなり機竜ごと前のめりに倒れて、呻き声を上げる。

「……なっ!?!」

「ルクス、今だ!」

他の機竜ドラッグナイト使いたちが身構えたとき、ルクスはクルルシファーの手を引いて走り出した。

「ま、待てッ!?!」

それを見た残る四機の《ドレイク》たちが、慌てて動く。だが、それよりもジークが先に動いた。

「——神速制御」
クイックドロウ

フューラー

《F》の牽制攻撃で盗賊たちを足止めした。さあ、報復の時間だ。

「えっと。止まってくれる?」

ジークの横に、巨大な紫の装甲機竜ドラッグライドが立ち並んだ。

「何……!?!」

神装機竜《テュポーン》。陸戦型であるその両手に、武装は握られていないが、爪と拳の肉弾戦で敵を圧倒する、近接特化の装甲機竜だ。
「こんばんわ。ルーちゃん、ジークくん」

その使い手である幼馴染みの少女が、そうルクスとジークに向けて声をかける。

「ファイルファイ。……やっぱり来てたんだ」

ルクスが苦笑いしてそれに応える。

「俺が援護射撃するから遠慮せずに突っ込んで、ファイちゃん」

「うん。まかせて」

短い言葉で会話をした後の行動は、迅速だった。《ドレイク》たちは、それぞれ小型のブレードを構え、《テュポーン》に斬りかかる。しかし、《オッドアイズ・ドラゴン》の補助武装《F》から射出される弾丸が、《ドレイク》の持っている武装を弾き飛ばす。

「えい」

間延びした声とは裏腹に、素早い拳が、《テュポーン》から繰り出される。通常の装甲機竜の倍はあろうかという豪腕。その拳を当てられ、《ドレイク》の右腕が、一撃で粉碎された。

「な、にイイ……ッ!」

驚愕に目を見開いた男の前で、《テュポーン》が、くるりと宙返りする。装甲機竜という、金属フレームで組み合わされた兵器が、まるで獣のように俊敏な動きで、加速する。そして、腕を壊されながら空きになったその胴体に、機竜の蹴りが突き刺さった。

「が……はあっ!」

賊らしき男は、背後に十数メートルほど吹き飛ばされ、悶絶する。最大で展開された障壁も砕かれ、すぐに機竜の接続が解除された。

「うわっ……!?!」

と、ルクスはその異常な戦闘を見て、思わず声を上げた。

「あなたは初めてかしら? 彼女の《テュポーン》が、まともに動いたところを見たのは」

路地の陰にルクスと逃げ込んだクルルシファーは、そう尋ねてくる。

「ファイルファイ。あんなことができたんだ……」

ドラッグライド 装甲機竜を使った、体術の攻撃。続く、もう一機の《ドレイク》の腕を、今度は手のひらでつかみ止め、瞬時につぶす。間髪入れずにもう一方の腕で正拳を撃ち込み、一撃で装甲を砕き散らした。

「ば、化け物かコイツはッ……!?!」

瞬く間に仲間をやられた五人目の賊は、《ドレイク》を使って逃走を開始する。

「無駄なことだ。《テュポーン》からは逃げられない」

いつの間にかルクスの横にいたリーシャが、溜息を吐きながら呟く。

「リーシャ様!?!」

「どうして二人が、こんなところにいるのかしらね?」

「い、いやっ……。その、たまたまじゃないか? 別にジークのことが気になってつけてきたとか、別に、そういうことじゃなくてだ……」

「あ、そうですか……」

視線を逸らして、顔を赤らめるリーシャに、ルクスがなんともいえない顔を向けると、《テュポーン》の左腕から鈍色のワイヤーが撃ち出された。

「あれは、《テュポーン》の特殊武装、《バイル・アンカー竜咬縛鎖》。一見、ワイヤーテイルのような捕縛系の武器だけど、装甲のいろんな個所から射出されて、射程内の敵を捕獲できる」

アトリエ 工房社長と一流の整備士だけにあって、流石は説明が上手だ。

「た、助け——!?!」

「ちよつとやり過ぎた。……かな?」

《バイル・アンカー竜咬縛鎖》に捕まり、引き戻され右腕からブローされそうになった盗賊が悲鳴を上げると、拘束を解除し、《ドレイク》を解放する。だが、高速で引き寄せられていた《ドレイク》は、そのまま慣性の勢いで街路を横転し、壁に激突。——動かなくなった。

「まだだ、ファイちゃん。油断するな!」

ジークが《オッドアイズ・ドラゴン》を使って、装甲を破壊された

機竜使^{ドラッグナイト}いたちを拘束しつつ、叫ぶ。

「……あれ？」

フィルファイが倒した機竜使^{ドラッグナイト}いに視線を向けた瞬間、《ドレイク》の中に、男はいなかった。周囲を見回すと、男が接続を解除をした生身のまま、裏路地を走っているのが見える。機竜を捨てての逃走——いや。男の逃げる先には、細見の女性が立っていた。

「う、動くな！ その女——！」

腰からナイフを抜き、賊らしき男が叫ぶ。おそらくは、人質に取るためだ。

「危ないッ！」

ルクスが思わず声を出して、助けに走ろうとするが——、

「平気だ、ルクス。——フローリア！」

それよりも先回りしていたジークが、機竜を解除して低く構える。更に、『自身』を叫ぶと赤かった髪は青くなり、瞳は黒くなった。

「やれやれ。なんでこういった荒事に呼ばれるのか」

ジークの声に、非常に良く似た声の第二人格『フローリア』が溜息を吐く。

「く、このお！」

賊がフローリアの目の前まで迫り、ナイフを胸に突きつけようとしたとき、

ドスッ！

と、鈍い音が響いた。フローリアから放たれた腹パンが、賊の腹にめり込んだのだ。

「ウツ……溜璃」

「……彼女は溜璃じゃない」

ルリイイイイイ！

出た！ フローリアさんの無言の腹パンコンボだ！

気絶した賊はその場に倒れ伏した。

「随分と治安が悪いんですね。この国は——」

背後で静かに女性が呟く。振り返ると、フローリアと同じ執事服に黒い髪の顔立ちが整った女性が、腰に差していた剣に手を置いてい

た。一触即発の空気。フロリアと執事服の女性は見つめ合った状態で膠着していた。そこに――

「やめなさい。二人とも」

割って入るようにクルルシファアの凜とした声が、一触即発の空気を破った。冷徹ともいえる女性は、フロリアから視線を切るとクルルシファアを見る。

「ご無沙汰しております。お譲様」

「えっ……？」

困惑するルクスの隣で、クルルシファアがため息をつく。

「彼女は、私の知り合いよ。エインフォルク家の執事、アルテリーゼ・メイクレア」

「じゃあ、もしかして、彼女が――？」

「ええ、私の様子を見に来た、エインフォルク家の従者よ」

「場所を変えてもよろしいですか？　ここは話をするには不向きです」

アルテリーゼと呼ばれた女性は、そう静かに申し出る。

？

賊を拘束した後、遅れてやってきた警備兵に賊たちを引き渡すと、ジークたちは――フロリアと入れ替わった後――アルテリーゼの後に従った。歩いて十分たった、学園の敷地から近い酒場に集まり、軽く話をするようになった。校則では酒場の出入りは推奨されていないが、責任はアルテリーゼが持つと言った。

三人掛けのテーブルに、ルクス、クルルシファア、アルテリーゼが腰かけ、そのすぐ隣のテーブルには、リーシャとフィルファイが座る。そして、ジークは――カウンターでミルクを頼んでいた。

「ミルクでももらおうか」

「なめてんのかア!?　小僧!!」

ミルクが注がれたコップを持って来て、カウンターにガンツ!

「これ飲んでとつと帰んなア!!」
めつちや優しいマスターでした、はい。

「ジーク君は……何をやっているのかしら?」

「なんか、このバーの裏メニユーらしくて、ミルクを頼むとアレをやってくれるんです」

クルルシファーがカウンターに座っているジークを見ながらルクスに質問をすると、ルクスは苦笑いで返した。何故、このバーにある裏メニユーがあるかはこのマスターしか知らない。

「まずはそうですね。ご壮健で何よりです、お譲様。と言いたいところですが——」

アルテリーゼはルクスたちをちらりと見て、そう切り出してくる。ユミル教国の貴族であり、ドラグナイト機竜使いを輩出する名門、エインフォルク家。その執事を務めるという彼女は、自身も凄腕のドラグナイト機竜使いであり、ユミル教国では特級階層エクスクラスと呼ばれる最高位の実力者らしい。

ここにいるクルルシファーを除く全員が驚いたが、階層クラスにまったく興味がないジークだけは、

『え、何それ? 強いのか?』

首を傾げたジークに、アルテリーゼは睨んだ。プレイボーイな性格のジークと真面目そうなアルテリーゼでは、相性は悪そうだ。

「級友の前だからといって、余計な気遣いはいらさないわ」

クルルシファーが素っ気なく言うと、アルテリーゼは嘆息を漏らした。

「では、率直に。もう少し気をつけてください。あなたの身体は、エインフォルク家のものなのですよ?」

「なら賊に狙われるのも、名家の宿命だから仕方がないわね」

どこか不機嫌そうなアルテリーゼの言葉に対し、クルルシファーは皮肉を混ぜて返す。ふいにアルテリーゼは、ルクスに視線を向ける。

「ところで、その男性と——向こうの執事はどなたのですか?」

「私の恋人とその執事よ。素敵でしょう?」

「……なんででしょう。向こうで占いを始めてますが」

「あ、ジークのサービス営業なので気にしないでください」

アルテリーゼはトランプを広げて女性客に占いを始めているジークに、ジト目で言う。ルクスは素早くそれに返した。ジークがこういった所でああいうのをやるのは当たり前前で、雑用時はマジックをやっていたりもした。

「恋人ですか？ その少年が、ですか……？」

怪訝な顔で、アルテリーゼが聞いてくる。

「ええ。あなたにはあまり馴染みがないでしょうけど、彼は旧帝国の王子、ルクス・アーカディアよ。今は、王立士官学園に唯二人の男子生徒として通う私の級友。何か問題があるかしら？」

「……」

少し思案顔になったアルテリーゼ。そして、深呼吸をひとつした後
に、呟いた。

「そうですか、それは困りましたね。実は——」

「これはこれは——、私も見くびられたものだな？」

「……!？」

突然発せられた男の声に、一同ははっと息を呑む。金の刺繍がはいつた、赤い豪華な外套を纏った男が、アルテリーゼの背後に立っていた。マントの下から引き締まった手足を覗かせる、長身瘦軀の男。そして、どこか威圧的な——というより、自我の鎧を纏った騎士。初対面の者が見れば、十人中九人が、そのような印象を受ける。

「バルゼリッド卿!？ 何故、あなたがここに？ 会食の予定は、明日のほずですが——」

「ああ、忘れたわけではないよ。アルテリーゼ殿」

驚くアルテリーゼに、そう呼ばれた男は笑みを返す。

「これでもオレは、期日にはうるさい男なのでね。——だがそう、あえて欠点を言うならば、少しばかりせつかちなのだ。オレの未来の妻となる少女を、一足先に見ておきたくてね」

に、と唇の端を歪め、その顔をクルルシファアに向ける。顔から足先まで、舐めるように視線を這わせると、男は満足そうに頷いた。

「ほお。評判通りの美しさだな。これでもオレは、王都の社交パー

ティーに何度も顔を出したのだが——、これほどの華は見たことがない。少々肉付きが控えめだが、成長が楽しみだよ」

「お褒めに与り、光栄でございます」

そう返答したのは、アルテリーゼだ。

「アルテリーゼ。その人は？」

クルルシファーが素っ気ない表情で、そう口に出すと、

「そうか。どうやらまだ話は通っていないかったようだな。では、名

乗らせてもらおう。オレの名はバルゼリッド・クロイツァーという」

「……!？」

男の言葉を聞いた瞬間、ルクスとリーシャに——いや、周囲の客を含めた酒場の中そのものに、緊張が走る。

（クロイツァー家って、確か——）

ルクスは少し考えてから、思い出す。

確か貴族としても名高い四大貴族の一つで、同時に旧帝国のタカ派としても有名だった家だ。家柄や権力、財産においては、新王国の中でも群を抜いている。だがその一族の思考は、旧帝国の思想をそのまま受け継いだようなものであり、ルクスは昔から、あまりいい噂を聞いたことがない。

「四大貴族の嫡男……？ まさかアルテリーゼ、あなたは——」

「ええ。誠に勝手ながら、明日に予定していた会食にてバルゼリッド卿にお譲様を紹介し、その場で婚約を交わしていただくよう、私が話を進めておきました。ですが——」

「どうして相手の私が、その話を耳に入れていないのかしらね？」

呆れたような口調で、クルルシファーが問いかけると、

「このくらいしないと、お譲様はまた理由をつけて逃げてしまいますから」

二人の仲は悪いようだが、お互いの性格はよく知っているようだ。アルテリーゼは何かとうまく理由を付けて婚約を避けるクルルシファーの行動を見抜き、自ら決めた婚約者を連れてくる予定だったらしい。

「そう？ でも残念だったわね。この通り今の私には、おつき合い

している男性がいるわ。そうよね？ ルクス君」

「えっ……？ あ、はい。一応——」

クルルシフアーに話を振られて、ルクスは慌てる。

「ルクス……？ ああ、なるほど。その容姿は——、お前があの旧帝国の皇族の生き残りか。アルテリーゼ殿。確かに彼は元皇族だ。そういう意味では各地に顔が利くかもしれないが、今は無様な没落王子。それに、オレの方が機竜ドラッグナイト使いとしての腕は上だ。この男のために今回の婚約を延期する必要はないと、オレは判断するが？」

「……………」

侮蔑を込めた、笑みと口調。だが、ジークが先程の盗賊から得た情報で『四大貴族』が出てきた。もし、それが本当ならば——

「バルゼリッド卿。先程——」

「ご主人様ア！ お水を持って参りましたア!!」

ルクスの言葉を遮るように、テーブルに思いつきり水が入ったコップを叩き付けられた。視線を上げると、そこには執事服を着たジークがバルゼリッドとルクスの間に立っていた。

「ジーク!？」

「……………貴様、何者だ？」

ジークのいきなりの奇行に、驚くジークと不満な表情になるバルゼリッド。だが、ジークは平然としている。

「ジークIIザン・フローリア・エリック・ルーカスと申します。今はルクス・アーカディア様の執事をやっております」

恭しく、ジークはバルゼリッドに向かってお辞儀した。しかし、何か演技がかかっているように滑稽に見える。

「その名前……ああ、王都のトーナメントで全敗中の『道化師』か。最近、見なくなったから忘れていたよ」

バルゼリッドは侮蔑を含んだ笑みを浮かべる。

『道化師』に『無敗の最弱』……残念だがどちらもオレとでは格が違う。そもそも赤の他人を笑わせるために負けるなど三流以下だな」

「……………」

「ツ——！ 貴様、言わせておけば」

俯いてバルゼリツドの言葉を聞くジークの姿を見て、怒りの形相で反応した少女がいた。それは、隣のテーブルに座っていたリーシャからだ。

「ジークは貴公とは違って私利私欲のためにその力を振るわない。目の前にいる男の価値すら見抜けないとはな。口を慎めバルゼリツド卿」

そう言い、リーシャは二人を睨み付ける。それに気圧けおされたわけではないようだが、バルゼリツドも視線を返した。

「そなたは、確か——」

「新王国第一王女。リーズシャルテ・アティスマータだ。ジークはわたしの助手だしパートナーとなる予定の男だ。侮辱するならば受けて立つぞ」

リーシャの啖呵に、バルゼリツドは数秒沈黙した後、

「……くつくつく。ははははー！」

いきなり声を上げて、哄笑した。

「何がおかしい?」

「これはこれは……噂通りに女性に優しいのだな、ジーク殿。しかし——これからの時代は、戦いだ。現れる幻神獣アピスを打ち滅ぼし、他国との遺跡争ルインいに勝利する力が、何より求められている。ジーク殿のような優しい戦い方では不安だろう」

「……………」

バルゼリツドに罵られても、ジークは俯いたままだ。自分に言い返せないと思つたバルゼリツドは、気を良くしたのか口角を上げる。

「どうした、言い返せないのか?」

「……………」

「ふはははー。そうだろうなあ。貴公ではオレには勝てない。それをわかっているからだろう? 王女殿下によく躰みされてるじゃないか」

嘲笑いするバルゼリツドに、ついに限界を迎えたリーシャが立ち上がりかけたその時——

「——ん？ あ、ごめん聞いてなかった」

『……は？』

何気ない、本当に何気ないジークの言葉に全員が間拔けた言葉を漏らした。先程、怒りに立ち上がるうとしていたリーシャまでもがだ。「ああいや。さつきまで使ってたトランプのジョーカーが一枚足りなくてさー」

どうやら、俯いていた理由は手元のトランプを見ていたかららしい。ジークは「まあいいや」と言つてトランプを服の中にしまった。

「すいませんねー。えーと、確か……バルーン卿？」

「バルゼリッドだッ！ バルゼリッドッ！ 貴様、舐めてるのか!？」

「いえいえ、そんなコトはないっすよ、えーと、バ……何とか卿」

「貴様、そんなに覚えたくないのか？ 私の名前……」

バルゼリッドは怒りと屈辱に身を焼き焦がしながらも、何とか貴族のプライドで耐えた。しかし、ジークの攻め手は潰えてない。

「まあまあ、『王国の覇者（笑）』さん。落ち着いてくださいよ〜」
ポン、とバルゼリッドの肩にジークは手を置いた。

「てか、さつきから王都のトーナメントの自慢してるけどさ、ルクスに勝ててないんでしょ？ それで自慢かよ。ふっくくく」

ジークは笑うのを耐えていたが、バルゼリッドにはまる聞こえだ。

「くっ！ 離せー！」

屈辱に耐え切れなくなったバルゼリッドが、自身の肩に置かれていたジークの手を払った。

「それに、無理やり婚約を迫るとはね。やれやれ、口説きの仕方を教えてやるよ」

そう言い、ジークはアルテリーゼの前までやってくると、

ドンッ！

「ひゃっ!？」

ジークはアルテリーゼの顔のすぐ真横に、右手の掌を叩きつけた。思いのよらぬジークの行動に、クルルシファーも聞いたことがない可愛らしい悲鳴を、アルテリーゼは漏らした。

「メイクレアさん。綺麗な髪ですね」

「ふえっ!?!」

そつと、ジークは空いている左手でアルテリーゼの髪を撫でた。優しいジークの手付きに、アルテリーゼは頬を赤く染める。

「それに、黒い瞳も綺麗ですよ」

「う、あ……」

左手はアルテリーゼの頬を撫でる。こういうのを一回も触れたことがないアルテリーゼは、あたふたと慌てる。ふっ、と爽やかにジークは笑う。そして、アルテリーゼの耳元に顔を近づけると――

「初^{うぶ}な反応も可愛いよ。アルテリーゼ」

「――!!!」

耳元で囁かれたジークの言葉に、アルテリーゼは顔をトマトのように真っ赤に染めた。

ルクスは前に、ジークから口説きのコツを教えて貰ったことがあった。

曰く、『女性に綺麗とか可愛いとか言つとけばそれだけで女性は喜ぶから。うん、所謂褒め殺し』

曰く、『姓と名の使いどころで相手の心を驚掴みさ!』

執事服同士の異常な光景な筈なのに、どこか艶やかな気がする。そして、ついに左手をそつとアルテリーゼの顎にそえた。

「アルテリーゼ。俺とレッツパーリーナイトしないk――マインドクラッシュユー!」

だが、急にジークは顔面を壁に打ち付けた。誰もが、ジークのいきなりの奇行に目を奪われていると、ジークは壁から頭を持ち上げた。

「――済まない。俺^{ジーク}が失礼をした」

そう謝罪をしたのは、ジークよりもいくらかクールな印象のフロリアだ。

「ふう。ジークから意識の主導権を奪うために気絶させなければならぬとは……」

ため息を吐きながら、フロリアは首を回す。ゴキッ!ゴキッ!と首の骨が鳴る音がする。

「それで……卿がバルゼリッド・クロイツァーか」
「そう言い、フローリアは振り返る。」

「卿はどうやらクルルシファー嬢と婚約をしたいようだな」

「……ああ、そうだが」

急に目の前の男が変わったことにバルゼリッドは戸惑ったが、なんと言葉を出すことが出来た。

「だが、相互意見の違いにより話しに決着はつかない。だが、ここに
てつとり早く終わらせる方法が一つだけある」

「それは……なんだ」

「これだよ」

フローリアは自身が身に付けている白い手袋を外すと、それをバル
ゼリッドに向かって投げつけた。

「おい、^{デュエル}決闘しろよ」

』

フローリアの一言で、店内に緊張が走る。

「……貴様、わかっているのか」

「わかっているも何も、これが一番の解決方法だと卿も理解してい
るはずだ」

それに、と言ってフローリアは続ける。

「仲間が侮辱されて、俺が黙っているとでも?」

フローリアの瞳には、冷たい炎が宿っていた。

「くくく、いいぞ。そうでなければ面白くない」

「お、お待ちよバルゼリッド郷。貴方のお手を煩わせるわけには
……」

アルテリーゼは納得がいかないのか、そう口を挟みかけたとき、

「この際、あなたも決闘に参加してみたらどうかしら?」

クルルシファーが静かに、そう提案してきた。

「……どういう意味ですか?」

「当事者の私と、今回の件を持ちかけた責任者のあなたが高みの見
物というのは、気分が悪いわ。どうせならお互い二対二のペアで、ま
とめて決闘をするというのはどう?」

「な、何を言っているのですかあなたは!? 冗談もいい加減にしてください! こんな話、バルゼリツド卿がお受けになるとでも——」
「私はただ、賞品のように結果を待っているなんて、性に合わないのよ」

クルルシファアがさらつと、そう告げると、

「くくく、オレは構わんよ」

バルゼリツドが不敵な笑みと共に、それを快諾する。

「結構ではないか、アルテリーゼ殿。遺恨なき戦いこそが決闘の主旨というものだ。それに、オレは平和主義だが、たまには全力を出したくもあるのだ。王都の公式模擬戦^{トーナメント}では怪我人を出さぬよう、つい手加減をしてしまうからな」

帯剣している機攻殻剣^{ソード・デブイース}の柄に手を伸ばし、ガチャリと揺する。

「決闘場所はこちらが決めてよろしいか?」

「好きにしろ」

「ふっ……明日の会食は残念だがキャンセルだ。では、三日後の夜。決闘の場所を用意しておこう。オレは仕事の都合で、しばらくは城塞都市^{クロスフイールド}に滞在している。くれぐれも、逃げたりしれくれるなよ?」

「さっさと失せろ、二流機竜^{ドラッグナイト}使い」

そうやり取りすると、バルゼリツドは豪華な外套^{マント}をなびかせ、酒場を出て行った。

「……………」

やがて弛緩した空気が流れ、店内に賑わいが戻り始める。

「ふう……………」

と、緊張の解けたルクスが、ため息をつくと、

「ジークさん、貴方は何をなされているのか、おわかりなのですか?」

諫めるような口調で、アルテリーゼが眉を上げる。

「俺は別にただ主が侮辱されたから執事の仕事をやったままだ。それに、ジークに口説きされた時は、そちらも満更じゃなかったようすだが?」

「うっ……………」

フローリアに指摘されたアルテリーゼは、頬を染め睨む。

「あのバカに言っとくよ」

フローリアは軽く肩を竦める。

「それでは、門限が近いためこれで失礼します」

「畏まったお辞儀をすると、フローリアは視線でルクス達に帰ることを促した。そして、酒場を後にした。」

Part 9 鍵の少女と秘眼の竜(1)

「——さつきはすまないことをした。熱くなるとすぐ周りが見えなくなるのが、俺の欠点なんだ」

五人で並び、学園への帰路を歩んでいると、フローリアが——まだ、ジークは気絶している——そう呟く。フローリアの横顔には反省の色が浮かんでいた。らしくない雰囲気、ルクスは慌ててかぶりを振った。

「ううん……。でもそれより、よかったの？ あそこで盗賊の事を聞かなくて」

夕刻に襲われた、盗賊の事件。ジークの活躍により裏で四大貴族が糸を引いていたことを聞きだすことに成功した。その後、酒場に現れたバルゼリッド・クロイツァーにルクスが問い詰めようとしたのだが、ジークがそれを邪魔したのだった。

「大丈夫だ。きつとジークならこう言ってる。『相手が不利になるカードはここぞつという時じゃあないとね』」

確かにジークなら言いそうだ。賭け事ならここにいる全員よりジークの方が得意だし、何より慣れてる。

「そう言えば、思いつきり頭をぶつけたけど、貴方は大丈夫なの？」
クルルシファーが心配そうにフローリアに尋ねる。人を気絶させるほどの頭突きだったのだ、意識の主導権を奪うためとはいえかなりの無茶がある。

「それも平気。ジークは俺に気絶させられるのは織り込み済みだった筈さ」

「え……。？ つまりマゾ——」
「違うぞ」

クルルシファーが言いかけた言葉をフローリアはきっぱりと否定した。

「あいつはわざとアルテリーゼさんを口説き、俺に止めさせた」

「ん？ なんでわざと」

「俺の性格があの場合を納めるのに適していると思ったからかな。それに、決闘を仕掛けたのにも理由はある」

「……そういうことね。流石はジーク君だけど、少しリスクがあるんじゃない？」

頭が賢いクルルシファーは、話しの内容だけで理解したらしい。しかし、まだわかっていない三人は首を傾げた。

「あそこでバルゼリッド・クロイツァーに問い詰めても真実は揉みくちやにされてしまう。ならば、決闘で戦ってその場を抑えればいってことでしょ？」

「ああ、彼の一族の思考は、旧帝国の思想をそのまま受け継いだようなもの。必ずこちらに干渉してくるはず」

当然、そこにはリスクもある。決闘に負ければ元のこうもないし、バルゼリッドがこちらに干渉してこない可能性だつてある。

「けどまあギャンブルつてのは、ハイリスクハイリターンが付き物。ロウリスクハイリターンはありえない」

「勝てるのか？」

リーシャが心配そうに聞いてくる。確かに相手は、神装機竜の使い手であり、王都の公式模擬戦^{トーナメント}で三位の機竜使い^{ドラグナイト}。北の大国ユミルでも指折りの、特級階層^{エクスクラス}の機竜使い^{ドラグナイト}。

数日前の臨時教官ほど楽には勝てない。神装機竜《ファフニール》を持つクルルシファーとペアだとしても、それは変わりようがない事実だ。

「俺はあんな二流とは違う。それに、ジークが強いのは君も良く知っている筈だ、リーシャ姫」

「それは……ああ、そうだったな」

唯一人、この中でジークと戦ったことがあるのはリーシャだけ。そして、ジークの実力を知っているのもリーシャだけだ。

「よし、この話は一旦止めにしよう。早く帰らないと、門限が過ぎそうだ」

「えええっ!？」

フローリアが放ったその言葉に、互いに顔を見合わせ、思わず声を

上げる。慌てて走ったおかげで、門限ギリギリで学園内に入ることができた。

？

城塞都市一番街区。富裕層の住居区に存在する、白亜の豪邸。室内に拵えた窓から、金髪に長身が特徴の男、バルゼリツド・クロイツァーが外を眺めていた。先程までローブ姿の存在と話合っていたのだ。

「ふん。いつまでもオレを飼い慣らせると思うなよ。まあいい、どんな手を使ってでもというなら、手段はいくらでもあるさ」

そう言つて、窓から背を向けた時、バルゼリツドが着ている豪華の服の襟からすつと一枚のカードが床に落ちた。

「ん？ なんだこれは……」

手に取つて確かめると、それはピエロの絵柄が描かれた——道化師のランプだ。

「何故、ランプのジョーカーが……」

何時の間に襟の中に入れられたのかバルゼリツドは思案する。そして、思い当たる節があった。

『ああいや。さつきまで使つてたランプのジョーカーが一枚足りなくてさ』

酒場でジークの欠けていたランプを探す仕草。あれは演技だったのだ。そして、服に仕込んだジョーカー。

「そうか——貴様は気づいているのか」

ぐしゃ！と手に持ったランプを握り潰した。

「いいだろう。決闘を楽しみにしているぞ」

そう言つてバルゼリツドは、手元の機攻殻剣ソード・デバイスを握り締め、舌舐めずりました。

？

バルゼリツドに決闘を挑んで二日が過ぎた。『騎士団』のメンバー

はこの日、任務のために、演習場の控え室へと集まっていた。『騎士団』のメンバーではないジークとルクスも今回の遺跡調査は特別参加で同行する。

目標は、遺跡付近を徘徊している大型の幻神獣、ゴーレム二体の討伐と、第六遺跡『箱庭』の内部の調査だ。出撃するメンバーは、ジークを入れて十五名ほど。ゴーレムを倒した後は、余力があるメンバーで、遺跡へと入る手筈になっている。

いや、予定とは違った。

「では、本日の作戦決行の、予定変更についていくつかあげる」
教官のライグレイが、微かに苦い顔を見せて言う。それは、予想外かつ面倒な出来事を示していた。

「まず——今回の作戦に、留学生のクルルシファーも、特別に参加してもらったことになった。作戦への参加は、本人の強い意志によるものだ。特別扱いせず、同じメンバーとして任務に挑んでくれ」

「え……?」

「どうして、クルルシファーさんが——?」

と、『騎士団』のメンバーたちから、思わず驚きの声漏れる。

前にルクスから聞いた話では、留学生の生徒は基準があり、危険な任務には関わらないと故郷の国から言われていた。

「よろしく。みんな」

当事者であるクルルシファーは、同行の理由を説明せず、簡単に挨拶を済ませる。予想だにしていなかった、遺跡調査への志願。それだけでも、十分な驚きに値するのだが——。

「そしてこの方は——」

「ああ、紹介はオレ自らしよう。教官殿の手を煩わせることもあるまい」

傲岸な口調と、芝居がかった仰々しい所作。そしてこの他者を威圧するような目つきに、ジークは見覚えあった。

「どうして、彼がここに——」

困惑を隠しきれないルクスの呟きが、隣にいたジークの耳にも聞こえた。

「オレの名はバルゼリッド・クロイツァー。ベルヘイク地方の領主補佐を務めている。二年前に、機竜ドラグナイト使いの士官学校を首席で卒業した身だ。この度の幻神獣討伐及び遺跡調査ルインの任に関し、手助けになればと思い、協力を申し出た」

ざわり、と。全体に動揺が走る中、唯一人だけ。ジークが不敵に笑った。

？

作戦会議が終わると、ルクスたちは装衣へと着替え、演習場に出る。後は各々が機竜を纏い、目標地点に向けて、移動を始めるだけだが――

「あの、クルルシファアさん。どうしてこの任務に――？」

出発前に、ルクスはクルルシファアに歩み寄り、尋ねる。クルルシファアは周囲の人目を気にしつつ、小声で返す。

「詳しくは後で話すわ。ただ今は私にとって、目的を果たす数少ないチャンスだから」

遺跡ルインへの調査が目的とは、一体どういうことだろうか？

「そう言えば、なんであの人があるんだらう」

あの人とは、バルゼリッド・クロイツァーである。遺跡調査ルインは秘密裏に行われる重要な作戦。情報は学園内部の一部しか知らず、外部には漏れない筈だが――

「そのことなら思い当たる節があるわ」

そう言い、クルルシファアは視線をジークにやる。最初から聞いていたのか、ジークは肩を竦めた。

「ちよつとお。まるで俺が主犯格みたいなのはやめてもらえますかね。まあ、半分は俺ですけどさー」

「結局は半分貴方なのね」

クルルシファアのジト目に、ジークは悪戯っぽく笑う。

「三年生の方に、今回の作戦の情報を流して。外部に漏れるように差し向けただけだよ」

「ええええ!? 何やってんだよ!」

ジークから出た言葉に、思わずルクスは声を荒げてしまった。

「もちろん目的があつてやったことだよ。密偵^{スパイ}をあぶり出すためにやった」

「密偵^{スパイ}つて、本当にこの学園にいるのかしら?」

クルルシファーは首を傾げた。

「ああ、俺の予想だけど必ずいるよ。何故なら、やつがここにいらら」

そう言つて、ジークはクルルシファーに視線を向けた。ヤツとはもちろんバルゼリツドのことだ。

「別にあの人は関係ないわ。私はこの調査に参加する件を学園長に通しただけだから」

「つれない言葉だな、我が未来の妻よ」

会話を聞きつけてきたのか、バルゼリツドがジークの背後から現れる。そして貼り付けたような笑みを、クルルシファーへ向けた。

「その、未来の何とかというのも、やめてもらえるかしら? あなたと私は、ただの他人に過ぎないわ」

素っ気ない口調で、クルルシファーが答える。

「これは失礼した。まあだが、明日の夜に行われる決闘の結果など、既に決まり切つていると思つたのでね」

バルゼリツドが余裕の表情で、そう返す。

「ふっ、ふふ……」

しかし、ジークは何かおかしかつたのか肩を震わせて笑う。それに、バルゼリツドは怪訝な表情になる。

「なにか、おかしい部分があつたかな?」

「いやいや悪い、バ……なんとか卿。負けたときの言い訳でも考えてるものかと思つて」

ジークが挑発的な笑みを浮かべると、バルゼリツドは青筋を立てた。

「面白い。明日を待たずに決着を付けてもいいんだ——」

「おつともうこんな時間だ。そろそろ出発しないと部隊長に怒られ

ちやう。つてことでなんとか卿、頑張ってください」

バルゼリツドが話し終えるより先に、ジークが話を止めさせルクスとクルルシファーを連れて離れて行く。そして、機竜を纏うとさっさと飛んで行ってしまった。

演習場には、怒りに拳を震わせるバルゼリツドだけが残った。

？

機竜を纏い、出発してから十数分後。城塞都市から二十キロほど離れた新王国領の遺跡に、メンバーの全員が辿り着いた。荒野の地面から生えている、巨大な白亜の立方体。

第六遺跡——『箱庭』と呼ばれるその建物は、無機質な威容を備えていた。

『目標が確認できたぞ。皆、戦闘態勢に入れ！』

部隊長を務めているリーシャが、竜声を介して警戒を促す。ルクスもブレードを構えつつ、その遺跡を見下ろした。

「これが、『箱庭』……」

ルクスが物珍しそうに呟いていると、

「珍しそうだね。元帝国王子の君でも、これを見るのは初めてかな？」

《ワイバーン》を纏い、ルクスの隣を飛んでいたシャリスが、そう話しかけてくる。

「雑用で周辺の警備をしたことはありませんけど——、こうして間近で見たのは初めてです」

「そうか。この場では、一緒に来ている三年生しか調査の経験はない。事前の作戦会議で聞いているだろうが、何かあったら遠慮なく聞いてくれ。ジーク君も——」

「……………」

「——？ ジーク……………」

シャリスが背後に居るジークにも声をかけようとして、振り返ってジークの顔を見ると、どこかジークの様子がおかしかった。無機質な

威容の遺跡に驚いているような感じではない。どこか——怯えた表情で見ている。

ルクスとシャリスの心配そうな視線に気づいたのか、ジークはいつもの普通の表情に戻って応える。

「どうしたんですか？ シャリス先輩、ルクス」

「いいや特別なことではないのだが、君がどこか怯えた表情になっていたから……」

「大丈夫、ジーク？」

ジークの急な表情の変化に、ルクスとシャリスが戸惑いながらも心配の言葉をかける。ジークが、何か話そうと口を開きかけたその時——五百m^{メートル}先に何かが見えた。

『おい。みんな気をつけろ！ 前方に幻神獣を確認した！』

リーシャが全体に警戒を促す。見れば、城の数倍はある『箱庭』の陰から、巨大な塊が出現していた。

一体目は『箱庭』の目の前、二体目は少し離れたところに。

「あれは——！」

部隊の目に映ったのは、半身を岩の鱗に覆われた、金属の巨兵。ゴーレムと呼ばれる大型の幻神獣だ。歩みは鈍重、攻撃は単調という弱点だが、硬質の金属でできた堅牢な身体を持ち、その重量から繰り出される一撃は防御不可能、致命傷を免れない威力を誇る。

ただ、逃走は容易い。しかも、このゴーレムと呼ばれる幻神獣は活発な類ではないので、不用意に近づかなければ、襲われる危険も少ない。まあ、出現してしまつては討伐をしなければいけないのだが。

「なかなか固そうだな」

そうジークは言いつつ、《オッドアイズ・ドラゴン》の特殊武装、《スパイラルフレイルム》と予備武装の《V》を両手に花の状態で構えた。

ゴーレムの核は胸の位置だが、生半可な遠距離射撃では、その外殻を撃ち抜けない。しかし、攻略法はある。空中で《ワイバーン》が攪乱し、地上で《ワイアーム》たちの最大充填した機竜息砲で核が出るまで削り落とす。

これが、事前の作戦だったのだが——。

「時間がかかり過ぎるわね」

「え？」

ぽつりとした眩きにルクスが反応すると、クルルシファーはリーシャに顔を向けた。

「陽動と攻撃は、私に任せてもらえるかしら？ その方が早いわ」

「ちよ、ちよつと待て！ ひとりでやるつもりか!？」

クルルシファーの申し出を、リーシャは慌てて止めようとするが、まるで動じなかった。

「私の《ファフニール》なら可能よ。問題がなければ、行かせてもらうわ」

「それは、確かにそうだが——」

「じゃあ、俺もひとりでもう一体をやるよ」

「なっ!?! ジーク、お前なにを言っている!？」

リーシャは焦った顔でジークを止めようとする。クルルシファーとジークは同じ神装機竜使いだが、決定的な差がある。それは機竜の性能だ。

《オッドアイズ・ドラゴン》は神装機竜だが、性能が汎用機竜と同じ『最弱の神装機竜』。一方、《ファフニール》は高機動型で、相手を凍結させる特殊武装《凍息投射》と自動で守る《竜鱗装盾》。そして、なにより未来予知が出来る《ファフニール》の神装、《財禍の叡智》がある。

操縦者の技量を無視しているが、カタログスペックを見ればその差がいくらあるか一目瞭然である。だが、当のジークは本来ならば複数で相手をするあの幻神獣アピスにひとりで挑もうとするのだ。

しかし、ジークは——

「まあ、一撃で倒せるしなんとかなるでしょ」

『——ッ!?!』

ジークの言葉に、この場にいた全員が驚愕に目を張った。

《オッドアイズ・ドラゴン》にあの強固な鎧を打ち砕く武器がない。

奥の手に神装、《天空の虹彩》があるが、バルゼリッドが見ている前で使うわけがない。

「んじやあ彼ケルシンファー 女もなにか急いでいるようだし、さっさとやりましょうかね」

そうジークが言うと、《オッドアイズ・ドラゴン》を操り奥にいるもう一体のゴーレムに近づいた。

オオオオ……。

《オッドアイズ・ドラゴン》の接近に反応したゴーレムが頭部から異音を発する。ゴーレムの豪腕が届かない距離まで詰めると、《スパイラルフレイム》を構えた。

そして、《バニッシャーV》も構えると——
《バニッシャーV》——ユニオン合体!!」

ジークがそう叫ぶと左手に持っていた《バニッシャーV》が分裂し、右手に持っていた《スパイラルフレイム》に組み合わさる。そして、一つの新たな武器が生まれた。

「——《バニッシャースパイラルフレイム・バニッシャーV》——バニッシャー巨砲になった《バニッシャースパイラルフレイム・バニッシャーV》を、遠目で見ていたルクスは驚いた。

「な、なんだあれは——!?!」

今までの《バニッシャーV》は単機で使用していた。それが、まさか他の武装と一体になるとは予想だにしなかったのだ。

「チャージ充填完了」

ゆっくりとジークは標準を合わす。片手持ちから両手持ちに切り替えると、スラストター推進装置を全力で噴出させた。

《イグニッション点火》——ファイヤー発射ツ!!」

瞬間、巨砲の先端から真紅の熱線が迸った。それは真っ直ぐゴーレムまで行くと、鎧に直撃した。

グ、オオオオオオ……!!

目も口もないゴーレムが、くぐもった唸り声を上げる。だが、それは断末魔に聞こえた。

熱線に耐えれなくなった鋼の鎧は、徐々に溶け、そして貫かれた。胸の核どころか、ゴーレムの身体ごとその全体を撃ち抜いたのだ。

「ふい……危なかった」

ジークはため息と共に冷や汗を拭った。撃った時に生じる作用反作用で後ろに吹き飛ばすことを予想し、あらかじめ推進装置^{スラスター}を最大で回していたのだが。それでも数m^{メートル}は後ろに下がっていたらしい。

「まあ、上手くはいったでしょ」

そう言い、ジークは風通しが良くなったゴーレムだった岩の塊を見る。核を失えば、後は自然に朽ちて行くだけだ。

「さて、向こうはどうなったかな」

クルルシファーと戦闘を行っているもう一体のゴーレムを見るべく振り返ると、ちょうど胸の核を撃ち抜かれ終わったところだった。

緊張から解き放たれたのか、『騎士団^{シヴァレス}』の女生徒が歓喜を上げているのが見える。

『ええい、静かにしろ！ まだ作戦の途中だぞ』

リーシャが窘めるような竜声も聞こえ、ジークは苦笑いした。だが、その隙にクルルシファーが『箱庭^{ガーデン}』の上に降り立とうとする。その時のクルルシファーの表情には、焦りがあった。

（ああ、やはりそうか……）

ジークしかわからない機竜の声。《ファフニール》から感じ取った声に、ジークは確信めいた答えに辿りついた。だが、ふいに――

『みんなっ！ 気をつけて――何か来る！』

陸上にいたティルファーが、警戒の声を上げる。

『レーダーによる敵影を確認。新手の幻神兽^{アピス}です』

《ドレイク》のノクトが続けた瞬間、それが見えた。

「ッ……!? な、何よあれ……ッ!?!」

《ワイバーン》を纏っていた『騎士団^{シヴァレス}』の少女が、小さな悲鳴を漏らす。

「まさか……!」

土煙が晴れたその空に、異形の悪魔が浮いていた。

立ち上がった大熊をゆうに越す巨軀と、赤茶色の皮膚。そして、巨大な漆黒の翼。短剣ほどの牙をぞろりと覗かせ、赤黒い口を凶悪に歪める、化け物だった。

隠れる気配はない。ただ、ゆっくりとこちらに距離を詰めている。

「あれって、確か——」

「ディアボロス……か!」

リーシャが眉をひそめて叫ぶ。

「……でディアボロスかよ」

苦笑いしながらジークは武器を構えた。

「——ギエエアアアアエアアアアアアツ!」

絶叫にも似た唸り声を上げ、幻神獣アビスは双眸を光らせた。団員のほとんどが、反射的に身を竦めたとき、ディアボロスは空を蹴った。

「シャアアアツ!」

大気が弾けるような突風を起こし、《ドレイク》を纏ったノクトの元に、爆発的な速度で飛びかかってきた。

「——ッ!?!」

ルイン遺跡の前にいたリーシャたちも反応するが、追いつけない。

終わった。誰もが思ったその時——

「おお……らっああああ!」

高速で動くディアボロスよりも、更に早くジークがノクトの元に着いた。そのままノクトを抱きかかえ離脱する。ディアボロスが振った拳は大地を砕き土煙を巻いた。

「はあ……はあ……これって危なすぎるだろ」

ジークはディアボロスから距離を取りつつ、荒げた息を整えた。ノクトを救うべく、ディアボロスよりジークは早く動く必要があった。しかし、《オッドアイズ・ドラゴン》にはそんな速度は出せない。そこでジークが取った行動は、武器を後方に向けて撃つことだった。

撃つたときの反作用を利用し、速度を上げる。危険な賭けだったが、上手くいったようだ。地面に着地しノクトを離す。その間にも、向こうでは戦いが続いていた。

『騎士団シヴァレス』は奮闘するが、それでも戦局は厳しいそうだ。

「——しかたない、神装を使うか」

《オッドアイズ・ドラゴン》の機攻殻剣ソード・デバイスを鞘から引き抜きながら、ジークは呟く。バルゼリッドがいる目の前でやりたくはなかったが、致し方ない。——だが、今回は俺一人で神装を完成させる気は無

い。

「ちよつと、君の力も借りるよノクト」

「え……？」

ジークが言った言葉に、ノクトは首を傾げた。その間にジークは、ノクトが持っている《ドレイク》の機攻殻剣を抜き、《オッドアイズ・ドラゴン》と《ドレイク》の機攻殻剣を交差させる。

「神装——《天空の虹彩》発動」

？

ジークがノクトを救出したとき、素早くリーシャ《キメラティック・ワイバーン》のキャノンを、ディアボロスの横腹目がけて撃った。

「グアアアア！」

察知したディアボロスが、素早く中空に逃げる。『騎士団』から距離を取ると睨み合い両方とも硬直状態が生まれる。油断を許さないこの状況で、ふいに背後から、韃走りの音が聞こえた。

「——さて、そろそろオレの出番かな」

余裕を滲ませた声の主は、同行していたバルゼリッドだ。ルクスたちよりやや後方で、《ワイアーム》の装甲を解除し、召喚した新たな機竜を纏う。その身は、真夜中のような群青に染められた、分厚い装甲を持つ機竜使いと化した。

「あれは——」

一同は幻神獣を警戒しつつも、その機竜に視線を向ける。

神装機竜《アジ・ダハーカ》。王都の模擬戦でも、高ランクの相手にしか使わない、バルゼリッドの神装機竜。『王国の覇者』と呼ばれるものの、戦闘形態だ。

「ふ、はははははッ！」

瞬間、バルゼリッドの哄笑が響き、その両肩に連結されているキャノンが動く。トーナメントで見たことがある《アジ・ダハーカ》の特殊武装、《双頭の顎》。二つ砲口が紫の光を帯び、いきなり火を噴いた。ディアボロス目がけ、二筋の閃光が襲いかかる——が、紙一重で敵

は空に逃れ、攻撃を回避した。

「きやつ……!?!」

逆に、砲撃は『騎士団』^{シヴァアレス}のメンバーにかすめていた。だが、バルゼリッドは砲撃を回避されてなお、余裕の笑みを潰えささない。

「どうだ、このオレと勝負をしてみないか？ あの幻神獣を、どちらが先に倒せるのか」

「戯れ言はよせ。バルゼリッド」

バルゼリッドの挑発ともとれる言動に、リーシャが険相を見せて割り込んだ。

「これ以上余計な真似をする気ならば、わたしが先に、ここでお前をぶちのめすぞ」

この男は、周囲にいた『騎士団』^{シヴァアレス}のメンバーも、砲撃に巻き込む距離で発射した。もし、仮に何かあっても、この男はそれこそ『事故』でもみ消すつもりだったはずだ。

「あなたは——」

と、ルクスが怒りに、声を震わせたとき、

「いい加減に、ふざけた真似はやめてもらえるかしら？」

側に戻ってきたクルルシファーが、いつになく真剣な声で割り込んだ。

「くく、つれない態度だな、我が未来の妻よ。だが、そのくらいでいい。それでこそ、従えがいのあるというものだ」

《アジ・ダハーカ》の装甲碗が、《ファフニール》の肩口にそっと置かれる。それを静かに振り払うと、クルルシファーは深呼吸をひとつして、

「あなたより先に私が敵を始末するわ。それなら、問題はないでしょう？」

涼しげな表情でそう言い切り、クルルシファーはディアボロスに向かって、飛翔した。

「今度こそ——仕留めるわ」

接近すると同時に、《凍息投射》^{フリージング・カノン}を構えて、幻神獣を狙う。至近距離での攻防は、神装の未来予知がある以上、クルルシファーに分があ

るはず。——が、

「……ッ!? どうして、《ファフニール》の予知が——?」

交戦の瞬間、クルルシファアの横顔に動揺が走り、動きが止まる。不意に訪れたその隙に見逃さず、ディアボロスは拳を振るう。

「グルアアアアア!」

「くっ——!」

なんとか反応したクルルシファアは、上に逃げて拳をかわす。

「なんで、私の神装が……!?!」

いつものように、表向きは冷静な声を出しながら。しかし、ルクスが見たことがないほど、クルルシファアは狼狽えていた。

「やれやれ、やはりオレの助けが——ッ!」

地上にいたバルゼリツドの《アジ・ダハーカ》が、《双頭の顎》デビルズグロウを構えたとき、急にそれを止めた。バルゼリツドと『騎士団』シヴァレスの背後から、突如新たな威圧感が生まれたからである。目の前に敵がいるのにも関わらず、ルクスたちは背後を振り返った。

そこには、二本の機攻殻剣ソード・デバイスを持ったジークが、巨大な振り子が描いた虹色の軌跡の中心にいた。

「根源に至る幻想の竜、まばゆき光となりて竜の眼に今宿らん! 出でよ! 秘術ふるいし魔天の竜! 《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》!」

光の輪から追加の装備が転送され、《オッドアイズ・ドラゴン》を組み換えて行く。手足は《オッドアイズ・ドラゴン》より無機質に、背中の角は特殊武装《スパイラルフレイルム》と一体と化しリング状になった。そして、ジークの左目はルーン文字が刻まれた黄金の目に変わった。機攻殻剣ソード・デバイスには紫色で「Fusion」の文字がうかぶ

秘眼の竜《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》。その異質の姿に全員が目を奪われた。

「グアアアッ!!」

《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の異質さを感じ取ったの

は幻神獣アビスも同じらしく『騎士団シヴァレス』のメンバーを無視してジークに突貫していく。

「よし。いいぜいよ」

爆発的な速度で迫るディアボロス。しかし、ジークは余裕の表情で構えた。

「グルアアア！」

ディアボロスは拳を振るう。ジークは斜めに体を傾かせ当たるスレスレのラインで避ける。そして、カウンターでジークは拳をディアボロスの腹に当てた。

「無言の腹パン！」

「グルアアア！」

ディアボロスは苦悶の声を上げ、大きく後ろに後退した。ジークとディアボロスとの間に、距離が空いた瞬間、そこに紫の閃光が二者を割り込むように通った。

《アジ・ダハーカ》の《双頭の顎デビルズグロウ》の砲撃だ。

「バルゼリツド、貴様ツ！」

「なに、オレはただ協力をしているだけだぞ？」

リーシャが怒声を上げるが、バルゼリツドはそれを軽く受け流す。

しかし――

『俺は大丈夫だ、リーシャ』

ジークは竜声で落ち着いた口調で応えた。

『戦況はさほど変わってない。勝つのは――俺だ』

《アジ・ダハーカ》の砲撃で巻き上げた土煙の中からディアボロスが出てきた。そして、大きく旋回するようにジークの背後を取る。

（くっ――！ あゝ馬鹿が巻き上げた土煙のせいでジークの視界が遮られている。これじゃ迎撃のしようがない）

リーシャの言った通りに、ジークの視界は土煙で見えない。それは、戦いにおいて致命傷になりうる。

「グウオアア！」

ディアボロスは拳を振るう。

ガツギイイ！

土煙の中で鈍い金属の音がする。誰もがジークがやられたと思っ
たが——、土煙が晴れた次の瞬間、今度は目を見張った。

「残念だったな。《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は——
—特装型だ」

ディアボロスの拳を《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の
装甲碗で受け止めながらジークはそう言った。

視界が塞がれた状態で、どうやって幻神獣アピスの攻撃を防げたのか。そ
れは、特装型に搭載されている探知機能サーチにより敵の居場所を読んだの
だ。

進化の神装《スカイ・アイリス天空の虹彩》は機竜の特性さえ変化させる。

「いくぞー……《シャイニーバースト》！」

《スパイラルフレイム》と背中の角が一体化したリング状の特殊武
装——《シャイニーバースト》。その中心に青い光が集約すると、ディ
アボロスに向かって放った。

「グオアアアア！」

至近距離での砲撃に、ディアボロスは吹き飛ばされる。

「だめだ！ まだ死んでない！」

空中で姿勢を立て直してジークに突撃していくディアボロスを見
て、ルクスは慌てる。いくら威力が強くても一撃で核を破壊しなけれ
ば隙ができる。しかし、《シャイニーバースト》に再び青い光が集約す
る。

「連撃の……シャイニーバースト！」

この特殊武装の能力は、高威力の砲撃を連射できる。その最高連射
は——五発。

「グオレンダア！」

青い光の群れが、ディアボロスに殺到する。

「ゴオアアアアア！」

ディアボロスは絶叫を上げ、四肢を吹き飛ばしながら空へと吹き飛
んだ。

「……ちっ、こいつ」

吹き飛ばされたディアボロスを見て、ジークは舌打ちをした。

「グ、ルアアアアアア……!」

四肢を吹き飛ばされ、血を吐いて悶絶していたディアボロス。いきなりその身体を倍以上に膨らませた。

「……!?! 離れろッ!」

それを見た『騎士団』のメンバーたちが、慌てて声を上げる。

『全員、障壁を最大出力だ!』

幻神獣の中には、自爆を行う個体が数種類いる。ディアボロスもそのうちの一体だ。徐々に幻神獣の全身に赤い亀裂が入り、光を帯びる。

全員が防御の体勢をとったとき、ルクスは隣のクルルシファアの異常に気づいた。

「どうして……動かないの? 私の《ファフニール》が——」

ルクスの隣で、クルルシファアの機体が、ガタガタと震えだしていた。危険が迫っているにもかかわらず、特殊武装《オート・シールド》の盾が、逆に《ファフニール》の周囲から落下していく。使い手の消耗による、制御の混乱——暴走が始まっている。

「クルルシファアさんッ!」

直後、ブンツ!と空気を切るような音が響いた。竜尾鋼線が爆発寸前のディアボロスに巻きついた。そのまま地面に叩き落とされる。下方を見ると、ジークが竜尾鋼線を振っていた。

「衝撃に備えろ!」

《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の腕が振り落とされ、ディアボロスの胸を貫いた。その掌には、幻神獣のコアがあり、そのまま握りつぶした。

瞬間、ルクス達の視界は光りに覆われた。

Part 9 鍵の少女と秘眼の竜(2)

「ん……。うう……」

苦悶の呻き声と共に、リーシャは目覚めた。爆心地からは離れていないはずなのに、耳鳴りがする。

「あ、起きたか」

「うわあぁっ!？」

背後からいきなり声をかけられ、リーシャはびくつと身体を震わせてしまった。振り返ると、リーシャと同じ装衣を身につけたジークが、枝を脇に抱え立っていた。その背後には、すでに建てられていたテントがある。

「いやー意識が無かったからちよつと寝る準備を進めていたんだよ」

「そ、そうか」

枝を地面に置いて、焚き火を準備をするジークを見ながらリーシャは体調を整える。耳鳴りも治ってゆつくりと視線を辺りに巡らす。

ごつごつした大岩。木々の隙間から見える湖。そして、柔らかな明かりで地面を照らす天井。ここはおそらく——第六遺跡『箱庭』の中だろう。

そうリーシャは心の中で頷くと、視線をジークに戻した。だが、黙々と火を起こすそのぼろぼろになっている右手を見てリーシャは立ち上がった。

「おい、その右手!」

「ん? ああ、これか」

ジークはまるで、今気づいたような調子で自分の右手を見た。

「爆風で腕がちよとステークになったぐらいさ。気にしなくて平気」

それを示すようにジークは右手を握ったり、開いたりする。

「痛みはちよつと感じるぐらいかな。まあ、痛覚が狂ってるからだけどね」

へらへら笑うジークが逆に、心配になる。幻神獣^{アピス}の自爆から

『騎士団』^{シヴァアレス}を守るために身をていしたのだろうが、流石に無茶をし過ぎている。

「バカもの！　まずはその傷の手当をしろ！」

「え、いや大した傷じゃないって」

「いいから寄せいせ！」

そう言つて、リーシャは鞆から応急手当の道具を取り出すと、ジークの右手を手当していく。

「身を呈するのはいいが、無茶はやめてくれ。お前はわたしにとって大切なんだ」

「リーシャ……」

「——悪い。流石に今のは恥ずかし過ぎた。忘れてくれ」

頬を染めて顔を背けるリーシャ。それを見て、ジークは手当をしているリーシャの手を握った。

「ありがとう、リーシャ。嬉しいよ」

ここまで自分を大切に思ってくれるのが嬉しくて。それに、リーシャが可愛かった。

「う、ああう。ええい！　これ以上わたしを恥ずかしめるな！」

嫌そうに手を払うも、顔を真っ赤に染めていてとつても可愛らしい。

「そう言えば、みんなは大丈夫か……」

「俺が身をていしてたから大丈夫でしょ。ええと、確か遺跡^{ルイン}に入つたときは、行動が決められていたはず」

しかし、メンバーがバラバラになった今の場合は事前の作戦は意味を成さない。

「今日はもう夜になるし、明日に行動を移そう。皆を集めてから攻略にするか——撤退にするかはリーシャが決めればいい」

「そう、だな……」

巻かれた包帯と、手の調子を確かめながらジークは天上の明かりを見た。『箱庭』^{ガーデン}の中は、太陽がない。にもかかわらず、まるで日が落ちるように天井の明かりは消え、自然と辺りは暗くなる。

「まあ、早めに野宿の準備が出来てるから問題はないか」

?

パンツ！と弾ける炭化した薪に、新たな薪をジークは追加している。綺麗に紅く燃える焚き火を見ながら、携帯食料の干し肉を焼く。

(焼けば少しは美味しくなるかな……アム。うん、変わらない)
残念なほど美味しくない。当たり前か。

「——なあ……どうした？」

「え、何が？」

「眉間に皺が寄っている。お前にしては珍しい」

きよとんとジークが呆けた表情をした後、眉間に手を当て確かめる。

「いつから？」

「箱庭こゝろに来てずっとだ。何かあったのか？」

「あったと言えばある、かなあ」

ジークは曖昧な回答をしつつ、薪を追加する。

「——明日の決闘の事で悩んでいた」

「機竜が壊れたのか？」

「いいや。《オッドアイズ》の方は平気だ。あの爆発で弾けたのは外装だけで本体の方は無事」

「じゃあ、一体……？」

数度、ジークは言うのを躊躇った後、溜息を吐いて言う決心をした。

「勝つか、負けるかで悩んだ」

「なにを……言ってるんだ？」

リーシャは理解できないと、言いたげな表情で返してきた。まあ、概ね予想通りと言える。

「そうだね。簡単に話すと、いつも通りの戦い方で挑もうと思ってる」
「いつも通りの戦い方とは、わざと戦いに負ける『道化師』のスタイルだ。」

「なっ!?! お前は本気で言っているのか……？」

「当然。リーシャ、これは君達を守るためでもあるんだ」
そう言った、ジークの瞳には後悔と迷いがあつた。

「なんで、俺は旧帝国の連中に裏切られたと思う？」

「なんでって……それは、なんでだ？」

リーシャはふと疑問に思った。ジークは旧帝国に裏切られ、仲間を一人失い、生き残った仲間とは離れ離れになってしまった。しかし、裏切られるに至るまでの理由をまだ、リーシャは知らない。

「俺はな、傲慢に力を使ったのさ」

そう、あれは全て俺が招いた。

？

あの頃の俺は、ただ戦うのが好きだった。機竜の声が聞こえる特性のおかげで、性能を最大限まで引き出せる俺にとっては、歳が六つに関わらず大人相手でも負けはしなかった。正しく、無敗。ただ純粹に、勝利を求めた。

だが、本当の勝利と言うモノをはき違えていた。

「面子メンツという問題だったんだろう。年端もいかない餓鬼一人に、旧帝国の精鋭が敗北した。その噂が広まる前に消してしまうのは、必然の行動であつただらう」

逆恨みで仲間を殺された。それは、この時代には良くある事で、仕方方の無い事だ。

「勝勝つて、負負けて、勝勝つて、負負けて——その繰り返しなかで俺はある結果に辿り着いた」

「……………」

リーシャは感づいたしまったが、言えなかった。いや、言いたくなかった。何故なら——

「——自分から、負殺されるける事だ」

誰かに勝つて、負けるぐらいなら、最初から自分が負けて被害を最小に納める。戦う時は、常に半歩後ろに下がって武器を構え、引き金を引く時は僅かに遅れて引いてきた。

「わかったかい？ 勝つてことは、負けるってことの表裏一体なんだよ」

「……違う」

ジークの話を聞いて、リーシャは悔しいが納得するしかなかった。仲間を殺されたことがあるジークだからこそ見えるものがあつて、失いたくない物があるから、そこに行き着くしかなかった。

だが——絶対にリーシャは肯定だけは出来なかった。

「お前は確かに負けることで仲間を守ってきたかもしれないけど、それは違う。現に、ジークはわたしをベルベットに勝つことで守ってくれた。勝ってくれなかったら、わたしはここにはいない」

「あの時は、ああすることでしたかりーシャを助けることができなかったから……」

「臨時教官の時だって、さっきの幻神獣アピピスだってお前は——」

「違う！ 違うんだ、リーシャ！」

ジークはリーシャの言葉を遮る様に、声を上げた。

「あの時は運が良かったかもしれない。けど、次はそうはならないかもしれないんだ！」

ジークは手を顔に当て俯いた。リーシャの見てる角度からはわからないが、ジークはきつと辛そうな表情をしているに違いない。

ジークだつてクルルシファーを守りたい。けど、守れば今度はリーシャ達が危ない目に合うかもしれない、そんなことが頭をよぎるのだ。

「ばかもの……」

そつと、リーシャはジークを抱きしめた。

「なにもお前一人で抱え込む必用はないんだぞ？ ただ、後のことはわたしに任せてくれればいいんだ」

リーシャはそう言いながら、ジークの頭を撫でる。優しく、まるで母親が泣く子供をあやすように。

「わたしだつて弱いわけではないんだ。自分の身は自分で守れるし、むしろ頼ってくれてもいいだぞ？」

だから——

「わたしを信用してくれ。ジークがわたしに言ったように、わたしもお前を必ず守る」

強く、まだ幼い少女はそう宣言した。それはジークに心に、強く響く一言だっただろう。ジークは一言も話さなかったが、強くリーシャを抱き返した。それを、ただ黙ってリーシャは受け入れ続けた。

？

「……………」

「……………」

燃える焚き火の目の前で、ジークとリーシャは一つの毛布に包まれながら座っていた。

(き、気まずい……………)

先程あんなに言ってしまったのもなんだが、お互いとても気恥ずかしい状態になっている。たぶん、顔が仄かに赤いのは焚火のせいだけではないだろう。

「……………あ、あの」

「……………な、なあ」

「……………そつちからどうぞ」

あーもう何でここまで重なるかなっ!?

「んじやあ俺から。——やっぱりの状態でいるのか？」

この状態、と言うのは一つの毛布に二人で包まれていることだ。

「いや、これはジークが言い出したことだろう……………」

「けど一緒に見張りをやろうって言ったのはリーシャだけど」

「それは……………そうだけど」

遡るほど数十分前。ジークが落ち着いてリーシャから手を離れたときの話し。

「ごめん……………かつこ悪いところを見せた」

頬を赤く染めながら、ジークは謝罪をする。

「い、いや平気だ。ジークの役に立てたなら良かったんだが……」
リーシャも頬を赤く染めて恥ずかしそうに微笑んだ。

「ああ、これで迷いなく勝てる」

そう言つて、不敵に笑うジークはいつもの飄々としている雰囲気のものだ。

「さて、明日のこともあるし今日はもう寝よう。見張りは俺がやっているから——」

「見張りならわたしもやるぞ」

「え、でも疲れているだろう？」

「それを言うならジークの方が疲れているだろう」

確かに、幻神獣^{アビス}の爆発をまじかに受けたのだ。痛覚は狂つていても、疲れが無いというわけではない。

「わたしにいい案があるぞ。一つの毛布をわたしとジークで共有すれば同時に見張りが——」

と、言うことがあつた訳ですよ。

「誰も居なくて良かったよ。こんなの見られたら恥ずかし過ぎる」

「わたしもよくあんなの言えたなと思うよ」

お互い恥ずかしいそうに言い合つてるが、内心はとても嬉しかった。それから何刻か経つたころ、リーシャが可愛らしく欠伸をした。

「……ねむい？」

「ううん、平気……いや、ちよつとだけ眠いかな」

前のリーシャなら見栄を張って強く出たが、今はお互いに信頼し合っているため、弱い部分も見せられる。

「よっこいしょ……」

「うえっ!？」

ジークはリーシャを抱きかかえると、自分の両足の間にリーシャを移動させた。

「寝てていいぜ。なんかあつたら起こすから」

「うん……。ありがとう……」

身体をジークに預け、リーシャは重たい瞼を閉じていく。しかし、ジークの心の中にはちよつとした悪戯心が芽生えていた。

そつとジークは手を、リーシャの綺麗な金色の髪を結わいている黒いリボンに伸ばした。

「……ごめん」

「あ……」

しゅるり、とりボンで留められていた金色の髪が解けて背中に垂れる。そこに、ジークは顔を埋めた。髪から香る、心を穏やかにしてくれる優しい匂い。

「髪を括っているリーシャもいいけど。解いてるときの方が、俺は好きだな」

「そう、か……」

リーシャは手を、ジークの頬にそつと添える。そして、静かにリーシャは呟く――

「好き」

瞼を閉じ、眠りについた。

「……俺もさ」

ぎゅつ、とジークはリーシャを抱きしめた。

Part 9 鍵の少女と秘眼の竜 (3)

ゆつくりと、ジークは瞼を開ける。暖かい温もりを、体全身が包み込まれている。

目の前には、綺麗な金色の髪の毛の持ち主のリーシャがまだ可愛らしい寝顔で、ジークに抱き締められながら夢を見ていた。

「……寝てたのか」

おそらく、リーシャが寝た後に自分も眠ってしまったのだろう。焚き火の炎も消えているし、『箱庭』の天井も明かりが灯されている。

(まだ日が昇ったばっかか……起こすのは後少しでいいだろう)

ジークは毛布を脱ぐとそれをリーシャに掛け、横たわらせた。小さな手に黒いリボンを握らせると、ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》の機攻殻剣ソッド・デバイスに手を伸ばし、視線を葉が生い茂る木々の向こう側に移した。

(——何かがいる)

起きた時から葉っぱが揺れる音がした。風が吹いて揺れた可能性もあるが、今は無風だ。幻神獣アヘビースが居るかもしれないので、ゆつくりと木々に近づく。剣を鞘から抜き、いつでも対処できるように構える。木々をかき分けると、そこには二人の男女がいて、二人ともこちらに機攻殻剣ソッド・デバイスを向けていた。

「なんだ、ルクスとクルルシファーか」

「ジーク……無事で良かった」

「あら、貴方だったのね」

銀髪のルクス・アカディアと、水色の髪の毛のクルルシファー・エインフォルクが安堵の表情を浮かべて肩を落とした。ちらつと、ジークが視線を落とすと、クルルシファーの足に包帯が巻かれていた。

「クルルシファー、怪我をしたのか?」

「それを言うなら、ジーク君の方が重傷よ」

「ああ、腕がステータキになった程度だから大丈夫だよ。決闘に支障はないぜ」

そう言つてジークは包帯が巻かれている右腕をふらふらと振つて見せる。

「で、荷物なんか持つてどこに行くんだい？」

「ここで、ジークが本題に切り込む。」

「決まっているでしょ？ 集合場所の祭壇に向かうのよ」

「おーちようど良かった。じゃありーシャを起こしてから——」

「悪いけど、そんな時間はないわ」

ジークがリーシャを起こそうとテントに足を動かしたとき、クルルシファアはそれを止めるように言った。

「え？ 最終的に皆で集まるんだし、別にここでリーシャを起こすのに時間かけてもいいんじゃないわ」

「いいえ、私には『箱庭』^{ガーデン}でやる事があるの。ここで少しでも時間を取られるわけにはいかないわ」

「むう……」

何時もと雰囲気が違うクルルシファアを見て、ジークは首を傾げる。視線をルクスに向けるも、ルクスは首を横に振るだけだった。

(さてはて、どうしたものか……)

困つたような、溜息をジークは吐いた。

？

「ちつ、前来た時より荒くなつてやがんな」

ジークは舌打ちをしながら、^{ソード・デバイス}機攻殻剣で道を遮る木の枝や高く生い茂る雑草を切つて行く。

「ねえ、本当にこの道で合ってるの？」

「ああ、この道が祭壇への一番の近道で合ってる」

そうジークは言いながらも、目の前の木々を切る手を休めない。ジークがルクスとクルルシファアに合流した後、どうするか迷つたが、結局祭壇に付いて行くことにした。寝ているリーシャには悪いが、こつちもこつちで行く理由が出来た。

「それにしても、ジーク君は『箱庭』^{ガーデン}に来たことがあるのね」

「うん、それ僕もびつくりしたよ」

「あく結構前に何度か来たことがあってだな。そんな時にこの道を見つけたんだよ」

祭壇へ向かう時にジークはこの道を言ったのだ。それはつまり、祭壇の位置と今現在のの位置が把握している事だ。それが出来るのは、ここを何度も訪れていなければいけない。

(『結構前』って、旧帝国のことかな……?)

今まで長いことジークと一緒に過ごして来たルクスだったが、ジークの事は今だ謎が多い。何処から来たのか、過去に何があったのか、知らない事が多過ぎる。

「——なあクルルシファー、一つ聞いていいか?」

「……なにかしら?」

唐突に、ジークは目の前の雑草切りを止めて、クルルシファーに質問をした。

「今夜、決闘するわけだけど——君は勝てんの?」

「なにを唐突に言ってる——」

「別に難しいことを言っているわけじゃない。どういった戦術で、^{プラン}どういった武器で君はあの二人に勝つつもりなんだい?」

振り返って言うジークの表情は、何時も見るとは異なる学生の顔ではなく戦士、いや軍師と言った方が適切だろう。

「単刀直入に言うと、今の君じゃ絶対に負ける」

「ツ……!?!? 何を根拠に——」

クルルシファーは目を開きジークに食ってかかろうとした時、ジークは包帯が巻かれている右手でそれを止めた。

「根拠は二つあるが、今は一つだけ——焦りや恐怖が君、いや《ファフニール》から伝わってくる」

「《ファフニール》から……?」

ジークの特性『機竜の声が聞こえる』、は前にルクスとクルルシファーは聞いていた。

「昨日の幻神獣との戦いで、君の《ファフニール》は暴走をしかけた……」

乱入して来た幻神獣アビスに、クルルシファーは近接戦闘を仕掛けようとしたが、何故か《ファフニール》の神装《財禍の叡智ワイズ・ブラッド》が発動しなく、その後も思い通りに動いてくれなかった。

しかし、高い機竜との適性値を持っているクルルシファーが、あそこで暴走するのは不自然すぎる。

「けど、何故暴走したかはわからない焦り。そんな君の感情が《ファフニール》を伝って俺に届いた」

「じゃあ、もう一つの恐怖は……？」

先程の言葉の中には焦りと恐怖が出てきたが、まだ焦りしか説明がなされていない。しかし、ジークはふっと笑うだけだった。

「それは二つ目の根拠と一緒に目当ての場所で、な」

ジークが前方を向くと、そこは不思議な場所だった。

？

「ここが、その——」

ジークたちは、ついに中心地の祭壇へ、辿り着いた。円形の床の周囲に、白い円柱が建ち並び、中央の台に載った銀の玉石は、不思議な光を帯びている。見覚えがあるようで、他の何とも似ていない、奇妙な建造物オブジェ。『箱庭』ガーデンの壁と同じ白亜の金属でできたそれは、まさに祭壇だった。

「どうやら、俺らが最初だったらしいな……」

ジークはそう言うと、ルクスとクルルシファーの後ろに下がった。

「ほら、好きなことをやりなよ」

そう言うジークの表情は、これから何が起るか知っている顔だった。それを振り切る様に、クルルシファーは、宝玉に歩み寄る。

「それじゃ、ここでみんなを待って——」

そうルクスが提案したとき、

『ガ、ガガガ……』

と、奇妙な音が、突然聞こえてきた。

「ツ……!?!」

ルクスとクルルシファアは、とっさに腰の機攻殻剣ソード・デバイスに手をかけるが、ジークは落ち着いた姿勢でじつと宝玉を見ていた。

「落ち着け、これは解除の合図だ」

「解除……?」

ルクスとクルルシファアは、表情を困惑に染めるが、

「ガ、ガガガ……! 《鍵》の存在を認識しました。特殊コードの解除を行います。問題がなければ、転送を始めます」

竜声のような直接脳内に響く声が、唐突に聞こえてくる。

「この音は!? まさか、この祭壇から——!?」

瞬間、床に描かれていた模様が、目映い光を放つ。

「これは——!?!」

反射的に瞼を閉じ——開けると、全ての景色が変わっていた。

「——ここは、遺跡ルインの内部。その第一層、祭壇の真下だ」

青白い金属板に囲まれ、瓦礫が無数に転がる、無機質な回廊。話で聞いていた、祭壇の内部だった。

「ここが、私の……」

クルルシファアは急いでいるように足を動かす。そして、奇妙な箱形のオブジェに手を当てると、パシツと白い光が走った。

「鍵の認証を確認。レベル権限により、第二層管理室への施錠ロックを解除します」

「オブジェが、しゃべった……!?!」

オブジェから発せられる奇妙な声と同時に、ロックが解除された。

「そう……。やっぱり、私は、そうだったのね」

クルルシファアはオブジェから手を離すと、棚に置いてある無数の『ボックス』に近づいた。

遺跡ルイン内には、機竜の部品や古文書を納めた箱——『ボックス』が存在する。だが、固く閉ざされているため、本来なら壊す以外は開ける方法がないはずだが。

『鍵の認証を、確認。レベル権限による開封が可能です』

クルルシファアがボックスの端にそつと手をかざし、空間を撫でるように指を動かす。すると、開かないはずの箱が、小さな音と共に開

いてしまった。その中には、無数の汎用機竜の武装と部品。そして、古代文字で書かれた紙の束があった。

クルルシフアーは古文書をめくりながら目を通していく。

「違う……」

首を横に振ると、その場に古文書を落とすしふらつく足取りで、奥の扉へと歩いていく。先程の解除した扉に近づくと自動的に扉が開いた。その先には、更なる地下へと続く階段があった。

「まだ、わからないわ。もっと……もっと探さないと。——ッ！」

眩きながら、開いた奥の扉に手をかけた瞬間、クルルシフアーの身体がぱたりと倒れた。

「クルルシフアーさんー！」

「う……」

苦痛を振り払うかのようにかぶりを振ると、クルルシフアーは起き上がろうとする。だが、まともに起き上がれない。

「——ッ！ おい」

「ん……？」

『ガガガ……、ピピピピ——！』

ルクスがクルルシフアーに駆け寄っていた瞬間、ジークは天上からパラパラと小石が落ちてくるのを見た。それと同時に、オブジェから音声が発せられる。

『危険です。振動により、内部が崩壊します。安全な部屋へ避難してください』

オブジェから発せられた言葉通り、天井が崩れ始める。

「急げっ！ 崩落に巻き込まれるぞ！」

「……ッ！」

既に身動きが取れないクルルシフアーをかかえて、ルクスは近くの部屋へと滑り込んだ。それに続くように、ジークも中に入る。

揺れが始まって数分。やっと揺れが収まり、再び辺りは、静寂を取り戻す。

「ドアは瓦礫が塞いで開けられなくなっちゃったな」

ジークがドアの向こう側を向きながら、そう呟く。別段、機竜で地

上に出れない訳ではないのだが、まだ他にも脆い部分があるのでこの案は最終手段になりそうだ。

「少し落ち着こう。その身体じゃ、《ファフニール》を使うのは無理だよ。僕が、ちよつと辺りの様子を見てくるから——」

ルクスはうつむいたクルルシファーに、そう告げて立ち上がる。

「……ごめんなさい」

うつむいた少女の、消え入るような声が聞こえてきた。

「ううん。気にしなくていいよ。それより——え？」

ルクスがそう、クルルシファーの身を案じようとしたとき、その細い指先が、そつとルクスの手をつかんでいた。

「もう少しだけ、わがままを言ってもいいかしら。話しを聞いて欲しいの」

「……………」

「私は、この世界の人間ではないわ。遺跡^{ルイン}の——生き残りなのよ」

「生き残り……？」

ぽつりと吐き出された一言に、ルクスは思わず言葉を失った。ただ、ジークだけは平然とした表情のままだった。

？

「なるほど、それで——彼女の『鍵』としての機能は、確認できたのかい？」

同時刻の城塞都市。富裕層の住民区に、二人の人影が向き合い、座っていた。『王国の覇者』と呼ばれるバルゼリッド・クロイツァーと、漆黒のローブを纏った存在だ。

「ああ、わざわざ見物のために同行したが、あの女を幻神獣^{アピス}の爆発から守るため、遺跡^{ルイン}が取り込むのが見えたよ。あんたから、わざわざユミル教国の女を娶れと聞いたときは、何事かと思ったが——これで納得がいった」

そう満足げに、バルゼリッドは眩き、手元のウィンググラスを傾ける。

「あの『鍵』さえあれば、遺跡^{ルイン}の『最強の力』と、『最高の財』を得

ることができる。はは、最高じゃないか。だが——」

愉快そうに笑っていたバルゼリッドだが、急に表情を歪めた。

「彼女を娶る前に、邪魔な存在がいる」

バルゼリッドは忌々しい男、ジークを思い浮かべる。人を小馬鹿にした笑み。そして何より、自分のプライドに傷を付けた。

「そう言えば、妙な決闘をするようだね。勝算はあるのかな？」

「愚問だな、同胞よ」

バルゼリッドは即答すると、その腰に提げられた機攻殻剣ソード・デバイスの柄に、そつと指を這わせた。

「あんたから買った《アジ・ダハーカ》の神装は最強だ。どんなヤツが相手だろうと、負けはしない。それに、ヤツと彼女の神装は確認済みだ。今のオレの相手にはなるまいよ」

「ああ、そういうえば——そのことで一つ話があるんだ。バルゼリッド卿よ」

ローブ姿は、浮ついた声を真剣なものに変え、そう告げる。影で隠された灰色の瞳を極限まで見開き、男は嗤った。

「ジーク・ザン・エリック・フローリア・ルーカスには気をつけろ。

奴は善側あつちの人間じゃねえ、悪側こつちの人間だ。悪を殺せるのは悪のみ——油断すれば、喰い殺されるぞ」

？

「私は、この世界の人間ではないわ。遺跡ルインの——生き残りなのよ」

クルルシファアの言葉に、ルクスは思わず身を固めてしまう。

「遺跡ルインの人間って……、まさか——」

クルルシファアは、身動きが取れなくなった祭壇の個室の中で、淡々と語りだした。

彼女は、ユミル教国の遺跡ルイン——、『第四遺跡・坑道ホール』と呼ばれる場所、先ほどの『ボックス』とは違った箱で、発掘されたらしい。当時、遺跡ルインの調査をしていたエインフォルク家の家長——今の義父

が、クルルシファアを養子として引き取った。しかし、おそらくは何らかの期待をしていたのだろう。遺跡ルインと失われた過去へと繋がる手がかりとして。

「物心ついた頃にわかったのは、自分が養子であるということ。両親も、兄妹きょうだいも、使用人も、全員がどこかよそよそしかったから、自然と気づいたわ。だから、すごく努力した。皆に気に入ってもらえるように、いつか自分を、家族として認めてもらえるように、本当にどんな辛いことも我慢して、努力を続けたわ」

しかし、求めた『もの』はどんどん遠ざかって行くばかりだった。勉強も作法も、機竜ドラグナイト使いとしても、一流の使い手として認められた。だが、努力すればするほど、距離は離れていく。

ある時、ユミル教国でおきた、遺跡ルインの暴走。その事件後に、クルルシファアは疫病神のように扱われ、こうして他国へ送られてきた。

「だから、この遺跡ルインの調査に、あんなにこだわっていたの？」

「ええ……。ずっと確認したかったの。私が本当に遺跡ルインの人間なのかって。もしかしたら、今まで聞いたことは何かの問題で、本当の私は、ただの普通の人間、エインフォルク家の人間じゃないのかって、でも——」

そつと目を伏せて、クルルシファアがため息をつく。

「そ、それは、まだわからないよ！　ここだって全部——」

「そうだな。ドアも瓦礫に埋もれちゃったし、ここに残るか」

「ジ、ジーク!?　何を言って——」

唐突に、ジークはそう言うのと棚に置いてある『ボックス』に近づいた。先程、クルルシファアがやった様にジークが表面を撫でてでも、『ボックス』は開かない。

「まあ、落ち着けよルク——」

「ここだって全部調べたわけじゃないし、もしかしたら、ユミルにある遺跡ルインに、他の手がかりがあるかも——」

「それだったらさあ……。いいじゃねえか。クルルシファアは遺跡ルインに残って」

「……っジーク！　君は……彼女を馬鹿にする気か!?　彼女は、真

剣に悩んでいるんだぞ!」

ルクスはジークを引き寄せると、ジークの胸ぐらを掴む。その手は怒りで震えていた。

「僕は……! クルルシファアさんが苦しむ姿を見たくない! それを放っておくなど出来るものか!!」

「くっくっくっ……」

「……っ!? 何が可笑しい!」

急に、ジークは腹を抱えて笑いだした。

「はっははっ……あはっ! ああ、可笑しいな可笑しくてたまらねえよ。民想いの優しい王子様気取りのお前がなあ……」

ジークはルクスの手を掴むと、それを胸ぐらから外した。そして、逆に今度はジークがルクスの胸ぐらを掴む。

「お前が本当に見たくないのは、民を、クルルシファアを救えねえ無力な自分自身の姿だ」

「……………」

その時、ルクスの頭の中では、昔の記憶がフラッシュバックしていた。

五年以上も前の記憶。雨が降っていて、足を滑らせた馬車が崖から転落したのだ。生存者は二人、しかしルクスの母親は頭から血を流していて今にも息絶えそうだった。

『お願いです! 謝礼は致します。早くお医者様のところへ連れて行かないと、母が——』

崖の上に助けを請う。雨音は強くなく。いくつかの人々が行き交っていた。霧も出ていたが、助けを求める声は確かに届いてはくずだ。だが、ルクスの声に応じる者は誰もいなかった。

『お願いです! 誰か! ——ッ!』

返事の代わりに降ってきたのは、石だった。ルクスの額から血が流れ、銀髪と顔の半分が、赤く染まる。見上げた先に、絶望が立っていた。

『うるせえぞ! クソガキが!』

『そうだ! お前ら皇族と貴族が、俺たちに何をしてきたかわかつ

てるのか!？」

『宮廷を追放されたお前らを助けなくても、俺たちに罪はねえんだよ! そのままくたばっちまえ!』

憎悪に満ち、怨嗟の声を上げる民たちの姿。ルクスがその現実を初めて知った日だった。

「お前は結局自分の姿しか考えてねえ。薄情で無力などうしようもない人間なんだよ」

「……やめ……ろ……っ」

「しかもさあ……そんなクソみてえな自分を直視する勇氣もねえんだろ? ほんつと……お前って弱いな?」

「やめろ!」

「弱くて薄情で……よくそんなんで自分は救いたいだとか言えるよなあ!」

ジークはそう言うと、ぱつとルクスから手を離れた。

「いい加減認めろよ。クソみてえなお前自身を……そして、絶望しろ」

「くっ……!」

数歩、ルクスは後退すると、下を向いた。グギギと悔しそうに歯噛みする音がする。

「さあ、クルルシファー。選択の時間だ——」

視線をルクスから切ると、ジークはクルルシファーに向いた。

「ここに残るか、有りもしない希望を追いかけて外へ出るか」

「……………」

「まあ、答えられる訳がねえよな」

やれやれと、ジークは溜め息を吐く。

「自分は『違う存在』ではないと錯覚してしまいそうになる程の優しくて楽しい毎日、今幸せであるほど浮き彫りになる喪失さと忘却への誘惑。……向こうほど厳しい地獄は他にはないだろう。『違う存在』は己の心の内に其れを作り続けねばならない」

「君が向こうで幸せになる程その錠は緩くなる。挫けて諦めを選ん

だ時の自己嫌悪は己を殺しかねんものになるだろう。幸せも喜びも無いこの遺跡は、ある意味『違う存在』にとっても親切な場所だ。――

――……己が不幸でいる事が、違うと安易に停滞していられるからな。

俺は、残ることをお勧めするぞ」

暗い空間に、ジークの低い声が響く。これが、ジークが言ったクルルシファーが勝てない二つ目の根拠『恐怖』。自分は何者で、一体誰なのか。それを知る恐怖だ。

「……るのよ」

「ん……っ？」

「貴方に、何がわかるのよ……！」

クルルシファーは声を荒げて言う。顔には、一筋の涙が流れていった。

「私だって一生懸命認められるように頑張ってきたの！　なのに、これから本当の私を知るとなると怖いのよ！　何もない貴方には、私の事なんて――」

「甘ったれるな！」

「――」

唐突に放たれた言葉に、ルクスとクルルシファーは凍りついた。先程までは嘲りだったが、今度は本気で怒っているようだった。

「都合が悪くなったら悲劇のヒロインか？　はっ、笑わせる！」

ジークの瞳には、怒りの炎が灯っていた。

「私の事なんてわからないだど？　ああ、わからないね。ただ、言えることは誰にも辛い時が必ず来る。それが、前か今か後かのどれかだろ？」

「――ッ！」

「もういい、好きにしろ」

ジークはそう言うと、その場を離れた。

？

(あくあ、嫌われちゃったかなー)

ルクスとクルルシファーから少し離れた所で、ジークは『騎士団』のメンバーに連絡が取れないか試行錯誤していた。

(正義には悪役が必要だから……。後はルクスがなんとかしてくれるっしょ)

自分には誰かを慰めるとか向いてないし、とジークは心の中で呟いていると。

『こちらノクト。誰か応答してください』

《オッドアイズ》のヴァイザーを耳に装着させていると、そこからノクトの《ドレイク》から竜声が聞こえてきた。

「こちらジーク。竜声を受信した」

『……！ どこにいるのですか？』

「大まかにはわからないが、祭壇の真下だ。崩落に巻き来れて地上に脱出できない。申し訳ないがそちらから頼む」

これで下から砲撃をして無理やり脱出しなくて済んだ。

『Yes. ですがどうしたら』

「リーシャの《ティアマト》にドリルが積んであるはずだ」
出撃する前に工房でリーシャが装備させていたはずだ。

『了解しました。少しお待ちを……成程、ご武運を』

「は？ 何を言ってる——」

『ジイイクウウウウ……』

あつ、察し。

「ああ、おはようございます。リー——」

『何がおはようございます、だ！ このバカモン！ 朝起きたらお前が居なくて心配したんだぞ？』

「はい、それはもう存じております」

『そもそもお前を守ると言ったのはわたしなのに、そのお前が——』

「ういっす。本当に申し訳ございません」

そう謝りつつ、ジークは背後を振り返る。すると、暗闇の向こうからルクスとクルルシファーが歩いてきた。

「で、覚悟は決めたのか？」

「ええ、決めたわ」

クルルシファーはじつとジークの目を見ながら言う。

「私は前へ進むわ。そこが、絶望しかなくても」

「……そうか」

一瞬、ジークはクルルシファーが言った言葉に驚いたが、目を伏せて頷いた。

(こいつもそう言う奴だったか……)

嬉しいような、悲しいような。そんな気持ちがジークの心の中に居座っていた。

だが、これで全てが揃い完成した。俺の、『勝利の方程式』が。その時、ジークは酷く歪んだ笑みをしていた。

Part 10 《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラ
ゴン》(1)

七年前の、ルクス、いや、ルクスとジークの記憶と言った方が正しいか。ルクスの母の葬儀に、皇族の人間は誰も来なかった。宮廷を追放された身分のせいか、とても妃のひとりとは思えぬほど粗末なものだった。それでも、ルクスにとってはどうでもよかった。

「……意外とこじんまりしてんだな」

教会の中で、ルクスは虚ろにこれからの事を考えていると唐突に教会の扉が開かれ、一人の青年が入って来た。

「君は……ジーク!」

「よお、久しぶりだなルクス」

黒衣の礼服を纏ったジークは笑顔で挨拶をした。そして、ルクスの所まで行くと隣に座る。ルクスは久しぶりに会う友人に色々話したいところだったが、今はそう言う気分ではなかった。

「なんて言えばわからないけど、残念だったね」

「ううん……ありがとう」

お互いにそう言い合うが、その後はまったくお互い話さなかった。ルクスはじつと教会の十字架を見つめ、ジークは天上のステンドグラスを物珍しそうな目で見ていた。すると、ポツポツと天井を叩く音が聞こえて来る。

「雨、か……」

「うん……」

またお互い話さず先程と同じ所を見ていたが、数刻たってジークが立ち上がる。そして棺の前まで行くと、棺の中の白い薔薇を一つ摘む。

「人を殺めるのはいつだって、必ず——人なのです」

まるで、迷っている羊を導く牧師ミニスターのようにジークは囁く。いや、この場合は悪魔ディアボロスだろう。

「I pray for your souls」

瞼を閉じてそう言うと、ジークはそつと白い薔薇を棺に戻した。

「俺が言うのもなんだが、あまり人を憎むなよ」

そう言うと、ジークは教会の扉に向かう。

「もう帰るの……？」

「ああ、やる事があつてな」

にっこ笑うジークに、ルクスは少し肩の荷が軽くなった気がした。

「頑張れよ」

「うん！」

びつと親指を立て、礼服を靡かせてジークは教会を出て行った。

その後、ルクスは運命を決める人物と出会い、ドラグナイト機竜使いになることを決める。

？

かちやかちやと、ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》の調整を行う。これから始まる決闘に最善の状態までもって行きたいからだ。

ルイン遺跡の調査から戻って来て、ジークはアトリエ工房へ直行した。装備の換装と追加、機竜の整備をするためだ。

(予定通りならば、後少しでアイツがここに来る……)

これさえの中すれば全てが思い通りなのだが。と、思っているとアトリエ工房のドアが乱暴に開かれる。

「来たか……！」

ジークはまだドアを開いた人物を知らない。しかし、まるで知っていたかのようにほくそ笑む。

「大変だジーク！ クルルシファーさんが——」

「決闘に行ったか」

「えっ、あ、そうだけ——」

「よし。予定通りに進んでいる、チェックメイトは既に確定したも当然だ」

ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》と《ドレイク》のソード・デバイス機攻殻剣を鞘に納めると、嬉しそうにルクスの横を通り過ぎる。

「ちよつと待てよジーク！」

ルクスは何も言わず横を通り過ぎようとするジークを、肩を掴んで止めさせた。

「予定通りってどういうことだ！ クルルシフアーさんが一人で決闘に行ったことかつ!?」

「ああ、そうだけど？」

「なにっ!？」

涼しげに言うジークに、ルクスは憤りを覚える。

「まさか、クルルシフアーさんを売るきか？」

「いいや。まあ、とりあえず時間がないから歩きながら話すけど」

？

「あえて言うならば、俺はクルルシフアーを一人で決闘に行くように誘導した」

月の浮かんだ夜空の下に、クルルシフアーは立っていた。決闘の場所として指定された教会跡地は、城塞都市三番街区の外れにある。幻^{アピス}神獣の襲撃を受け、廃墟となっている。クルルシフアーの対面では、バルゼリッドとアルテリーゼが立っていた。

「時間通り来てくれたな。我が未来の妻よ。無事に遺^{ルイン}跡調査の使命を終えて帰還することを、オレは信じていたぞ」

仰々しくバルゼリッドがそう告げると、対峙するクルルシフアーは、微かに眉をひそめた。

「ところで——あの偉そうな執事の男はどうした？ 無事に遺^{ルイン}跡から帰れたとは聞いてたが、疲労で倒れたか？ あるいは——怖じ気づいて逃げ出したのかな？」

「いいえ、彼はここには来ないわ」

絡みつくようなその挑発に、クルルシフアーは動じない。

(わかってる。これは私の覚悟よ)

この先に絶望しなくても、ルクス^人がいる。ならば自分が『違う存

在』でも、

「前に進むわ」

そして静かに、腰に提げた機攻殻剣ソード・デバイスを抜き払う。

「序盤はクルルシファアの優勢、だが」

「く……!?! どうしてまた、《財禍の叡智》ワイズ・ブラッドが——!」

まだ、自分の体力と精神力は、尽きていなかったはず。無論、決闘の前に消耗していたのは事実だが、それでも神装や特殊武装を使うだけの計算はできていた。なのに——、

「それはな。お前が見誤っていたからだ。このオレの実力をな」

「……ッ!?!」

柱のように立ち上った、炎と煙。

「彼女はまだ《アジ・ダハーカ》の能力を把握しきれていない。そこが敗因となるだろう。だが、それこそが狙いでもあり、勝つための不可欠要素だ」

「かはっ……!?! う、あ……」

普段は冷静な顔を苦痛に歪ませて、クルルシファアは身悶えする。

「おっと、済まなかった。いずれはオレの子を孕む大切な腹だ。もう少し優しくしてやらねばなるまいな」

バルゼリッドは言葉とは裏腹に、罪悪感の欠片もない表情で嗤っていた。

「何故、クルルシファアさんを一人で行かせた？　そこまで把握しているならば——」

「ああ、もちろん俺と彼女で戦って勝てる戦術もある。しかし、それは万全とは程遠い。百の戦略も、千の戦略も、勝てなきや意味がない。それに、彼女を一人で行かせたことにも意味がある」

「そんな意味のために、クルルシファアさんの命を危険にさらすの

か」

ルクスは敵意を込めた視線を、ジークに向ける。しかし、当の本人はどこ吹く風と肩を竦めた。

「考えてみるよ、全ての人間が俺の掌で思い通りに動いてんだぜ。それって最高じゃないか？」

ジークは口角を吊り上げ、酷く歪んだ笑みを作る。

「俺も久しぶりに勝ちに行くんだ。このチェスは誰にも邪魔はさせない」

そう言うジークの表情は、『道化師』の顔ではない。初めて見るジークの『勝つ』と決めた顔。狂気を感じさせるジークの表情に、ルクスが唾を飲み込んでいると廊下の向こうからリーシャが走ってきた。

「おい、ジーク！　まずいことになった！」

リーシャが手紙を持ってどこか慌ただしく話します。しかし、ジークの笑みは消えない。

（これも全てジークの掌か？　どこからどこまでが彼の掌で、一体いつから彼に踊らされているんだ？）

ルクスは何とかジークの思惑から外れようと思えるが、いくら考えでも抜けだし方が思い浮かばない。しかも途中までいってもそこから先が無い。

（だめだ……八方塞がりじゃないか）

ルクスが悔しそうに歯噛みしている最中でも、ジークとリーシャは話を進めていた。

「ついさつき、義母上ははうえから届いた書簡に書いてあったんだ。バルゼリッドを倒してはならない理由と、ヤツの狙い。この新王国の危険が」

ジークはリーシャから手紙を受け取ると、手紙の内容に目を通す。

「ふむふむ、なるほど」

ジークは数度頷くと、手紙をリーシャに返した。

「何者だ!？」

言葉の途中で、『アジ・ダハーカ』の装甲碗が、クルルシファアの腹

から引かれる。ほんの一瞬後、その空間を青白い光線が通った。

バルゼリッドが後退し、光線が来た方角を見る。瞬間、その空間が歪み一匹の秘眼竜が現れた。各部位が機械的印象を植え付ける装甲^{フレーム}。

「何者かって？ 決まってるだろ——」

不敵な笑みを表情に出しながら、青白い月を背にし、《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を纏ったジークが、悠然とリング状の特殊武装《シャイニーバースト》を向けていた。

「悪役だよ？」

釣られるように見上げたクルルシファーが、啞然とした表情をす
る。

「——すみませんね。少し腹が痛くなつて便所に行っていたら遅れちゃった」

ジークは静かな微笑を見せ、声をかける。だが——

『なんで……私はもう、あなたを巻き込むつもりなんてなかった！』
竜声を介して、悲痛な叫びをジークに送る。

『これは私の責任よ！ あなたは私を助ける理由なんて——』

『はあ……どいつもこいつもあーだなこーだなど』

しかし、ジークは落胆的なため息を吐く。

『別にお前のために戦いに来てんじゃねえんだよ。あいつは学園の面子を汚した。なら、コンマ一秒でも取り戻すのは当たり前だろ』

ジークは《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》から《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》に切り替え、特殊武装の《スパイラルフレーム》と補助武装《^{ディザスター}D》を構える。

「決闘相手のジークだ。現時刻をもつて、戦いに参戦する」

ジークはそう告げると、クルルシファーの前に立ち、立ちはだかった。

「ハハハハ！ ハツハツツハア！」

同時に、バルゼリッドが哄笑した。心底愉快そうな表情で、ジークを睨み付けた。

「これはこれは、見誤っていたぞ。てつきり逃げるものかと思っていた。たかが、女ひとりを助けるために駆け付けるとは——。予想以上に愚かな男のようだな『道化師』、いや、『裏切り者』」

「……………」

バルゼリツドの指摘に、ジークの顔に険が帯びる。

「——『裏切り者』？」

クルルシファーが聞いたことない言葉に疑問の声を出す。ジークは微動だにしない。ただ静かに、バルゼリツドを見据えている。

「くく、どうした？ 急に『英雄気取り』をしなくなったか？ 無意味な真似はよせ。怪我と疲労を押しして戦ったところで、この女は何もお前には利を——」

嘲笑ちやうしょうを含んだ言葉を、バルゼリツドは言い終える前に止めた。ジークは笑っていた。彼はおかしくてたまらないと言うように、機竜の中で腹をよじっている。

「くくつ、ひひつ、ははははははははつ、は——はっはっはっはっはっはつ、あー……………」

ジークはひーひーと苦しそうに息を吐きながら、目尻の涙を拭う。

「なるほど、誰から聞いたか知らんが、愚かなことよ」

狂笑をした後、ジークは片方の深碧色の目を手で覆った。

「なんだ」

「いきあがるな小僧」

ドスが利いた低い声とジークの冷たく凍った真紅の目がバルゼリツドを黙らせる。

瞬間、この決闘場にいる全ての人間が凍りついた。ジークが纏う霧囲気が急に、殺意を帯びたモノになったからだ。

「貴様程度の三流餓鬼風情が、アーカディア帝国の闇を知るにはまだ早いわ。わかったならば疾く早く死ね」

声と同時に、剣を構えた。そして、一直線に飛びかかろうと、足に力を込めたとき——、

「お待ちください！」

ゴウツ！ つと、突風を巻き起こして、アルテリーゼがジークに飛

びかかる。

「バルゼリッド卿は、彼女と戦い消耗しています。これで二対二の正式な決闘です。まずは、私がお相手致しましょう」

《エクス・ワイアーム》で強化された臂力を最大限に生かし、アルテリーゼは、双剣で《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》に斬りかかる。意表を突かれた、瞬く間の出来事。しかし——

「貴様も三流か？ アルテリーゼ・メイクレア」

その傲慢な声と同時に、既に勝負は決していた。

「二対一なのに何故二人がかりで来ない？ ど阿呆が」

「そんな……」

《エクス・ワイアーム》が両手にしていた双剣が切られ、更に両手の手首も破壊されている。

対奥義《超越制御》ビヨンド・スラッシュ——一撃をして二撃。二撃目の斬撃は『神速制御』クイックドロウさえも超す速さ。それが、今の一瞬で行われたのだ。

「……ッ、だ、だが！」

二つの武装と両手を失い、アルテリーゼはジークから距離を取る。

「まだ、終わっていない！」

往生際悪く抵抗しようとしたとき、

「アルテリーゼ殿」

穏やかな声で、背後からバルゼリッドの《アジ・ダハーカ》が、その肩に手をかけた。

「え……？」

直後、《エクス・ワイアーム》の装甲と幻創機核フォース・コアから、光が消える。エネルギーの消耗か、あるいは、強制のシステムダウンか。

「ここはオレに任せていたきたい。今のあなたでは勝ち目はないでしょうし、何より——彼に手加減をされた時点で、勝負はついている」

「……くッ！」

ジークは《エクス・ワイアーム》の腕を破壊した時に、そのまま幻創機核フォース・コアまで破壊出来た筈だ。なのにそうしないのは、初めから眼中になかったからだ。

「一体、彼は……」

子供とは思えない殺意と強さ。しかし――、

「何が目的で……。戦っている……」

彼は全ての『悪』を凝縮したような存在。傲慢で、慈悲はなく、最強だ。

「それに、なんだ……。この感覚、は……」

疑問を呟きつつ、アルテリーゼは廃墟から離れ、戦線を離脱した。そのまま座り込み、意識を失った。

「さあ、これで一対一だ。一応言っておくが、さっきお前がクルルシファーとの会話は全て録音済みだ」

《ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は特装型、録音機能も備えている。ジークは念のため、バルゼリッドに釘を刺しておいた。

「では、行かせてもらうぞ！ 『道化師』！」

バルゼリッドが大地を蹴り、一直線に飛びかかってきた。陸戦機竜型の《アジ・ダハーカ》は、脚部の車輪を高速回転させ、瞬時に間合いを詰める。そして、手にした大型の戦斧ハルバートで眼前を薙ぎ払った。

「……………」

ジークは身を退き、中空に飛翔すると上から《スパイラルフレイム》で砲撃した。飛翔型の性能を生かした攻撃方法。ジークが放った砲撃が、《アジ・ダハーカ》の装甲を打ち砕こうとしたとき、

「はっ……………」

嘲笑うような声と同時に、砲撃がバルゼリッドの目の前でかき消された。三重の光の壁に阻まれ、砲撃が通らない。合計三回の砲撃を、バルゼリッドが全て受けきった直後、

「――死ね」

《アジ・ダハーカ》は空中に跳躍すると、光を帯びた戦斧ハルバートを振るう。それをジークは身体を捻って回避すると、今度は《D》ディザスターで斬りかかった。

「無駄だ」

しかし、先ほどと同じ三重の壁に阻まれる。攻撃が通らないとジークは確信し、距離を取った。

「他人の神装で俺の攻撃を防ぎきった気分はどうだ、小僧？」

「ほう、気付いたか」

ジークの威圧的な言葉に、バルゼリッドは陰相を浮かべる。

「まさか……！」

と、反射的にクルルシフアーが声を上げた。それにニタリとバルゼリッドは粘ついた笑みをした。

「そうだ、オレの《アジ・ダハーカ》の神装《千の魔術》アヴェエスタは、触れた相手の機竜からエネルギーを奪い、触れた神装機竜からは能力すら奪って使用できる」

戦線を離脱したアルテリーゼの《エクス・ワイアーム》がシステムダウンし、激しい消耗に見舞われていたのも、そのせいだろう。

「なかなかいい読みだったぞ。見破ったことに関しては褒めておこう。だが——わかったところで貴様は所詮、オレには勝てん」

ふいにジークを睨みつけると、特殊武装である左肩のキャノン、《双頭の顎》デビルスグロウを起動させる。その砲口はジークではなく、既に身動きの取れないクルルシフアーに向けられた。

「ほお……」

ジークはそつと目を細める。

「その弱った状態では防ぎきれんだろうが。まあ、その女の手足が多少不自由になるうが、オレはちつとも構わんなのでな」

嘲笑うような声と同時に、砲撃が放たれる。

「——《虹 咆 哮》リアクシヨン・フオース」

瞬時にジークが《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の特殊武装を起動させる。背中に生えている角に埋め込まれている赤と緑の宝玉が激しく輝き、《スパイラルフレーム》の威力を強化した。

紫の閃光と、赤と黒の閃光が正面からぶつかりあう。轟音と爆炎。しかし——もし、この撃ち合いに勝敗をつけるとしたら、負けたのはジークの方だろう。

「かかったな。『道化師』」

「ジーク君……！」

《アジ・ダハーカ》が手にしていた竜尾鋼線が、《オッドアイズ・ペ

ンデュラム・ドラゴン』の右手に巻き付いていた。ジークは大して動揺もせず、《D》ディザスターでワイヤーを断ち切る。

しかし、遅い——。

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の装甲が光の粒子となって消え、元の《オッドアイズ・ドラゴン》になってしまった。

「残念だったな。お前の持つ《オッドアイズ・ドラゴン》の神装は、これでオレが手に入れた」

バルゼリッドは切られたワイヤーテイルを投げ捨て、凶笑を浮かべる。クルルシファーを狙ったのは、ジークに隙を作るためだったのだ。

「……………」

「英雄気取りの道化師め。お前の無意味な戦いを今——終わらせてやる」

そうバルゼリッドが言うとき、《アジ・ダハーカ》の機攻殻剣ソード・デバイスを抜く。

「神装——《天空の虹彩》」

バルゼリッドは奪った《オッドアイズ・ドラゴン》の神装を起動すると、夜空に虹色の輪が出現した。そして、《アジ・ダハーカ》に新しい装甲が転送される。

「そうだな、名付けるならば——《Pアジ・ダハーカ》」

禍々しくなった装甲アーム、失った筈の右肩の特殊武装が修復されており、更に強化された。そう、《アジ・ダハーカ》は《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の力を得たのだ。

「さあ、終わりだ『裏切り者』」

バルゼリッドは勝ち誇った笑みをする。絶望的な状況。しかし——

ジークの笑みは消えなかった。

Part 10 《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラ
ゴン》(2)

《Pアジ・ダハーカ》の装甲脚が、廃墟の荒れた地面を踏みしめる。勝利を確信した足取りで、あえて時間をかけ、ジークに重圧をかけてゆく。

「このまま戦えばお前は死ぬが、それでもいいかね？ 命乞いをして負けを認めるといふのなら、ここで見逃してやっても——！」
バルゼリッドが話している最中に、ジークは《D》から《F》に切り替え《Pアジ・ダハーカ》に向けて牽制攻撃をしかける。しかし、バルゼリッドは動かさず障壁のみでそれを防いだ。

「——《V》合体」
しかし、防御をしたということ、攻撃の手を休めるということ。その瞬間にジークは《V》と《スパイラルフレ임》を接合させた。

「発射ッ！」
充填に時間がかかるはずの武器を、『零装填』で装填時間を無くし、バルゼリッドに向けてジークは撃った。

決めてが限りなく少なくなつたこの状況でも、ジークは焦らず淡々とこなす。その素晴らしい精神力と技術が成せる一撃。誰もが完璧に決まつたと思う——。

相手が虹竜の力を得ていなければ。

「ふっ！ 甘い！」

バルゼリッドは強化された《双頭の顎》、改め《P・双頭の顎》で迎え撃つ。

「《虹 咆 哮》！」

更に強化するバルゼリッド。紫の光線に黒も混ざり、禍々しさが更に増えた。再び紫と赤い閃光がぶつかりあう。だが——今度は結果が違う。

「くっ……！」

火力に競り負け、ジークは廃墟に残っていた柱をぶち折り、瓦礫の山に激突し土煙を巻き上げる。それを追って、バルゼリツドは《P》サイコアジ・ダハーカ》の車輪を加速させた。

「くつくつく！ 素晴らしいぞ、この力は！」

歓喜の叫びを上げ、バルゼリツドが追撃を仕掛ける。だが、土煙を切り裂きバルゼリツドに何かが高速で飛来した。

「ッ……！」

これにバルゼリツドは顔色を変え、防御の構えをとった。

飛んできた何かは、ジークが持っていた《D》デイズスターだった。《D》デイズスターが三重の障壁に衝突すると、「キイイーン！」と甲高い音が響く。そして、次の瞬間に一枚目の障壁が破れた。

「なっ……!?!」

《財禍の障壁》ワイズ・ブラッドで見た数秒先の自身の未来、そこには剣に貫かれるバルゼリツドが映っていた。

慌てて《虹 咆 哮》リアクションフォースで障壁を強化する。その結果、《D》デイズスターは軌道が逸れ明後日の方向へ飛んで行った。それを目で確認していたバルゼリツドの額には脂汗が垂れていた。

(くっ……なんだ、あの威力！)

《オッドアイズ》からは既にエネルギーを吸収していたはずなのに、どこからそんな威力が？ そんなことを思っていると、ジークは瓦礫から立ち上がった。

「ふっ……！ 残念だったな。今のが貴様の切り札だったようだが、切ってしまうえば切り札もたんなる捨て札。もう貴様がオレに勝てる手段は無い！」

《D》デイズスターは失い、《V》パニッシャーと《F》フューラーでは三重の障壁を突破するには火力不足。

「———どうして、逃げないのよ……」

クルルシファーにはその理由がもう、わかっている。もし、ジークが距離をとって時間稼ぎすれば、バルゼリツドは再びクルルシファーを攻撃する。だからこそ、わからない。ジークの目的は学園の面子を取り戻すために戦いに来た、何の関係もない自分のために戦っている

のかが。

『大丈夫ですか？ クルルシファーさん』

そう思ったとき、クルルシファーに、竜声による声が届く。それは、ルクスからだった。

『ルクス君——』

『まだ、気づかれないようにお願いします。クルルシファーさん』
極めて冷静な声で、ルクスが告げる。

『僕にもジークが何したかわからないですけど。策が実行しているところですから、もう少しだけ、待ってください。そして——』
ルクスは息を溜めて、そう告げる。

『意識を失わずに、見守っていてください。彼の勝負を——』

？

武器を失い、ジークは足掻くように戦っていた。強化された《Pア
ジ・ダハーカ》の攻撃に、汎用機竜程度の《オツドアイズ・ドラゴン》
では手も足も出ない。

「はあ……はあ……」

機竜の吸収を受け、ジークの呼吸が荒くなる。額に流れる汗を、
ジークは拭った。

「いい加減、敗北を受け入れてくれないかね」

戦い続けながら、呆れたような口調で、バルゼリッドは口を挟んで
くる。

「せっかくだから、いいことを教えてやる。お前はなんのために
戦っているかわからんが——それはただの徒労だ。いや、逆効果と
言った方がいいな」

「……………」

「このオレは……『王国の覇者』は、この国の未来を救おうとしてい
るのだぞ？ 知っているか、ジーク。現在この国に迫る危機——」

「終焉神獣だろ？ 知っている」

バルゼリッドが答えるより先に、ジークが答えた。

「ならば話しは早い。オレはそやつを娶って、学者たちにいろいろと身体を調べさせて、遺跡から新しい武装と技術を掘り起こさなければならんのだ」

「……ッ!?!」

クルルシファーがそれを聞いて、怯えた表情を見せる。

「貴様ならわかるだろう？ オレの元にやってきた他国の少女一人を犠牲にして、この国、いや他国までもが救われるのだ。それでも、前はまだオレの邪魔をしようというのか？ この国を滅ぼし、その少女を——」

「うるせえ」

欺瞞に満ちた演説を断ち切るように、ジークが言い放つ。そして、再び武器を構えたその時——、

「もういいわ。ジーク君」

「……クルルシファー」

荒い息をつくジークに、クルルシファーがざらりと言った。

「もう十分よ。あなたは戦わないで」

？

「今だから話すけど——私はあなた達を利用していたのよ？ 最初からそれだけのつもりで、あなた達に近づいたの。だからこれ以上は、無理してまで傷つかないで」

血を吐くような想いで、クルルシファーは言葉を紡ぐ。自分のことを見捨てて欲しいと。

「私にとって、あなたはただの道具だったわ。だからあなたにも、そう言っただけなの。私を道具だと。……お願い」

ぽたり、と。クルルシファーの頬を、堪え切れなかった一滴の涙が伝った。

『ジークは操作技術が上手いから、将来は皆を装甲機竜ドラッグライドで笑顔にさせて』

(……笑顔、か)

ふと思い出した、忘れられない記憶、呪いとなった最初で最後の仲間
間の願い。

「確かに、俺もお前を『駒』としてこの決闘に勝つために扱った……」
ジークは視線をクルルシファーから切ると、バルゼリッドに向き直った。

「だから、俺は自分の『駒』を絶対に守り抜く」

そう言うと、ジークは自身の首から提げてあるペンデユラムを握った。

「ほお、勝ち目もないくせに、まだやる気か？　だが、その彼女は

——」
「お前は言ったよな、彼女一人を犠牲にしてこの国を救うと」

「……言ったが、それがどうした？」

バルゼリッドの言葉を遮り、言い放った言葉。それにバルゼリッドは、眉を寄せ怪訝しそうな表情で返した。

ジークは、ニヤリと凶悪な笑みを浮かべる。

「それがお前の『善』と言うならば、俺は今から貴様の『善』を喰らう『悪』となろう——俺は、この国の未来を捨てる」

この選択肢は間違っている、これは弱者の綺麗ごと。それでも——

「ここは、お前の出番だ——ああ、わかった」

ジークがそう言うと、急に声が低くなり髪の色も変わった。黒曜石を思わせる黒色の瞳、髪も赤から黒に変わり全体的に落ち着いた雰囲気
の少年。

「——フローリアⅡザン・ジーク・エリック・ルーカス。ジークに代わって参戦する」

？

フローリア——ジークの多重人格の一つで、基本的にジークが行動不能になったときかジーク自身がフローリアを必要になったときしか呼ばない。そのため、いまだ謎が多い少年。

「——《ファンタム・ナイト幻影騎士団ブレイクソード》」

フローリアが呟くと、突如なにもなかった空間に黒い霧が発生した。

「——ッ！」

バルゼリッドはそれに警戒し、ハルバート戦斧を構える。

「安心しろ。ただ武器を取り出したただけだ」

フローリアが言った通りに、黒い霧から半壊状態の黒い大剣を抜いた。

「さあ、斬り合おうか」

フローリアは《オッドアイズ・ドラゴンオッドアイズ・ドラゴン》を操り、《サイコP・アジ・ダハーカ》に突貫して行く。

「ふっ！」

フローリアは《ファンタム・ナイト幻影騎士団ブレイクソード》を上段から振るう。

(半壊の剣など、舐めているのか?)

バルゼリッドは内心で落胆し、ハルバート戦斧を振るう。そして、

《ファンタム・ナイト幻影騎士団ブレイクソード》はいとも簡単に壊れた。

「どうした? その剣は壊れてしまったぞ?」

バルゼリッドは呆れた声で言う。しかし——

「ああ、壊れてしまったな」

フローリアは口角を上げる。

「……?」

剣を折られたはずなのに笑っている。理解が追いつかないことに、バルゼリッドが困惑していると——

パキッ!

《サイコ・デビルス・グロウP・双頭の顎》の肩方が、まさに今ほど壊れた《ファンタム・ナイト幻影騎士団ブレイ

クソード》と同様に粉碎された。

「なんだとっ!?!」

理解が追いついてこれない現象が連続で起こり、バルゼリッドは困惑する。それを見かねたフローリアは今しがたの特殊武装の説明をする。

「この剣は、壊れると効果を発動する特殊な武器でな。その効果は、

『この武器と相手の武装一つを互いに破壊する』というものだ」

フローリアは初めから、肩の特殊武装を狙って、攻撃を仕掛けていた。そして、狙い通りに《幻影騎士団ブレイクソード》は壊れ、その効果を発動し《Pアジ・ダハーカ》の特殊武装を道連れにした。

「ふんっ！ 確かにオレの特殊武装の破壊は出来たが、それがどうした？ まだオレの勝ち揺るが——」

「残念だが、この特殊武装にはもう一つ能力がある」

フローリアは《オッドアイズ・ドラゴン》と《ドレイク》の機攻殻剣を、バルゼリッドに見せつけるように掲げる。

すると、両方の機攻殻剣に先程と同様に黒い霧が覆う。

「もう一つの効果は、違う神装機竜に書き換える」

フローリアが機攻殻剣を振ると、二対の漆黒の機攻殻剣が出来あがった。それを、フローリアは交叉する。

「——漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う反逆の牙！ 今、降臨せよ！ 《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》！」

闇が現れ、《オッドアイズ・ドラゴン》を包み込む。そして、反逆竜が目を開いた。黄色い相貌でバルゼリッドを睨みその姿を現す。

黒い身体に、《オッドアイズ・ドラゴン》よりすらつとした装甲。機械の羽根のような翼をはためかせこの決闘場に降り立った。

「……………」

フローリアは、バルゼリッドが新たな神装機竜に困惑している間に倒れているクルルシファー目がけて黒い剣を投げつけた。

「ッ——!？」

クルルシファーは来る痛みにも身を硬直させたが、黒い剣は当たる手前に落下し突き刺さった。そして、クルルシファーを囲むように檻が形成される。

「——《幻影霧剣》、外と内側を遮断する特殊武装だ。貴様の攻撃はクルルシファーには届かない」

だが、クルルシファーからもバルゼリッドに攻撃が出来ない。良く

も悪くも、守りと拘束に適した特殊ぶそうだ。

「さてと、『終局』まで一気に行くかね」
チエックメイト

フローリアが呟いたと同時に、機械のような羽根に付いている黒い宝玉が激しく光る。

「ツ——!?!? させるか!」

バルゼリッドは反射的に嫌な予感がし、特殊武装のキャノンで攻撃する。しかし、フローリアは別段焦るわけでもなく、手を上げ指をパチン!と鳴らした。

「《幻影騎士団トウム・シールド》」
ファントム・ナイツ

突如、バルゼリッドとフローリアの間に、フローリアを守るように盾が出現し砲撃を防いだ。そして、バルゼリッドは異変に気づいた。

「なぜだ!?! なぜオレの《財禍の叡智》はオレの敗北しか見せない!?!」
ワイズ・ブラッド

いくら未来視をしても、その先にあるのは自分がフローリアに負ける未来しか見えなかった。

「ふっふっふふ」

それを見ていたフローリアは可笑しそうに笑う。

「まさか、これは貴様の仕業か!?!」

怒りを表情に出し、フローリアに激しく質問をする。しかし、フローリアは横に首を振った。

「いいや、俺ではその神装に干渉は出来ない。ただし、ジークなら話は別だ」

「どういう、ことだ?」

「ジークは《財禍の叡智》で見える未来を、捻じ曲げているのさ」
ワイズ・ブラッド

「ツ——!?!」

あり得るのか? 人が神装機竜の神装を干渉し、それを無効化することが。

「ジークは今、高速最適解で貴様の次の行動を先読みと無力化している。そして、その一度に最適解している数はざっと百を超える。一つの未来しか見れないその神装では、既にジークにチエックメイトさられているのも当然至極」

ジークが『神算鬼謀』の力を最大限に使用し、世界に干渉する力。名付けて、《勝利の方程式》。

「それに、お前は《アジ・ダハーカ》の本当の持ち主じゃない。お前程度の三流機竜ドラッグナイト使いではその機竜は手に余るようだ」

「くう……!」

「終わりにしよう——《反逆紫電!》」

翼の黒い宝玉から紫電が飛びだすと、目にも止まらない速度で《Pアジ・ダハーカ》に巻きつく。

「ぐ、あ……! だが、この程度の拘束——」

「無駄だ。貴様の機竜の力は頂いた」

「? 何を言って、ツ!?!」

フローリアの言葉に、バルゼリッドは疑問に眉を顰めた次の瞬間、《Pアジ・ダハーカ》の強化装甲が光の粒子になって消えた。

「貴様の機竜の力を奪い、そして奪った分の力を《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》のエネルギーへと変換する」

それが、この特殊武装《反逆紫電》の能力だ。

「どうだ? 奪う側から奪われる側に回ってみて。今、どんな気分だ?」

「ぐう……くそおお!」

バルゼリッドは拘束を無理やりとくと、フローリアに向けて片方しか残っていない《双頭の顎》を放った。

しかし——

「無駄だ」

フローリアは反逆竜の右腕で砲撃を受け止め、握り潰した。いとも簡単に、まるで空気を掴むごとく。

「くそっ! くそっ! くそっ! くそおおっ!」

バルゼリッドは怒り狂いながら、何度も砲撃をする。しかし、何度やっても先程と同じ握り潰される。

「先程も言っただろう。お前の機竜から力を奪ったと」

奪ったのは《アジ・ダハーカ》の力だけではない。アルテリーゼの《エクス・ワイアーム》、クルルシファアの《ファフニール》、そしてジーク

クの《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》。

「俺らは常に最悪な事態を想定しながら戦い続ける。それが、仲間が敵に奪われたとしても決して見捨てたりはしない」

「ツ……………」

クルルシファーは、はつと息を上げた。

「仲間は、必ず取り戻す！」

フローリアが大きな声で宣言すると同時に、反逆竜の翼が横にスライドし展開した。

「貴様の決闘には…………鉄の意志も鋼の強さも感じられない！」

そして、翼から蒼い炎を点火した。フローリアは空中に飛翔すると、落下の勢いを利用してバルゼリッドに突撃する。

「くっ！ 舐めるな！」

バルゼリッドは目の前に三重の障壁を壁を最大出力で展開した。

「対奥義『狂竜連環』！」

《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》は紫色のオーラをその身に纏う。

「はあああつ！」

フローリアが拳を振るうと、最大出力の三重の障壁をまるでガラスを砕くように貫いた。

対奥義『狂竜連環』——一撃必殺の『強制超過』と、永遠に動き

続けれる『永久連環』の合わせ技。

一撃が必殺で、

永遠の連続攻撃。

「うおおおおおおお！」

《アジ・ダハーカ》の神装《千の魔術》^{アヴェエスタ}が発動するより先に、フローリアがその身体を引き千切る。両腕、そして特殊武装の《双頭の顎》^{デビルスグロウ}を。

「終わりだ！」

そして、フローリアは《アジ・ダハーカ》を蹴り上げバルゼリッドよりも高く飛翔する。

「反逆のライトニング・デイスオベイ！」

紫の電気を帯びた反逆竜は、まさしく雷のごとくバルゼリッドに強襲する。

「革命の雷に撃たれて散れ！」

紫の雷はバルゼリッドを貫いた。

「ぐ、ぎやあああああああああッッ！」

触れた、雷の接点から、幾億の針が広がるように衝撃が突き抜け、吹き飛ばされる。背後に存在した瓦礫の山、荒れた地の固い地面すらも巻きこんでバルゼリッドはやつと止まった。そのバルゼリッドは、全身から血を噴き出し、吐血して悶絶する。

「バカなッ……！ 何故こんな……、こんなことがアアア！」

絶叫を上げて悶えるバルゼリッドは、それでもなお、抵抗しようと立ち上がる。しかし、機竜の大半がすでに破碎されているため、もう《アジ・ダハーカ》は戦闘を続けられない。

ドラグライド装甲機竜も、神装も、その何もかもが、全てが、失われていく。

地面に着地したフローリアはクルルシファーに近づくと、地面に突き刺さっていた《ファンタム・フォック・ブレード幻影霧剣》を解除した。

「さあ、ここまですごい掌だ。ここから先は、君の意志で動きたまえ」

それだけ言うと、フローリアはバルゼリッドに向き直る。

「ふ、ふざけるな！ あつてたまるか！ こんな——、ゴボツ！

こんな事がア！」

「もう、勝負はついたぞ。でも——」

ジークは穏やかに告げ、最後にバルゼリッドの顔を見据える。

「もしこれ以上、ジークや学園の人に手を出すつもりなら、次は殺す」

「……くッ！ ハハハハハッ！」

それを聞いたバルゼリッドは、醜悪な笑みを浮かべて飛び退いた。
「イイイイイ！」

教会跡地のすぐ隣には、深い森が広がっている。そこに逃走経路を用意していたのか。しかし、フローリアは動かない。その変わり、

「——甘いわね」

透明感のある声と銃声が、教会跡地に響く。

「ぐ……が！」

直後、《ファアフニール》の特殊武装である《凍息投射》フリージング・カノンの射撃が、《アジ・ダハーカ》の装甲を凍らせていた。

それを見ていたフローリアはふっと微笑む。

「言っただしよう。私を、甘く見ない方がいいって」

いつもの涼しげな微笑を見せて、独り言のように呟いた。

全てが終わり、フローリアは小さく息を吐き、吸い、目を開いた。

「ん……弱いっ！」

拳を天に突き上げ、彼は実に満足げに叫んだ。

？

「此度の件。バルゼリット卿の謀を見抜けず、婚約を推し進めようとした私の責任です。お嬢様とルクス・アーカディア様には、謝罪の言葉もございません。厳罰はエインフォルク家に戻り次第受けますので、この場ではどうか、ご容赦のほどを……」

アルテリーゼの声を、店の外で聞いていたジークは大きな欠伸をしていた。

(ねむうい……)

《勝利の方程式》ジーク・オブ・エクエイション——世界にも干渉できる超絶演算。しかし、その代償は大きかった。脳の肉ずれにより数日は頭が回らない。

今日は報告で、ユミル教国に帰るアルテリーゼにルクスとクルルシファアの関係を伝えるためこうして、貸し切りのレストランで会合中

なのだ。

ちなみに、ジークは今回護衛として付き添いで来ている。

「では——失礼致します。お嬢様——。またいずれ、お伺いします」

「あなたも——元気でね」

クルルシファアの穏やかな笑みに、アルテリーゼは一礼して返す。

「もう帰るのかい？ アルテリーゼさん」

「はい。此度は本当に申し訳ありません」

「いいて、すんだことだし」

そう言つて、ジークは右手をぶらぶらと振る。まるで、気にするなと言つてるようだ。

「あの、その腕の怪我は大丈夫なのですか？」

「あーこれ？」

アルテリーゼは、ジークの火傷と擦り傷を負って包帯で巻いている右手を心配そうに見つめる。

「その傷も此度の私の不詳が働いた傷、よろしければ医療費を払わせて下さい」

「え、いいよ。こんなほつとけば治るし——」

「いえ！ これはエインフォルク家に仕える身としてやらせて下さい！ なんでも致しますので！」

うーん、ここまで親切にしてもらって拒絶してしまってさ彼女の従者としての誇りを傷つけてしまうかもしれない。ここは、俺のテクニクで——。

「んじゃあー、右手にキスをしてくればいいよ」

「……え、ええええええっ!!」

悪魔ほく笑うジークの言葉に、アルテリーゼは驚愕に叫ぶ。

(これで諦めてくれるだらう……)

こんな恥ずかしいことを要求されては、流石に。

「えっと、キスでいいんですか？」

「うん、別に無理しなくていいんですよ」

羞恥に頬を染めるアルテリーゼ。

さあ、諦めろ！これでチェックメイトだ！

「では、失礼します——」

ふう、帰ってくれたようだ。この程度のゲーム、かんた

「んう……ちゆう」

「……え？」

手に生暖かい感触が感じ、意識から引き戻される。そして、目の前には、ジークの右手を両手で持ち、頬を赤く染めながらたどたどしくも一緒懸命にキスをするアルテリーゼの姿があった。

「んちゆう……はあ、はあ、これでいいですか？」

「……」

「あれ、ジークさん？」

予想を上回る出来事に、流石にキャパオーバーになったらしく、ジークはその場で放心状態になってしまった。

？

「ふう。久しぶりだな、お風呂なんて——」

「……そうだな」

脱衣所と浴場の扉で丁寧にノックをして、中に誰もいないことを確認した後、外に『清掃中』のプレートをかけて、服を脱ぐ。女子寮での入浴に関しては、基本的に男は禁止されているのだが、一週間に一度ほどの割合で、それが可能なタイミングがある。

ルクスとしては、水か湯を含んだタオルより断然お風呂の方がいいが、反対にジークはテンションが下がっていた。

「はあ……」

意外にも意外、ジークは大の風呂嫌いなのだ。身体の傷を誰かに見せたくない、というのもあるが、それ以外にも理由がありそうだ。

先程も嫌々言っていたジークを無理やり引っ張って来た。

「あくあ……風呂に入りたくない」

学園の制服を脱いだジークの身体は、対拷問訓練の跡が生々しく残っている。刃物で切り刻まれた裂傷痕、熱された物を押し付けられ

たのか火傷の跡も残っている。そして、臍の辺りには旧帝国の烙印を無理やり消した傷もある。

浴場の扉を開けると、大理石の柱と、そしてランプが淡く照らす、広い湯船が目飛び込んできた。幼い頃の宮廷生活では割とよく入れていたが、雑用生活を始めてからは、ほとんどまともな入浴はできなかった。これでも役得だ。と、ルクスは思う。

洗い場で熱いお湯を浴びた後、ゆっくりと身体を洗い、最後に湯船に身体を浸していた。全身から力を抜いて、お湯の湯力に身を委ねる。日頃の雑用や訓練で、緊張した筋肉がほつれる感覚は心地がよかった。

「はああ……」

「……………」

至福の時間に頬を緩ませるルクスとは真反対に、顰めっ面で入っているジーク。それを横目で見ながら、そっとルクスは目を閉じた。

「無事に、終わってよかった」

色々なことがあったが、誰も失わずに済んだ。

そう、独りごちていると。ちゃぷんつ。と、すぐ隣で水面が波打つ音が聞こえた。

「え——？」

ジークは相変わらず顰めっ面で、動いた気配がない。思わず目を開け、白い湯気が隠された隣を見ると、

「……………あれ？」

見覚えのある桜色の髪の少女が、ぼうつとした目でルクスを見て、首を傾げていた。

「——つて、えええええっ!？」

バシヤツと飛沫を立て、ルクスは浴槽の中で思い切り後退る。

「うぶっ……………」

地味にルクスが立てた水飛沫が、ジークの顔面にかかった。

「お行儀が悪いよ。ルーちゃん」

髪を下ろしたフィルファイが、真顔でそう言ってくる、

「あ、ごめん——じゃないよ!? どうしてフィル……ファイ

ちやんが、ここに居るの!? その、外に清掃中ってプレートなかった!?

「今日は外で訓練してて、遅くなったから。お風呂はまだ入れるって、お姉ちゃんが——」

「……………」

ぼんやりとしたその一言で、ルクスは察する。この状況は悪戯好きなフィルフィの姉、レリイ学園長の差し金に間違いない。

と、ルクスが考えていると。

ザパアアア!

今度は反対側から波打つ音が聞こえてきた。

「ごめん……………先が上がってる」

ジークが顔面蒼白でそう告げ、湯船から出た。

「ど、どうしたの? 大丈夫?」

思えばおかしかった。フィルフィが湯船に入って来た時に、ジークは一切口説きしなかった。可愛い女性を見つけると、必ずと言っていいほど口説くジークがだ。

今は顔が白く見えるほど弱々しい。熱かった風呂に浸かっていたのにもかかわらず、微かに肩が震えている。息を荒げて風呂場から出て行くジークに心配していると、

「……………くかー」

湯船に浸かっているフィルフィが、寝音を立てて湯に沈んでいく光景が目映った。

「寝てるしッ!? ちょっと、こんなところで寝ちゃダメだって、フィルフィ!」

慌ててフィルフィを揺するルクスの声を背後で聞きながら、ジークは風呂場を後にした。

?

至福の時間だったはずのお風呂の時間。しかし、現在のジークは最悪の状態だった。

「はあ……はあ……」

大粒の汗と水が頬を伝って床に落ちて行く。濡れた髪を乱雑にバスタオルで拭き、いつもだったら寝間着の下に着ている装衣を着ていない。それほど今のジークは悪い状態だった。

熱いはずなのに身体が震えるほど寒い。鏡で顔を見たらきつと唇が真っ青だろう。

ここからルクスの部屋に行っても遠すぎる。しかし、行く当ては――

「やっぱり……ここしかないか」

ジークはとある部屋の前で止まった。ドアノブに手をかけ数度躊躇ったが、意識も限界に近づいてきたのでドアを開けた。部屋の中には金髪の少女がいた。

「――む？ 誰だノックもせず、ってジーク!？」

「……リーシャ」

何時もなら黒いリボンで二つに括っていた金髪を解いて、腰まで流している。寝間着のネグリジェを着ているため、小柄なのに大きめの胸が、制服の時より際立っている。

息を荒げているジークを見て、リーシャは顔に焦りが浮かぶ。

「な、なにがあつたのだジーク!？」

近づいて来るリーシャをジークは手で制した。

「い、今は……気分が、悪い」

リーシャを押し退け、二段ベットの下に潜り込んだ。リーシャは何か言いたげな顔をしていたが、ジークは意識を手放した。

？

ベットに入り、荒い寝息を立てて眠りについたジークを見ながら、リーシャはため息をついた。

「そんなずぶ濡れじゃ……風邪を引くぞ?」

箆筒からタオルを取り出し、ジークの頭に圧すように拭いていく。

「うう……」

「——ッ!?!」

低く呻くジークに、リーシャはビクッ!と肩を震わせた。汗と水を拭いたのだが、再び汗が滲み出てきた。

(やはり……あれをやるしかないのか)

心の中でリーシャは逡巡し、決意をするとジークが寝ているベットにリーシャも入る。その頬は赤く染まっていた。

横に向いて寝る姿勢になると、ジークも横に向かせる。

(ほ、本当に大丈夫なのか?)

リーシャはある事を思い返していた。

『ジークにもっと近づきたい?』

決闘が終わって、事後処理をしているときにリーシャがフロリアにある頼みごとをしていた。(ジークは脳の過負荷で休眠中)

『頼む! 聞いている相手を間違えているのはわかっているんだ、けど——』

『ああ、いいよ』

頭を下げて頼むリーシャに、フロリアはあっさり承諾した。

『はは、意外だったかな? けど、俺はジークが少しづつ変わっていることが嬉しいんだ』

くすりと笑うフロリアの姿は、どこかジークに似ていた。

『そうだな……ジークの傷を撫でる、かな』

『……は?』

ジークにもっと近づきたいと言ったはいいが、リーシャは間抜けた声を出してしまった。

『もちろん悪ふざけで言っているつもりじゃない。この身体、ジークにある傷を撫でることだ』

『いや、悪ふざけじゃなくても意味がわからないのだが』

急にジークの傷を撫でろなんて言われても、リーシャは困惑をして

いた。それを知ってか知らずかフローリアは微笑む。

『ジークには親がいなかった』

微笑みながら言ったフローリアの言葉の内容は、前にジークに聞かされていた。

『仲間はいただけけど……まあ、ジークは家族というモノを知らずに過ごして来た。近い環境にいた君ならわかるだろ？』

『……………』

旧帝国に裏切られ、目の前で仲間を殺されたジークはその後、旧帝国に所有物として幼少時代を過ごしてきた。細かい部分は違うが、似た境遇のリーシャは何となく共感できた。

それは『寂しい』と言う感情だった。

愛されず、愛を知らないまま育った者は誰かを求める。もしかしたら、ジークが口説くのはそれが理由なのかもしれない。

『傷を撫でてやれば、少しはあいつの孤独を癒せる』

『ほ、本当に仲直りできるのか？』

『そこは君しだい』

(まさかこんなに早く実践することになるとは思わなかった……)
言われた通り、服の上から傷を撫でた。

「んう……………」

身じろぎするジークを見ながらリーシャは優しく撫で続ける。すると、さつきまで荒げていた呼吸が、落ち着いてきた。

「すう……………すう……………」

汗も引き、蒼白だった顔も元通りになった。

「本当だ……………フローリアが言った通りになった」

ジークの顔をじっと見ていると、リーシャは急に頬が熱くなる感覚がした。

(……………ちよつとだけなら)

リーシャはジークの背中に手を回すと、抱き寄せた。

「……ふふ」

ジークの身体から伝わる体温。呼吸と共に動く体に、リーシャは自然と頬を緩めた。

「……………」

手をジークの身体から離すと、今度は首の後ろに手を回した。そして、ぐっとジークに身を預け乗り出すと――

ジークの唇に、リーシャは自身の唇を当てた。

「くっくッ!!」

リーシャは顔をトマトのように真っ赤に染めると、ぼっ！とジークから体を離れた。

「わ、わたしは何をやっているのだ。お、起きてないよな?」

バクバクとうるさい心臓の鼓動を宥めながらジークの顔を見る。安らかに寝ているジークを見て、リーシャはほっとした。

「……ジークと、き、キスを――!」

リーシャは震える手で自身の唇に触れると、先程の行為を思い出し再び顔を真っ赤に染める。愛しい人とキスが出来たことに頬をふにや、と緩めるが、ジークが起きていなかったことに少しリーシャは悔しく思う。

「ふふ、好きだぞ、ジーク」

リーシャは再びベットに入ると、もう一度ジークの傷を撫でる。そうすると、ジークはリーシャに身を寄せてきた。まるでそれが、母親に甘える子供みたいで、リーシャは嬉しかった。

ジークに甘いたいし、甘えられたい。そんな思いが、込み上げて来る。

リーシャはジークに身を預け、ジークの胸板に顔を埋める。頬擦りをする、ふわりとジークの匂いがする。抱きしめると、ジークは抱きしめ返してきた。全身をジークの匂いが包み込む中、リーシャも意識を落とした。

三章

Part 11 学園最強

その二人の男女は、世界を見下ろしていた。

「ひとつ、ご質問をしてもよろしいでしょうか？」

その内の、男の後ろから純白と濃紺の侍女服を纏った妙齡の女性が、まるで影のように佇んでいた。

「——いやだ、と俺が言ったらどうする。下らん前置きをするのは職業病か？ ミスシス・V・エクスファーサイ」

薄闇に包まれた、球場の無機質な広い空間。壁面に無数の枠があり、そこには町と森と広大な大地を映し出されていた。声をかけられた、黄金の刺繍が入った優美なマントを羽織るその男は、からかうような、あるいは嘲るような笑みを向けて背後を振り返る。

「虹彩の少年——ジーク・ザン・エリック・ルーカス。彼はいたい誰の味方なのですか？ 彼の行動、言動、その一つ一つは私たちの味方していますが、同時に敵を演じておられます。例の目的のためとはいえ、彼は謎が多すぎます」

淡々とした口調で、ミスシスと呼ばれた女性は、そう静かに尋ねる。対する青年はその問いを鼻で笑った後、静かに顎を上げ、ミスシスに視線をぶつけた。

「簡単な話さ。あいつは世界の敵で救世主だ」

「……。お言葉の意味がわかりかねますが」

ほんの僅かに逡巡した後、侍女がそう答えると、青年は笑った。

「お前は英雄譚を読んだ記憶はないか？ そこには『勇者』が存在している。善良な民や姫を救い、悪しき魔物や支配者を倒す。しかし、そこには『悪役』が必要だ」

「……彼はその役。——ということでしょうか？ 『勇者』という敵と戦い正義を名乗る、役割を背負わせた存在」

ミスシスの言葉に、青年はそつと目を細め、口端をつり上げる。

「そうだ。俺たちが全ての遺跡ルインを開けるには、『勇者』と『悪役』が必要だ。そして、彼は世界の敵。つまり、俺たちの敵でもある。これから各国の争いは更に激化するだろう。侍女長であるお前にも、いざれ動いてもらうことになるぞ?」

そう告げると同時に、銀髪の青年は展望室の外へ歩きだす。

「そろそろ次の一手を動かす。あの第三皇女様に使者を出せ、ミスシス」

「承知致しました」

侍女は慇懃に頭を下げた後、青年の出て行った扉を閉じる。そして、先程の虹彩の少年を、侍女長は思いを馳せ、そっと呟く。

「……Sジーク」

それは、愛憎が入り混じったものだった。

?

真夜中……。

『こちら、ジーク。異常は無し、どうぞー』

小型化した竜声を送るための機器を耳に付けているルクスに、ジークの声が入ってくる。全体を見渡せる女子寮の屋上で、ジークは見張りをしているのだ。

『こちら、ルクス。異常はありません。どうぞ』

そして、ルクスは女子寮付近の中庭を歩いていた。

遺跡ルインの調査権をかけた郊外対抗戦と、その代表者を選出する校内選抜戦の開催日が、あと数日というところまで近づいていた。機竜ドラグナイト使いとして腕を振るう最大の行事に、昂揚にも似た緊張が、学園の中に満ちている。

『うう……。今日は冷えるなあ……。』

『おっ! あんな所にかわいい女子が——あつとただのルクス君だ!』

『やめてえええええ! それ言わないでえええええええ!』

からかうようなジークの声に、ルクスは悲痛な悲鳴を上げる。

『ごめんごめん。今は、ルノちゃんだね』

『アアアアアア！』

ルクスは再びインカム越しに悲鳴を上げる。それを女子寮の屋上で聞いていたジークは腹を押えて笑い転げていた。それにルクスは歯噛みしながら、本来付いていない筈のスカートの端を摘み上げる。
(どうして……どうしてこうなった！)

？

「えつと……。学園敷地内の警備の依頼——ですか？」

その日の放課後、ルクスは三和音^{トライアド}に呼び出され、『ある依頼』について相談をしていた。

「そーそー。学園の警備なんて、ほんとに衛兵さんたちの仕事なんだけどき。それだけじゃ手が回らないことだつてあるんだよ」

快活な性格の同級生、ティルフアーが腕を組んで思案顔で頷くと、隣の一学年のノクトも頷いた。

「Yes. 彼らにも生活はありますから、日の暮れた後もずっと。というわけにもいきません」

「特に夜の敷地内や女子寮の周りなどは、我々三和音^{トライアド}が自主的に行ってきたが、ここ最近の情勢を考えると、もう少し人手が欲しいところなのだ」

最後に三学年でリーダーのシャリスがそうまとめ、ルクスに歩み寄る。

「というわけでルクス君。今日からしばらく君にも参加してもらおうと、こうして頭を下げて来たというわけさ。学園の平和を守るため、私たちの力になってはくれないか？」

やや大げさな仕草で、そう頼んできた。

(相変わらず、真面目なんだかい加減なんだが、よくわからない人だなあ……)

ルクスは内心で苦笑いしつつも、当然のように首肯した。

「わかりました。僕でよければ、お手伝い——」

「姉御！ 例のモノを持って来ました！」

そう笑顔でルクスが答えた瞬間、タイミング良くジークが部屋のドアを開けて入って来た。その手には袋が握られている。

「おお、ジーク君。持って来てくれたか!」

「Yes. お仕事が早くて助かります。ジークさん」

「いやー、さすがジクっちだね。出来る男は違うよ」

「いえいえ。姉御の頼みなら頑張っちゃいますよ」

礼を言い合うジークたちの姿を見て、ルクスは直感的に感じる。

(あ、これやばいヤツだ)

しかし、承諾してしまった手前断れない。

「さてと、じゃあルクス。着替えようか」

「え……? 着替えるって何に?」

「何って、これだよ」

ジークはそう言うと、袋の中から取りだす。

「はい、女子の制服」

「ああ、なるほど……って、なるか!」

ジークとルクスの息の合ったボケとツツコミに、三和音は「トライアドおぉー」と賞賛の声を上げる。

「あ、ありがとうございます……じゃなくて! 何でこれがあるの!?!」

「学園長に、『ルクスが急に女装に目覚めたそうです』って言ったら特別に用意してくれた」

「ちよ、ええっ!?! なに誤解を招くこと言ってるの!?!」

「大丈夫、嘘だから安心しろ」

「いや、嘘に聞こえないから……」

ジークの笑みを作りながら言う言葉は、何故か嘘に感じられない。

「ルクス君、少し落ち着きたまえ。これは目的のためだ」

困惑してうろたえるルクスに、シヤリスは真面目くさって言う。それを手助けするかのようには、ジークはうんうんと頷く。

「今回の警備は、女子寮の周囲がメインとなる。そして、最近学園の周りをうろつき、どうやら男の変質者らしいのだ」

「で、ルクスがか弱い女の子のフリをしておけば、油断した変質者が

ホイホイと寄ってくるわけよ。警戒される心配もないし、女生徒が危険に晒されない。つまりは囹役。まあ、これも学園の安全を守るため。……わかるよな、ルクス」

「くう……わ、わかりました……」

シヤリスとジークに押され、ルクスはついに頷きを返す。

「じゃあ、時間もないからさっさと着替えちやおうか？ ルクス」

ジークがニヤリと笑みを浮かべ、ルクスの服のボタンに手を伸ばす。

「んじゃ、着替えさせてあげるね！ ルクっち、女の子の制服の着方知らないでしょ？」

「い、いえ……！ ひとりでがんばってみますから——って！

何でみんなニヤニヤ——」

そこからの事は、とても早かった。まず身ぐるみを全部？され、そして女子の服を着せられた。なんとか女子の下着は着せられずにするんだが、すっかり女生徒の姿へと変えられてしまった。

「うわっ……!?! こ、これ、思ってたより、ずっと——」

「Yes. ここまで似合うとは、正直誤算でした」

「ジーク君、化粧が上手だな。どこかでやってたのかい？」

「ええ、前に誰かにやっていたので」

トライアド
三和音とジークが、思い思いの感想を述べる中、あまりの恥ずかしさに、ルクスは鏡の前で固まってしまっていた。

「ぶっ……安心しろルクス。くくっ……今のお前は、ふっ、女の子に見える、ははははは！」

「全っ然、嬉しくないよ！」

腹を抱えて笑いだしたジークに、ルクスは涙目で叫んだ。

？

その後、作法や仕草のチェックされ、ジークは高いところから全体の見渡し、ルクスはこうして敷地内の見回りに参加しているのだが、今のところそれらしい不審者が現れるどころか先程からジークにか

らかわれているのだ。

「絶対に覚えてろよ、あいつうー」

普段は温厚のはずのルクスは珍しくジークに怒っていた。絶対にあいつも同じ目に合せてやる。

(いやでも、ジークはああゆうのでもノリがいいからなー)

本当に仕返しになるかな?と、ルクスは内心でため息を吐く。

「でも、本当にこれからが大変そうだなあ——」

ルクスはいよいよ先日のことを思い出す。ユミル教国からの留学生であるクルルシファーを巡る事件で、新王国の四大貴族の嫡男、バルゼリッド・クロイツァーは失脚した。しかし、バルゼリッドにはアティスマータ新王国を救うという、使命があったらしい。

終焉神獣^{ラグナレク}——七つの遺跡^{ルイン}に一体ずつ存在すると言われていて、最大最強の幻神獣^{アビス}。そして、ここで問題なのがかつてのアーカディア旧帝国が、その終焉神獣^{ラグナレク}の一体を解き放ってしまったのだ。しかも、それをヘイブルグ共和国が知っていて討伐を求められている。

もし要求を蹴れば、ヘイブルグ共和国を含む同盟三国から、外交的圧力をかけられる。まだ建国して五年しかたっていない新王国としては、望ましくない状況だ。だが、終焉神獣^{ラグナレク}も一筋縄ではいかない。その討伐方法や部隊編成について、王都で連日軍議が行われていた。

『新王国の戦力で勝ち目があるとすれば——セリスティアを攻撃、ジークが作戦指揮官しかないだろうな』

新王国の姫であるリーシャの答えはそうだった。

確かにそうだろう。ジークの天才的思考と戦術、まだ知らないがセリスティアの戦闘能力を合わせればそれだけで一軍隊だ。しかし——

(でもあの人、すごい男嫌いらしいからなあ……)

そう、そこが問題だ。いくらジークが口説きが上手だからと言って、実際のところはどうかかわからない。

(何か、手を考えないと……)

女子寮の周りをゆったりと歩きながら、ルクスがそう考えている

と、

「……う？ あれは——」

視界の隅に微かな違和感を覚え、ルクスは身構える。裏門の草藪、正確に言うところと図書館の陰になっているところに人影を見たような気がしたので。音を消して、ルクスは足を進めると。

「……………」

「——ですから、そう思いました」

(誰かと話している……？ こんな時間に、こんな場所？)

一瞬、不審者の件が過つたが、声が玲瓏とした響き、典雅な発音は、貴族子女の令嬢のものだ。それでも、万が一を考え確認しようとして目を凝らすと、すらりとした背の高い少女の横顔が、視界に飛び込んできた。

すると——、

「——なんであのとき、私ひとりが王都に残る方がいいと判断したのです。我ながら英断だと自負しているのですが、あなたは どう思いますか？」

少女は、誰かと話しているようだが、周囲には誰も見当たらないのだ。

(……何だろう？ あれ)

ルクスがそう首を傾げたとき、

「にゃ〜」

小さな鳴き声が、少女の足下辺りから聞こえてきた。よく見ると、そこには猫がいた。

「ですが内心、誰かが一緒に残ってくれると言い出してくれるかと、期待していたのです。なのに、誰も残ってくれませんでした……。もちろん、誰がそう言いだしても断るつもりではあったのですが……。ああ、待ってください！ 話しはまだ——」

焦った様子で少女が手を伸ばすが、猫はその場から走り去ってしまった。

(……僕は何も見てない。うん、そうしよう)

自分は幻覚を見たんだ。ジークにからかわれて少し心が疲れてい

るのだろう。かぶりを振って雑念を追い払い歩き始めたとき――

「――おっと、声を出さないでくれよ。お譲ちゃん」

若い男の声が、いきなりルクスの背後からかけられた。

「……ッ!?!」

教官や、見回りの衛兵じゃない。ということは――件の変質者だ。

(しまった!? 背後に居たなんて――)

「いい子だ。そのまま動かないでくれよな? 俺はお譲ちゃんを傷つける気はないんだ。身代金をもらうときに価値が下がっちゃうし、第一、美女を傷つけるのは俺の性に合わねえ」

(つて、……この人まで、僕のこと勘違いしてるし!?)

目的通りに囿役になっっているのだが、あんまり嬉しくない。インカムの向こうでジークが爆笑しているのがわかる。ルクスは少しイラついてインカムを強めに叩いた。

「よし。じゃあゆつくりと、俺についてきてくれるな?」

だが、変質者は完全に油断している。右手にナイフを握ってはいたが、ルクスの首筋や背中には突きつけていない。これならば、男が意識を逸らした一瞬の隙に、取り押さええることは可能だ。そう判断し、ルクスはひとまず様子を見ようとすると――、

「それは認めません。私の判断は――不許可です」

透き通った典雅な声が、夜の空気を震わせた。女装したルクスと不審者の男から、少し離れた位置にいつの間にか、先ほど猫と話していた、一人の少女がいた。

制服のネクタイが緑色だからおそらく三年生だろう。色白の肌に、腰までかかる鮮やかな金髪と、ジークとは違った深い翡翠色の瞳。そして、はち切れんばかりの豊かな胸を持つ少女。

「刃物を捨て、その少女を静かに放すことを許可します。あなたに拒否権はありませんが」

少女が身に纏う、神秘的ともいえる超絶とした空気。殺気や怒りな

どはなく、されど拒否権は与えない言い方。ジークは確たる証拠と結果で相手を黙らせるが、目の前にいる少女はその場を全てを支配する、絶対者の空気で相手を黙らせる。

「……残念だが、その期待に添うことはできねえなあ」

不審者の男が、やや気圧された声を出し、後退する。おそらくは本能的に——自分との『格の違い』を認めたのだ。

「……どうだ？　まずは、その腰につけてる武器を捨ててもらおうか、乳のでかいお譲様よ」

自らを鼓舞するためか、あえて男は軽口を混ぜ、脅しをかけた。ルクスを人質にし、まずは武器を奪ってから、逃げ出す算段だろう。

「わかりました」

少女はふつと頬を緩め、腰の剣帯に手をかけた瞬間——、

「痛い目を見たい、ということですね？」

ベルトを外すと見せかけて、それを高速で引き抜いた。

まるで一コンマの出来事だった。七mほどあった距離を一瞬で詰め、不審者の隙と緩みを突くようにその喉元に、刺突剣型の機攻殻剣ソルト・デバイスを突き付けた。

「なっ……!?!」

さらに激しい雷鳴と同時に少女の背後が輝き、黄金の機竜が現れた。瞬く間もなく、その半身を装甲が覆う。

無詠唱の高速機竜召喚に、速攻を為すための部分接続。通常ならば、ほぼ不可能な難易度の機竜操作術に、目の前の少女は平然とやってのける。

「武器を捨てることを許可します。これが最後の警告ですよ」

少女は威圧を込めた冷笑を見せ、事実を告げた。

「ぐっ……うー！」

不審者は額から汗を流しながら、ナイフを芝生に捨てて、両手を上げる。その隙にルクス是不審者から離れると、少女は微笑んだ。

「怪我はありませんか？」

少女は安心したかのように、呟く。この局面では、もはや不審者は逃げられない。ルクスが、ほっと小さな息をついたとき、コロン、と

何かが足下に転がった。

「……!?!」

卵ほどの球体が、音を立てて弾け、巻き上がった白煙が視界を遮る。

「くっ……!?!」

不審者の男が走りだす音が聞こえたとき、ふいにルクスは背後から殺気を感じた。

「危ないッ!」

とっさに少女の背中に立ち塞がり、両腕を伸ばす。次に来る痛みには、ルクスは身体を強張らせたが、伊丹は来なかった。代わりに、目の前に血が舞う。そこには、少年が投擲されたナイフを握っていた。

「ジュー——」

「逃がすか!」

ルクスがジークの名前を出す前に、ジークは煙を振り払い逃げ出した不審者を追おうとする。しかし、すでに不審者は視界から消えていた。

「ちっ……!?! 逃がしたか」

ジークはそう言うと、手に持っているジークの血で真っ赤になったナイフをその場に捨てた。そして、ジークは少女とルクスに向き直る。

「ありがとう、ジっ——」

「お怪我はありませんか?」

マイ・レディ
お譲さん」

またもやルクスがジークの名前を言う前に、こんどは金髪の少女に近寄った。肩膝をついて、片手（怪我をしていない方の手で）で少女の手を取ると、ジークはいつも通りの口説きを始めた。

「貴方のような美しい人には初めて会いました。よろしければ、この後に俺と——あれ?」

いつも通りの口説き、いつも通りの展開。しかし、いつも通りなら相手は少しだけでも褒め言葉に照れるはず——だったが、今回は違った。

口説いでいるはずだったジークが、急に中に投げ飛ばされた。そして、背中から地面に落ちる。

「ぐふうあああ!?!」

「ジ、ジーク!?!」

今度こそ、ルクスは最後までジークの名前を言えた。

「ぐふうあああ!?! 背中が!」

「え? え? 何が起こったの?」

ルクスが背中を押え、悶えるジークに戸惑っている間に、長身の少女はジークに近づいた。その眼は呆れを含んでいた。

「はあ、相変わらず馬鹿な人ですね。色魔^{しきま}」

「ん? あんたどつかで——ああ! お前は——!」

ジークは投げ飛ばした相手を見ると、驚愕の声を上げる。それは、ルクスがジークと一緒に居て珍しい表情だ。

「猪突猛進女!」

「ツ——! そのあだ名は何ですか! 不許可です。私にはちやんとした名前があります」

「お前らしくてピッタリだろ。だいたい、後先考えずに動くお前が悪い」

「なっ!?! どこがですか!?!」

「全てだ!」

ジークと少女との間で、見えない火花が散る。一体、何が起きているんだ?と、ルクスが内心で思っている——、

「にゃ〜」

先程、少女から逃げた猫が戻って来てジークに近づく。そして、猫はジークの足に頬擦りした。

「あっ! その猫は——」

「お? なんだ、また話し相手がいなくて猫に話しかけていたのか? はは—悲しいね」

「うっ……」

ジークの嘲笑いに、少女は齒がみする。

「ね、ねえ……知り合いなの?」

蚊帳の外状態だったルクスは流石に耐えかねたのか、ジークに聞いた。

「ああ、こいつは猪突猛進女」

「違います！ すみません、この色魔の言うことは信じないでください」

そう言った少女は、一回咳払いすると――、

「――私は本日より城塞都市に帰還しました、セリスティア・ラルグリスと申します」

？

「いたたた！ お前、もう少し優しくやれよ！」

「違います。貴女が軟弱すぎるのです！」

セリスティアが自己紹介をした後、ジークの手傷を治しに医務室へと向かった。既に勤務外だった女医の代わりに、セリスティアは手際よくジークの傷を消毒し、包帯を巻いた。だが、ルクスからの視点からはどう見ても全力の力で包帯を巻き付けているように見える。

不審者の男は捕らえられなかったが、今は三和音や他の『騎士団』の少女たちが、手分けして追っているらしい。

「おーい……強く巻きすぎて血が止まりそうなんですけど」

「……………」

「無視かよ」

ジークの言葉に反応を示さず、じつとルクスの顔を覗き込んでいた。

(どうしたんだろう――？ つてまずい！ 僕まだ、女装したままじゃないか!?)

ルクスが慌ててウィッグをはずそうとしたとき、顔に柔らかな感触が押しつけられた。

「えっ…………？」

むにゅっという柔らかな感触と、質量。そして、サラサラの髪がふわりと揺れて、ルクスの顔をくすぐった。

「なっ…………！」

それが、セリスティアに抱きしめられているのだということに気づ

き、ルクスは頭が真っ白になる。

(な、なんで、いきなり——!?)

ルクスはジークに助け舟の視線を送るも、ジークはきつく縛られた包帯を解いているのに夢中だった。わけがわからない状況に、ルクスが激しく混乱していると、そつと頭を頭を押さえていた両腕が、離れた。

「はっ……!?! す、すみません。あなたがあまりにも可愛らしかったもので——その、失礼いたしました」

セリスティアは慌てて床の隅に視線を逸らし、呟く。頬が微かに染まっているところを見ると、結構慌てているようだった。

「い、いえ、そんなこと——」

同様にドキドキしながらも、ルクスは心の中で安堵をしていた。

(この子が……!?! いや、この先輩が、学園最強の少女——!?)

四大貴族の一角、ラルグリス家の長女であり、大の男嫌いで名の通った少女。だが、頷けるものがある。あの腕の冴えと純正の貴族を思わせるこの物腰、正しく模範となるべき女生徒。

「私のことはセリスと呼んでください。そしてよろしければ、あなたのお名前を、聞かせていただけますか?」

「ル……。ル、ルノ、っていいいます。その——、二年生です」

(……って、何言ってるんだよ僕は!)

ルクスはここで男だと明かすことに危険を感じ、あらかじめ皆で決めていた名前を、とっさに言ってしまった。

「ルノ……ですか。素敵な名前ですね——色魔、あなたとルノはどういった関係なのですか?」

セリスティアは頷いて微笑んだ後、急に顔を変えて包帯を巻き直していたジークに、聞いただす。ジークは「あ?」と言って視線をセリスティアに向ける。

「別に同級生で同じクラスだよ」

「ッ——! 気を付けてください、ルノ! この男は不埒で変態で自分勝手に、基本的に他人を見下している度し難いクズ男なのです!」

(あー合ってる合ってる。だいたい合ってる)

ジークの日頃の行いを思いかえすと、否定出来ないのが事実だ。またもやジークとセリスティアの間で、火花を散らしていると――

「セリス姉様！」

慌てた様子で、黒い三つ編みと褐色肌の少女が医務室の扉を開けた。

「大丈夫ですか？ 怪我は？ ナイフで襲われたそうですが――」

「大丈夫ですよ。サニア」

サニアと呼ばれた褐色の少女が、慌ててセリスティアの心配をするが、セリスティアは落ち着かせる声音で言った。「はあ……」と安堵のため息を吐いたサニアは、キツと目を鋭くすると今度はジークを睨みつけた。

「やはり貴方のような男がいるから」

「いやいや、俺はその猪突猛進女を守ったから」

そう言うと、ジークは包帯を巻かれた右手を見せた。だが、それでも食ってかかろうとしたサニアをセリスティアは手で制した。

「納得いかないのもわかりませんが、守ってくれたのも事実なので今回は見逃しましょう」

「……はい。セリス姉様」

渋々頷いたサニアを確認すると、セリスティアはルクスの手を取った。

「また私とお話してください、ルノ。あなたのこと、気に入ってしまいました」

セリスティアはそう言うと、名残惜しげにルクスから手を放し、そのまま立ち去った。

「……………」

彼女たちの背中を見送ってしばらくした後。

「――って、どうしよう!?!」

女装したまま、彼女を騙して別れてしまった。

「な・る・ほ・ど……そういう事ね」

慌てるルクスを尻目に、ジークは何かを納得したかのように頷き怪しく笑みを作った。

Part 12 宣戦布告

「あああ……」

学園の敷地にある工房アトリエ、そこでジークは装甲機竜ドラッグライドの整備をしつつ、大きな欠伸をすると、背後で金髪の少女が心配そうに声をかけた。

「おいおい、寝るには早いぞジーク。疲れているのか?」

「んん、ちよつとだけな……」

少女は手に持っていた工具を机に置いて、顔を寄せてきた。

強気な真紅の瞳と、可愛らしい金髪のサイドテールが特徴の少女――

――新王国の王女であり、神装機竜《ティアマト》の使い手、リーズシャルテだった。

「昨日は工房アトリエに来てなかったが、あまり無茶はするなよ。その手の傷も、浅いらしいが最近不審者が学園に侵入しているらしいから気をつけろよ」

ジークの手に付いた傷は、不審者のナイフで付いた物ではなく、リングの皮を切っている時に滑らせて付いた物とリーズシャには言っている。

「んー、そうだな。流石に今日は早く寝るか」

身体を伸ばす仕草をすると、背骨が伸びて小気味のいい音がする。すると、リーズシャは頬染める。

「そ、そうか……。じゃあ、今日は私も早めに寝るとしよう。久しぶりにお前と一緒に寝たいからな」

今の話とは関係ないが、俺の最近の変わった事を言おう。

普段、寝るように使っているジークとリーズシャの共同部屋。そこには二段ベットがある。しかし、その上の段――リーズシャのベット――を使わなくなったのだ。理由は簡単、ジークとリーズシャは下のベットで一緒に寝ているからだ。

バルゼリッドととの決闘があった翌日。ルクスと一緒に風呂に入った後、のぼせてリーズシャの部屋まで急行しそのまま気絶したのだが、なんと朝目を覚ましたら自分の横にリーズシャが寝ていたのだ。いやいや、マジでびびったから。

まあ、それ以降は一緒に寝ないと何故か寝つけが悪いって言うか……そんな感じで数日前から一緒のベットに寝ているのだ。

「……そう言えば。今日の放課後に工房（こころ）に集まりがあるんだったな」

「ああ、あの女の対抗策を、早く考えないとだな——」

『あの女』とは、『騎士団（シヴァレス）』の団長であるセリスティア・ラルグリスのことである。

「ふと小耳に挟んだ程度だが——、数日前からお前たちを学園から追い出そうとする働きが、三年生たちの間で起きていているようだぞ」

「ん……あながち予想通りっちゃ予想通りなんだよなあ」

ただ、厳密にはただひとり、サニアという昨日会った黒髪の三年生の人が、他の同級生を煽っているようだが。

「まあ、安心しろ。新王国の姫であるわたしの名に誓って、お前の在学を取り消させることなど、絶対にさせないからな」

リーシャはそう言うと、小柄な身体にしては存在感のある胸を張る。その姿を見て、ジークはほっと息をつける。正直なところ、ジークはこの学園を去るには惜しいと思う。同年代の友人たちは、ずっと自分が持てなかったものだ。

それに、

（まだ、リーシャと一緒に居たい）

ジークは無意識に、隣に座るリーシャの手を握る。

「うん？ どうした、ジーク」

唐突に手を握って来たジークに、リーシャは首を傾げるが、ジークはただ朗らかに笑うだけだった。

「頑張ろう。俺たちなら出来るさ」

「……っ！ お、おうそうだなー」

ジークの笑顔にリーシャは頬を赤く染めながらも、意志を示し合した。

？

そして、放課後——工房^{アトリエ}。

「と、言う訳で今回の議題は兄さんとジークさんの在学を守ることです。皆さん、わかりましたか？」

『はい』

広い作業台をテーブル代わりにして、複数人がアイリの言葉に返事した。

工房^{アトリエ}の所長リーシャ、クルルシファー、フィルフィに加え、三和音^{トライアド}の三人とルクスの妹アイリが、テーブル囲むように座っている。

各々の手にはアイリが製作した、今回のセリスのことについて集めた情報を纏めた紙がある。

（三年生の彼女たちがどう動くのは、あの猪突猛進女の意志次第つてか）

目の前の紙にはそう書かれていた。男嫌いのセリスが、ルクスを追い出そうとするならば、そこは黙って彼女に賛同する人間が大多数を占めている。

「Yes. それでは、ルクスさんをよく知る私たちがまず、セリス先輩を説得してみるべきでしょうか？」

「それは意味ないと思うよ」

ノクトの提言に、ジークは否定の言葉を投げかける。すると、一斉に視線がジークに向いた。

「あいつは頑固だし鋼のような信念を持つてるから説得しても多分意志を曲げれないと思うよ。それに、あの猪突猛進女は自身の私的感情より、この学園の規則で勝負に出てくる。それを考えたら不利なのはこつちなんだよねー」

つらつらと述べるジークの言葉に、「はあ……」と、ジークたちを支持している彼女たちはため息を漏らす。

「しかし、なにもしないという訳にもいかない……」

だが、代案が思いつかないのか、皆が口をつぐんでいると、

「——まあ、気を急いでも仕方ない」

再びジークが口を開く。

「もし、猪突猛進女が俺らを退学にしようとしても学園長が粘って

くれる。それに、退学を拒否する意向を示せばあちらも馬鹿じやない話を聞いてくれるっしょ」

淡々と呟くジークの言葉に、他の面々は、しばらく考えると、

「——そうですね。今のところ、それが一番かもしれません」と、まずはアイリが頷いた。

「三年生の間で悪い噂を流している人がいるのは事実ですが、それはサニアという人だけですし、今も別に問題が起きているわけではありません。私たちが反応して騒ぎ立てれば、かえって対立を強めてしまいます」

「つまり、既にルクス君を受け入れている、一、二年生の意志を統一しておく、というのが大事ということね」

そうクルルシファーが答え、話し合いに一段落がつこうとしたとき、ジークは懐中時計を見て、

「そろそろ来るな」

コンコンと、ふいに工房アトリエの扉をノックする音が聞こえてきた。

「……何の用だ？ わたしは今、忙しい」

「すみません。ルクス君はこちらにいますか？」

所長であるリーシャが扉越しに答えると、生徒らしき少女の声が返ってきた。

「あ、あのですね。寮長さんが、ルクスさんのことを呼んでいるらしいのですが——」

「あいつには今、わたしの依頼をさせている。作業が終わったら伝えておく。運が良ければ早くそちらに行けるかもしれんと、寮長には伝えておいてくれ」

「わかりましたー。それじゃ、私は失礼しますね」

「……………」

一同が怪訝な顔で声を潜め、視線をジークに向ける。しかし、ジークは動じず机の下に隠してあった袋をルクスに投げ渡した。

「ほれ、これ持って早く寮に戻れ」

「え？　なんで、ってこれ『あれ』じゃん!？」

「あまりこそこそしているのも危険だ。ひとまず今日はもう解散し

たほうがいいな」

「え？ 無視……？」

ジークがそうまとめると、立ち上がって工房アトリエの奥の方に行く。

「さてと、後少して全機の点検が終わるぞー」

その後、ルクスはジークに疑問を持ちながら工房アトリエを出た。しかし、この後ルクスは『あれ』が役にたったことを知らなかった。

？

同日の、薄雲に覆われた月の浮かぶ、夜。城塞都市クロスファイードから遠く離れた王都の牢獄に、ひとつの影が伸びていた。王都の牢獄は、その罪の種類と重さに合わせ、三つの階層に分けて罪人を管理している。中でも一番嚴重な最深層へと、影は難なく辿り着いていた。

「——こんばんは、我が旧帝国の盟友。元気にしていたかい？」
鉄格子の前で足を止めたローブ姿が、穏やかな声で中の男に話しかけた。

「……そろそろ、来る頃かと思ったよ」
牢の中で目を瞑っていた元警備部隊隊長——ベルベット・バルトはそれに気づき、顔を上げる。ローブ姿の正体——かつて自分の逆の手助けをした『闇商人』。そのローブには真新しい血が付いていた。

「クロイツァー家の坊ちゃんでも殺したのかな？」
ベルベットが何気なく言うと、『闇商人』は先ほどの態度が嘘のように怒気を含ませた声になる。

「ああ、あの無能は俺のお気に入りの神装機竜を壊しやがった。あのクソ野郎は俺を怒らせる天才だよ。散々《アジ・ダハーカ》にはエネルギーの限界容量があるっていったのによ——だが、もういいんだ」

今度は機嫌がいい声になる。

「あの無能はもう死んだ。それに、今度は俺が奴らに絶望を与える番だ。だから——お前を助けだしてやる」

「……………」

無邪気な、底なしのドス黒い笑みが、フードの下から零れるが、ベルベットは無言で見つめる。

「あのクソ餓鬼^{グッ}が憎いだろう？ だからチャンスやるよ。もう一度ここからお前を出して復讐させてやる」

「……残念だが、それは遠慮させて貰おう」

『闇商人』からの誘い、しかしベルベットは首を横に振り拒絶した。「なんだと？ お前は一生負け犬で生きるつもりか？」

「そうだな。私の部下からの願いだっただよ。改心してこの新たな国のために剣を振ってくれと。それを無碍にするわけにはいかないだろう？ それに——」

ベルベットはローブの下にある瞳に、睨みつけ言う。

「貴様では私の優秀の部下は倒せない」

「……言い残したいことはそれだけか？ じゃあ、死ぬ」

『闇商人』は黒い笑みを浮かべそう言った瞬間、

「ゴバツ……!?!? ぐ、ぐがああああああああッ!?!」

突如ベルベットの眼前に、鮮血が飛び散った。赤黒い、角のような突起が内側から胸を突き破り、生えている。

(後は任せたぞ……! ジーク!)

胸から生えた赤黒い角は、本数と太さを増し、鉄格子の数本を砕き、内側から食い破るように広がっている。そして、ベルベットは事切れた。

「……チッ！」

だが、『闇商人』はベルベットを殺したにも関わらず舌打ちをした。ベルベットは死ぬ寸前まで、ずっと『闇商人』を睨み続けていた。その表情には、絶望はない。ジークと同じどこか挑発的な笑みが『闇商人』を威圧していた。

?

——翌日、学園の昼休み。

ルクスは急いで学園長室に向かっていた。その訳は数分前に戻る。中庭で昼食をとりつつ、セリスのことを考えていた。しかし、ティルファーがルクスの事を呼びに来た。その内容は――

「ちよつと大変なんだよ！ セリス先輩が、学園長にルクつちとジクつちを退校させるように、直談判してるらしくて。今はリーシャ様とジクつちがそれを止めについて――」

正しく急な出来事だった。ルクスは急いで校舎の三階、学園長室に向かった。学園長室の前の廊下は、学年を問わず既に大勢の生徒でごった返していた。

「すみません、ちよつと通してください！」

バン！と、扉を開いた瞬間、その光景が目飛び込んできた。

「だからー！ 俺らの編入は問題ないって言ってるじゃん！ 俺の編入は学園長に頭下げてまで通した、正式な手続き踏んでいる。退校は拒否だ！」

「私たち三年生が不在のとき、勝手に決められら編入です！ それにああなたの軽い頭を下げてても不許可です！」

「ああ!! なんだこの、猪突猛進女！」

「だから私の名前はセリスティアと言っています！ 色魔！」

「誰が色魔じゃこの乳デカ！」

「そのセクハラ的な言動を言ってるのです！ 変態アホーク！」

それは、まるで幼稚な喧嘩だった。ジークとセリスティアは互いに罵り合いながら正論をぶちまける。離れて見ていたリーシャや三和音、学園長の面々はどこか憐れみを帯びている。

「こ、これは初めて見たぞ。セリスがあそこまで感情を剥き出しにして言い合うのわ」

「Yes. ジークさんもいつも以上に白熱してます」

「なんか子供の喧嘩を見てるみたいだねー」

上からシャリス、ノクト、ティルファーの順で口々に感想を述べる。

「わかったよ！ もっと誠心誠意心を込めて頼めばいいんだろ!!」

ジークはそう言うと、セリスティアと学園長を視界に入れ両膝と両手を地面に付ける。そして、頭を地面に擦り付けるように下げた。

「俺をこの学園に残らせて下さい！」

(お前のプライドは紙以下か……)

プライドの無い土下座を見て、この場にいる全員が同じことを思った。

「不許可です！ ルクス・アーカディアは許すとしてあなたは在学を許可できません！」

「なんでさー！ 土下座してまで頼んでんのに!？」

「土下座してもダメなものはダメです！」

二人は激しい口論を続けていたが、部屋に入ってきたルクスの姿を見つけると、ぴたりと言葉を止めた。ジークとセリスティアの視線がルクスに注がれる中、ルクスは慌てて扉を閉め理事長室の中央まで行く。

「あなたが旧帝国の王子。ルクス・アーカディアですか？」

一呼吸の間を置き、値踏みするような視線で問いかけてくる。他者を圧倒するような気配と声に、微かに息苦しさすら感じた。

(これが、彼女の『男の』に対する態度か……)

大の男嫌いという噂は聞いていたが、こうして対峙しているだけで呑まれそうな威圧感が、ルクスの身体を押していた。

「あなたは本来、この場にいるべき人間ではありません。それは、わかっていますか？」

「……………」

淡々としたその声に、ルクスとはつきに反論ができない。

「今回の経緯について、私は話を聞きました。私の留守中に、何度か危機を救っていただいたことは感謝します。ですが、それであなたがここに在籍する理由にはなりません。この学園は貴族子女たちのためのものです」

「まあ、そうだな——」

セリスティアの言葉を同意するようにジークが声を上げる。

「俺らという例外を認めれば、他の例外も認めることになる。学園創立後の七年間は、共学化はしないという話になっていたしな」

「く……………」

つらつら述べるジークの言葉にルクスたちは呻いた。なんで知ってんだよ、と目線でジークに訴えると「事前サーチだよ」とジークはひらひらと手を振った。

「つい先日、不審者の男が敷地内に侵入しました。その彼が原因ではありませんが、この学園の女生徒たちが、これ以上男性に油断しても困ります」

「流石は学園最強で優等生様だなあ。お前が四大貴族の力を使えば、学園の出費者である貴族たちは、王家より発言権のあるセリスティアラルグリスタ家につく。言い争う前から俺らが不利なのはわかっていたさ」

「なっ!? 何を言ってるんだよ!」

「わかっているのなら速やかに負けを認めてこの学園から——」

「アホ、誰が負けを認めるって言ったよ」

ルクスが驚愕に声を上げ、セリスティアがふっとため息を漏らしながら呟いた言葉を遮るように、ジークは嘲笑う。

「知ってか? 学園内では、貴族間での上下関係はなく、平等な士官候補生として扱って校則に明記されてんの」

「……なるほど、確かにこの校則に則ればいく四大貴族でも手を出せませんね。しかし、それは建前の話しで——」

「あれれ? 校則は破るけど在学は認めないってちよつと都合がよくないですかね、優等生様」

ジークはすっごいムカつく顔で口角を上げる。今の会話は、この口論を予見して前もって用意していたネタだろう。

「くっ、相変わらず口だけは達者ですね」

「それが俺の武器だからな」

再びジークとセリスティアの間で火花が散る。しかし、それを遮った者が現れた。

「セリスティア先輩。僕からあなたにお願いがあります」

ルクスの突然の言葉に、その場にいた一同がはっと息を呑む。扉の外に聞こえないよう、声を落としてから、ルクスは言った。

「バルゼリッド・クロイツァーが請け負うはずだった、終焉神獣討伐

の件です。その部隊を、あなたが率いていただけませんか？」

「……!?!」

その一言で、学園長室の中に緊張が走る。ジークにいたっては「まじか、おい」と、驚愕の表情になっている。

「……あなたが、何故その件を知っているかは、あえて問いません」
僅かな息をためた後、セリスはルクスに視線を合せて淡々と告げる。

「ですが、あなたとはなんの関係もない話です。終焉神獣は私ひとり
で仕留めるつもりです」

突き放すような言葉。しかし、ルクスも食いつく。

「ではまだ、僕は学園を去れません」

「……どういう意味ですか?」

明確に拒否の意志を示したルクスを見て、セリスは怪訝な顔で問い質す。

「僕とジークを『騎士団』の一員として、あなたの部隊討伐に同行させて
いただきますからです。ラルグリス卿」

「ツ……!?!」

ここまで完璧に『威厳のある四大貴族』だったセリスティアは、初めて
動揺の色を見せた。

「あなたの実力は僕も聞いています。でも——、終焉神獣は強敵
です。他の機竜使いの協力もなく、あなたひとりに戦いを任せるわけ
にはいきません。学生でありながら軍の任務を請け負うことができます
。『騎士団』に僕が入れば、あなたに協力できます」

「——はあ、こいつはべらべらと喋りやがって。まあ、そう言う事
だ猪突猛進女。俺もルクスの意見に賛成だぜ」

肩を竦めながら答えたジークもルクスの方に付いた。

「俺ら餓鬼の喧嘩に大人が介入するのは間違っているって思うわけ
さ」

「……何が言いたいのですか?」

(あ、このパターンは……)

ルクスは一度聞いたことがある。それは、フローリアがバルゼリッ

ドに言った言葉——

「おい、決闘しろよ」
デュエル

ジークは挑戦的な笑みで、学園最強の機竜ドラグナイト使いに決闘を挑んだ。

「……不許可です。だいいち私になん——」

「おーなるほど、校内選抜戦で論争の決着をつけると。流石は学園最強の言う事は違うぜ！」

反論しようとしたセリスティアより先に、ジークが学園長室の扉の向こう側に向けて大声でそう言った。すると、扉の向こう側から複数の声が聞こえてきた。聞き耳を立てていた女生徒たちがジークの言葉を聞いて驚愕に染まっているのだろう。

「さあ、これで逃げれなくなったな学園最強様よ」

「くう……やってくれましたね」

「なに言ってたんだ。餓鬼の頃の続きだろ？ 二十勝、二十敗、五引き分けの勝負」

「……いいでしょう。ですが、昔の私と勘違いしてもらっては困ります。勝てるかと本気で思っているのなら、大変な見込違いです」

挑戦的な獣を彷彿させる笑みのジークと、鋭い威圧感を湛えた騎士の様な笑みのセリスティア。真反対の笑みの間で、火花が散っているのは共通していた。

(やばい……)

ルクスは、いやこの場にいる全員がジークとセリスティアの姿を見て思った。

(勝つてに決められてしまった……!)

これが天才肌同士の会話。凡人には入る余地がない。

?

ジークとルクスの在学をかけた校内選抜戦の話は瞬く間(だいたいジークのせい)に広がり、放課後になる頃には、校内はその話題は持

ちきりだった。

そんな中でも、ルクスは律義に学園の依頼をこなし、ジークは「機竜の調整をしてくるぜ」と言って工房アトリエに入った。三和音トライアドのノクトとの相部屋でもある妹の部屋を訪ねると、制服姿のアイリとジークが、小さな机の前でルクスを待っていた。既にジークは項垂れていた。

「こんばんは。兄さん」

穏やかな口調なのが、逆に恐ろしかった。

「そ、その、怒ってる？ アイリ……」

「怒ってませんよ？ ええ、兄さんはきつと、私に怒られたくてやってるんでしようから、ここで私が怒ったら、ますます喜んでしまいますからね」

「怒ってるよ、絶対に怒ってるよ」

ジークはまるで蚊のような声を出す。

「ん？ 何か言いましたか、ジークさん？」

「いえ。何も言っていないです、お譲様」

(なにがあつたか容易に想像出来てしまう……)

ようするに、完全に怒っている。

「ふう……まあ、今回はジークさんが悪いですし、兄さんは何もしてませんが、止めなかつた兄さんも兄さんです——」

そこからは長時間の説教をジークとルクスは聞いていた。なんだかんだいって、たったひとりの肉親とその友達の身をアイリは案じていてくれるのだろう。だからこそ、なんの相談も無しに事件に飛び込んだことに、酷くご立腹なのだ。

「まじですみません！ アイリ様！」

「今回は、相談する暇がなかつたんだよ。本当にごめん！ そ、その、埋め合わせは今度、ちゃんとするからさ……」

ジークが渾身の土下座&ルクスが必死に謝ると、

「……兄さん達は、卑怯ですよ」

困ったような表情で、アイリはぼつりと呟く。

「私が最終的に許すしかないと知っていて、勝手に行動するんですから、」

「えっと、アイリ——？」

小声なので良く聞きとれず、ルクスが問いかけると、

「な、なんでもありません！」

頬を微かに染めつつ、アイリが慌てて言った。どうやら許されたらしいので、ほっとジークは溜め息を吐く。

「ま、まあ、埋め合わせの件は、後でじっくり考えさせてもらうとして……、今回兄さん達を呼び出したのは、別の話です」

アイリはそう前置きして、こほんと咳払いをひとつする。部屋の空気が一層重くなったようだ。それだけ重要な話を、今からしようとしているのだ。

「これはさつき学園長から極秘で聞いた話なのですが、王都で投獄されていたバルゼリッド・クロイツァーが、先日……殺害されたそうです」

「……!?!」

聞かされたその事実には、ルクスは息を呑みジークは険しい表情をした。

「それと、反乱軍の部隊長として監禁されていたベルベットも殺されていきました。どちらも、^{アビス}幻神獣の襲撃によって、です」

「——え？」

アイリの言葉を聞いて、そんな間拔けた声を出したのはジークだった。

「そ、そんな、なんで……ベルベットさんが」

「……ジークさん？」

急に顔を青ざめ、身体を振るえ出したジークを心配そうにアイリは声を掛ける。しかし、ジークには届いていなかった。

『よセッ！ やめろ、やめてくれ！ 殺さないでくれ！』

『ごめんね、ジーク』

『やめろおおおおおおお！』

目の前で、仲間が刃物で切り裂かれた。真っ赤な血が宙を舞い、

ジークの頬にかかる。ジークは絶叫し倒れた仲間を抱きかかえる。額から血を流し、あと少ししか生きれないとはつきりわかる。それでも優しく微笑む。

『ねえ……お願いがあるの』

『やめろ……言わないでくれ』

もうすぐ死ぬ。ジークはその事を理解しながらも、どうしてもそれを否定しなかった。

『ジークは一流の機竜使いだし、人一番装甲機竜ドラッグライドが好きでしょ？だからね……』

『目を閉ざすな！ 生きろ！』

息が弱まり、体温が冷えてくる。

『ジークが……私の代わりに、皆を笑顔、にさせ、て——』
そう告げると、目を閉じ二度と開けることはなくなった。

「うわあああああああああ！」

「ッ!? ど、どうしたの!？」

「ジークさん!？」

頭を抱え、急に大声で叫び出したジークに、ルクスとアイリは驚愕の声を上げる。しかし、ジークは床に倒れ悶絶の声を上げる。

「俺は！ 俺はア！ どうして！ なんで!？」

「お、落ち着いてジーク!？」

ルクスが叫び出すジークを落ち着かせようとジークの身体を抑えるが、それでもジークは叫び続ける。

「また殺した！ また、またア！ 誰も、守れて、いな、い——」

叫び続けたジークは突如、糸が切れた人形のように力が抜け、口から泡を吹きながら身体を痙攣させ意識を失った。

Part 13 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》(1)

「とりあえず……もう心配はいらないわ」

そう医務室の先生が言うと、ルクスとアイリはほつと息を吐いた。ジークが倒れてすぐにルクスが医務室に運び、先生に事情を説明している間にアイリが学園長を呼びに行った。

「なにが原因でジーク君は倒れたのかしら？」

「そうですね、ルクス君から聞いた話から仮定すると……フラツシユバツクでしょうか」

「フラツシユ……バツク？」

レリイ学園長の質問に、病室のベットで寝ているジークを見ながら答えた先生の聞き慣れない言葉に、アイリは首を傾げた。

「心的外傷、つまり強いトラウマ体験をした人がなんかしらの出来事で再びその記憶を思い出すのよ。戦場に出て行った兵士が起こしやすい病よ」

(ベルベットの死で再び心の傷口が開いたのか……)

消したくても消えない《記憶》を、今なおジークは背負っている。

「とりあえず、彼は今日ここで寝かせてしまいますね」

「はい。では、私たちは帰らせてもらいます」

そうやって、ルクスたちは帰って行った。

？

ジークが倒れた次の日――。

今日から五日間、校内選抜戦を行われる大事な日なのに主力メンバーの一人――ジークがぶつ倒れた事を聞いてクラスはざわついていた。

そうこうしていると、廊下から猛スピードで走って来る音が聞こえる。そして――

「フオオオオオオオ→→」

ハイテンションで教室の中に入って来る何者か——ジーク(?)。

「久しぶりのシャバの空気は美味いぜえ!」

かわらざるハイテンションで、クラスの全体を目を輝かせて見渡す。

「うおー! かわいい女子がたくせんいるぜー!」

ジーク(?)の異常な行動を疑問に思った全員を代表するようにクルルシファーが声を上げる。

「なんか今日のジーク君おかしくない?」

「うん……なんか言動が、ジークくんらしくない」

「でも、フローリアってわけじやなさそうですね」

フローリアはどつちかと言うと落ち着いている。そして、今まで静観していたリーシャが口を開く。

「あれはおそらく……エリックかな?」

リーシャたちが色々と言っているのをおかまないなしに、ジークもといエリックはテンションを上げる。

「よっしやあああああ→→ テンション上がって来たぜえ!」

そして、「とうっ!」と言って飛び上がる。ル○ンのポーズで。

「ではっ! い・た・だ・き・まあ——待てやコラアア!」

ル○ンのポーズから急に床にまつかさまに落ちて頭を思いつきり床にぶつけた。ん?今度はジークか?

「てめえしばくぞー エリック!」

床から顔を上げたジークは、額から血を流しながらも自分エリックに怒りの声をぶつける。

『痛つてえな! なんだ別にいいじゃねえか!』

「良くねえに決まってるんだろ! 人が寝てる時に身体を乗っ取りやがつて!」

『ああ!? やんのかコラア!!』

「やってやるよこのバナナヘアー!!」

ジークとエリックは喧嘩をしているが、彼らは一つの肉体に複数の人格を有している。傍から見るとジーク一人で喚いているにしか見

えない。まあ、それも慣れたものだが。

「それにしても、お姫様はよく彼がジーク君じゃないってわかったわね」

「ん〜何となくだが、前にジークが『エリックは馬鹿な奴なんだぜ(笑)』って言ってたんだ」

(身内を貶けなした!?)

『あああああああ!』

リーシャたちが話し合っていると、ジークとエリックが一つの身体でジタバタして窓から外に身を放り投げてしまった。二人分の叫び声が混ざった感じだった。そのタイミングに合わせて、ライグリー先生が教室に入ってきた。

「お前ら出席取るから座れ」

「ラ、ライグリー先生! ジーク君が窓から落ちました!」

「あーきつと生きてるから平気だろ」

(見捨てるっ!?)

その後、ライグリー先生は淡々と出席を取った。

「それでは、本日より五日間、校内選抜戦を執り行う! 各自、参加者である武官志望の生徒たちは、演習場の掲示板を見て自分の対戦予定を把握しろ。時間内に参戦できなければ不戦敗となる。怪我や体調不良などの場合は、早めに名乗り出ておけ。その点は考慮する」

本来ならば、遺跡調査権をかけた他国との模擬戦、校外対抗戦の代表を決める戦いなのだが、今回はジークとルクスの在学と、セリスが行う討伐へのルクスの同行をかけた戦いでもある。

「選抜戦用のルールは、以前解説した通りだ。そして、今回は学園長の提案で、更に特殊な勝負形式となる」

セリスとその支持派である三年生と、ジークとルクスの支持派である一、二年生で対戦を行い、その結果で勝った方の要求を呑まなければならぬというものだ。更にその戦いは、一般生徒戦と、『騎士団』戦との二つに分けられる。

当人を含む『騎士団』のメンバーと自分を支持する一般生徒の勝利

数が、それぞれ相手の支持者の勝利数を上回らなければならぬ。ジークたち男子及び『騎士団』シヴァレス内の支持者の戦いで一戦、一般生徒の支持者の戦いで一戦。最低でも、どちらかで一勝を取らなければ、ジークたちは確実に学園から追放されてしまうことになる。

それぞれが持つ、相反する主張。それを通したければ力で示せ。簡潔で一番わかり易いやり方だ。

「説明は以上だ。では各自、全力を出せ」

ライグリー教官が出て行くと、少女たちのざわめきが、わっと教室の中に広がった。不安の音が、口々に飛びだす。

「え、えっと、すみません。なんか、みんな巻き込んだじゃって——」
ルクスが反射的に、そう言うのと、

「ええい、静かにしろ！ お前たち！」

大騒ぎするクラスメイトたちを見て、リーシャが立ち上がり、一喝する。そして、クラス全員に伝えるかのように、声を張り上げる。

「わたしたちのやることはひとつだ！ 狼狽える必要はない、そのために全力を尽くせ！」

「——既にできる限りの手は、打っておいた！」

「……え？」

と、ルクスを含めたクラスメイトの全員が、首を傾げる。それどころか、ジークの声が聞こえてきた。全員が窓を見ると、ガシツ！と手が窓枠を掴んだ。

「俺たちの戦いは既に始まっているのさ！」

そう言つて、ジークは窓から這い上がって来た。ここ三階。

「何のために俺とリーシャが徹夜を繰り返して工房アトリエに籠っていたと思おう？」

「お姫様と二人つきりになるためじゃないの？」

「うーん、まあそうだけどそうじゃないから！」

クルルシファーが言った言葉に、ジークは否定を返す。リーシャが「えっ!? おま——」と何か言いたげだったが、今回は割愛する。

「俺はこの時を見越して、二学年全員の装甲機竜ドラグライド全てを、一週間前から調律しておいた。これで君たちの機竜は、以前より全体の出力が

強化されているはずだ。これなら三年生にも、一応は対抗できる……たぶんね」

あるよね、見栄を張ったはいいいけど後から不安が来るの。

「だが、不安になることはない。そもそも今から機竜の性能を上げても差は微妙にしか縮まない気がする。——肝心なのは、君たちの心」^{ハート}

そう言つて、ジークは胸をドンツ！と叩く。不思議とクラスの全員がジークに注目した。

「古来より喧嘩でモノを言うのは、いつだって魂の重さだ！^{ウエイト} 勝ちたいと思つた方が勝つ！ やつてやろうじゃねえか！ 俺たちの喧嘩がどんなもんかを思い知らせてやれ！」

拳を強く握り、そう高く宣言するジーク。その熱が伝播したのか、クラス全員が熱気に包まれる。

「なんかいけそうな気がしてきた！」「そうよ！ ジーク君たちの努力を無駄にはいけないわ！」

クラスメイトのやる気を見て、ジークは嬉しそうに頷いた。

「よっしゃー！ やつてやるぞお！」

『おー！』

ジークの号令に、クラスメイトは活気立つ。それを見ていたルクスは安堵した。

（よかった。昨日の事で心配だったけど、ジークの調子はいつも通りみたいだ）

ルクスがそんな事を考えている合間に、ジークを含む神装機竜使いたちは各々タッグを組んだ。

ジーク&リーシャ

ルクス&ファイルイ

クルルシファー&テイルファー

ペアは予め決めて、申請しておかなくてはいいけないが、対戦相手の組み合わせは、直前になるまでわからない。そのため、こういった場合もある。

ジーク&リーシャ対セリス&サニア

「いきなり本命か」

控え室の外に、本日の対戦相手が貼り出された。それを見たジークは口を歪めた。セリスのパートナーであるサニアは、神装機竜を持ってない。故に、機体性能のみで判断するならば、こちらが比較的有利だと言えるが、周囲のクラスメイトの表情は、緊張に満ちていた。そのため、ジークは笑みは場から浮いている。

校外対抗戦、校内選抜戦ともに最多数の試合をこなし、無敗を誇るセリスティアの逸話。そして、ジークとの交戦したとの話。今まで味方だった『最強』が敵に回ったことで、口には出さずとも、恐れを抱いているのが見て取れた。

「——さてと、やりますかね」

「ああ、そうだな」

が、対戦相手を決定した二人は、まるで動じた様子を見せず、微笑んだ。

「おれたちが先に猪突猛進女を倒せば、それで勝ったも同然だからな。というわけで、ちよつくらボコしてくるぜ」

ジークはルクスに向かってサムズアップをすると、演習場に歩いて行った。

「……………」

立ち去る二人の背中を、ルクスが見送っていると、

「どうしたのですか？ 兄さん」

「うわっ……………」

突然聞こえた声に、ルクスは驚く。いつの間にか妹のアイリと、その親友である三和音トライアドのノクトが、隣にいた。

「実の妹が会いに来たのに、とんだご挨拶ですね。酷い兄さんです」
にこりと微笑を浮かべるアイリだが、目は笑っていないかった。

「そ、そんなことないよ。ちよつとただ、考えてただけ——」

「考え——何をですか？」

慌ててルクスが弁解すると、ノクトが首をかしげる。

「アイリは昨日僕といたからわかると思うんだけど、倒れたときのジークは異常な状態だったんだ。それが、今日になるとまるで昨日の

事が無かったかのようにいるんだ……」

「確かに変ですけど、考え過ぎでは？ ジークさんの事ですからわりと吹っ切れてるかもしれませんよ」

「……そうだといいただけ」

既に誰もいない廊下を見て、ルクスは考えぶかしく呟く。

「ルーちゃん。もうすぐ、始まるよ？」

「……うん。わかった」

背後のフィルフィからそう急かされても、ルクスは生返事を返す。

「兄さん行きましょう。ここで考えていても仕方ありません——ジークさんの事ですから負けるはずありませんが、万が一を考えてセリス先輩の情報を、できる限り兄さんに解説します」

「あ、うん。ありがとうアイリ」

ルクスはぎこちなく笑い、やっと四人で演習場の観客席に向かう。大勢の生徒たちや、学園関係者で賑わうその席にルクスたちが着くと、ほぼ同時に、ジークたちが入場した。

？

「それでは、校内選抜戦Aグループ二番ペア対、Bグループ一番ペアの模擬戦を開始する。互いに抜剣し、ドラグライド装甲機竜を装着せよ！」

ジャッソ審判を務めるライグリー教官の声で、四人は一斉にソード・デバイス機攻殻剣を抜き払う。そして、それぞれのグリップのボタンを押すと、パスコード詠唱符を呟いた。

「——来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ、《ワイバーン》！」

まずはサニアが、汎用機竜である《ワイバーン》を召喚する。光の粒子とともに現れた蒼の機竜は、即座に無数の部品へと展開し、サニアの身を覆う装甲と化した。

「荒事は得意ではないのだけど、今日だけは本気で行かせてもらおうわ」

中型のブレードを構え、サニアが告げる。『シヴァアレス騎士団』の三年生である

少女の宣戦布告に、観客席が微かにどよめいた。

「……ふっ」

対するリーシャは、それを一笑し、機攻殻剣ソード・デバイスを高らかに掲げる。

「——目覚めろ、開闢かいびやくの祖。一個に——」

「ちよつと待ったリーシャ」

「おわわ!? 急にどうしたんだ!」

ジークは《ティアマト》の詠唱符パスコードを唱えてるリーシャを止めた。その行動に疑問を思ったリーシャはジークを凝視する。

「今回は《ティアマト》じゃなくて、《キメラティック・ワイバーン》で戦ってくれないか?」

「は? いや別に構わないんだが、何で弱い方を使うんだ?」

「ここで《ティアマト》を使うと機体にダメージを負って後に必要な時に使えなくなる。だから《キメラティック・ワイバーン》でサニアを押さえ込んでくれ」

「じゃあ、あの学園最強はどうするんだ?」

「俺が相手になる」

そう言うと、ジークは《オッドアイズ・ドラゴン》の機攻殻剣ソード・デバイスを引き抜く。それを見たリーシャはため息を吐くと。《ティアマト》を納め《キメラティック・ワイバーン》を抜いた。

「降誕せよ。天地の対なる楔くさび、穿たれし混沌の竜。《キメラティック・ワイバーン》!」

「——《オッドアイズ・ドラゴン》」

二人が詠唱符パスコードを宣言すると、周囲の空間が光りに包まれる。

「接続・開始!」

その直後、内側から開き、無数の部品に分かれると、高速で各部位に装着される。神装機竜と異形な機竜の威容に当てられたのか、三年生の女生徒たちが、それぞれ不安を口にする。だが、対峙するセリスティア自身は僅かな動揺も怯みもなく、機攻殻剣ソード・デバイスを構えた。

「降臨せよ。為政者いせいしやの血を継ぎし王族の竜。百雷を纏いて天を舞

え、《リンドブルム》」

特徴的な刺突剣型ソード・デバイスの機攻殻剣。高く掲げた剣の背後から現れたの

は、鋭くも荘厳な形状と、黄金の輝きを纏った大翼の巨竜。

「接続・開始——」

その美しさと底知れぬ迫力に、観客の生徒たちは、思わず歓声も忘れて見入ってしまう。右手には、特大の突撃槍、左肩には特殊な形状の機竜息砲が連結されていた。

「……リーシャ」

「なんだ？」

「始まった瞬間に、《ティアマト》の機攻殻剣をかしてくれ」

「……わかった。壊すなよ」

短い会話を済ませた瞬間、ライグリー教官の声が、リングに響いた。

「模擬戦、開始！」

合図と同時に、リーシャはジークに《ティアマト》の機攻殻剣を投げ渡す。それを受け取ったジークは素早く抜剣する。

「——神装、《天空の虹彩》！」

瞬時に神装を発動。空に虹色の螺旋が重なり合って複雑な円を創る。交叉した《オッドアイズ》と《ティアマト》の剣が眩く光る。

「いでよ、絶望の暗闇に差し込む、眩き救いの光！ 《オッドアイズ・セイバー・ドラゴン》！」

虹色の円から輝く追加装甲が送られると、《オッドアイズ・ドラゴン》と合体した。そして、完成したのは白銀に輝く鋭利な装甲を持つ竜。

「まだだ！ 来い、《V》、《F》、《D》！」

ジークは更に三種の武器を呼び寄せた。赤い機竜息砲、青い機竜息銃、そして黒い機竜牙剣。

「合体——《V・F・D》！」

それぞれが分裂し、複雑に絡み合う。そして、一本の白銀の大剣が完成した。右手に《V・F・D》、左手に《スパイルフレーム》を構え

ジークはその深碧色の目をセリスティアに向けた。

「行くぞおおおお！」

「来なさいっ！」

こうして、戦いの幕が切って下ろされた。

？

ジークとセリス。この二人だけでも一軍隊並の戦力を誇る程の実力の持ち主たち。それらがぶつかり合う時、想像を絶する戦いになる。誰もがそう思った――

だが、

「だからあれは俺のせいじゃなかったんだって！」

「嘘です！ あれは完璧あなたのせいです！」

白銀の大剣と黄金の突撃槍ランスがぶつかり合いながら、ジークとセリスは口喧嘩を繰り広げる。しかし、そこに加減など一切なく少しもの油断で命取りになるだろう。

「私の食べ物を勝手に食べたのは重罪です！」

「テーブルの上に置いてあったから誰なのかわかんなかったんだよ！」

「誰なのかわかんなくても、少しは躊躇うものでしょう!？」

「バーカ！ よく言うだろう、お前の物は俺の物、俺の物は俺の物つてなあ（煽り）！」

「それってつまり少なからずは私のだって知っていましたよね!？」

高速の攻撃を繰り出しながらも、口喧嘩を続けるジークとセリス。それを見ていた観客席の アイリは呆れたようにため息を吐く。

「……はあ。ジークさんはこんな時に何を？」

「まあ……ジークらしいと言えばらしいけど」

「Yes. ですが、あれが強者の戦いだと思います」

同じ力量の持ち主が目の前にいて、全力をぶつけられる頑丈な装甲機竜ドラグライド。滅多に相対することが出来ない偶然あいてに二人は今、歓喜に身を震わせている。

「神装——《支配者の神域》ディバイン・ゲート」

セリスが呟いた瞬間、《リンドヴルム》を中心に七色の光輪に包まれる。

「《スパイラルフレイム》!!」

ジークは即座に砲撃を行う。しかし、弾丸が当たる前にセリスはその場から消えた。

(これが、この神装の能力)

「——空間転移です」

「しまッ——!?!」

ジークは目の前で消えたセリスを目視で探していると、いつの間にもジークの背後にセリスが現れた。セリスは無防備の《オッドアイズ・セイバー・ドラゴン》の背中に向けて、特殊武装《雷光穿槍》ライトニングランスを振るう。黄金の槍が《オッドアイズ》を貫くと思えた。

だが、

ハウリンググロア
「機竜咆哮!」

ジークは渦状の波を発生させる。相手に向かって放ち、攻撃を防ぐために行う機竜使用ドラッグナイトの基本技術。それを——

「ぐう……!!」

ジークは自身に向かって放った。衝撃をジークはその身に受け、弾き飛ばされる。しかし、《雷光穿槍》ライトニングランスの攻撃を回避することが出来た。それを間近で見たセリスは感嘆の言葉を言う。

「背後からの奇襲にも、冷静に対応し避け切りましたか」

「ばーか……当たってるよ」

セリスの賞賛の声を、ジークは苦笑い、震える右手を抑えて否定した。

?

「機竜」と姿を消した!? あれは、一体——?」

観客席でルクスが呟くと、アイリは静かに顔を上げた。

「あれが、《リンドヴルム》の神装——《支配者の神域》ディバイン・ゲートです。あ

の最初に広げた光の範囲内にあるものを、同じ範囲内のあらゆる場所へ、高速転移させることが可能です」

「そんな、まさか——」
ルクスは絶句する。もし、あの光の領域がこの演習場を覆っていたとすれば——。

「Yes. 彼女が最強たる所以は、まさにその点にあります。単純な戦闘技術、機竜操作の腕も群を抜いてますが、ああも自在に間合いを支配されては、勝ち目がありません」

ちらりとルクスに視線を向け、ノクトが補足する。その意味を、ルクスは瞬時に把握する。

戦いにおいて、間合いを制するものは勝つ。自身に有利な、相手には不利な間合いを取ればそれだけで半分以上はこちらの勝ちである。しかし、この技術は難しい。なにせ相手も自身の有利な間合いを取るべく動くからだ。だが、あの神装は——。

「離れていても、一瞬で距離を詰められ。接近して追い詰めても背後を奪われる。しかも、あの神装は私の《ファフニール》の神装、ワイズ・ブラッド《財禍の叡智》を無効化できるのよ」

背後に座っているクルルシファアの説明に、ルクスは改めて理解する。クルルシファアが操る《ファフニール》の神装、ワイズ・ブラッド《財禍の叡智》を駆使しても、瞬時に自らの背後へ回られれば、反撃の手段がない。そもそも装甲機竜は、基本的に背後を攻撃するようにできてない。その場での急な方向転換は機竜使いに負担が掛る。

しかも——

「あの特殊武装、ライトニングランス《雷光穿槍》は雷撃を放つことが出来る武器です。電撃は幻玉鉄鋼にも影響を与えるので、当たれば装甲を通して使い手もダメージを受けますし、攻撃を受けた箇所装甲や武装は十数秒もの間、動作を鈍らせます」

しかし、あの槍がジークに直接当たる前にジークは回避したはず。なのにジークは片手を抑えている。

「Yes. ですが、それだけではありません。電撃を穂先から放ち、中距離攻撃も可能です。もちろんそれを受ければ、触れたときと同様

に数秒間、装甲機竜ドラッグライドの機能が低下してしまいます」

ルクスが疑問を発するより早く、ノクトが補足する。

「電撃を帯びた彼女の攻撃は、『雷閃らいせん』と呼ばれています。あれを使用されると、いくら兄さんといえども、防ぎ続けるのは不可能です。機竜の動き自体が、封じられてしまいますから」

セリスの攻撃を、連続して受け続けることは不可能。対策として当たらないようにするしかないが、瞬時に違う場所に飛べる神装がある限りそれも不可能だろう。

想像以上の難敵。戦局の挽回は、もう望めなかった。だが――

「いいねえ！ 面白くなってきたよ!!」

そう空中に佇むセリスに向かって叫ぶのは、？ 猛に笑みを作るジークだった。

？

「ふっ……戦局が不利なのに何が面白いと思うのですか？」

「面白いに決まってるんだろ！ 観客が大いに盛り上がってるじゃないかー！」

そう言い、ジークは右手の調子を整える。

（よし、攻略法が見えてきた！）

右手で操縦桿を強く握ると、『スパイラルフレーム』の銃口をセリスへと向ける。

「発射！」

引き金を引いて攻撃をするが、セリスは難なく避ける。

「おおおおおおおおお！」

避けるタイミングに合わせてジークはスラスタを全開に噴かせる。接近して『V・F・E』を振るうが、セリスは神装でまたもや避ける。

（当たり前……！）

ジークはセリスを迎撃するわけでもなく、演習場の上――障壁が貼ってある限界高度まで辿り着く。そして、振り返ると。

「疾く早く——斬り裂け！」
手に持っている《V・F・E》が激しく光る。大剣を真下に向かつて薙ぐと、大気を裂いて斬撃がセリスに向かった。
これがこの剣の能力。幻創機格から送られて来るエネルギーを喰らい、斬撃として放出する。

「ッ——！」

咄嗟に《雷光穿槍》で攻撃を防ぐセリス。しかし——
崩撃！

まるで、雨を見てるようだった。ジークは三大奥義の一つ、『永久連環』で連続的に斬撃を飛ばしているのだ。

まさしく字に書いてある如し、城を崩落させるような攻撃。

これに——学園最強は、
《星光爆破》！

肩に連結されていた砲身が唸りを上げて起動し、球状の光弾を発射した。

「……ッ!?!」

眩しさに目を細めながら、ジークとリーシャ、サニアは同時に息を呑む。斬撃の雨に、黄色に明滅する光弾が衝突する。

ドウツ！

網膜を焼く閃光と、息もできないほどの爆風が演習内に激しく渦巻き、観客席の生徒たちが悲鳴をあげる。ほぼ演習場の八割の広さが、光と爆炎で埋め尽くされた。

《星光爆破》は、《リンドヴルム》が持つ、もうひとつの特殊武装だ。
溜め込んだエネルギーを極限まで圧縮した『星』という光弾を撃ちだし、数秒後、そこを中心とした半径三百m内の空間を爆撃する、広範囲超威力の殲滅兵器。

その砲撃をセリスは完璧に計算し、観客席に被害がでないよう、調整して放っていた。

「セリス姉様が、本気を出すなんて——」

砲撃前に、セリスから回避の指示を受け、サニアは攻撃範囲から一足先に逃れていた。それでも驚きを隠せぬ表情で眩き、中空で佇む

ジークに視線を移す。

?

「……さあ、どつから来る?」

ジークは砂塵舞う演習場を上空から眺め武器を構える。背後は障壁で守っている、つまり——

「後は前しか現れないと言う事ですか? ですが、それがあなたの敗因です!」

セリスは《支配者の領域》^{デイバイン・ゲート}で、大剣の刃渡りから外れた中距離に瞬間移動すると、槍を振るい『雷閃』を見舞う。中距離攻撃が可能なの武器ならば、神装と合わせてあらゆるリーチで有利に立ち回れる。

「終わりです!」

剣は届かない、斬撃を飛ばそうにも間に合わない。電撃を喰らって機体がダウンして槍で突かれて終わり。そんな誰にも予想が着く結末に、ジークは——

「フツ——」

笑った。

「——ツ!? 何故、雷が!?!」

セリスが放った『雷閃』は、ジークに当たる前に消えた。

「電気は低い方へと落ちる」

電気は川を流れる水流と同じで、低所へと落ちる仕組みになっている。それによって、セリスより高い位置にいるジークには届かないのだ。しかも、空気中に舞っている砂塵が自然と電気の勢いを削いでいる。

ここまでが、ジークの計算内。

「終わりだ!」

「くっ——!?!」

啞然としているセリスに止めを刺すべく大剣を振り下ろすジーク。セリスは咄嗟に槍を振るう。だが、剣の間合いに入られた今は最良の反撃をしても、ジークの斬撃の方が早く届く。それはもう避けようが

ない。この瞬間、セリスは確かに自分の敗北を覚悟し、だからこそ、

次の瞬間、ジークが槍に突き飛ばされた感触に愕然とした。

「ガッア!？」

「ジーク!？」

そして、ジークは《ライトニングランス雷光穿槍》に吹き飛ばされ、演習場の地面に叩き落とされた。慌ててリーシャはジークに駆け寄ろうとするが、サニアに阻まれ救助に向かえなかった。

「なんですか、今の軽い攻撃は!？」

「おれ、が……聞きてえよ」

口端から血を垂れ流しながら、ジークはなんとか立ち上がった。

(なんだ……今の感覚は?)

身体が突然思うように動かなくなつたこの事態に、ジークは困惑する。それは、観客席にいるルクスたちも同じだった。

?

「はあ……はあ……」

額から大きな汗を垂れ流しながら、ジークはセリスの攻撃を辛くも避ける。明らかにジークは失速している。まるで、見えない重りが身体に押し掛かっているかのように。

「やはり……まだ、ジークは立ち直れていないんだ」

観客席で見ていたルクスは、確信めいた言葉を言う。

「立ち直れていないって。つまり、ジークさんは昨日ことをまだ引きずっているのですか?」

「いや、ジークは心では振り切っているはずだ。ただ、無意識が身体を抑え込んでいるんだ」

「無意識、がですか?」

アイリの問いに、ルクスは頷く。

「自分では治しようが無い心の奥、『無意識』が自然とトラウマを蘇らしているんだ。それが身体に刻み込まれていた記憶が、筋肉に制限

を掛けているんだと思う」

「そんな……では、もうジークさんに勝機はないのですか？」

「……わからないけど、ジークに秘策がないと多分勝てないと思う」
そう言った、ルクスの悪い予感——的中していた。

？

「やべえな——このままじゃ勝てそうにないわ」

中空にいるセリスを見据えながら、独り言を言うジーク。いや、正確には二人だが——。

『やれやれ、どうするよジーク？』

「どうするもこうも、解決策は一つでしょエリック」

ジークは、《オッドアイズ》と《ティマト》の機攻殻剣ソード・デバイスを引き抜くとそれぞれを交叉させる。

『『さあ……嵐を巻き起こそうぜ!!』』

Part 13 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》(2)

砂塵が舞い上がる演習場の中央。そこから突然、竜巻が出現した。その発生源である少年は天高く白翼竜を呼ぶ。

「その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！現れろ！《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》！」

交叉した《オッドアイズ》と《ティアマト》の機攻殻剣ソード・デバイスが変化し翠色の二刀一对となる。竜巻から現れたのは、白い装甲に翠色の目。ミントグリーンの四対の翼を持った風を操る竜。他の神装機竜と違う点は大地に立つための脚がないことか。

「よっしやー！久しぶりに暴れるゼエ！」

拳を打ち鳴らしそう叫んだのは、金色の前髪が特徴的なエリック。さっきまで操縦してたのがいきなり変わった事におかしいと思ったセリスは、怪訝な顔でエリックに問う。

「あなたは誰ですか？」

端的に、そして鋭く言うセリス。それに対してエリックは拳を突き出して答える。

「俺の名はエリックⅡザン・ジーク・フローリア・ルーカスって言うんだぜ！長いからエリックだけでいいぞ！」

「エリック？ では、あなたが多重人格の一つと言う訳ですか？」

「そうだ！ここからはジークに代わってこの俺様が相手になるぜ！」

そう言うと、エリックは操縦桿を握ると攻撃態勢に入る。その構えは手に武器を持たない徒手空拳である。

「武器を持たないのですか？」

「武器ならこの《クリアウイング》そのものだ！刃こぼれも弾切れも心配ないぜー！」

「確かに、それは理に適っています。では——行きますよー！」

瞬間、目の前からセリスが消えた。現れた先はエリックの背後。
スラスター
推進機に向けて槍の穂先から雷撃を見舞う。完璧に死角となるとこ
ろからの攻撃にエリックは――

「《光翼鏡》！」

雷閃が当たる直前、《クリアウイング》の四対の翼が光ると電撃が反
射した。

「ッ……!?!」

跳ね返って来た雷に驚きつつもセリスは体捌きで避ける。

「おらあああー！」

エリックは絶対に防げない筈の攻撃を防いだ事に、驚く隙を与えな
いような怒涛の連打。しかし、そこは流石の学園最強と言われるだけ
あつて全てを槍で捌く。

「――なぜ防がれたつて顔をしてるな」

まるでセリスの心を見透かしたかのようにエリックは言う。

「特殊武装《光翼鏡》。相手の特殊武装、神装をはね返し更に自身
を強化することが出来る四対の翼。そして――」

エリックは《クリアウイング》の手のひらを見せる。すると、空気を
圧縮したような球体が出来上がった。それは、陽炎みたいに周りの
景色を歪めている。

「これは特殊武装《S R》の風を操る能力で作った空気を圧縮した
球だ」

それをエリックは放り投げる。フヨフヨと浮かぶ空気の球はセリ
スへと向かう。それを、セリスは薙ぎ払うと――

キイイイイン！

甲高い音を立てて破裂した。

「っあ!?!」

「空気の球と思って油断したろ？球の中を高気圧にして爆弾を作つ
たのさ！まあ、聞こえちやいないが」

セリスは音が失った耳を庇うように後退する。

(やられました。まさかそんな事ができるなんて……)

『空気を操る』能力こそ単純だが、それ故に汎用性が高い。先程の転

移場所を瞬時に感知したのも空気の探知結界を張っていたからだろう。エリックは直情的な性格かと思えば意外にも器用に戦うようだ。それか、ジークが支援してるのだろうか？

「なぜ、攻撃してこないのですか？」

音を取り戻し態勢を立て直したセリスは、困惑した表情でエリックに尋ねた。こちらが態勢を立て直している間、エリックはその場から動いていないのだ。

「いや、あんたが万全な状態になるまで待つていただけだが？」

「……う？あなたなら今の隙を突いて私を倒せたはずでは」

「だってあんたは《クリアウイング》の能力を知らなかったら？それで勝つてもフェアじゃないし、面白くないぜ」

「あえて私に特殊武装の能力を見せてそのうえで私を倒す、ですか？」

「俺はジークみたいを考えたりコソコソとせこい手で勝つようなタイプじゃないんだ。相手と対等な条件で勝つことこそが俺のスタイルだ」

そう言つて、エリックは拳を前に突き出す。「さあ、やろう」と言つてるかのようなエリックの眼差しに、セリスは微笑んだ。

（まるで、騎士みたいな人ですね。だったら——なおさら負ける訳にはいきません）

操縦桿を強く握りランスを持ち上げる。

「行きますっ！」

推進装置を駆動しエリックへと突撃する。雷閃は効かないため、物理的に相手の核を狙う。《リンドヴルム》の槍と《クリアウイング》の拳が何度もぶつかり合いその度に火花が激しく散る。先に退いたのは——エリックだった。

（やろう、的確に一点だけを狙つて攻撃してきやがる）

《クリアウイング》の拳を見ると、小さいながらも一点だけ小さなヒビが入っていた。そう、セリスはあの攻防の中での的確に、そして確実に拳にダメージを負わせていたのだ。

（流石は、最強だな……なら！）

エリックはダガーを両手に二本、合わせて四本持つと右手のダガーをセリスに投擲した。

「影撃……ですが、それはどうの昔に攻略しています」

一投目のダガーが囷で二投目が先に投げたダガーの影から攻撃するこの技。初見だと確実に虚を突くことが可能だが、見慣れて仕舞えば簡単に避けられる。セリスは一投目を避けて二投目のダガーを防ぐ準備をした、その瞬間——

「影撃—式の型—」

エリックがそれを言った瞬間、一投目の背後から二投目が飛び出して来た。

「ばかな!？」

慌てて神装を発動し、回避する。しかし、出現場所は読まれている。

「影撃—参の形—」

二本のダガーを出現と同時に投擲。流星に避けられずセリスは障壁で防ぐ。しかし、

バギイイ!

ダガーが障壁を貫いた。

「——!」

セリスは全く反応出来ず、ダガーは《リンドヴルム》の肩に接続されている《星光爆破》^{スターライト・ゼロ}の銃身を刺し貫く。

式の型——やっっていることは影撃と変わりはないが、切り返しの一投目に対奥儀「超越制御」^{レジョン・スラッシュ}で、一投目よりも早い速度で振るい二投目が一投目を追い越す影撃対策をした相手への奇襲攻撃。

参の型——投げた一投目の柄尻に二投目の穂先を当てて威力を上げ、障壁を突破するための攻撃型の影撃。

「工夫すれば影撃だって色んな技が出来るんだぜ!」

エリックの言葉を聞きながら、セリスは刺し貫かれた特殊武装をパージする。

(強い……ですが、弱点も見えましたよ)

セリスはダガーを投擲する。

「ふん! この程度の攻撃でっ——」

そう、これぐらいでは《クリアウイング》に傷を付けるのは難しい。しかし――

「あなたの特殊武装の弱点、それは自身だけを対象に取るものではないと無効化が出来ないです」

ダガーを弾いたエリックの真上から凜んとしたセリスの声がした。エリックは慌てて顔を上げるが、既にもう《雷光穿槍》ライトニングは眼前まで迫っていた。

セリスは先程から神装を使いつつ、その弱点を探していた。《雷光穿槍》ライトニングランスの雷閃を弾いたが、神装の《支配者の領域》デイベイン・ゲートは無効化できなかった。ここから予想ができるのが、効果を発揮する範囲が決まっていること。ならば、セリスは最後の技にかけた。

セリスの最後の技――『重撃』。ダガーを投擲すると同時に、自身は《支配者の神域》デイベイン・ゲートの能力によって相手の背後に瞬間移動をおこなう前後から同時に攻撃を繰り出す必殺の技。

今度は雷を飛ばすのではなく、槍に纏わせて貫く。纏う事で無効化を防ぐためだ。

渾身の一撃。

しかし――

「時空超過！」トランスミグレーション

瞬間、《雷光穿槍》ライトニングランスの穂先は空を切った。

「――つ!？」

セリスは目を疑った。あの状況で攻撃を避けるのはまず不可能だ。だが、もし可能とするならば方法はある。それは、《リンドヴルム》の神装と同じ空間転移、もしくは――瞬間移動。

「はああああああ!？」

次の瞬間、真横に白翼竜が拳を振っていた。風を纏った拳は自動で発動する障壁を越えて突風がセリスに襲う。演習場の壁まで弾き飛ばされたセリスは苦悶の呻き声を漏らす。

「くう……い！ 今のは空間転移? いえ、これは?」

「対奥義」時空超過トランスミグレーション――神速制御と強制超過の合わせ技。暴走させたエネルギーを一瞬にして推進装置の出力に変化し零から百へ

のロケットダッシュを可能とさせる」

その性質上、空間転移ではないが一瞬にして最高速度になるこの技は相手の視界を置き去りにする高速移動。連発は出来ないが、どの場面でも一瞬で回避&反撃ができる。

「もう攻撃するのも疲れて来たぜ」

「そうでしょうね、顔色が悪いですよ」

「それを言うならあんだだって神装の使い過ぎで疲れてるだろ？」

神装機竜は普通の機竜の倍以上疲れる。神装を使えば加速的に体力を奪われるのも必然。セリスはここまで何回も神装を使っている。流石に女子だからと言って長くは持たない。

「見栄を張り過ぎると死んじまうぜ？」

「大丈夫です。私は貴方がたを倒すまで死にませんので」

「……セリス、まだ爺さんのことを——」

エリックの忠告を断ったセリスに、心配そうに声をかけるジーク。その顔には親友を思い労わる悲しげな表情があった。

「お前の気持ちはよくわかる。だけど、一人で背負う必要は——」

「黙りなさい」

凜とした、しかし何処か苦しいその声でセリスは放った。

「ウェイド先生を殺したのは私です。罰は私一人で十分です」

「……この頑固め」

目を伏せ歯軋りしたジークは、最後の一撃に全てをかけるべく意識を集中させる。

「テメエのそういうところが心配だって——言ってるんだぜ！」

再びエリックに戻ると《クリアウィング》の全身に風を纏わせる。空気圧は今までの倍以上あるだろう。

エリックの研ぎ澄まされ、決意が籠もった目を見てセリスも突きの構えを取る。

「これが最後です」

《ライトニング光穿槍》に雷を纏わせて一撃必殺を狙う。そして、長い時間睨

み合いが続いたかと思えた瞬間——

カーン！

呼び鈴の鐘が鳴ったと同時に、目にも止まらぬ速度で双方は駆ける。

「旋風のヘルダイブスラッシュャー！」

「はあああああ！」

？

黄金の雷光と翠の竜巻がぶつかり合った瞬間、視界の全てが白色の閃光で埋まった。

『キャアアアアッ！』

爆音と暴風が観客席を襲い女子生徒たちは悲鳴をあげる。薄っぺらい障壁一枚は意味を成さず、容易く吹き飛ばされる。

雷が演習場の壁を砕き、暴風が観客席を削る。まるで天変地異が起こったかのような出来事に為すすべがない。

しかし、嵐は長くは続かない。弱まる頃には視界が晴れる。

「はあ、はあ……危機一髪だった」

《ワイバーン》を纏ったルクスが冷や汗を拭いながら後ろにいる妹に視線を向ける。

「アイリ、大丈夫だった？」

「なんとか大丈夫です。それよりも他の人達は——」

「Yes. みなさんが瞬時に動いてくれた事で生徒たちには怪我が無いようです」

ノクトの説明により周りを見渡すと『騎士団^{シヴァレス}』のメンバーが障壁を張って生徒たちを守っていた。しかし、あの破壊力は危なかった。もし少しでも遅れていれば大惨事だっただろう。

「兄さん。そろそろ演習場が晴れるころですよ」

「どつちが……勝ったんだ？」

風と雷で巻き上げた砂埃が晴れて、演習場の中が見えてきた。まず、はじめに現れたのが——

「リーシャ様と——」

「サニア先輩が!？」

観客席にいた生徒たちより衝突の余波に間近にいたりリーシャとサニアは、壁に叩きつけられたらしく意識はあるが強制的に機竜を解除させられていた。

「う……、勝負は、どうなった？」

「セリス姉様？」

どうにか立ち上がったリーシャは演習場の中央に目を凝らす。

そこには――

「はあ、はあ……」

「――」

半壊状態の《リンドヴルム》を纏ったセリスと、地面に倒れ伏したジークの姿だった。

「戦闘続行不可能と見なし、三年生『セリスティア・サニア』ペアの勝利とする！」

その瞬間。素早くライグレイが勝敗を告げ、模擬戦終了の鐘が鳴る。直後に大歓声が、演習場に降り注いだ。

？

「ジーク……!?!」

倒れ伏して起きないジークを見て、リーシャは慌てて駆け寄る。教官たちも流石に危険だと感じ救護班を呼んだ。

そのままジークは救護班に担がれ演習場を後にする。

「やられてしまいましたね。二人とも……」

ルクスの隣で見ていたアイリが、微かなため息とともにそう言った。

「Yes. ですが、かなり健闘したのではないかと思います。あのセリス先輩を相手に、よくここまで」

ノクトも同意して頷いた。

「ジークさんが不調だったこともありましたが、あそこまでセリス

先輩を追い詰めたのはジークさんが初めてです」

「……《クリアウイング》の特殊武装は《リンドヴルム》に対して効果的でしたが、流石は『起動定石』と呼ばれるだけありますね」

「起動、定石……？」

アイリの口から聞き慣れない単語を聞き、ルクスは首をひねった。

「彼女は幼い頃から、剣や機竜ドラグナイト使いとしての高い資質があつたようですが、中でも特異な才能を持っていたらしいです。……あらゆる状況を想定した戦術を覚え、即座に最善の策を実行する能力からそう呼ばれているらしいです」

《クリアウイング》の特殊武装の弱点を瞬時に看破し、そこから逆転の糸口に繋げる思考の瞬発力。機竜操作の技術や、《リンドヴルム》の性能の高さだけじゃない。

（神装機竜に機動定石、か……）

似通った才能のジークとセリス。底知れぬ実力を、改めてルクスが感じ取っていると、

「……………」

つんつんと、隣からルクスの肩をフィルファイが軽くつついてきた。

「ルーちゃん。ジークくんのお見舞い、行ってあげて」

「……あ、うん。そうだね」

とりあえず、リーシャとクルルシファーの身体が心配だ。ルクスは立ち上がると、フィルファイたちと一緒に観客席を後にした。

？

校内選抜戦で怪我人が出やすいこの数日は、臨時の休息室がいくつか用意されていたが、リーシャとクルルシファーはまず、医務室に運ばれたようだった。学園の廊下を歩くと、医務室のドアの前でリーシャが立っていた。

「リーシャ様！」

「ん？ああ、ルクスカ」

「そ、その——ジークは、大丈夫ですか？」

少し緊張しながら、ルクスは問いかける。すると、リーシャはため息を漏らしながら、

「安心しろ。今は女医が診ている。そろそろ——」
リーシャがそう言うと、タイミング良く医務室から女医が出てきた。

「あら、お見舞いに来てくれたの？　ちょうど良かったわ。いま意識を取り戻したところよ」

「……!!　ジーク!？」

さつきまで余裕の姿勢はどこいったのか、リーシャは慌てた様子で医務室に入ってしまった。やはりジークの事を心配していたのだ。

医務室に入るとベットに横になっている身体に包帯を巻いた、大量の脂汗を流しているジークがいた。

「大丈夫か？」

「はあ……はあ……リーシャ？」

苦しそうに喘いでいるジークは、声の主を確認するように薄目を開ける。

「すまない。せつかく『ティアマト』の機攻殻剣ソード・デバイスを貸してもらったのに、負けちゃった」

「戦いの勝敗は良い。お前は自身の全てを出し切って戦ったのだから」

リーシャが労いの言葉を言うと、ちょうど入って来たルクスたちも見舞いの言葉を言う。

「お疲れ、ジーク」

「はは、負けちゃった」

その後、フィルフィ、アイリ、クルルシファー、が労いの言葉を言う。と医務室の扉を叩く音が響く。そして、入って来たのは——。

「あなたは!？」

「失礼します。ジークのお見舞いに来ました」

鮮やかな金髪の、『騎士団シヴァレス』の団長。ジークの先程の相手、セリスティア・ラルグリス本人が。

「……何しに来た？」

宿敵の登場に警戒をするリーシャ。

「言いましたが、単なる見舞いです」

「……………」

そう言われてしまつては無碍に出来ないのでリーシャは押し黙るしかない。

セリスはベットにいるジークに目線を移す。包帯で巻かれているジークを見ると、どこか表情が暗くなる。

「申し訳ありません。……私のせいであなを重傷に——」

「なに謝つてんだ」

「え……………」

セリスの謝罪を、遮る様に言ったジークにセリスはきよとした表情に変わる。

「お前は俺に勝つたんだ。二十一勝、二十敗、五引き分けてお前の勝ち越した。胸を張つて、堂々としていろよ」

ジークは皮肉交じりに笑いながらそう言う。勝負事で怪我をすることは常あること。そのことは重々承知している。

「それにお前のせいで倒れたわけじゃないし、体力に限界を迎えたから倒れたわけでもまだ戦えたから。てか今日の俺の体調が悪かっただけで——」

ジークの言い訳を聞いて、医務室にいる全員は苦笑いをする。だが、そのお陰でセリスも笑顔になった。

セリスは、呆れたような小さなため息を漏らすと医務室を後にするべく出ようとしたその時。ジークが「だけど……………」、と言い止める。

「俺は負けたが、俺たちの戦いはまだ始まったばっかだ」

ジークは震える腕で人差し指をルクスに向ける。

「次は勝つ。俺たちが」

そう言い終わると、ジークは力尽きたように意識を手放す。やはり体力的にも精神的にも限界を迎えたようだ。

？

「セリス先輩……！」

ジークが眠りについてから、ルクスはすぐに医務室を出てセリスの後を追った。先ほど激闘を終えたとは思えないほどしっかりと歩みで、どこか含みのある強い視線をルクスに向ける。

「ほんの少し、意外でした」

その大きな胸元に手を当てて、セリスは独白のように呟く。

「あそこまで本気で戦う彼と、そして彼を引き留めている彼女たちは、本心からあなた達のために戦っているようですね」

おそらく、さっきの戦いと見舞いを通して、セリスにはリーシャたち女生徒の意志と覚悟を、直に感じたのだろう。

その超然とした支配者の気配が、ほんの微かにふわりと緩む。だが次の瞬間、背筋を震わせるような強い敵意が、ルクスを襲った。

「ですが、私の意志は揺らぐことはありません。あなたはまだ、この学園には不要な人間です。それを次のあなたとの戦いで、証明します」

「……あなたはとても強い人です」

戦い、人の上に立つことを定められ、そのために幼い頃から、あらゆる鍛練を続けてきた少女の姿。四大貴族の一角であるラルグリス家の威光。しかし、その確固たる意志に負けないように、ルクスもまた宣言する。

「でも——僕も託されたモノがあります」

ルクスもジークも決めていた。新王国の未来を担う、彼女たちの助けになる。どこよりも近いこの学園の中で、それを為すことを。

『お前の苦しみも、痛みも全て俺が引き受ける。そこでこの新しい国を助けてみせる』

「……………」

まつすぐな視線を返され、セリスは一瞬息を呑む。が、すぐにいつもの超然とした気配に戻ると、そのまますれ違い、歩み去った。

Part 14 少年の過去

校内選抜戦の二日目の朝は、静かに始まった。二日目の内容も昨日と同じで、教室で簡単な予定と話を聞いた後、ひたすら対戦を行うだけだ。が、貼り出された昨日の対戦結果を見て、ルクスのいる二年生の教室では、少し沈んだ空気が流れていた。

「厳しいですね。やっぱりまだ、わたしたちが三年生に勝つのは、無理なんではないか?」

「あたしも、結構頑張ったんだけど、な……」

「その、ルクス君。ごめんね……」

などと、ぼやくクラスメイトたちの姿が、ちらほら見受けられた。それも仕方の無いことだろう。昨日の対戦、ジーク&リーシャ対セリス&サニアのタッグ戦は惜しくもジーク達が負けてしまった。それが不穏な空気を呼ぶ結果となった。

現状、一、二年生の得点は三十三点、三年生の得点は、五十二点と明らかな差がある。

「気にしないでください。僕も今日、頑張りますから」

謝罪の声をかけられたルクスは、そう笑顔で返す。

「う、うん……」

クラスメイトの少女たちは頷くが、あまりその声は明るくない。セリスとの直接対決の予定こそないが、昨日から勝っている『騎士団^{シヴァレス}』の三年生たちと、三連戦する予定になっているのだ。

ただ戦うのならまだいい。しかし、ルクスは自ら攻撃を行わず、防御に特化した戦術を使う、『無敗の最弱』だ。今回のように、勝たなければ得点が入らない戦いは、相性が悪い。

だが、とある秘策がある――。

「……よっ」

試合の時間が近づいてきたので、席を立ち、教室の外へ出る。

ジークは医師からドクターストップが言い渡されているため、医務室から出られない。リーシャもジークを看病するために観客には来れない。なので、ルクスはフィルフィとティルファアの二人と一緒に

に、ひとまず演習場へと向かった。

？

同時刻。医務室ではベットに寝間着で横たわっているジークと、ジークを看病しているリーシャがいた。

「そろそろ、ルクスの初戦が始まるな」

「最初の相手は……サニア・レミストか」

リーシャが持つてきた今日の試合予定表を見ながら、ジークは呟く。

「どうだった？ 実際に戦ってみたサニアって人の実力は」

「中堅以上、ただしお前やわたし、神装機竜持ち未満だった」

流星に『騎士団』シヴァレスに所属しているだけあって実力はそこそこあるよ
うだ。しかし、その程度ならばルクスの障害にはなるまい。

「それに、ルクスにはわたしが開発したとっておきの武器があるから大丈夫だ」

「どうやら心配はいらなかったな」

ジークはため息を吐きながら身体を上げると、鈍痛が襲う。

「ツ——!? いったえ、まだ身体が動けそうにないなあ」

力なく倒れ込むジークを見て、呆れた表情のリーシャは手拭でジークの汗を拭いた。

「あんな攻撃をもろに当たれば誰だって行動不能になる。むしろお前は死なずに済んだだけで良かった——さてよ？ じゃあなんで、セリスは動けてお前は……おい、ジーク。わざと負けたな？」

「……なんのことかなあ？」

にやにやしながら答えるジークに、再びリーシャは呆れた。

？

そして、ルクスとサニアの模擬戦から、数時間後。二日目の、個人戦をメインとした選抜戦の戦いは終わり、夜がやってきた。

初戦のサニアをリーシャが開発した新武器を使い、新しい技、『極撃』で勝利を収めるとそのままの勢いで残る二戦も勝利した。それに士気を上げた一、二年生たちも奮闘し、まだ三年生サイドが優勢でありつつも、勝利の行方はわからない状況だ。

しかし、上出来な結果だったが、それとは別に、ルクスにはある問題があった。

「そ、それで、明日のことなんだけど——」

「Yes. ルクスさんは本当に、いろいろな面倒に巻き込まれる宿命を負っているのですね」

そう切り出したルクスに、黒髪の大人しそうな少女——トライアド三和音のノクトは、しみじみとした口調で言う。

「そう言えばそんな約束をしてたな。まったく俺には関係なかったから忘れてた」

「どうしてそういう、私が相談されたくないことだけ、私を頼ってくるんですかね、兄さんは」

そして、ベッドの上で思い出したジークと、呆れたようにため息をついた妹のアイリ。医務室に集まった彼らは、急いで解決方法を見つけてなくてはならない、特別な問題があった。

「明日の休日に、あのセリス先輩とデートの約束をしていたなんて、兄さんは何を考えてるんですか？」

「……………」

そう言われてしまうと、とっさに何も言い返せない。

校内選抜戦には、休日というものが存在する。連戦による疲労の蓄積を防ぐため、五日の中日に丸一日の休みがあり、その間生徒たとは緊急時を除き、ドラッグライド装甲機竜の使用は禁じられる。

「そもそも、そのデートの話は、兄さんの可愛い女装姿——『ルノ』さんという、架空の少女に対して申し込まれたものですよね？」

「えっ……………!? まあ、その——」

「では、そんな約束なんて、無視していいんじゃないでしょうか？ どうせその『ルノ』さんは、学園に存在しないわけですし——」

素っ気ないアイリの一言に、ルクスが我に返る前にノクトが答えた。

「Yes. 仕方がありませんね。優しいルクスさんでは、セリス先輩との約束をすっぽかすのは厳しそうですね」

ノクトがそう、静かな口調で言うどジークも頷く。

「まあ、でも起こったことは仕方ない。——じゃあ、ここは『ルノ』で頑張ってもらおうか」

「なるほど、その手がありましたか」

ぽんと手を叩き、アイリが感心する。

「ああ、そっか。僕がまた女装すれば……。……って!? どうしてそうなるのっ!?!」

一瞬ルクスは頷きかけ、途中で思いつ切り突っ込んだ。が、ジークは平然とした顔で、

「は? お前は明日、『どうもくセリス先輩。実はルノって言う美少女は僕でしたくぐへへへ(裏声)』っで、猪突猛進女がどうなるか想像してみろ?」

「うっ……それはそうだけどって全然声にてないし!」

割と必死に、ルクスは言った。

「Yes. ですが考え得る限り、これが誰も傷つかない最良の方法かと思えます」

「いや、僕が傷つくから!? 結構心が痛いからこれ!」

「お前だけ傷つくだけだからオツケーじゃね?」

「いや解決しないでほしいんだけど!」

「でも、肝心の女装はどうやってやるんですか? 確かその一式は、学園長に返したと聞きましたか——」

ルクスの叫びを無視してアイリが呟くと、ノクトは部屋の隅においてあった鞆を持ってきて、中身を取り出した。

「Yes. そう思って、ついさっき、学園長から女装道具一式を借りておきましたので、ご安心ください」

「ちよつと!? 何でそんな手際がいいの!? 最初から僕に女装させる気だったでしょう!?!」

ルクスが叫んでいる間にも、ジークは鞆の中を物色する。

「あ、化粧道具もある。メイクは任せろ」

持ち出したメイク道具を指に挟み腕を交差させ、ドヤ顔で言う。

「いやなにのりのりなんだよ！ その『プロですから』って顔やめろよ！」

「兄さん、ちよつと静かにしてください。もう夜なんですよ？」

「……あ、ごめん。いやでも、お願いだからやめて——!?!」

という、ルクスの訴えも虚しく、完全に三人はその方向で話を進めてしまう。結局、明日のセリスとのデートは、『ルノ』という少女として行くことになってしまった。

「それはそうとして、せっかく別人として会うのでしたら、セリス先輩に探りをいれてみたらどうですか？」

女装セットの鞆を手に、今日はもう寝ようとしたとき、そんなアイリの声が耳に入った。

「え——?」

ルクスの疑問に、アイリは平静な顔で言ってくる。

「デート中に聞き出す機会はあると思いますよ？ セリス先輩が男嫌いになった理由を、運良く知ることができれば、何かの役に——」

「それは、ちよつとできないよ」

きつぱりと、ルクスは言い切った。ただでさえ変装でセリスを騙してしまったのに、そこから更に彼女の本音を引き出そうとするのは、さすがに悪すぎる。

「お人好の兄さんなら、そう言うと思いました」

アイリもルクスの反応を予想していたのか、ただ微笑みを浮かべる。それで、話は終わりのはずだった——。

「しかし、ジークさんなら知っているのではないのでしょうか？」

視線をジークに移すと、先ほどの和気あいあいとした目ではなく、鋭い視線でジークを見る。

「ど、どうしたの急に?」

空気が変わったアイリに、怪訝な表情で問うルクス。

「ジークさんは前々からセリス先輩と面識があるようです。それな

らなせ、セリス先輩が男嫌いか知っていますね？」

言われてみるとそうだ。ジークはセリスの事を猪突猛進女と呼んでいる。面識がない状態でそう呼ぶことは不可能だ。それに、ジークとセリスの喧嘩しやまぶもある。あのかなりの回数を見る限りそうとう会っていたのだろう。

「言ってくれますよね？」

「……………」

ベッドの上でジークは少し考える仕草をすると、深いため息を吐く。

「仕方がない——。話すとしようかな。あれは五年前、革命が起こった日だ」

神妙な顔で話したジーク。そして、夜が更け次の朝がやって来た。

？

翌日。ジークは早起きし、ベッドから立ち上がると身体の調子を確認するように少し軽めの運動をしていた。

「よし、もう動いてもよさそうだな——」

そう言っていると、医務室の扉を叩く音がした。こんな早朝から自分を訪れるのは誰だろうと思案する。リーシャかな？いや、一昨日から徹夜で機竜の整備をしているからこの時間は寝ているはずだ。そうなる、ルクスやアイリぐらいになりそうだが。

入室の許可を出すと、意外な人物が現れた。

「おはようございます」

鮮やかな金髪と、底なしに深い翡翠の瞳。そして、なによりはち切れんばかりの豊かな胸を持つ少女。四大貴族のセリスティア・ラルグリスだった。

「どうした？…こんな朝早くから」

学園の在学をかけた戦いをしているはずなのに、ジークは親しい友人に声をかけるようにセリスに挨拶をした。

「あの、その……一つお願いがあるのですが——」
頬が僅かに紅く染まり、恥ずかしそうに俯くセリス。中々喋らない
じれったい空気に我慢できず。ジークが先に喋り出す。

「この後、結構忙しいから早めに用件を言ってくれるかな？」

「あう、い、言います！ その、実は今日だいじな用事がありました
——」

そして、数刻後。

今日の天候は幸か不幸か、校内選抜戦の休日は、朝から抜けるよう
な快晴だ。模擬戦の疲労を癒すため、昼まで眠りこけたいものだ。

偶然にも、学園内に人気がないことが、セリスを待っているルク
スにとつてはありがたいことだが——、

「……はあ、どうみても女子だよなあ」

ルクスは手鏡を見ながら、自分の姿を見た。何より、下着まで女子
の物なのだ。

（渡されたときに服をよく確認しておけば、こんなことにはならな
かったのに——）

そのことをルクスが激しく後悔していると、

「——おはようございます。ルノ」

「うわ……ッ!？」

いきなり声をかけられ、ルクスは飛び跳ねそうになる。制服姿のセ
リスが、いつの間にかルクスの隣にいた。いつもの制服姿であつて
も、気品があり美しい。それに——、

「どうか、しましたか？」

「いつ、いえ、なんでもありません。その——綺麗です」

「まあ、ありがとうございます。今日は気合を入れて久しぶりにお
化粧してもらったのです」

褒め言葉を言ったルクスに、セリスは嬉しそうに微笑む。不意打ち
のようなその笑みに、ルクスは不覚にもドキリとしてしまった。

しかし、それもその筈だろう。端正の顔立ちに、更にその美しさを
引き立たせるようなメイク。それだけであらゆる男、いや女性でさえ
目を惹く美貌だ。

「では、いきましようか？ 本当は、あなたの私服を見てみたかったです、まだ休日ですからね」

そう言つて、セリスはルクスの手を取つて歩き出す。

？

「ふああ〜……」

ジークは大きな欠伸をしながら、医務室のベッドで寝そべつていた。こんな快晴な日には寝るにかぎる。——とはならない。

「大きな欠伸をしているところ悪いが、お前とセリスの関係をここで吐いてもらうぞ」

鋭い目線でリーシャはジークを見つめる。どうやら、ばれてしまつたらしい。

「あのセリスティアにメイクをしたそうじゃないか。それに、前々から聞いておきたかったのだがあの女とどういった関係なのだ？」

これは誤魔化しようがない状況のようだ。

「うーん……」

炎が城を焼き。全てが変わろうとしたその日。俺は城を飛び出し、とある場所に向かつていた。帝国に監視されていた俺を匿える場所へと。

傷だらけの身体で飛び続けたため、目的地に着いた時には既に体力の限界だった俺は気絶してしまった。

「……………」

そして、目覚めた時には初めて見る天井と、初めて感じたふかふかのベッド。全身に怪我をしていたため、首しか動かせないが十分だった。

「すう…………すう」

右手に温かい感触と寝息を感じ取り視線をそちらへと動かした。そこには黄金の髪をした少女が自分の腕を大事そうに握りながら

眠っていた。

もう一度あたりを見回してみる。豪華な部屋にふかふかなベッド。そして、自分の腕を掴み続ける少女。まだわからないが、ここがどうやら自分を匿ってくれるところらしい。

考え浸っていると少女が可愛らしい欠伸をした。

「ふああ……」

眠たそうに目を擦りながら少女は起き上がり、少年と目が合った。すると、目が急にキラキラと輝き出すと立ち上がった。

「やつと目覚めたんですね！家の前に倒れていたので看病しました！あ、私の名前はセリスティア・ラルグリスと言います！貴方の名前はなんですか？」

捲したてるように言い続ける少女、もといセリスティア。しかしながら、今の自分にとっては煩いだけだった。

「……」

セリスティアから視線を逸らし狸寝入りをする。その後もセリスティアが何かと喚いていたが聞かないふりをした。

自分がこの家に来てから二日目。起きてみるとベッドのすぐ横にパンとスクランブルエッグが乗った皿が置いてあった。それを見た瞬間、自分の腹が鳴ったので有り難く食べることにした。パンの麦の香ばしさとスクランブルエッグの丁度いい塩胡椒の振り加減がとても美味しかった。

その後、セリスティアがまた部屋に来たがまた狸寝入りをした。

その次の日も、また次の日もセリスティアは無視を続ける俺の所に飽きずに通い続け会話をしようとは何度も話しかけてきた。「好きな花」「好きなお菓子」時には、セリスティアが経験したその日の出来事を俺が寝る直前に言っただけからたまったものじゃなかった。

だが、ある日の夜にジークはいつも通りに狸寝入りをしていたら聞いてしまったのだ。セリスティアが息を殺して嗚咽を漏らす音を。その時のセリスティアの顔は見ていなかったがそれがこの少女の本当の心なのかもしれない。自分の本心を押し殺す必要があるほどの出来事が、まだ幼い彼女に責任と言う重圧がのしかかっているのだ。

その日、またセリステイアは俺の所に来た。

「——それで、今日はとても美味しいパンを焼きました！」

俺はいつも通りに狸寝入りをしていたが、この前のセリステイアの鳴咽が

頭をよぎる。心の中でため息を吐くと体を寝返りさせてセリステイアの方に顔を向ける。

無言で目を合わせてきたジークの瞳に、セリステイアは首をかしげる。だが、ジークはセリステイアを見つめたままベットから手を伸ばしセリステイアの手を取った。セリステイアは更に頭の上にハテナマークを出す、それを無視して彼女の手のひらを撫でる。

ザラザラとした感触。令嬢の彼女に相応しくない手の傷にジークは懐かしい物を感じた。

「この手のたこ。——剣を振り続けてきた奴にしかできない物だ……」

しかもそれは一朝一夕の物ではなく何日、何ヶ月とやり続けた証である。

「お前……何か悲しいことでもあったのか？」

「……!？」

セリステイアは目を見開きいかにも動揺した表情をしたが、話そうとはしなかった。

「まあいい、明日から構ってやるから今日はもう寝ろ」

俺はセリステイアを追い払うと毛布を掴んでベットの中に潜り込む。眠りながら明日からどうするかを考えた。

次の日、日の出の前起きてベットから起き上がると身体を巻いていた包帯を解いて全身の傷口の具合を確認していく。全体的な傷の具合は回復していたが、一部だけまだ治っていない部分があった。臍の辺りの火傷と刺し傷、まだ痛みを感じる。

俺が全身を確認している時、部屋に誰かが入って来た。

「おはようございます。昨晚はよく眠れまー」

部屋に入って来たセリステイアの息を呑む音がした。振り返ると顔と耳を真っ赤に染めた状態で明後日の方向を向いている彼女がい

た。

「お前か、丁度いいところに来たな。湯を沸かして欲しい、あと俺に合う服を用意してくれ」

「えっあ、その、えっと……」

俺が頼んでもセリステイアは混乱でまともな返事が返ってこなかった。「はあ……」と、小さなため息を吐くとセリステイアに問いかける。

「お前、男の体を見るのは初めてなのか？」

「……！」

セリステイアは更に顔を真っ赤に染めビクツ！と体を震わせる。上半身だけ包帯を解いたから良かったが、これが全身だったらきつとセリステイアは気絶していただろう。仕方なく毛布を羽織るとベツトの上に座る。

「ここで待ってるから、頼んだぞ」

俺がそう言うと、以前に混乱状態だったセリステイアは幾分か呼吸が落ち着いて来たのか、顔がまだ真っ赤な状態で部屋から出て行った。気持ちを安定させる訓練でも積んでいたのか思ったよりも復帰が早かった。

セリステイアが部屋から出て15分経つか否かに女中が風呂の準備が出来たと知らせに来了。礼を言ってから俺は女中に案内され集団浴場に一人いる。時間が時間だから仕方ないが、こんなおつきい浴場を一人で使うとなると王族な気分になれるが、つい数日前にはアーカディア帝国が滅びたなど自嘲気味に笑った。

お湯で体を清めた後、湯船に浸かり体を伸ばす。すると、全身の骨がポキポキと快音を鳴らす。寝続けた為に体が鈍と化している。充分に浸かると風呂から上がって脱衣場に戻ると一着の執事服が置いてあった。摘み持ち上げると丁度俺ぐらいのサイズだった。これを着ろということか？

脱衣所を見渡してもこれ以外の服が無かったので仕方なく着替える事にした。少し丈直しが必要な部分があるが、まあだいたい合ってるので良しとするか。着替え終わって脱衣場から出ると、脱衣場前に

腕を組んだセリスティアが待っていた。表情から察するに怒っている様に見えるが。

「……………どうした？」

「私は……………お父様の裸さえ見たことありません」

「……………はあ？」

俺が質問をするとセリスティアは訳の分からない事を言い出した。訳が分からなすぎて眉毛が上がったほどだ。

「貴方は私を辱しめました。この責任を取ってください！」

「……………あーうん。ちよつと待て」

だいたい理解した。うん、なるほどねうん。

「俺は別にお前に俺の身体を見せようとした訳じゃないんだが？」

「いいえ嘘です。私が部屋に入った時には脱いでました」

「いや、それはお前が俺の部屋に入る時にノックしなかったせいだろ」

俺が事実を言うとセリスティアはたじろいだが、性格が負けず嫌いなのかすぐに食らいついて来た。

「それは違います。常識的に考えて部屋の中で裸になる方がおかしいです」

「部屋の中ぐらい脱いだって平気だろ」

「私の家です」

「個人のプライバシーは守って欲しいなあ」

「ぐぬぬっ……………」

流石に言い返す言葉を見失って来たのかセリスティアは考え込む。ちようどこの辺ぐらいで話を変えやすいと感じたので本題を言う。

「ま、そんな事より今日から俺がお前の教育係をする」

「……………何故あなたなのですか？」

首を傾けて疑問するセリスティア。先程の会話は忘れたらしい。

「まあ、誰かの言伝かな。お前の教育をしてくれつてよ」

「え、えーとまだよく分からないのですが」

「今は分からなくてもいい。いずれ教える」

セリスティアは俺の言葉にまだ分かっていたいなかったようだが、俺はそっちの方がちようどいい。

「とりあえず、ちよつと住ませて貰うからよろしくな」

俺は右手を出し、握手を求めた。

「俺の名前はジークIIザン・エリック・フロリア・ルーカス。名前が長いからジークだけでいい」

「……私の名前はセリスティア・ラルグリスです。私はセリスと呼んでください」

セリスは俺の右手を握った。そうして俺はセリスの教育係兼ライバルとして半年以上をここで過ごすことになる。

Part 15 終焉神獣

真昼の医務室で男女二人がいる。リーシャとジークだ。

「と、まあこんな感じで半年以上をセリスのところまで新王国に変わった後のほとぼりが冷めるまで居候してた訳よ」

「そ、それじゃあお前とセリスの間には何も——」

「うん、ないよ」

にこやかに俺は笑うと、リーシャはほっとした様な表情になる。

「だから俺も何でアイツが男嫌いになったからわからないんだよな」

口元に手を当ててジークは考え込むが、はつきりとした原因が思いつかない。

「俺を色魔って呼ぶ原因はアイツがノックもせず俺の部屋に入つて来たりしてその度に俺の体を見て勝手にシヨックしてたからそれで言うようになったんだよな」

「じゃあ、ジークは何でセリスのことを猪突猛進女って呼ぶんだ？」

「それは・・・セリスが俺に性懲りもなく勝負を挑んでくるしアイツは定石しか覚えないから何回か手合わせするとパターンを覚えやすいんだよな。だから猪突猛進女って呼んでんだ」

つまりこの二つはお互いを揶揄うための渾名という訳だ。

「・・・そうだ」

やる事を思い出したかのように、ジークは顔を上げる。

「リーシャ、今から手伝って欲しい事があるんだが」

「何を手伝って欲しいんだ？」

急にやる気を出したジークに、嫌な予感しかしないリーシャ。

「それはだな——」

「……………本当にやるのか？」

悪い顔で言ったジークの言葉に、リーシャは驚き目を開く。しかし、それは逆にこの男の悪戯心ジークを煽る行為でしかないのだ。

「さあ、悪巧みは思い立ったら急げだ。さっそくとりかかるぞ」

ベッドから出ると来ていた服を脱ぎ捨て、制服に着替える。ジークの一連の流れをリーシャは頬を染めながら手で目を隠す。だが、指と指の間が若干空いていて隠せてないのは秘密だが。

「よし、明日までには終わってなきやだからな。今日は徹夜になるかもな」

「むう、徹夜になるのはいいが。ジークの身体は保つのか?」

重傷の状態からまだ二日しか経ってない。普通なら絶対安静だが。

「ん? ああ、大丈夫だよ。確かにまだ重傷だけど痛みには慣れてる」
そうこうしているうちに、ジークは制服に着替え終わる。

「んじゃ、行こうぜ」

活き活きしているジークが部屋を出て行くのをリーシャは呆れ顔で着いて行った。

??

一方、ジーク達が学園でよからぬ事をしようとしてるとは別に、ルクス改めルノとセリスの方では緊急事態が起きていた。

外出先の屋台が多く建ち並ぶ中央広場に耳をつんざくような奇妙な不協和音が鳴り響いた。そして、直ぐに中型の幻神獣^{アピス}——『キマイラ』が仕事終わりに賑わっていた中央広場に降り立ち恐怖と混乱を叩き込んだ。

当然ながらセリス達は中央広場に向かうが、ルクスは困った事が起こった。《ワイバーン》は休日に修理して貰うため今は持っていない。《バハムート》を使えば自分の正体^{アピス}がここにいる民間人やセリスにバレてしまう為にルクスは抜剣に躊躇う。

(どうする? このままじゃ——)

「——」

《バハムート》の柄を持ちどうするか悩んでるルクスの横を黄金の一条が疾駆する。

「セリス先輩!」

走りながらセリスが召喚したのは、神装機竜の《リンドヴルム》で

はなく、汎用機竜の《ワイバーン》を召喚した。

「―――デイズスター《D》」

セリスは《ワイバーン》を高等技術の無詠唱で纏うとその腕に灰色の機竜牙剣フレイド――ジークが作った補助武装《D》デイズスターが送られた。

(なんでジークの武器がセリス先輩に?)

ルクスが疑問に思っているその間にもセリスは飛翔し、キマイラと肉薄する。

「ギイシヤアアアア!!」

キマイラが雄叫びを上げ接近するセリスに迎撃を仕掛ける。だが、相手は幾多もの修羅場を潜り抜けた歴戦の機竜使いドラグナイト。振り抜いた高速の斬撃がキマイラを一撃で倒した。

(今のは……クイックドロウ神速制御? いや、似てるけど少し違うような)

剣の振り方はルクスよりジークに酷似している。剣速ではルクスやジークにこそ劣るものの、中級ミドルぐらいの機竜使いドラグナイトでは目で追うのは難しいだろう。

「すごい……」

思わず、ルクスの口から感嘆の声が漏れる。高速で剣を触れることも無詠唱で機竜を展開できることも驚くべき事だが、キマイラは生命力が強く豊富な攻撃手段を持っている。機竜使いドラグナイト単騎で戦うには、かなり厄介な種だ。それをこともなげに初撃で屠ったことに、改めてセリスの強さを実感した。

「倒しました。他に敵の気配はありません。大丈夫ですか、ルノ?」
と、剣に付着した血を振り払い安全を確認しようと振り返ったそのとき、巨大な塊が、その背後で起き上がった。

「危ないッ!」

「―――」

ルクスが叫ぶと同時に、セリスの《ワイバーン》が素早く上昇する。一瞬前までセリスのいたその空間を、吐かれた業火が焼き払った。

「くっ……!?!」

眼前の炎に煽られ、ルクスは高熱と異臭に眉をひそめる。胴体を斬り裂かれたはずの傷は塞がった。いや、それだけではない。鋭い肉食

獣の双眸は、漆黒に染まり、瞳孔が大きく開いている。更に、体表は赤黒い血管のような、奇妙な模様とも筋ともつかぬものが浮き出ている。調査書には、キマイラは別段、再生能力に長けた幻神獣^{アピクス}ではない。にもかかわらず、あの状態から瞬時に蘇った理由が、まるでわからない。

「どういうことですか?——何故、キマイラが?」

飛翔した中空へ逃れたセリスは眩きつつ、再び^{ディザスター}《D》で追撃をかける。だが、

「ギイ、イイエエア……ッ!」

「……ッ!」

キマイラは狂ったような咆哮を上げ、セリスが繰り出した刺突の一撃を前足で挟み、つかみ止める。直後にもう片方の腕に^{フューラー}《F》を召喚しキマイラの目に銃弾を浴びせるが、キマイラは剣を離さなかった。

「シャアアアアアッ!」

奇怪な鳴き声とともに、鋼のような尾っぽの蛇が、ずるりと数倍まで伸びる。そして鞭のようにになると、弧を描いてセリスの背後から襲いかかった。

「セリス先輩ッ!」

「……ッ!」

紫の毒液を帯びた、牙の攻撃。それを察知すると同時に、セリスは動いていた。

「ギイツ!」

《D》^{ディザスター}を持つていた方の腕を離し、振り返りながらも片方の腕に握っていた^{フューラー}《F》で襲いかかった蛇の半身を吹き飛ばす。

「なるほど、加減は要らないようですね」

《V》^{パニッシャー}も召喚すると三つの武器を合体させ、^{ザ・ピースト}《V・F・D》にする。大剣が《ワイバーン》のエネルギーを吸収すると、剣先から斬撃が迸った。

「グ、ギ……!アア……!」

さすがに耐えきれなかったのか、前足で食い止めていた先端を突き抜け、斬撃が胴体をぶち抜いた。今度は核を正確に貫いたらしい。断

末魔と共に全身が発光し、燃え尽き真つ黒な灰となつてしまった。突然城塞都市を襲つた怪物が消滅し、中央広場からは歓声が上がった。

「幻神獣アピスは、この一匹だけのようですね」

だが、セリスは真剣な表情を崩さず、周囲に視線を這わせる。ルクスも辺りを警戒してみたが、他の幻神獣アピスなどの気配は感じられなかった。

(ひとまず、周囲にはもう、いないみたいだ……)

幻神獣アピスは遺跡ルインから出現する。その為、角笛を使って誰かが城塞都市まで誘導しなければいけない。ベルベットの時のように別の誰かが裏切つた可能性がある。ジークが言うには学園内の誰かが裏切り者だと言うが。

「敵を倒しました、ルノ。大丈夫でしたか？」

接続を解除したセリスは、ルクスの側に寄つて、ふつと頬を緩めた。自分が戦つていたのに他人の心配が出来る彼女はやはり強い人だ。

「はい、大丈夫です。それより、セリス先輩。先程の《ワイバーン》は？」

セリスが纏つた《ワイバーン》が元々誰のだったか気になつたためルクスは質問を試してみた。ただ、ある程度は予想が出来ているが。

「はい、こちらは私が出かける前にジークが《リンドヴルム》を預かる代わりに渡してくれました」

なるほど、だから《ワイバーン》にジークが作った《V・F・D》が積み重ねていたのか。

「あの、もう一つ気になることがあつたのですが……」

「はい、なんででしょうか？」

ルクスの質問に笑顔で応えるセリス。内心ドキドキしつつ、ルクスは質しようとしたとき、

「おねえちやん！ありがとうございます！」

見ると、幻神獣アピスに襲われかけていた幼い男の子が、礼を言いこちらへ駆け寄ってきた。

「あ、ちよつと待って！この人は——」

セリスの男嫌いを心配して、ルクスがそれを止めようとする——

「元気ですね。怪我はありませんか？」

と、優しい声で、少年の頭を撫でた。

「あれ…………？」

その意外な光景に、ルクスは驚く。子供だから男でも嫌悪の対象にならないという可能性も確かにあるが、噂では幼少の頃からの男嫌いだと聞いていたのに——。男の子と手を振って別れた後、セリスは改めて、ルクスに向き直る。そして、やってきた衛兵に事情を話した後、学園に戻ることにした。

「それで先程の質問はなんですか、ルノ？」

「いえ、その…………。子供だと男の子でも平気なんですね、セリス先輩は」

「……………」

軽い気持ちで言ったルクスだが、何故かセリスは固まり、押し黙ってしまう。そして周囲を見回し、辺りに人影がないことを確認した後、ぽつりと小さな声を漏らした。

「ルノ。あなたは男性が嫌いですか？」

「え…………？」

ふいに放たれた質問に、どう返していいかルクスは迷う。

「…………その、誰にも言わないと約束してくれますか？私は——
本当は、男嫌いなどではないのです」

「…………えっ!?？」

一瞬、何を言われたのかわからず、ルクスは困惑する。だが、セリスのもどかしげな表情を見て、それが冗談ではないと悟った。

「むしろ、男性には憧れと興味があります。私が幼い頃、お世話になった先生と、ジークは、優しく強く人でしたから。いつか私もそういう素敵な人と、巡り逢いたいと——」

「————」

セリスが言った言葉に、ルクスはフリーズ仕掛けた。え、ジークがなんだって？

「その、これも内緒なのですが、実は幼少の頃にジークとしか若い人

と会ったことが無くて、それでどうすれば若い人と良い付き合い方がわからないのです。それにジークは扱いがしにくい性格ですから、私に近づいてくる男性全てに強い警戒を抱いてしまい。それでも、どうか『男性は苦手です』と話していたら、何故か私が、男嫌いということになってしまつてですね……。何故、いつもこうなのでしょうか……」

と、肩を落としてがつくりと項垂れる。

(ジークが悪いのか、この人が単純に不器用すぎるのか……)

人との出会いにおいて、前情報は大きくその認識を占める。ジークがセリスに悪印象を植え付け、セリスが男を警戒する、男の方も余計に身構えたり、逆にへりくだらうとする。それが更に誤解を悪化させたのだ。

「ですが、私にはまだ、男性に好意を寄せることなど許されません。ジークに頼つたり、甘えたりもできません。私は四大貴族、ラルグリス家の長女です。学園の『騎士団^{シヴァレス}』団長です。とても重要な立場にいます」

「……」

貴族の中でも、特別な地位にある少女。だからこそ今の新王国において、毅然とした態度を取っていたということか。

今までの会話を聞いて、ルクスは少し真面目な表情になる。

「……セリス先輩って、実はジークの事が好きですよね？」

「……ふえっ!?」

ルクスの言葉に数泊遅れてセリスの顔が赤くなり、上ずった声が漏れ出た。

「な、な、何を言っているのですか!?? あの色魔の何処がいいと!?」

言葉では否定してるが、表情には分かり易い回答が出てた。

「だって、さっきからジークの事をずっと話してますよ。なんやかんや言つて、ジークの事を——」

「ダメです! それ以上の追及は不許可です!」

顔を真っ赤にしたセリスが、慌ててルクスの口を両手で塞いだ。上

氣した心と身体を落ち着かせるために深呼吸を何回かして冷静になる。

「確かに、ジークは黙っていれば強い軸があるとても優しい人ですが……どうしてもあの五月蠅い口がそれらを全て台無しにしてしまうんですね。はあ、勿体ないです。残念極まりないです」

残念そうにセリスは深くため息を吐いた。その表情には呆れが出ているが、僅かに笑顔も含まれていた。それに、と言ってセリスはルクスを諭す表情にしながら続ける。

「ジークに好意を寄せていたことは認めます。ですが、それは親友、と言う信頼できる友としてです」

まあ、例えるなら戦友でしょうか、とセリスは最後に付け足した。自然な笑みが本音だと分かる。そして、どこか懐かしむ顔を浮かべる。

「ジークは私のドラッグナイト機竜使いの先生でもあるんです。まあ、最初に動かし方だけ教わって後はずっと模擬戦だけでしたけどね」

淡々と呟いた言葉に、ルクスは啞然としていた。その理由は、ジークの教え方がとても危険なやり方だったからだ。

機竜を使った模擬戦は基本的にはしない。それは何故か。理由は『危険過ぎる』からだ。勿論、加減をすれば大丈夫なのだが、その加減を少しでも誤れば大事故になりかねない。機竜の一撃が生身に入ればそれだけで即死だ。

セリスの説明を聞く限り、ジークの虐待レベルの練習には理由があるらしい。動けなくなるまで叩き潰した後に、今度は逆に甘やかす。傷の治療も侍女に任せるのではなくジーク自身がセリスを過保護気味に介護する。この対極の行動は、危機察知能力を高める訓練をしつつ、その危険状態を通常と感じさせない飴と鞭方法でもあるのだ。

「ジークは、昔と変わってませんか」

「? そうなんですか」

「ええ、前回の戦いで、私が気付かなかった《リンドヴルム》の欠点を彼は戦いを通して私に教えてくれました。——あの人と同じで、やっぱり教えるのが不器用ですね」

「……あの人って？ 誰でしょう？」

言つてから、余計なことを聞くつもりはないのにしまったと、ルクスは思う。だが、

「ウエイド・ロードベルド先生です。旧帝国王家の教育係だった方ですよ」

「え……？」

その名を聞いて、ルクスははつと息を呑む。それは、ルクスの母方の祖父だったからだ。

「そ、その人って、まさか——」

「はい。ルクス・アーカディアの祖父ですね。私は昔、王家の教育係を引退されていたあの方に、剣技や戦術の指導をしてもらっていたのです」

「……」

ルクスは内心、唾然としてしまう。まさかこんなところで、セリスと繋がりがあつたとは……。

「ウエインド先生には、本当にお世話になりました。あの頃はまだ、ドラグライド装甲機竜は使っていませんでしたが、先生とジークのお陰でここまで力を得たといっても過言ではありません。でも……」

と、懐かしむようなセリスの口調が、ふいに憂いを帯びたものに変わる。

ルクスの祖父であるウエイドは、旧帝国の悪政を咎める進言をした末に投獄され、牢の中で生涯を終えた。それがきっかけで、ルクスの母とアイリも宮廷を追放されたのだ。そのことを思い出しているのだろうと推測したルクスだったが、

「私は、ルクス・アーカディアに謝らないといけないのです」

「え……？」

セリスの口から発せられた意外な一言に、思わず耳を疑う。

それと同じに、ルクスの脳裏にジークの笑みが浮かび上がった。ルクスの勘が警鐘を鳴らす。これも全て、あの男の掌で動かされているのではないかと。ルクスの頬に一筋の汗が流れるのに、セリスは気付かずに拳を握る。

「でも——私は負けられません。私の判断に、多くのものがかかっていきます。旧帝国の思想を受け継ぐ男から、酷い目に遭わされ、今も悩んでいる少女もいます。彼らのことは気になりますが、今学園に受け入れるのは尚早です」

「……」

セリスの言葉に、ルクスは否定をすることが出来なかった。いや、それ以上に警戒さえ覚えた。

(なんだ、僕に警戒を訴えるようなこの感覚は……)

多分、セリスは無意識に言葉を選んでる。だが、言葉の裏にジークの存在を感じるのだ。

(僕の、考え過ぎか……?)

「そうです。私はもう二度と、間違えるわけには……」

「え……?」

ふいに聞こえた憂いの声に、ルクスが顔を上げると、

「ルノ。今日は楽しかったですよ」

そつとセリスが、ルクスの頭を撫でてくる。

「ではさよならです。お返事、待っていますよ」

学園の校門前に辿り着き、セリスは別れる。敷地内にいる、他の女生徒たちの目を避け、来客用応接室で女装を解き、ルクスは小さくため息をついた。

「絶対に、勝たなくちゃな……」

男用の制服に着替え直した後、ルクスは呟く。これが、ジークが仕組んだシナリオでも進む以外の選択肢はない。それならば、ルクスはジークのシナリオに不満を感じながらも従うことを選んだ。

「そして、どっちにしろセリス先輩に、正体を明かして謝らないと——」

そう決意を新たににして、ルクスは学園側からの小さな依頼をいくつかこなし、夜に女子寮へと戻った。

?

セリスはルクスと別れた後、女子寮へと向かっていた足を途中で止めた。何故なら、道の先にジークが待ち侘びた様に立っていたからだ。

「よう、楽しいデートだったか？」

ニヤニヤした表情で感想を聞いてくるジークに、僅かに警戒するがジークは意に介さず進める。手に持っていた機攻殻剣をセリスに投げ渡す。それは、昼間にジーク預けた《リンドヴルム》の機攻殻剣だ。

「ほれ、直しておいたから明日はこっち使って大丈夫だぞ」

「な、直したり!」

セリスは目を開いて驚く。《リンドヴルム》はジークとの戦闘で大分に損傷していた筈だ。神装機竜は汎用機竜と違って換装が利かない。故に直すためには長い時間を掛けなければいけない。それを、たった半日で直したと言うのだ。

「ああ、別に修理料金を要求しないぞ。それと、感謝の言葉も要らないからな」

「で、ですが——」

セリスが何か言う前に、面倒くさそうな仕草で手をひらひらと振るジーク。だが、セリスとしては何かここで返したかった。

「俺に感謝を言うんじゃないで、リーシャに感謝してくれよ？ 俺一人じゃ神装機竜を直すのは不可能だったからな」

それだけ言うと、ジークは「じゃあな」とだけ言って工房の方へと体を向けた。用はすんだ、とばかりのジークをセリスは止める。

「待って下さい！ どうして敵対している私の機竜を直したのですか？」

敵対しているセリスの《リンドヴルム》を直さなければ、明日の戦いは不利に傾くだろう。なのに、ジークは《リンドヴルム》を直した。ジークにとって不利益なことをしたのだ。セリスが知っているジークは効率や利益に重みを置く人物。なのに、真逆の不利益をした。行動の理解が追いつかないセリスは困惑を強めながら尋ねた。

だが、セリスの困惑とは真逆にジークは少し唸る様に口に手を置き、数舜考える素振りすると——

「ん、気まぐれかな」

「……は？」

ジークの口から出た言葉に、セリスは思わず呆けた。

「なんとなく、ただそれだけだ」

肩を竦めたジーク。その気分的な行動に、セリスは苦笑いした。だが、その表情には嬉しさと悔いが含まれている。

そして、心の声がぼつりと漏れた。

「やっぱり——貴方に甘えてしまっんですね」

子供の頃はジークを頼れると無意識の内に甘えていた。『騎士団』シヴァアレスの団長になって、神装機竜も得て、周りからも頼られる存在になり、これで自分はジークの横に並べられると思った。だけど、それでもまだジークの横には並んでいなかった。

「ん？　なんか言ったか」

小さな声はジークには届かず、逆に訝しむ。

「あ、もしかして小細工でも仕込んだとか思ってるだろ？　安心しろ。そんなつまらない事はしねえよ。ただ、細かい調整はそっちの方でしてくれよ」

「……」

セリスが思ったことなど知る由もないジークはさらつと言う。しかし、セリスの心には暗い影が射し込む。

《小細工をしてくれた方が良かった》。そう思ってしまったのだ。

「……おい、大丈夫か？」

ずっと俯いているセリスにジークが心配そうに覗き込む。ジークと目線を合わせないように顔を上げる。

「有難うございます——」

無表情でジークの横を通り過ぎるセリスに、ジークは不思議な目で追いかける。女子寮の中へ消えたセリスの最後の暗い表情の意味が分からず首を傾げた。

「よくわかんねえなあ……」

それだけ言うと、ジークは作業の続きをするべく工房へと戻った。

？

「それでは、校内選抜戦Aグループ一番ペア対、Bグループ二番ペアの模擬戦を開始する！」

翌日、ルクス&フィルファイ対セリスと、サニアがルクスとの個人戦で敗北したせいか、今日のセリスのペアは、三和音トライアドのシャリスがセリスのペアだった。

現在までで、ペア戦と個人戦を合わせ、百二十七戦が行われ、得点はルクス側が百二十六点、セリス側が百三十四と、昨日よりも肉薄している。

一、二年生が三年生に勝利すれば、一勝につき三得点。三年生が一、二年生に勝利すれば、それぞれ一、二得点が入る。

ここまで戦い抜いてきた全学年の生徒たちも、この戦いが大きな戦局の分かれ目になるとわかっている。

故に、静かな緊張感も、演習場に満ちていた。

戦いが始まるその一方で、工房の中。徹夜作業で疲れ果てたりーシャは、ソファの上で可愛い寝顔で寝ている。その傍で起きているジークは、作業着から別の服に着替えている。真っ黒なその服は執事服とも暗殺服とも認識できる。

これから始まる戦いに、ジークもまた自分の目的のために暗躍を開始する。

？

ルクス&フィルファイ対セリス&シャリスの模擬戦は、開始早々そうそうから白熱していた。

フィルファイの神装機竜《テュポーン》が、特殊武装《竜咬縛鎖》パイル・アンカーを駆使した奇襲戦法を使いつつ、彼女独自の持ち得る格闘能力を装甲機竜で遺憾なく発揮していた。

しかし、劣勢に立たされていたのはフィルファイ達だった。

「うう………!!」

セリスの《リンドヴルム》から放たれた雷撃が、《テュポーン》の装甲を掠める。しかし、装甲を通して全身の筋肉が痺れ、《テュポーン》の制御システムも低下した。たとえ相打ちになったとしても、特殊武装の槍をぶつけければ、相手の動きを封じてしまえる。

しかも、ルクスの想定していなかったことまで起きている。

(槍の刺突速度が予想以上に速い……!!)

セリスの放つ刺突が、前回のジーク戦より速い。それが、ルクスの見切りを鈍らせていた。神装《支配者の領域》と合わせ、空間転移した瞬間に高速の刺突が飛んで来る。想定を超えた事態に苦戦を強いられていた。

なぜ、セリスの攻撃がジークの時より速くなったのか？それは、ジークが《リンドヴルム》の制御システムを改竄したからだ。セリスの操作に、《リンドヴルム》が順応できるようにした事で、以前より操作の選択に幅が出来た。

その一つに、三大奥義の神速制御が可能になっていた。ただ、セリスの神速制御はルクスやジークよりも遅い。しかし、《支配者の領域》の能力でそれを補っていた。そこに、《雷光穿槍》の雷撃も加わり厄介な技になっている。

これも全て、ジークが《リンドヴルム》を改修したせいだが、ルクス達がそれを知るすべはない。

？

白熱する試合の一方で——密かに影が動いていた。誰もいない無人の図書館。その最奥の通路にいたのは、サニア・レミストという少女だった。現在は療養という事情で、寮の自室で休むと周囲には伝えてある。扉の鍵穴に、手にしていた鍵を差し込み、ひねる。カチリと音を立てて扉が開くと、サニアはくすりと微笑みを見せた。

「ふふ、手こずらせてくれたけど、これでようやく——」

「お目当ての物が手に入る、ってことか？ サニア・レミスト」

「……!!」

突然の声にはサニアが振り返ると、そこには一人の青年が椅子に座って本を読んでいた。本を読んで暇を潰していたかのように座っているのは、黒い服に身を包んだジークだった。

「……何の用ですか？ 貴方は怪我で療養中の筈ですが、病室で寝ていなくていいのですか？ ジークⅡザン・フローリア・エリック・ルーカス」

「本当は全身が痛くて今にも寝ていたいんだけど、俺も君と同じでやらなくちゃいけないから無理を押ししてここに来てるんだよ」

ジークはそう言うと、目線を本からサニアに向け持っていた本を閉じた。

「この本か？ 単なる童話だ。勇者が魔王に立ち向かう今流行りの本らしい。一から五巻まであるシリーズ物なんだが、徐々に謎が解けて行く展開で、俺のオススメのシーンは——」

「本の感想を言うのであれば、私にはなくて他でやって頂戴。私は、忙しいの」

本の感想を述べていたジークを遮る様に、サニアはイライラを含まれた言葉を言う。言われたジークは、やれやれと呆れた仕草を態わざとした。

「せっかちななあ。まあ、いいだろう。俺もやることがあるんだ。単刀直入に言うぞ——何を探してるんだハイブルグ共和国のスパイ」

「……」

当たり前のように放たれたその言葉に、サニアは目を丸くする。

「はあ……、いくら私が貴方と敵対していたからって、他国のスパイ呼ばわりだなんて——。相当恨まれていたのですね。傷ついてしまおうわ」

「別に白を切らなくてもいいんだぞ。証拠だつて揃っているんだ」
平然と返すサニアに対し、ジークは懐から薄汚れた紙の束を取り出した。それは、サニアが学園の内情について記した、ハイブルグ宛の密書だった。

「ああ、別に俺は、お前を捕まえようとは思ってないぞ」

「……その言葉が、本当だと言う証拠は？」

誤魔化すのはもう不可能だと感じ、サニアは三つ編みに結んだ髪を解く。そして僅かに目を細めると、普段の知的な印象とはまるで違う、寧猛な気配を帯びた。

「そうだな、君の安全を保障しているとかダメかな？」

「何故、そのような事が可能なのですか？」

「君がヘイブルグのスパイだって事は俺以外に、アイリ・アカデミアが知っている。だけど、彼女は今は俺が嘘の情報を流して別の場所にいる。ここに、俺しかいないのがその証拠だ」

「……そうですか、貴方が私にそこまでする理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

サニアの安全は保障されている事は分かった。しかし、他国のスパイをしているサニアを何故かくま匿うのかが分からない。

「言っただろう。俺は、君とお話したいんだよ。だから、こうして面倒くさい席まで設けたんだ」

ジークは予め用意していた椅子を取り出して、対面に置く。

「さあ、お話をしよう。俺は、君を味方だと認識している」

「貴方は……何者なんですか」

不敵に嗤いながら着席を勧めるジークに、サニアは苦笑いで応じ用意された席に座る。

「俺は、スパイ。何処にも属さない一匹狼だ」

影が差すジークの顔に、サニアは冷や汗が出た。しかし、意地で動揺が表のようにすることは出来た。

「なるほど、同業者と言う訳ですね」

サニアの言葉に、ジークは微笑みを返した。

「さてと、お話と言ったけど内容は交渉でね」

「交渉、ですか？ 何をお望みで」

依然とニヤニヤとした表情のジークに、サニアは警戒を強める。

「君たちが欲している物を俺に渡すのを、君の身柄の安全で交渉しよう」

「……」

ある程度は予想していたサニアだったが、対価がまさか自分だとは思わなかった。サニアは、学園（こく）に来る前に「どんな物」かは伝えられているが、「使い道」までは伝えられていない。つまり、サニアはただの捨て駒であるのだ。捕まって尋問されても、全てをばらさない様に、簡単に切り捨てられるようになっていいるのだ。

それだけの命だと、軽い命だとサニア自身は理解している。だが、命令に従う以外の選択肢がないので受け入れている。そんな、塵芥（ちりあくた）の様な自分の命と同格と見ているジークに、サニアは動揺が隠せていなかった。

「そんな事が可能な訳が——」

「可能だ」

否定をするサニアの言葉を遮る様に、真っ直ぐな瞳ではつきりとジークは言う。

「脱走兵……それもスパイが捕まればどうなるか、同業者の貴方ならわかるでしょう。仮に、私をヘイブルグから逃がしたとして、新王国が私を許すとしても？」

「出来る。俺が、君の亡命の手伝いをする。新王国も君に手を出さないように俺が手を回す」

再び、ジークははつきりとそれが可能だと言う。サニアの動揺が高まり、口調に苛立ちが含まれる。

「ふざけているのですか？ 本当に出来る訳が無いでしょう」

「そこは、君が俺を信用してくれるしかないな。方法等は教えられない。もし、君が知ってしまった場合は、この交渉は無かった事になり君を殺す」

動揺して焦りながら話すサニアとは対極に、淡々と余裕に話すジーク。落ち着いたジークの声を聞いたサニアは、なんとか冷静を取り戻そうとする。

「そうか、なら信用を得るために少しばかり補填を付ける」

ジークは少しばかり考えて、サニアが欲しい物を考える。

「例えば、君が亡命した後の待遇でも考えてもいい」

「待遇、ですか？」

「そうだ。一生遊んで暮らせて、君が女として幸せになれるぐらいの金を用意しよう。それか、君がハイブルグに残している恋人が心配なら一緒に亡命させる事も出来る。——地位や君が望む物なら俺が用意してやってもいい」

「……」

ジークが告げた補填に、サニアは驚く余りさつきまで抱いていたイライラが消え、絶句で言葉が出なかった。

「貴方は何者なんですか？」

サニアは、ジークを化け物を見るような目で見る。目の前の、得体の知れない者に恐怖しながら。

「言っただろう。俺は、スパイだ」

「スパイ程度にそんな事が……」

「俺はコネがあるからな。多少の無茶は通るのさ」

同じ同業者なのにこの格差は一体何か。しかし、そんな疑問も高ぶる恐怖で消える。

「そこまでして、そんなに欲しい物なのか？」

「俺が欲しい物は、君を自由の身にしてでも余裕なぐらいだ。ただ、穏便に済ませた方が被害が少なくてすむ」

ジークにとってサニアは、踏み潰せる蟻だ。それが、簡単か面倒なのかの差だけだ。

「どうする？ なんなら俺の手足となって働いてくれてもいい。君の無能な上司よりかは待遇を良くする事を約束しよう」

「……確かに、貴方の交渉内容は良い。だが、お前は少し勘違いをしている」

サニアは飢えた肉食獣を思わせる凶暴な敵意を発し、不敵に笑った。

「私の目的は、温室育ちの貴族どもに地獄を味わせること！ その為なら、泥水を啜り、這いずり、畜生に堕ちる事も許容するッ！」

そして、サニアは機攻殻剣ソード・デバイスを抜き払った。

「……来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ、
《ワイバーン》」

サニアは汎用機竜の《ワイバーン》を纏うと、拳をジークに向けて放つ。ジークはそれを、後方に飛びのく事で避ける。やれやれと、首を横に振るジーク。

「交渉は破棄。そうか、じゃあ倒すとするか」

ジークも《オッドアイズ・ドラゴン》の剣を抜き、深紅の装甲を身に纏う。両手に特殊武装《スパイラルフレイム》と《D》ディザスターを構える。

「ふん、そう簡単に倒せると思うなよ!」

「イイイイイイイイ……!」

突如として、どこから聞こえてきた不協和音に、ジークは肩を竦める。

「角 笛ギヤラルホルンを使って幻神獣アビスを何体呼んでも、俺には勝てないぞ?」

「残念ながら私が呼んだのは幻神獣アビスではない。それに、貴様だけが知っている事が全てだと思ふなよ?」

幻神獣アビスは現れなかったが、その代わりに召喚されたサニアの《ワイバーン》が、突然奇妙な変貌を遂げた。ピシリ、と、その表面に赤黒い血管のようなものが這い、装甲が悲鳴のような軋みを上げ、フォース・コア幻創機核が不吉な輝きを帯びた。無機物であるはずの装甲機竜ドラゲライドが、まるでひとつの生物のように——蠢き出す。

「それは……そうか、ユグドラシルの種を機竜に流用したのか。あいつらしいやり方ではあるが、相変わらず一つに固執するのは変わってないようだな」

ジークは一度、驚く様に大きく目を開いたが、今度は嫌悪する様な鋭い目つきに変わる。

「強化する代わりに、負担が大きい。死にたく無ければやめといた方がいいぞ」

「私の命など最初から、クズの様な物。ならば燃え尽きるまで戦うまでだ!」

全てを嘲笑う狂気表情をしているサニアに、ジークは一瞬だけ言葉を失うが、今度は歪んだ笑みに変わった。

「いい覚悟だ……その覚悟が本気ならば、チャンスを与えてやろう」
そう言うと、ジークは道を譲る様に後退する。それをサニアは、訝

しむように目を細める。

「何の真似だ？」

「勘違いをするな。そこにある物は渡さない。ただ、お前のやりた
い事をしろ。復習を果たせ」

数瞬待って、ジークが何もしてこないのを感じ取ると手にした
機竜息砲キヤノンを図書館の壁目掛けて放つ。壁に大穴が出来るとそこから
サニアは、演習場へと向けて飛び立った。

「さて、終焉神獣ラグナレク以外にも群れる蠅が来たか」

ジークが天を仰ぐとそこには、装甲機竜ドラグライドの大軍がいた。

「戦争だ……闘争、競争、殺し合い」

懐かしむような、嬉しそうな、狂喜の表情でジークは剣を掲げる。

——グ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！

天災の凶兆を思わせる、聞いたことのない異音が辺りに響く。同時
に凄まじい地鳴りとともに、学園全体が揺れる。

ゴバアツ！

演習場の地面から、柱のような触手が、一斉に這い出てきた。

大海の怪物——終焉神獣ラグナレク『ポセイドン』。旧帝国が世に放った災厄
の一体が眠りから目覚め、『騎士団シヴァレス』の目の前に現れた。

「さあ、セリス、ルクス。お前らは生き残れるか？」

ジークを中心に虹色の環が広がる。この災厄を楽しむ様に、ジーク
は嗤い続ける。

Part 16 終炎の剣

ルクス達がいる演習場から離れた学園。そこでは、所属不明な機竜ドラッグナイト使いが敷地内を包囲していた。

ジークの嘘の情報によって、まったく別の場所にいたアイリと一、二年生の『騎士団シウェアレス』達は所属不明の機竜ドラッグナイト使いと交戦するが、実戦の経験が不足している学生達では防戦するするだけで手一杯で戦える人数が少なくなってきた。

「こんな数を私達だけじゃ……!!」

「諦めてはいけません！ 助けが来るまで耐えきるのです！」

普段は明るいティルファアも、今は恐怖で必死に戦っている。櫓を飛ばすノクトも、普段の冷静さを欠いている。包囲している男たちは、恐怖で顔を歪めている少女たちを見て、ケタケタと笑っている。

「おいおい？ こんなところで寄り道していいのかよ？ 後で『ケロボロス』の連中に怒られるぜ？ 俺たちの目的は、学園長と例のものを探すことだろ？」

「構うもんかよ。普段は危険な任務でコキ使われてるんだ。これくらいは臨時報酬がなくてどうする？ 俺たちは探し物の過程で、仕事の邪魔をしたコイツらと一戦交え、捕虜にした。いろいろと使い道は豊富だぜえ」

「……っ!!」

その悪意に満ちた男たちの言葉に、ティルファアとノクトは青ざめる。

「じゃあ、怒られないようにさっさと終わらせるか！」

男は、機竜の基本能力のひとつである《機竜咆哮ハウリングロア》を放つ。連戦で消耗し切っている二人には障壁で防ぐことは出来ない。しかし、二人の背後にはアイリと、戦えなくなった少女たちがいる。ここで、この攻撃を避けるわけにはいかないのだ。

衝撃波の直撃に備えて、ティルファアとノクトは目を瞑る。しかし、一向に吹き飛ばされる気配を感じられない。恐る恐る二人は目を開けると、そこには装衣を身に纏ったエリックが笑いながら立っ

た。

「大丈夫か？」

機竜を纏って無い状態で、エリックは《機竜咆哮》ハウリンググロアを生身で受け止めたのだ。

「なっ?! お前、何者だ!」

人など容易く吹き飛ばす衝撃波を、単なる人間の生身で受け止めた。理解出来ない事实に、男たちは警戒を強くした。しかし、エリックはまったく気にすることなくテイルファーとノクトの頭を撫でる。

「よく頑張った。後は俺がやるから君たちは休んでいてくれ」

そう言い終わると、エリックは男たちに向き直る。

「さあ、今度は俺がお前たちの相手をしてやる」

突然現れたエリックに、男たちは狼狽する。余裕を保っているエリックは、煽る様に人差し指を男たちに向けると、「かかって来い」とジャスチャーを送る。怒った男たちの一人が、機竜息砲キャノンをエリックに向ける。

「死ねっ!」

砲身が迸り、熱塊がエリックに殺到する。直撃すれば即死の攻撃の前にして、エリックは余裕のままだ。

エリックの周囲に、緑色の粒子が集まる。粒子同士が結合し、緑色の装甲が形成される。無詠唱の高速展開。セリスとは違って、エリックは機攻殻剣ソード・デバイスに触れず《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》を纏った。《クリアウイング》の腕を伸ばし、掌で機竜息砲キャノンの砲撃を受け止める。そして、空気を掴むかのように握り潰した。

「……」

先ほどは言葉が出た男たちも、今度は驚きの余りに声さえ出なかった。

「前はジークの命令で、わざと負けたが」

喋りながら、《クリアウイング》の周りに風が集まり始める。その風量は、セリスの時より多くなっている。

「今回は思う存分に暴れていいと言われている」

風が嵐に変わり、周囲の物を引き寄せる竜巻を形成する。

「さあ、ぶっ飛ばされたい奴はどいつだア」

エリックは圧倒的なオーラを纏い、不敵な笑みを出し、殲滅を開始する。

？

学園内の女子寮へと続く道。そこでは、異様な光景が広がっていた。胸に大穴を開けられた所属不明な機竜使たちと、両腕を血で真っ赤に染めた少女が立っていた。虚ろな目で立っている桃色の髪の少女——フィルフィ・アイングラムの後頭部に、硬い金属が当てられる。

「止まれ。試験体50」

冷たい声と共に、撃鉄を落とし何時でも撃てる準備をするジーク。手に持っているのは、回転式拳銃リボルバーと呼ばれる装甲機竜が世に広まり、その姿を消した旧世代の武器だ。

「実験は失敗で終わったと思っていたんだが。まさか、成功していたなんてな。彼奴の背伸びした実験も、無駄ではなかったって事か」

ジークは話しているが、その声はフィルフィには届いていない。ジークはフィルフィの状態を観察しながら、ゆっくりと拳銃を懐のホルスターに戻す。それと同時に、フィルフィは糸が切れたかの様に地面に倒れこむ。目を閉じたフィルフィは、小さく寝息を立てる。

「……フィルフィ。君がこうなったのは俺のせいだ。許す必要はない。一生憎んでくれてもいい。ただ、最後まで利用はさせて貰う」

ジークの暗い澱んだ瞳に、フィルフィが映り込む。踵を返すと、《オッドアイズ・ドラゴン》を纏いその場から飛び立った。

？

「う……。く……」

「大丈夫ですか？ セリス先輩!!」

演習場を囲う壁面の半分が崩壊し、地面が深く陥没した演習場の中で、ルクスは《リンドヴルム》ごと、セリスを抱き起した。

演習場の真下から現れた大型の幻神獣アビスにライグレイ含む教官達が対処しようとするが、その圧倒的な触手の数に手が回っていないでい

る。何故か、ここには『騎士団』のメンバーがいないのは不思議だが、この大型の幻神獣——終焉神獣『ポセイドン』が現れたのも誰かの手引きが原因なのかもしれない。しかし、そこにリーシャとクルルシフアーが手助けに来たが、今度は女子寮の方に見覚えのない装甲機竜が現れ、セリスの命令でリーシャとクルルシフアーは救援に向かった。

瓦礫から脱出したセリスは、一人でポセイドンに立ち向かう。セリスの捨て身の攻撃で、ポセイドンは一度倒されるが、突如として現れた黒いローブが角笛を吹くと。ポセイドンは蘇った。焼け焦げた触手は再生し、槍に穿たれ穴が空いた胴体は塞がった。全身に赤黒い線が走る。セリスと出かけた際に、キマイラが見せたものと同じ変化だった。

再び動き出したポセイドンは、咆哮とともに学内の敷地内を震わせる。このままだと、学園そのものが破壊されてしまう。まずい、と思ったセリスが蘇ったポセイドンを倒そうと動き出すが、突然に横から砲撃が飛んできてセリスは瓦礫に吹き飛ばされてしまった。

「さすがはセリスお姉さま。まだやられていませんでしたか」

穏やかな微笑みを浮かべたサニアが、中空からセリスを見下ろしていた。普段の穏やかな雰囲気からは一転。長い髪を下した荒々しい姿だ。更には終焉神獣と同じ、奇妙な赤黒い模様に覆われた、『ワイバーン』を纏っていた。

一年生の時から自分を慕ってくれた少女に、裏切られた事を受け入れることが出来ないセリスと、それを嘲笑うサニア。それを見た、崩れた観客席の上にはいた黒のローブの影が、哄笑を上げた。

「頭悪いなあ、さすがは脳力の公爵令嬢さまだ！ お前は俺たちに踊らせてたんだよ！ そのサニアはうちが送り込んだスパイだ！ この俺が軍師を務めてやってる、ハイブルグ共和国のな！」

「……！」

ローブの言葉に、セリスは絶句する。一方サニアは、怪訝な顔をローブ姿に向けた。

「よろしいのですか？ その名を出してしまっても？」

「あん？　なんだよお前？　まさか連中をひとりでも生かして逃す気か？　この場で全部忘れさせてやれよ。そいつがお前の仕事だ、エイブルグの犬」

「了解——そういうわけで名残惜しいですが、死んでください。セリスお姉様」

「……な、何故ですか!?!」

冷たい笑みで見下ろすサニアに、それでもセリスは声をかける。

「全ては嘘だったのですか!?!　あなたが私に言ったことも……。あなたから聞いた、男性から受けた酷い扱いも仕打ちも、全て——」
「継るような声と表情、その全てを断ち切る笑みで、サニアは答える。
「セリス姉様。あなたのおかげで、この国を滅ぼせます。ありがとうございます。感謝しています。あなたのその愚かな名声は、私の国でしっかりと広めておきますから——さよなら」

ゴッ!

と、サニアは言葉を終わると同時に、大型のブレードを振りかぶり、セリスに切りかかる。しかし、横合いからの攻撃に、サニアは攻撃を止めた。

「残念だが、お前の復讐タイムはそこまでだ」

横合いから攻撃したのは、《V・F・D》ザ・ビーストを構えたジークだった。

「ちっ！　またお前か。色々邪魔をしてくれたお礼に、お前もここで地獄に送ってやる!」

サニアは敵意を更に強くして睨みつける。しかし、ジークはそれを用意に介さず、片腕を上げ掌に小さな黒い霧を形成する。

《〈幻影霧剣〉》ファントム・フォッグ・ブレード

霧は一本の剣に変形し、ジークはそれをセリス目掛けて投げた。剣はセリスに当たる直前に、地面に突き刺さる。剣は突き刺さった地点から複数の剣を形成、広がり、セリスを囲い込む。

「な、なんですかこれは!?!」

「悪いが、お前はそこで休んでいろ」

拘束されたセリスは外に出ようと藻掻くが、見えない壁に弾かれる。内と外を隔てるこの特殊武装は、如何なる外的攻撃も無効化出来

るが、如何なる攻撃も敵には当たらない。

「こんな状況で貴方は何を言っているのですか?! この拘束を解きなさい!」

「神装と特殊武装の使い過ぎだ。それ以上は危ないぞ」

セリスは強がつてこそいるものの、その体は既に限界を超えている。ジークが《リンドヴルム》に施した制御系システムの改竄は、操縦者の能力を最大限に活かせるが、裏を返せば体力と精神の消費が激しくなっている。

「しかし、私がここで休んでいては校舎にいる生徒たちは——」

「安心しろ。既に向こうには『俺』を送ってある」

セリスの声を遮る様にジークが話した瞬間に、校舎の方から巨大な竜巻が巻き起こった。そこから吹き飛ばされるのは、所属不明な機竜ドラッグナイト使い達。

「リーシャとクルルシファアも向こうに行っている。ここも俺とルクスで、あの烏賊を倒す。お前は休んでいる」

ジークはそう言うと、《V・F・D》ザ・ビーストを構える。

「ふん、それよりもいいのか? お前らが今庇っているのはルクス。アーカディアの祖父の仇だぞ」

突然放たれた不可解な一言に、ルクスが眉をひそめる。

「どういう意味だ? さっきの言葉は——」

上空で不敵に微笑むサニアを睨みつけ、そう問いかける。

「道化だな、雑用王子。お前は何も知らないのか?」

「サニア! それは——、あなたにだけ……!」

縋るように絞り出されたセリスの声を嘲笑い、サニアは答えた。

「お前の祖父を殺したのはその女だ。そいつがかつて、旧帝国の政治の腐敗をお前の祖父に伝え、そのせいで進言したために投獄されて死んだのさ」

それを聞いたルクスの動きが止まり、セリスの顔が青ざめる。一瞬の硬直。その隙に、サニアは機竜息砲キャノンを構えた。

「お前たちは終わりだ! このまま、終焉神獣の餌となれ!」

そして、サニアは赤黒い刻印の浮かんだキャノンを構え、発射した。

極大な光芒が、恐怖に震えるセリスへと襲いかかる。その瞬間、^{ラグナレク}終焉神獣の咆哮とともに黒い霧が撒き散らされ、ルクスの視界が暗転した。

「やれやれ……」

呆れた声とともに、砲撃を《^{ザ・ピースト}V・F・D》で両断するジーク。そして、間髪入れずサニアに間合いを詰め斬りかかる。

「面倒なことになってきたな」

「何がだ？ セリスティアの事が心配なのか？」

嘲る口調で、鏢迫り合い状態のサニアはジークを挑発する。

「いや、そっちは別に気にしていない」

しかし、ジークは気にしていない様子で流すと、一度サニアとの距離を離し再び斬りかかる。

「あいつらの問題は、あいつらで解決する。それよりも、問題は目の前のことだ」

幾度と切り結びながら、ジークは目下の^{ラグナレク}終焉神獣に視線を向ける。

「あの烏賊を倒すには、俺一人じゃ出来そうにないな」

ポセイドンから伸びる触手を、ジークは斬撃を飛ばして斬り飛ばす。しかし、斬られた触手の断面からまた別の触手が生え変わった。その光景を見て、ジークは舌打ちをする。

「ちっ。これじゃ埒が明か——」

「くらえっ！」

サニアは、構えた黒い刻印の^{キヤノン}機竜息砲をジークに向けると、引き金を引いた。熱塊がジークへと迫り、そのまま直撃し爆ぜた。やったか？ そう思ったサニアの思考とは裏腹に、黒い煙の中から、半壊した剣を持ったジークが出てきた。

「当たる直前に剣で防いだか。だが、これでお前の武器は使い物に——」

サニアが言い終わる前に、手にしていた^{キヤノン}機竜息砲に罅が入り崩壊した。

「なにっ!?？」

「《幻影騎士団ブレイクソード》」

サニアは武器がいつの間にか壊されていた事に驚愕していると、ジークは手に持っていた壊れた剣を、黒い霧に霧散させた。

壊れる事で能力を発揮する特殊武装。その能力は、「この剣と相手の武器一つを破壊する」。手にしている《V・F・D》が、《オツドアイズ・ドラゴン》のエネルギーを吸い上げ光を帯びる。

「崩撃」

永久連環の連続攻撃によって無数に放たれた斬撃が、サニアの《B―bloodワイバーン》を破壊する。四肢、翼を切断された《B―bloodワイバーン》は、地上へと落ちていく。残骸にはサニアが苦しそうに呻いている。

「――顕現せよ、神々の血肉を喰らいし暴竜。黒雲の天を断て、《バハムート》！」

巨大な黒の機竜が、演習場を満たしていた黒い霧を斬り払い飛翔する。《バハムート》を纏った『黒き英雄』――ルクス・アーカディアは戦友のジークの側まで行く。

「ごめん、待たせた？」

「待つのはいつもの事だろ？それよりか、この烏賊をとつと倒すぞ」

黒い刻印が浮き出る触手を伸ばしながら這いずるポセイドン。動いた余波だけで、演習場が破壊されて行く。

ジークは補助武装《V・F・D》を、ルクスに投げる。

「おわあ!! 投げるなら事前に言つてよ!」

「投げた」

「過去形?!」

ルクス目掛けてクルクル回転しながら投げられた大剣を、ギリギリで柄部分を掴む。怒るルクスに、ジークは淡々とした口調で対処する。

「《バハムート》の制御系に介入して、《烙印剣》と《V・F・D》を合わせてある。とりあえず、二本を合体させる」

「え、いつの間にか?」

「リーシャと徹夜していたからな」

ジークが指を鳴らすと、《V・F・D》ザ・ピーストは分解され《烙印劍》カオスブランドに組み込まれる。漆黒の大剣に白銀の刃が付与される。

「っ……おつも!?？」

元が巨大だった大剣に、更に大剣だったパーツが追加されて大きさも重量も一回り上になっている。大剣を両手で持っていてても重過ぎるその重量に、ルクスは地面に落ちて縫い付けられてしまう。

「こんなのだうやって振ればいいんだよ!!」

《バハムート》の出力で持っても、この大剣を持ち上げることが出来ない。破壊力が上がっても、機動力が無くしてしまったら意味がない。

「強制超過リコイルバーストで持ち上げられる。《暴食》リロード・オン・ファイヤと併用して使えば威力が上がる」

「わ、わかった……」

《バハムート》を意図的に暴走させることによって、負荷と引き換えに10倍以上の出力を引き出すことが出来る三大奥義の一つ、《強制超過リコイルバースト》で大剣を持ち上げる。

「ぐう、うおお。お、重たい」

「威力は控えめに抑えとけよ」

ゆっくりとだが、大剣を持ち上げる。そして、そこに《V・F・D》ザ・ピーストの能力によって《バハムート》のエネルギーを吸収し、大剣にエネルギーを纏わせる。しかし、ポセイドンもそうやすやすと見逃してくれる筈もなく、触手を伸ばして攻撃をする。

「——《天空の光彩》スカイ・アイリス」

ジークが神装を発動させると、天空に日暈が出現し、ジークの左目が深紅に染まり、纏っている《オッドアイズ・ドラゴン》の装甲が虹色に輝く。

「揺れる、魂のペンデュラム! 天空に描け光のアーキ! ペンデュラム召喚!」

日暈から勢い良く射出された追加装甲を、ポセイドンの触手にぶつけ弾く。

「雄々しくも美しく輝く二色ふたいろのまなこ！ 《オッドアイズ・ペンデラム・ドラゴン》！」

《オッドアイズ・ドラゴン》に追加装甲が送られ、《オッドアイズ・ペンデラム・ドラゴン》に進化する。

バレット・インファイター
「銃 撃 ！」

右手に《スパイラルフレ임》、左手に《機竜息砲》キヤノンを構え、交互に撃ち出す。撃ち終わったら間を空けずに零装填ゼロリパースで再び発射状態にし、撃ち出す。それを幾度も繰り返し、砲撃の波を、ポセイドンに叩き込み動きを封じ込める。それをなせるのは、《オッドアイズ・ペンデラム・ドラゴン》の特殊武装の一つの、「エネルギーを倍増させる」能力を持つ《虹 咆 哮》リアクシヨンプオースを使えるからである。

隙を生み出すために、ジークは固定砲台となりルクスに時間を作る。

「——《暴 食》！」
リロード・オン・ファイヤ

五秒間、ルクスの周りがまるで時が減速したかのように遅くなる。そして、五秒後に大剣に溜まっていたエネルギーが一気に解放された。大気を焦がす熱量を持った、光の剣。

リコイルバースト
強制超過の膂力、エネルギーを集束と発射を可能にした

リロード・オン・ファイヤ
《暴 食》、それら全てを重ね合わせて可能に出来る対終焉神獣用兵器。その名も

レーヴァテイン
終炎の剣

星を焼き尽くす終わりの剣は、その名に違わずポセイドンを両断した。一撃を持って、断末魔を上げる余裕さえ与えず、その熱量を持ってポセイドンの核を破壊した。

「うわあ……っ！！」

突然の熱風に、ルクスは悲鳴を上げる。終炎レーヴァテインの剣の直撃を食らったポセイドンから、天に向かって火柱が立った。その爆風は演習場全体を覆った程だ。女子生徒に向かって飛んで来た瓦礫をジークは、一つ残らず撃ち落とすことで守った。

「——なんだあれ……？」

砂塵が晴れて、演習場を見渡せるぐらいに回復してきた。抉れた地

面に、倒壊した客席、吹き飛んで跡形も無い演習場の壁。しかし、それらがどうでも良くなる程に目を惹くものがあつた。

七色に淡く輝き、宙に浮かぶ幻想的な物体。ルクス——いや、その場の誰もが見たことのない宝石に、一瞬戦場の空気が止まる。

「メス犬。 出番だ」

ローブ姿の声と同時に、サニアの《B—bloodワイバーン》が、その水晶を掴み、飛ぶ。バラバラに破壊したはずの機竜が再生していたことにも意表を突かれたが、終炎の剣にエネルギーを多く吸い取られたため、ルクスは動けなかった。

「貴様にはこの場で借りを返したいところだが、今は撤退してやる」
サニアは憎々しくジークを睨むと、機竜の肩にローブ姿を乗せ、空中に制止した。

「なかなか驚いたぞ？ あのポセイドンを倒してのけるとはなア」
嘲るような口調で、ローブ姿は笑う。

「だが、殺さなかった方がよかつたかもな。これでお前は、完全に俺を怒らせちまつたぜえ。『黒き英雄』サマよお」

「お前は何者だ？ その銀髪は——」

どくん、と、そう言ったルクス自身の心臓が高鳴る。長く追ってきた、腹違いの長兄。旧帝国の終わりであり、新王国の始まりとなつたあのクーデターで、帝国軍と城内の人間を皆殺しにした、あの男——。

「ヘイズ。 下手な作戦は相変わらずだな」

「……っ!!」

ルクスが答えるよりも先に、ジークが嘲笑いを含めた言葉を飛ばした。ローブ姿はイラつきを表すかのようになり、強く舌打をした。

「ちっ！ お前は昔から、癩に障る奴だ！」

がばつと、その顔を隠していたフードを、脱ぎ去つた。

「ッ……っ!!」

その表情を見て、ルクスは思わず息を呑む。ルクスやフギルと同じ、旧帝国の血族を示す鮮やかな銀髪。左右の瞳は、灰と蒼の非対称。だが、その異様な相貌より驚いたのは、フギルと思つていたその正体

が、見覚えのない小柄な少女であったことだ。

「ジークお前やフギル、胡散くせーヤツと一緒にするな！俺の名は、ヘイズと言う。よく覚えておけよ、偽王子！」

怒りを露わにしながら、ヘイズと名乗った少女。しかし、次の瞬間には怒りが嘘だったかのように嘲笑を浮かべる。

「そうだ、いい事を教えてやるぜ」

「いい、事？」

唐突に調子が変わったヘイズに、ルクスは警戒をする。

「お前たちが倒した終焉神獣ラグナレク——そいつらは普段、遺跡ルインの奥地で眠っている」

終焉神獣ラグナレクは、遺跡ルインの奥地で眠り侵入者を排除するために存在する。故に、旧帝国がこのポセイドンを起こしてしまったために、甚大な被害が出てしまった。

「終焉神獣ラグナレクをこの世に解き放った張本人。そいつが誰か、知っているか？」

ごくり、とルクスは固唾を呑んだ。ヘイズとフギルには、何かしらの繋がりがある。もしかしたら、フギルの居場所を突き止められるかもしれない。そう、ルクスが次に放たれるヘイズの言葉を期待していると、それを嘲笑うかの様にヘイズは口角を上げた。ゆっくりと、ヘイズの指が持ち上げられる。

「終焉神獣ポセイドンを甦らした奴——」

ヘイズが指し示す方向に、悪寒を感じながらルクスはゆっくりと首をその先に向ける。

「そいつの名前は、『ジークⅡザン・フローリア・エリック・ルーカス』」

時が凍り付いたかのように、ルクスは動けなかった。今、目の前にいる親友が、普段と一緒の飄々とした表情をしている。これは、夢なのか？それとも、ヘイズの妄言なのではないのか？

震える身体を抑え、ルクスはヘイズを睨み付ける。しかし、ヘイズ

はそれを嘲笑う。

「その男はなあ。アーカディア帝国の工作員として、世界中を飛び回って帝国の利益になるよう暗躍していたのさ。その一つに、遺跡ルインの攻略も含まれていたんだよ。そして、そいつは最深部に眠っていた終焉神獣ラグナレクを起こした。小国や帝国の兵士を犠牲にして、封印する事に成功したと言う訳だ！」

「そ、そんな馬鹿な……!? あり得ない! ジークは——!?」

「ふふっ、ははっ、あはははははっ」

あまりにも衝撃的な言葉に、ルクスはこれが真実なのか問おうとジークの方に振り向く。しかし、当のジークは笑いながら俯いている。ジークの表情が読めないルクスは、戸惑い一歩退がる。

「普段ならここで殺してやるが、今回は特別に無能な後輩が背伸びした事を褒めて、見逃してやる——ただ」

顔を上げたジークの表情を見て、サニアは武器を構えた。そればかりか、ルクスも腰の機攻殻剣ソードデバイスに手を掛けた。身体に駆け抜けた警報が、無意識に構えさせられたのだ。

深碧色の瞳は暗く淀み、その奥は殺意が溢れんばかりに渦巻いている。だが、瞳とは逆に口は笑みを模かたどっている。憎悪を抱き、笑う表情。まるで、壊れた人形の様な顔のジークに悪寒が走る。

「次は殺す」

威圧するジークの言葉に、ヘイズは冷汗を滝の様に流す。理解している、目の前の男がどれほど危険なのか。誰よりも理解している。戦って、勝利することが難しいことも理解している。しかし、それでも戦わなければならない。忌々しい連中に、復讐するため。

「まあいい……次でお前たちは終わる。俺を怒らせちゃった事を後悔しろー!」

そう吐き捨てて、ヘイズはそのままサニアとともに逃亡した。ルクスとジークは、追いかけるということとはしなかった。更地になった演習場に二人は立っている。

「……ジーク——」

「ルクス。知りたいことがあるかもしれないが、教えられない。お

互い不利益だからだ」

「それは、肯定でいいのか?」

「……いいか? ルクス、妄想の範囲は勝手だ。手前が何を想像しようが問題なし。ノープロブレムただ、その先は話が変わってくる。ロハじや教えられねえな」

ルクスの鋭い視線を、ジークはいつもと変わらない飄々とした言葉で受け流す。そして、話はこれで仕舞いだと言わんばかりに歩き出す。

一人更地に取り残されたルクスは、拳を強く握りしめるとジークの後を追った。

??

ジークが歩いた先には、ファンタム・フォッグ・ブレード《幻影霧剣》の中で蹲っているセリスがいた。

「よお、無茶したんだってなあ?」

ジークが呆れ声で語りかけると、蹲っていたセリスは顔を上げ、ジト目を向ける。

「違います」

きつぱりと否定を口にしたセリスに、ジークは眉尻を上げる。

「あ? 何が違えんだ? 機竜を修理して、その次の日にぶっ壊す奴を俺は初めて見たぞ」

「うぐっ……」

ジークが指摘すると、セリスは再び顔を下に向ける。

「二人で戦って、あげくに死にかけるって笑えない話だな」

更に追撃をかけるジーク。今度はセリスの顔を持ち上げて、デコに親指を当てグリグリする。普段の凜々しいセリスに、憧れている生徒たちが、ジークの説教をくらい半泣きしているセリスの姿を見たら一体どんなことになってしまふのか。そんな想像をしたルクスは、身震いを感じ考えるのをやめた。

「俺は、どこでもお前を守る自信がある。でもな、一人で戦ってくた

ぱりたくてたまらねエ奴は、どんなにしたって守りようがねエんだよ、このアンポンタン」

グリグリした最後に、デコピンを赤くなった額にぶつける。

「反省したか？」

「……はい」

項垂れるセリスに、ジークはため息を吐きながら「ぼん」とセリスの頭に手を乗つける。

「まあ、一人で生徒たちを守っていたのは頑張ったな。後で手当てしてやつからな、セリス」

「……」

ジークは朗らかな笑顔で、セリスの頭を優しく撫でる。ジークの優しい言葉と表情に、セリスは昔の訓練後のご褒美を思い出した。優しく抱き締めてくれた記憶、その刷り込みが済んでいるセリスは、無意識にジークの身体に手を回していた。

「あれ……？」

「おいおい、泣きたくて胸を貸して欲しいか？仕方ねえなあ。特別に貸してやるよ」

抱き締められたジークは、胸の中に顔を埋めているセリスの頭と背中に手を置き、慰める様に撫でる。

「違います！私はそんな事を——」

「うんうん。甘える事なんて久しぶりだったんだろ？今は誰の目もこっちに向いてないから、安心して存分に甘えても平気だぞ」

ジークの手から逃れようとしても、身体がジークから離れようとしなかった。日頃の凛々しい姿で、休める瞬間など無かったセリスは、無意識に蓄積されていたストレスと習慣されていたジークのご褒美に、セリスの欲望は爆発していた。愛を求める無意識と、威厳を保とうとする理性がセリスの頭の中でせめぎ合っていた。しかし、懐かしい記憶にセリスの理性は溶け切りそうだった。

抗えない本能と、誰も見ていない状況が徐々にセリスの気持ちを傾けさせる。恥ずかしいのに離れられない状況に、セリスは違う意味で泣きそうになった。

？

「ふあ……」

午後の授業中。ルクスは教室の中で、小さな欠伸をかみ殺した。あの謎の襲撃から、はや三日後。疲労でしばらく休養していたルクスは、ようやく授業に復帰することができた。ハイブルグ共和国からのスパイだったサニアと、軍師のヘイズ。そして、旧帝国のスパイだったジーク。余りにも驚きの事実だったが、奇跡的にこれを知っているのはルクスだけだった。

他にも不思議な事があった。学舎を防衛していたティルファア達が悪勢に立たされた時、そこに駆けつける様に現れた人物がいた。それが、ジークの人格の一つ、エリックだった。

ジークは多重人格であって、それぞれの人格をその身一つに有している。その場には同時に、存在が出来ない。だから、演習場にいたジーク、学舎にいたエリックと不可能な事が現実で起こっていた。

「——それにしても」

ルクスは窓の外を見ながら、ため息を吐く。窓から見えるのは、演習場だった物の残骸だ。しかも一番恐ろしいのは、この惨状を生み出したのが終焉神獣ラグナレクではなく、対終焉神獣用ラグナレクに用意された、《終炎の剣》レイヴァテインの攻撃だからである。あれからレイイに呼ばれたジークはこっぴどく叱られ、《終炎の剣》レイヴァテインは禁止技指定となった。

自分が開発した武器が封印された事に、落ち込むジークを思い出し苦笑いしつつ、ルクスは隣に、そっと視線を向ける。フィルフィも、特に外傷はなく無事だったらしいが、どうやら疲労が溜まっているらしく、今日も休みだった。

(後で、お見舞いに行かないとな)

さすがにここ数日の雑用は免除されているので、放課後になったこれから、フィルフィのいる医務室に向かおうと席を立つと——、

「おいルクス。どこへ行くつもりだ？今日の放課後は、全校集会の予定だぞ？」

「あ……」

と、リーシャに引き止められ、ルクスはその事を思い出す。今回の校内選抜戦で、ジークとルクス達とセリスの勝負は曖昧なまま終わってしまったが、本来であればその総合結果は、これから発表される予定だったのだ。国外対抗戦への出場者十二名を決める、本来の目的の意味で。

「行きましょう。誰が対抗戦に出るのかは、だいたい想像がつくけれど」

クルルシファーに促され、ルクスは一緒に演習場へ向かう。その途中で、クルルシファーは揶揄いを含めた笑みを、リーシャへと向けた。

「それにしても、お姫様は朝から不機嫌ね？」

「……なんだ急に。別に私は不機嫌ではないぞ」

クルルシファーに尋ねられたリーシャは、数秒の間の後に答えた。リーシャは笑って答えた様に見えたが、その笑みは何処かきこちがない。取り繕うとしても出来ていないリーシャに、クルルシファーは面白がっているのであろう。

リーシャが不機嫌なのは、実際には今日の朝からではなく2日前ほどからである。ジークがレリイに怒られたあと、リーシャにも怒られた。それはもう凄まじい。

工房で一緒に寝ていた筈のジークが、起きたらいない。外で爆音があるのを聞いて飛び出したら、学園が戦場に成り果てていた。しかも、ジークは終焉^{ラゲナレク}神獣と闘っていた。これだけなら、まだ病み上がりのジークが無茶しただけと怒りを収められたが、リーシャが一番怒ったのが別にあつた。

女子寮でハイブルグ共和国の部隊を倒した直後に、演習場から爆音と火柱が立ち昇った。嫌な予感がしつつ、リーシャは後始末を終えて急いで演習場に向かうとそこには、セリスを抱きしめたジークの姿があつた。これにはリーシャも怒りが大爆発した。心配していたのに、まさかのジークは女を抱きしめていたのだ。

怒ったリーシャに、ジークは謝り続けたが効果は無かつた。ジークは部屋から締め出され、ルクス達の部屋に止まる事態にもなる程だっ

た。二日たって冷静になったリーシャは、流石に怒りすぎたかと反省し、ジークを部屋に入れようとしたが――、
肝心のジークが、学園にいなかった。

しかし、ジークが学園から去った訳ではなく。王都に用があつて今日と明日は、学園を留守にしていただけなのだが。

「姫様はジーク君がいなくて寂しいのよね？」

「ふんっ。わたしは別にジークがいなくても寂しくは無いし、早く帰って欲しいとも思っていない」

「別に帰つて来て欲しいとは聞いてないわよ？」

「っ!? ええい、やめろクルルシファー!」

完全に凶星を突かれたリーシャは、顔を真っ赤にし、ルクス達を抜かして早歩きで演習場に向かった。それを見たクルルシファーは、小悪魔めいた笑みを浮かべ、ルクスは苦笑いをした。

「でも……ジークが王都に用つてなんだろう？」

唐突に王都に向かったジークに、ルクスは不思議に思うがクルルシファーもわからず首を傾げるだけだった。

??

王都の一等地にあるレストランは、どれも一流の店だ。提供する料理は、どれも素材から調理法まで拘った絶品であり、城塞都市の高級店程度とはメニューに並ぶ価格の桁が違っている。そして、口にした者にその金を支払っても後悔などさせない美味を提供している。調度品も食事の体験に確かな付加価値を与える一級品ばかりであり、落ち着きながらも品のある高級感を漂わせている。

当然ながらそれらの環境を維持する為には、多額の経費を必要とする。その店を支える客層も相応に裕福な者ばかりだ。平民の感覚では狂気の沙汰と思つて思つてしまうほどの大金を平然と支払える者達を顧客としている。

そして、その店の個室ともなると料金も更に跳ね上がり、その顧客達であっても下手をすると予約すら一苦労となる。貴族の上層が密

談に使用することもあり、個室の使用履歴は国政の重役すら有り難がる箔となる場所だ。

ジークは、その個室に招かれていた。少し広めの部屋には見事な調度品が品良く配置されており、大きめのテーブルには輝くような質感を放つ白いテーブルクロスが掛けられている。その上には、そこに存在するのに相応しい料理が並べられていた。

そして、テーブルの向かいには四大貴族の一つ、ラルグリス公爵家の当主。そして、セリスの父である眉目秀麗な容姿の壮年の男、デイスト・ラルグリス。

新王国でも最上位に位置するデイストをジークは、この個室に招待した。

「食事の前に、私から君に礼を言わせて欲しい。今回の襲撃で、私の娘を助けてくれた事に感謝をしたい」

「その必要は御座いません。セリスティアご息女は学園を守り、貴族の使命を果たしました。——私は身の安全を保証して貰う。その代わりに、私はセリスティアご息女の手助けをする。それが、デイスト卿と私の間に交わされた契約ですから」

ラルグリス家がジークを匿ったのは、ウエイド・ロードベルトの遺言があったからだ。ジークを匿う代わりに、セリスを一流の機竜ドラゲナイト使いに育てる。ウエイドがなせなかつた事を、ジークが代わりに成し遂げる。それが、ウエイドの今世の去り際の言葉だった。

その後、ジークとデイストは食事をしながら会話を繰り返した。傍目には上機嫌に会話している様に見えるが、お互いに探り合いをしている。

「君は国外対抗戦には出ないらしいな」

「補欠としてセリスティアご息女のサポートを致しますので、ご心配なさらず」

「本当に良かったのか？ 学園で君に信頼を寄せている者は君に出て欲しいのではないのかな」

「まあ、そこは悪いとは思っておりますが……」

少しだけ申し訳なさそうな顔をジークはする。同時刻の学園では、

ジークが代表に選ばれなかったことに動揺するルクス達が出た。

「ハイブルグ共和国のスパイが学園に入っていたのか」

「はい。学園の中でも力があるセリスティアご息女に接近したのも周りからの信頼を得るためでしょう」

次に、ジークとデイストは情報の共有に移った。

「彼女達はハイブルグ共和国、ヘイズ軍師に所属する特殊部隊です。旧帝国が崩れた後に創設され、ヘイズ軍師の指揮下により政治攪乱工作及び——極めて高度な政治的選択を要する作戦任務に就くことを旨とする部隊」

ジークがどうやって手に入れたかわからない情報に、信憑性がどれくらいか分からないが、情報の質の高さに拘るジークの情報には信憑性がある。

「ハイブルグ共和国の軍部からはこう呼ばれています——『ケルベロス』」

「……地獄の番犬とは、彼らにあつらえたような名前だな」

「今回の彼らの主任務は、新王国を潰し、再び帝国を再建——ヘイズ軍師が新たな帝国の王となること」

帝国の名前が出ると、デイストは険しい顔をする。

「アーカディア一族の血の証である銀色の髪。そして、灰色の瞳。しかし、私はそのヘイズと言う者を見た事がない」

デイストは旧帝国時代の頃からラルグリス家の当主だった。アーカディア一族の血を引く者達は見たことがあったが、ヘイズと名の付いた者は記憶にない。

「ヘイズ軍師は、帝国がまだ健在だった時の私の後輩でしたから。表立っては行動せず、裏で工作をするのが彼女の手口です」

「……君に後輩がいたのか」

「二応、形的にはそうなっていた。ただ、相互利益の為に協力していただけです」

食事をし終わったジークは、口元を拭くと水が入ったグラスを握む。

「次の彼らの行動は、リエス島付近に出現する第三遺跡・箱舟ルインアーキだと思

われます。レリイ・アイングラムと騎士団シヴァアレスもそこへと向かう意向かと」

「……そうか。奴らが潜伏している箇所の予想は」

「現在、ヘイズ軍師はケルベロスのメンバーと共に廃棄となった地下水路に潜伏しています。そこからリエス島に向かい、『帝国の凶刃』の回収をする流れです。他にご質問は？」

「……これで十分だ。カタをつけたら追って連絡する」

ジークが最後に何かないかと問うと、デイストは首を横に振ってこれで終わりだと告げる。しかし、ジークは目を細めた。

「用件はすんでいませんよ、デイスト卿。対抗策をお聞かせください」

ジークがそう言った途端に、今度はデイストの顔も険しくなる。

「私たちの間に、そこまでの信頼は？」

「……」一つ忠告を。私が本件で望むことは、ヘイズ軍師及びハイブルグ共和国の計画を頓挫せしめること。この目的を万難を排し遂行していただく、それが貴方がたの義務だ。くれぐれも——お忘れなきよう」

ジークの相手は四大貴族。下級の領民ならまず話すことすら叶わない立場の人間に、ジークは鋭い視線で臆することなく非難を口にした。ただし、そこは流石の四大貴族の当主。諜報員程度の睨みなど、一切気にすることなく反撃をする。

「私たちが、旧帝国お前のくだらん喧嘩に手を貸すのは、利害の一致だ。私は旧帝国おまえの飼い犬ではない。旧帝国の太鼓持ち風情が、私をいつも顎でこき使えると思うなら、それは致命的な間違いだぞ」

デイストがそう言うのと、ジークは顔を俯かせる。デイストが釘を刺せたかと内心で安堵するが、俯いているジークが、それらの感情を嘲笑う。

「……ふ、ふふふ、くふふふ……ふふ。デイスト卿。あなたこそ、思い違いもはなはだしい」

顔を上げたジークは、まるで哀れな子供を見るような目で、デイストを見つめる。

「一つ。我々は『帝国の太鼓持ち』ではない。帝国という国そのものが、機関という無数の頭を持つ——多頭獣だ。帝国を守護するすべての機関もまた帝国の旗を抱く者。即ち——我々すべてが、アーカディア帝国なのですよ」

アーカディア帝国は滅びたが、その意思は今なお新王国の闇の中で生きていく。

「それでもう一つ。恫喝は、己より強大なものには効力がない。四大貴族は、個人や組織を屈服させる力を持つが——我々には国そのものを屈服させ、殲滅させるだけの力がある」

「我々はこの世界で、『唯一』、『最たる』、そして——『最強』だ。」

「だからあまり……」

「俺の帝国を舐めるなよ？ チンピラ」

ジークの挑戦的な視線と、デイストの鋭い視線がテーブルを跨いでぶつかる。一触即発の空気になるが、この個室は争い事は禁止になっているので、ジークとデイストは矛を収めた。

「ま、今回の情報はこんぐらいだ。セリスティアかアンタの手柄にでもすればいいさ」

それだけ言い残すと、ジークは立ち上がり出て行こうとする。

「……君の手柄はどうなっているんだ？ 慈善事業で動く君ではないだろう」

「その辺は俺を匿ってくれた時の借りだ。必要ない」

最後にその会話だけして、ジークは部屋から出て行った。

コラボ Part 1

「……よし、アルベルト」

座学の授業が終わって、次の授業の機竜の実演授業に女生徒が向かっている中、ジークはアルベルト——こことは違う世界から来た機竜ドラッグナイト使い——に声を掛けた。

「な、なんだよジーク」

どこか警戒を含んだ声でアルベルトは答える。しかし、まあ警戒するのはこちらの方なんだが。

「——決闘だ」

「……は？」

ジークから発せられた言葉に、アルベルトは間拔けた声を発した。やれやれ、間拔けな顔が更に間拔けに見えるぞ？

「理由を……聞いても？」

「これは失敬。なに、簡単なことだ——面白そうだから」

「面白そう、からだ？」

彼は傲慢に、しかも爽やかに微笑んだ。その異常性に、アルベルトは少し怯んだ。戦闘バトルジャンキー狂なのか、それとも本当に狂人なのか。

「あー……ジークはそう言う性格なので気にしないでください」

「そうよ。相手には情けや慈悲は与えない、傲慢で気高き姫君の剣よ」

いつの間に横にいたルクスとクルルシファーが、苦笑いでアルベルトに言った。

「そう、なのか……。それは難儀だな」

「まあ、ここ最近身体の傷がやっと治って、少し訛っている身体を動かしたいんだけどな。それに——」

そう言って、ジークはちらつと今から演習場に向かう女生徒たちを見た。

「異世界から来た機竜ドラッグナイト使いが、どれぐらいなものか彼女たちにも見せて上げたい。少しは勉強になると思うし」

「そう言うことなら、まあ……」

ジーク・ザン・フローリア・エリック・ルーカス。不思議な男だが、どこか憎めない性格だ。

「だがまあ、ただ戦って『はい終わり』じゃつまらない」

「何か罰ゲームでもやるのか？」

「そうだなあ……確かバカベルト。ケーキ作れるんだったよな」

先程、学園長室で話していたのを思い出す。俺も料理は人並み以上は作れる。

「おお、ナチュラルに人の名前前で貶して来たよこの人。まあ、ケーキとは言わずデザート全般ならば」

「よし、じゃあ負けた方が勝った方にメシを振る舞うってどうだ？」

「まあ、それならば」

OKとジークは頷き、両者の間に決闘が受託された。

「ルールの方はっと、そろそろ移動しないと先生にどやされるな」

時計を見たジークは次の授業の準備をするべく部屋を出て行く。

そのまるで自己中心的な行動に、アルベルトは目を丸くしていると、

「ほら、私たちも行きましょう」

「お、ああ、悪いクルルシファー」

クスツと笑って、呆気にとられているアルベルトに話しかけるクルルシファー。

「ふふ、不思議ね」

「何が不思議なんだ？」

「アルベルト君とは初めて会った筈なのに、これが最初じゃない気がするの」

（そうか、俺の世界とこっちの世界は違うのか）

アルベルトの世界では、クルルシファーとは恋人（仮）の関係だったが、ジークの世界では誰が――

「なあ、クルルシファーはアホークとどういう関係なんだ？」

「あら唐突ね？」

「いや、言いたくなかったら言わなくても――」

「ふふ、安心して彼とは別にそう言う関係ではないわ。ただ、ちよっ

とだけ恨みがあるの」

「恨み？」

ええそうよ、と言ったクルルシファアの顔には影が差していた。

「アルベルト君の料理も食べてみたいけど、どちらかと言うと勝つてほしいから教えてあげるわ。ジーク君の技と戦術を——」

そう言ったクルルシファアの表情は、小悪魔ぽかった。

？

ルールは以下の二つ（授業内容と同じにするために、今回はタッグ戦とする）。

- 一、機竜は汎用機竜のみの使用とする。
- 二、降参及び戦闘不能となった場合負けとする。

「んなもんでいいか？」

「ああ、いいぜ」

円型の演出場に、ジークとアルベルトは対峙している。お互いの腰には神装機竜の機攻殻剣ソード・デバイス以外に、訓練用の汎用機竜の剣が提げられている。

「よし！ 今回はパートナーとしてどんつとわたしに任せろ」

「ああ、頼りにしているぜ」

胸を張って言うリーシャのチーム。ジーク&リーシャのペア、そして——

「後衛は私に任せて頂戴、アルベルト君」

「おっしや任せた！ だけどクルルシファアのこと絶対守るぜ！」

別の世界から来たアルベルトとクルルシファアのペア。

『騎士団』及び二学年の中でもトップクラスの実力者と、異世界から来た未知数の実力者の機竜ドラグナイト使い。それだけの名勝負、観客席は女子生徒と教官でいっぱいだった。

『——来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ、
《ワイバーン》』

「四人同時に飛翔型機竜《ワイバーン》の呼符を詠唱し、纏う。演習場全体が緊張で静まる。そして、空気が張りつめピークになった瞬間。」

『模擬戦！ 開始！』

合図と同時に、その場の四機が一斉に飛翔する。作戦は事前に決めていたのか、お互いが迷いなく動き出していた。

「うおおおおおおお！」

初めに、機竜牙剣を持ったアルベルトが突っ込む。遠距離が得意クルルシファーが援護し、アルベルトが近距離戦で挑む。オーソドックスだが強い、攻守で便利な戦法。

「んじゃあ、プランAで」

ジークの言葉に、リーシャは頷き機竜息砲を構え、ジークは機竜狙銃を構える。これで、ブレードを持った近距離とキャノンを持った中距離、ライフルを持った遠距離が二人の構図になった。

ジークは一発、アルベルトの速度を遅めべく撃つ。

「うおりゃあああああ！」

しかし、アルベルトはブレードを振るい弾丸を斬り落とすと、加速し距離を詰める。

「そう上手くいかないか」

それに対し、ジークは空中に飛翔する。飛翔型の特性を活かし、中空から狙撃する狙いだろう。リーシャはクルルシファーに近づき、接近戦を挑む。

「逃がすか！」

ジークを追い、アルベルトも飛翔した。小回りが利かないライフルでは、近距離のブレードに対応出来ない。現に、ジークはアルベルトから逃げるように飛翔する。

「どうした!?! お前の力はその程度か！」

アルベルトの挑発に乗るように、ジークは急に止まりこちらに銃口を向けてきた。

「まあまあ、そう焦るなって。それに——余りクルルシファーから離れすぎてもいいのか？」

そう言つて、ジークは引き金を引く。

「来る!!」

アルベルトはライフルの銃口から弾道を読み取り、回避した。

「噂ほどじゃないな」

「狙いはおまえじゃないよ、アルベルト・デウスマキナ」

「キャアアア!」

「ツ——!・なんだっ!?!」

アルベルトが悲鳴した方を見る。そこには、ライフルの弾丸をくらい態勢を崩したクルルシファアの姿があつた。

「この距離で……!・豆粒しか見えないぞ……!」

ジークの遠距離視もさることながら、その作戦にアルベルトは舌打ちする。

（上空で逃げ続けたのは、俺をクルルシファアから離すため。クルルシファアはリーシャと戦闘しているからこちらに援護ができない。そして——）

「らああつ!」

アルベルトはブレードを振るう。しかし、ジークは回避しまたクルルシファアに向けて撃つた。

（こいつは機竜の機動性を活かしてショット&ウェイの戦法をとつてやがる）

しかも、ライフルの装填時間チャージも短い。クルルシファアから聞いた、『強制超過』リコイルバーストの応用技、装填時間を無くす『零装填』ゼロリバースだろうか。

このままだと、クルルシファアに負担が来る。

「勝負は後回しだ、ジーク!」

アルベルトは歯ぎしりし、ジークから離れるとクルルシファアに加勢する。その背を見ながら、ジークはそつと呟く。

「まんまと引き離された時点で機竜使用ドラグナイトの失格……と言いたいところだが、仲間を見捨てなかつたことで減点は取り消しだな」

そう言つと、ジークは目を細めブレードを取り出した。

「んじゃあ、プランBで行きましょか……!」

?

「クルルシファー、大丈夫か!？」

「ええ、なんとか平気よ」

アルベルトは急いでクルルシファーと合流する。クルルシファーの《ワイバーン》は至る所が傷だらけだが、戦闘は続けられるようだ。

「さて、どうする? クルルシファー」

「そうね、数的優位には立っているけど」

確かに合流したことで、リーシャと二対一の状況。ジークは遠い所からこちらの状況を窺っている。

「ふん! 都合よく纏まってくれて助かる!」

リーシャはそう言うのと、キャノンを二人に向かって撃った。

(また見えすいた攻撃……)

先程のこともあったため、今度は警戒しながらアルベルトは避ける。しかし、この場面は何所かで見ることがある。そう、あれは――

――

(俺の世界で、ルクスとリーシャ様の模擬戦で見せた――)

《空挺要塞》を使った戦法)

リーシャの神装機竜《ティアマト》の自律して動く特殊武装、《空挺要塞》でキャノンの弾道を逸らし敵に当てる芸当。しかし、今は

その《空挺要塞》は――

(なんで、あんな易々と俺をクルルシファーに向かわせた? 先程

と同じようにジークが俺を引き付けて囿になった方が……囿!?)

その時、アルベルトの頭の中に稲妻が走った。

(いや、これがもし……そう言うことか! 目の前のリーシャが囿か!)

「しまった……!! クルルシファー……」

「プランAが不発の場合、俺をノーマークにさせるのがプランBだ。今さら気付いても遅い」

いつの間にそこにいたのか、ジークがブレードを振りかぶっていた。

対奥義『時 空 超 過』——強制超過と神速制御の合わせ技。
零から百のストップ&ゴー。一瞬にして距離を無くし、その速度は時
空を超過する。

「う、おらああああー！」

ジークは、リーシャが放った砲撃に合わすようにブレードをぶつけ
る。そして、砲撃はブレードの表面を滑り弾道が変わる。

「くそおっ!？」

そして、砲撃はアルベルトたちに殺到する。

？

ジークは黒い煙をまじかで見ながら、赤く熱せられたブレードを捨
てた。

「少しは、期待したんだ——ツ!？」

黒い煙を切り裂いて、弾丸がジーク目掛けて飛んでくる。ジークは
それを首だけで避けるが、頬に一筋の赤い線が入る。

「まだ……終わっちゃいねえぞ！」

ジークの眼前で、アルベルトが機竜息銃プレスガンを構えながら佇んでいた。
その足元でクルルシファーが倒れている。

(クルルシファーが庇ったか……)

「すまねえ、クルルシファー——」

「ふふ……大丈夫よ。後は……任せたわ」

そう言い終わると、クルルシファーは三和音トライアドに連れられ演習場を出
て行った。

「さあ、続けようか」

ジークはクルルシファーが外に出て行くのを確認すると、ライフル
を構える。

「舐めるなよ——《極限死竜》、起動」

そう呟いた瞬間、アルベルトの髪が黒と青に変わり、右目が金色に
変わった。

(……なんだ、洗礼か?)

警戒にジークがライフルを構えた瞬間、始まった――

「行くぞっ!」

アルベルトが叫んだ瞬間、ジークの視界からアルベルトが消えた。そして、ジークの目の前に現れた。

「なにっ!?!」

すでにアルベルトはブレードを振りかぶっている。反撃は不可能と感じたジークは、ライフルを盾にする。

「まだだっ!」

「ぐっ……!」

ライフルを両断され、ジークは腹を蹴られ演習場の壁に吹き飛ばされる。

「リーシャ……気を付けろ!」

また、先ほどと同じようにアルベルトが視界から消えた。そして、次の瞬間にはリーシャの目の前に現れる。

タキオン・トランスミグレーション
「時 空 超 過!」

ジークも対奥義でアルベルトの横に瞬間移動する。そして、肩の幻創機核目がけてブレスガンで射撃した。

「なっ……!?!」

弾丸が命中したかに見えたその刹那、アルベルトは横も見ずに、それを回避した。気配を察知してとつさに動いたにしては、あまりに無駄のない最小限の動き。

「ハアッ!」

「ぐう……!」

アルベルトはブレードを振るい、リーシャの《ワイバーン》のフォース・コア幻創機核を砕いた。

「これで一対一だな」

「……なんだ? そのインチキ手品」

ジークは警戒しながらアルベルトに問う。

「教えてやるよ、機竜のエネルギー生成率を上げる《デッド・ゾーン極限死竜》。攻撃を避けたのは『超直感』だ」

「直感……だとっ!?!」

『超直感』——五感を越えた第六感を極限まで高めることで、直感だけで起こしたことを100%成功させることができる。

「なるほど……未来予知と同じもんか」

摩訶不思議な手品に、ジークは納得したかのように頷く。そう、わかってしまえば手品は単なる遊びだ。

「お喋りしたいのはやまやまだが、こいつにも時間制限があつてね——行くぞ！」

先程と同じように、アルベルトは視界から消える。

「ふっ、安心しな。こちらにも策はある——」

ジーク・オブ・エクエイション

《勝利の方程式》

ジークがそう言った時、アルベルトは警戒したが、一見ジークの見た目には変化はない。はったりか？とアルベルトは後ろから奇襲をかける。

だが、次の瞬間アルベルトの目に信じられないことが起こった。ジークが背後を振り向いたのだ。偶然、いや、それにしてはあまりにも迷いが無い。

「読めていたよ、そこから来ることは」

そう言つて、ジークはアルベルトが振るつたブレードを《ワイバーン》の右腕で掴む。そして、次の瞬間には音を立ててブレードが粉碎された。

「なっ……!?!」

アルベルトが呆気にとられた瞬間を、ジークは見逃さずにプレスガ
フォース・コア
ンで右肩の幻創機核を撃ち抜いた。

「びっくりしたろ？ 強制超過で腕を無理やり強化したんだぜ。ま
リコイルバースト

あ、その代わり俺も無事じゃないけどな」

ブレードを破壊した右腕は、その衝撃に耐え切れず崩壊していく。

「ちっ……!」

アルベルトは舌打ちをしたが、気持ちを改めて距離を取ると新たなブレードを取り出す。

（そうだ、あいつはまだ俺の速さに——）

「狂竜連環！」

今度はジークの《ワイバーン》に異変が起こった。《ワイバーン》を

中心に周りの空気が放出されて行く。いや、これは違う、機竜から放出されるエネルギーがそう見えるのだ。

対奥義『狂竜連環』——強制超過と永久連環の合わせ技。一撃が必殺で、永遠の連続攻撃だ。

「さあ、これで同等だ！」

ジークは目にも止まらない速さでアルベルトに突撃する。そして、アルベルトはブレード、ジークはダガーを振るう。刃同士が触れ合った瞬間、衝撃が辺りに走った。

『キヤアアアア！』

二人から生じる衝撃と突風が観客席まで届く。両方とも右腕が消え武器はあと僅か。しかし——

ジークもアルベルトも、歪んだ笑みを作っていた。

？

「くう……！ 遠慮つてもものを知らないな、あの二人は！」

衝撃で吹く突風に顔を手で覆いながら、ルクスは文句を叫ぶ。まるで周りの事なんて関係ないような戦いかた。そして、お互いの死力を尽くすぶつかり合い。

「ルクっち！ 何が起こってるの!?!」

隣に座っていた三和音トライアドのテイルファーが剣戟の音で掻き消されなように声を張り上げてルクスに質問をした。それほど、ジークとアルベルトの戦いは今まで見たことのないほどの激しい戦いなのだ。

「ジークとアルベルトの二人の間で、無数のかけ引きが行われているんだ。アルベルトの『超直感』をジークは《勝利の方程式》で無効化する。そして、《狂竜連環》は《極限死竜》を封じるための手段として」

そして、今現在は零距离の肉弾戦へと移行した。技の見栄えも、美しい剣戟もないただただ力任せの醜い剣のぶつかり合い。しかし、それ故に一撃が必殺。

「体力の消費も激しいはず。そろそろ決着がつくよ」

まるでルクスの言葉が合図かのように、二人は一度大きく距離をとった。

？

「はあ……はあ……」

「ふー……ふー」

肩かで息を吸い、大きく吐く。頬に汗が伝いあごの先端から水滴が落ちる。

（俺以上の技の引き出しと戦略。これが神算鬼謀の異名を持つジークの実力！）

（異世界の機竜使いはここまで強いのか。正直、悔っていた部分はあつたな！）

お互い、相手の実力を認めあう。それ故に目の前の敵に勝ちたい。

（——体力が消耗し過ぎたか）

（次の一振で）

（（終わらせる!!））

ジークが踏み込むとアルベルトは腰を低くして正眼でブレードを構える。そして、ジークはダガーをアルベルトに向かって投擲した。

「虚を突いた攻撃か!？」

真っ直ぐ突っ込んでくるかと思いきや遠距離攻撃。しかし、アルベルトはブレードで一投目を上に弾いた。

「なっ!？」

いつの間にかアルベルトの目の前に二投目のダガーが迫っていた。

「——影撃」

これぞジークの十八番。一投目の後に瞬時に二投目を神速制御クイツクドコロウで放つ。二投目が一投目に隠れる仕組みになっているのだ。

「クソッ！」

アルベルトは障壁を張ってこれを防ぐ。しかし、大きく仰け反ってしまった。そこに、黒い影が中空に現れた。上に弾き飛ばされたダガーを、ジークは手に取り上から強襲をしかける。

「くそっ！ どけ！」

行く手を阻む幻神獣^{アビス}を次々に倒すが、それでも数は一方的に増えるばかり。焦りを積るルクスだが、そこに二筋の閃光が目の中の幻神獣^{アビス}を倒した。

「止まるな！」

「突き進め！」

背後からのジークとアルベルトの声に、ルクスは振り返ることなく剣を振る速度を速める。それぞれの神装機竜を纏ったジークとアルベルトによる背後からの援護射撃により、一度っきりのチャンスが生まれた。

「うおおおおおお！」

ついにルクスは幻神獣^{アビス}の群から抜け出し、ローブ姿に肉薄する。繰り出すのは自身の中でも最速の技——神速制御^{クイックドロウ}。真つ直ぐに吸いこまれるように幻創機格^{フォース・コア}へと剣が迫る。確実に幻玉鋼鉄^{ミスリルダイト}を裂く。

しかし、その手に感じる感触が来なかった。

「な……っ!?!」

おかしい。絶対に避けられる距離ではなかった。なのに——。

「——これがあの『黒き英雄』か」

「ッ……!?!」

背後からの声に、咄嗟に振り返るルクス。だが、その目の前にブレードが迫っていた。

「予想していたより、大したことがないな」

「ぐあっ！」

ブレードに叩きつけられ、ルクスは真下に落下していく。意識が飛びそうになるのをギリギリまで保ちながら、ルクスは腕を継るようにアイリへと伸ばした。

?

「くそっ！ ルクスが失敗したぞ！」

「わあとる！ それよりも今はこの大量の幻神獣^{アビス}に集中しろ！」

ジークとアルベルトは口で喧嘩しながらも的確に幻神獣を倒している。だが、数が圧倒的に多過ぎるうえ、ディアボロス等の上級幻神獣もいる。

「おいアルベルト！ その武器いいな俺も使わせてくれよ！」

ジークは三つの武器を合体させ《V・F・D》を創ると、それをアルベルトに渡した。

「注意して使えよ！」

アルベルトも《七罪武神》を《ラストカノン》に変形させ、ジークに渡す。

「俺が雑魚を倒す！ お前は奥の上級を相手しろ！」

右手に《スパイラルフレイム》、左手に《ラストカノン》を持つと、永久連環と零装填を同時に発動する。

「砲撃！！」

無限に装填と発射を瞬時に繰り返す殲滅用攻撃。それが一瞬の内に大勢いた幻神獣を灰に化す。

「うおらああああああ！！」

高速でアルベルトは《V・F・D》を振ると、上級幻神獣を次々に切り伏せていった。

いつの間にか、演習場で立っていたのはジークとアルベルトのみになっっていた。

「さてと、ややっこしい事になっちゃったなー」

ため息と共にジークは荒れに荒れまくった演習場を眺めた。

コラボ Part 2

空気の壁を破壊する勢いで、飛翔してるのは機竜を纏った三人の少年だ。《ワイバーン》を纏ったルクス・アーカディア。《オッドアイズ・ドラゴン》を纏ったジーク。《シン・サタン》を纏ったアルベルト・デウスマキナ達が目標の島に向かって進んでいる。

小隊の先頭にいるジークが竜声で声を送る。

『これから失楽園ロスト・パラダイスの上空に出る。敵陣地のど真中に突入するため、臨機応変に対応しろ』

『了解』

ルクスとアルベルトが応答を返す。これから行く場所はアルベルトが『超直感』で導いた島である。事前にジークが調べていたため、この島であることは確定だろう。

失楽園ロスト・パラダイス 園ロスト・パラダイス 昔は一つの大国だったが、突如として王族と貴族達を含め、この大国は滅びた。そして、その島は幻神獣アピスの巣窟になってしまい、地図上からその名前すら消えた。

学園からこの島までは少しばかり離れているため途中までは陸地を馬車で行き、残りの距離を機竜に乗って目的地へと急いだ。

雲の中を切り抜け島の上空に出た瞬間——

『……!?来るぞ!』

ジークの眼下に広がる島。そこが、幻神獣アピスの巣窟となった、荒廃した世界である。島の至るところで赤い点が見えた瞬間、歓迎の挨拶代わりに、対空砲火がジーク達に襲いかかって来た。

『散開っ!』

ジークの号令で三人は散り散りになって攻撃を避ける。

その三人の様子を見つめる黒いローブ姿。三人を分断させる事に成功したローブ姿は、満足そうに体を震わせた。

??

アルベルト side ——

る。

「くたばれっ!」

銃口から迸る閃光が、金色の化け物に吸い込まれていく。命中し煙を上げたのを確認し、やったかと思った次の瞬間、アルベルトは目を疑った。

「バカ……なっ!」

翼を閉じたそいつはキャノンの一撃を喰らった筈なのに、傷が一つもない。上空に悠然と滞空しているそいつは、再び咆哮を轟かせ大地に雷光を落とした。

??

ルクス side——

アルベルトが苦戦している一方で、島の東側に飛んでったルクスも同じく化け物に襲われていた。

「ぐう……!」

その表情は焦っている。その証拠に化け物と接敵しすぐに《ワイバーン》から神装機竜である《バハムート》に切り替えた。だが、焦っている理由はそれだけではなかった。

(なんで……神装が発動しない!)

そう、先程から神装である圧縮強化の《リロード・オン・ファイヤー暴食》が不発に終わってしまったのだ。

「こいつは一体!」

攻撃を避けながら敵を見る。

大蛇の様な赤い巨体に、背中に生えている翼。竜の様にも見えるその化け物は口から炎を吐き出しながらルクスに襲いかかってくる。

「一体どうすれば……」

苦戦するルクスだが、それでも活路を見出そうと奮闘をする。

??

ジーク side——

アルベルトとルクスが苦戦している一方でジークは島の真ん中を目指して進んでいた。

「こちらジーク。応答しろ……」

先程から何回も竜声を飛ばしているが、アルベルトとルクスからは応答をする素振りが見えない。いや、「応答しない」のではなく「応答出来ない状態」なのかもしれない。又は妨害を受けて竜声を飛ばせないか。

(あるいは、どつちとも可能性があるわけだが)

だが、問題はそれだけでは無かった。

「さっきから……。一度も幻神獣^{アピス}に会ってないな」

戦闘を避けるのは良いことだ。体力の消耗を抑えられるためでもある。しかし、明らかに罠だと感じる程に辺り一帯は静まり返っている。

幾度か竜声を飛ばしていると、目の前にひらけた場所が現れた。その真ん中には廃墟となった古城がある。

「ここは……」

ジークは辺りを見渡す。だが、背後からの視線に気づき振り向いた。そこに居たのは学園でアイリを連れ去った黒いローブ姿。いつの間にか背後に立っていた敵に警戒しながらジークは声を出す。

「お前、何者だ？」

短い文、そして突き刺すような殺意で、ジークは目の前のローブに睨めつける。

「我が名は《暗黒の召喚神》。《三幻魔》の殉教者である」

「あ、暗黒の召喚神？三幻魔？」

「ふん、終焉^{ラグナレク}神獣を超える究極の邪神を遂に呼び出す事だ出来るのだ」

ジークは知らない単語に首を傾げた。それを見た、《暗黒の召喚神》は嘲笑うかの様に笑ったあと、自らそのローブを脱ぎ捨てた。

「なっ……！」

ローブの中の姿を見て、ジークは絶句した。ローブの下から現れたのは人ではなく——悪魔だったのだから。

腕が人より倍太く、指が細く爪が鋭い。体は爬虫類を連想させる皮膚と甲殻類に近い鎧を身体の箇所に着けていて、背中には蝙蝠の様な翼が生えている。そして、胴体から伸びた細い首と人の顔を歪ませた様な獣の顔があり胴体と同じく兜を身につけている。

「幻神獣か？」

「違う、言った筈だ。我は三幻魔の殉教者である」

「……さつきからずっと言ってるが、その《三幻魔》ってなんだ？」

相手から更に情報を引き出すためにジークはわざと話を引き延ばした。

「この世界に終焉神獣ラグナレクを超えられる化け物は存在しないと思うけどな？」

あえてジークは挑発の態度を取る。しかし、《暗黒の召喚神》は不敵の笑みのままだった。

「——現在、貴様の仲間が《三幻魔》のうちの二体と戦っている」「ッ……!?!」

《暗黒の召喚神》の放った言葉にジークは目を見開いた。もし、コイツの言葉が本当だったらルクスとアルベルトは現在その化け物と対峙している状態だ。

「くっそ……!」

ジークはアルベルト達を助けに行こうと振り返る。

「他人の心配より自分の心配をしたらどう——」

《暗黒の召喚神》は言い終わる前にジークは行動を起こしていた。

《時 空 超 過》の高速移動で一瞬にして《暗黒の召喚神》との距離を縮めるとその胴体に向かって《V・F・D》ザ・ビーストを振り落とした。

「《三幻魔》とかどうでもいいけど、要はお前が死ねばそれで終わりだろ？」

冷静に思考したジークはまず先に召喚者を倒すことにした。化け物を増やさないためである。真つ二つにされた異形の目的は最後まで分からなかったが、これで黒幕は始末した。

「後は二人の援護に向かえばおわ——」

「もう一度言うが、他人の心配より自分の心配をしたらどうだ？」

今度はジークが言い終わる前に止められた。背後から声をかけられ、振り返ると、そこには今切った《暗黒の召喚神》が悠然と立っていた。

「お前、なんで——」

「生きてる、と言いたげだな」

ジークは自分の心の中を言い当てられて動揺が表情に出る。すると、ジークの後方で落雷と火炎が起こった。

「《降雷皇ハモン》、《神炎皇ウリア》そして最強の《三幻魔》をここに召喚する!!」

《暗黒の召喚神》が高らかに宣言すると、大地が揺れ地響きが鳴り始める。

「目覚めよ、最強の三幻魔。《幻魔皇ラビエル》!!」

地面を割き、大地から目覚めたその化け物は自分よりも何倍もある巨人だった。

「さあ、存分にその力を振るうがいい 《幻魔皇ラビエル》!!」

「ッ……!?!」

《暗黒の召喚神》が巨人に向かって指示を出すと、《幻魔皇ラビエル》はその巨腕をジークに向かって振り落とす。

??

アルベルトside——

「くっそッ!? コイツめっちゃ強過ぎだろ!」

戦闘を開始してからおよそ十数分。アルベルトは防戦一方だった。

(防御無視の雷と攻撃が通らない翼。最強の矛と盾か!)

アルベルトが心の中で叫んでいると黄金の怪鳥、《降雷皇ハモン》は叫び続ける。

「チィッ!」

アルベルトは舌打ちすると落ちてくる雷を危なげに飛翔して避ける。

「……こうなったら一か八かの勝負に出るしかない」

そう言うと、アルベルトは天高く飛翔した。それを撃ち墜とすべくハモンは落雷をアルベルトに向けて放つ。

「地獄までひとつ走り付き合っつて貰うぜっ！」

アルベルトは放たれた雷を避けるのではなく、自分からぶつかりに行った。

「うっ、ぐううあああああ!!」

直撃を食らった体に鋭い痛みと共に電気が流れる。機竜にも同じ様に電気が流れて機能が停止し、真つ逆さまに落ちて行く。

「……行くぜ——《極限死竜》!!」

アルベルトが《極限死竜》を発動すると出力が落ちていたアルベルトの機体に再びエネルギーが取り戻される。

「機能停止されるの、利用させて貰ったぜ」

《極限死竜》は機竜の幻想機核以外の機能を全て停止させ、エネルギー生成効率を上げる諸刃の技。だが、今回はそれを逆手に取り落雷で機能を止めた後に全開で幻想機核を動かし落雷の効果を弾いたのだ。

雷を纏った《シン・サタン》は《邪神竜剣》を構える。

「これで……終わりにしてやる」

落下に勢いを乗せてアルベルトはハモンへと突進する。

「■■■■■■■■■■ ツ!!」

ハモンは落雷をアルベルトに放つが、《超直感》でアルベルトは未来予測をし全て避ける。

「でいい、やつあああああ!!」

渾身の斬撃をアルベルトは振った。しかし、ハモンは翼を閉じ守りに入る。鉄壁のガードに剣は弾かれ——ない。

「てめえの雷で、切り裂かれるー!」

アルベルトが振るった剣は、ハモンの翼を切り裂いた。

敵の攻撃を弾く翼をどうやって破ったのか。その方法は、ハモンが放った落雷にある。落雷には相手の防御を上からダメージを与える効果が付与されている。

「なら、その雷を利用すればお前の防御も上からダメージを与えられるわけだ」

最強の盾よりも矛の方が強かったのだ。

「じゃあ、なっ！」

防御を失ったハモンをアルベルトはトドメの一撃を見舞った。

??

ルクス side ——

(なるほど……だんだん相手の能力がわかってきたぞ)

目の前の敵、『神炎皇ウリア』の炎を避けながらルクスは冷静に分析をした。ウリアは二つの能力を有している。

一つは、『相手の神装と特殊武装を無効化する能力』。これは発動型なので自分が神装を使わなければこの能力は働かない。

そして、二つ目。『神装と特殊武装を無効化した回数だけ、自身の力に変換する能力』だ。能力自体はかなり単純でルクスが戦い始めてすぐに気がついた能力でもある。

「——『リロード・オン・ファイヤ暴食』」

しかし、ルクスは先程から神装や特殊武装を何度も発動し続けている。能力が無効化されることも奴が強化されているのも知りながらだ。

「……もう充分かな」

十回ぐらい神装を発動してルクスは自分の策が進んでいるか確認する。ウリアの炎は地面を溶かすほどまで強化され丁度いい頃合いかと思う。

「さてと、後は僕が耐えられるかだけ……」

今度はルクスがウリアに向かって突進する。迫り来る炎を避け、懐に飛び込むとウリアはルクスに向かってその大きな口で食い殺そうと迫る。そこにルクスはブレードを横にしてぶつけた。

ギイイイイインンンンツ!!

ぶつかった衝撃で大気が震え甲高い音が鳴り響く。

「うぐっ……!?!」

その衝撃は操縦者のルクスまで響き苦悶の声を上げる。しかし――

「■■■■■■■■■■ッ!？」

大きく弾き飛ばされたのは圧倒的な力を持ったウリアの方だった。「ふう……なんとか耐えれた」

ルクスは罅が入ったブレード――《スケイルブレード障壁牙剣》を下ろしながら汗を拭う。

相手の力を利用してダメージを弾き返す事が可能になるブレード。守りを主体とするルクスの戦法に、攻撃力を入れる為にリーシャが開発した武器だ。

先程から守りに徹していたのも、敢えてウリアの力を上げ続けているのも全てはこの一瞬のためである。敵の攻撃を見切り、弾き返すタイミングを狙っていたのだ。

「エンドアクション永久連環！」

精神制御と肉体制御を交互に動かし連続でウリアを切り刻む。紅い閃光が迸った。

??

ジーク side……

ラビエルの猛攻から逃れるべく、ジークは岩陰に隠れ作戦を練っていた。

「厄介なのはあいつの能力だな……」

『ああ……まさか^{アピス}幻神獣を召喚できるとはな』

側から見たらジークの独り言に見えるが、ちゃんと多重人格の自分と会話をしている。

『あのラビエルは自身の力で^{アピス}幻神獣を召喚し更に使役が可能。これは^{ラグナレク}終焉神獣と同格と思っててもいいな』

フロリアが落ち着いた声で言う。時間が経つごとに^{アピス}幻神獣を召喚し続けるラビエル。だが、これだけではなかった。

『しかも召喚した^{アピス}幻神獣を生贄にして瞬間的に火力を出すことが可

能。物量でも火力でもこちらを上回れるとキツイぜ』

珍しくエリックが緊張した表情で話す。ジークの技の数で無限に沸き続ける幻神獣^{アピス}を捌きつつ、ラビエルの火力を上回るのは不可能かと言つて他の神装機竜でこの状況を打開出来るかと言われれば出来なくもないが――。

『ここは、僕の出番かな?』

ジークの頭の中にフローリアともエリックとも違う声が響く。

「ルーカス……お前ならこの状況を突破する事が出来るな?」

『任せてよ。沢山いる方が僕の機竜も喰いごたえがあつて嬉しいと思ふんだ』

嬉しそうにルーカスが答える。

「よし、この体をお前に貸す」

ジークは目を閉じるとぐったりと力が抜けたかの様に岩に背を預ける。だが、すぐにジークの体に異変が起きる。

前髪が紫色になり、開いた目も紫色に変わった。

「ん、久しぶりにこつちまで来たけど……戦いの匂いだあ」

ルーカスは狂気のお笑みを浮かべると、『オッドアイズ』と『ドレイク』の機攻殻剣^{ソッド・デバイス}を抜刀する。

「さてと、蹂躪するか」

そう言うとルーカスは『オッドアイズ・ペンデラム・ドラゴン』を動かし岩場から飛び出した。

それをラビエルが確認すれば召喚した幻神獣^{アピス}に命令を下す。数十は超える幻神獣^{アピス}の大群に、ルーカスは憶する事なく武器を構える。

「――崩撃」

『V・F・D』^{ザ・ピースト}がエネルギーを喰らい、斬撃に変わる。更に、永久連環^{エンドアクション}で無数の斬撃が幻神獣^{アピス}の最前列へと行く手を阻む。切られた幻神獣^{アピス}が後続の幻神獣^{アピス}にぶつかり速度を落とす。しかし、それを押し切つて無理矢理に幻神獣^{アピス}が出てきた。

「やるねえー」

だが、ルーカスの表情にはまだ余裕が残っている。迫り来る幻神獣^{アピス}を回避しつつ適度に攻撃を加えてちよつかいを出している。

「さあ、もつともつと幻神獣を出しなよ。そうしないと、僕に勝てないぞ?。」

ルーカスはラビエルに挑発すると、それに応える様にラビエルは更に幻神獣を加えた。

「さてと、お前達の運命は僕が決める」

《オッドアイズ》と《ドレイク》の機攻殻剣を重ね合わせる。

「神装——《天空の虹彩》」

ルーカスの背後に虹の輪が出現した。その眩しすぎる光に照らされた幻神獣たちは怯んで動きを止める。

「魅惑の香りで虫を誘う二輪の美しき花よ! 今一つとなりて、その花卉の奥の地獄から、新たな脅威を生み出せ! ——融合召喚!!」

二つの機攻殻剣が一つになって紫色の刀剣へと変わる。他にも《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の追加装甲がパージして、代わりに紫色の追加装甲が虹の輪から送られる。

「現れる、餓えた牙持つ毒龍! スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン!!」

追加装甲が《オッドアイズ》の装甲と融合し形作る。推進翼が食虫植物の様な顎の形をした翼。関節部にある珠が怪しく発光し、その姿は植物を模した竜の様だった。

「捕食植物」

翼の口が開き、中から無数の触手が現れた。更にルーカスが命令を送るとその植物は意志があるかの様に迫り来る幻神獣に向かって動いた。手、足に絡みつき次々に幻神獣を拘束していく。動けなくなつた幻神獣に向かって、ルーカスは残酷な笑みを浮かべる。

「さあ、食事の時間だ。——吸収」

《スターヴ・ヴェノム》の珠の中が怪しく蠢めくと、幻神獣に絡みついていた触手からエネルギーが《スターヴ・ヴェノム》に送られる。

《捕食植物》——触手状の特殊装備は、攻守共に優れた性能を発揮する装備だけでなく、相手に絡みつきその相手からエネルギーを吸収する力も備えられている。

みるみると幻神獣達は力を奪われ、枯れ果てていく。

「ふー、まあ少ないけど」

ルーカスが言い終わった後には、大量にいた幻神獣アピスが一匹も居なくなっていた。

「ぎ・て・と——終わりにしようかな？」

《スパイラルフレーム》をラビエルに向ける。幻神獣アピスから吸収したエネルギーをキャノンへと注ぐ。すると、《スパイラルフレーム》から紫色の光が溢れ出し始めた。

「■■■■■■■■■■ッ!!」

ラビエルも握り拳を作つて、ルーカスへと振るう。その威力は、能力を使っていた時に比べれば低い。それでも機竜を一撃で砕く程の威力はある。だが、目の前に迫ってくる攻撃に、ルーカスは悠然と中空でキャノンにエネルギーを貯め終えていた。

「戦慄の——」

トリガーを引き、充電し終わった力が一気に放出された。

「ポイズンサイド！」

紫の閃光が拳ごとラビエルを吹き飛ばす。岩などを巻き込みながら古城まで吹き飛ばされたラビエルは、その巨体に大きな風穴が開き動く気配がない。

「ま、こんな物かな？」

少し物足りなさそうな声音で、ルーカスは融合を解除すると紫色の機攻殻剣ソード・デバイスは元の二本に戻った。それに呼応する様に《スターヴ・ヴェノム》も追加装甲が剥がれて元の《オッドアイズ》になった。

「おーい！ジーク！」

「ん……？」

背後の上空から声が出たので振り返るとアルベルトが手を振りながら飛んで来ていた。アルベルトが到着した後すぐにルクスとも合流が出来た。

「んん？そーいやお前、ジークに似ているけど違えな。誰だお前？」

アルベルトはルーカスの姿を見て疑うが、当の本人であるルーカスはまったく聞いていない様だ。

「ふーん、この人が異世界から来たアルベルトかあ」

「あのすいません。人の話を聞いてます?」

その目はどこか品定めをする様な、あるいはどれぐらいの実力があるかを図っている。

「へー強いねえ、君」

「まー俺は強いからな」

また、ルーカスの目つきが変わった。今度は獲物を見つけた狩人の様な鋭い目に。

「僕ね、まだ食べ足りないんだ?」

「……?」

ルーカスは再び《オッドアイズ》と《ドレイク》の機攻殻剣ソード・デバイスを抜く。

「だから、君——僕の機竜の餌にならない?」

「ッ……!?!」

溢れ出たルーカスの殺気に、アルベルトは身構える。それに、ルーカスは嬉しそうに微笑むと唇を舐めた。

「融合召喚——うぐっ!?!」

機攻殻剣を重ね合わせようとしたルーカスだったが、突然にその身体が動かなくなつた。

「なんだよ。もう終わり?」

悔しそうに唇を噛むルーカスは、ぐったりと力が抜けその場に座り込む。突然に座り込んだルーカスを心配してアルベルトとルクスは駆け寄る。

「おい、大丈夫か!ルクス、こいつは何時もこんな感じなのか?」

「えっと、それは——」

ルクスがどう説明していいかと、悩んでいるとルーカスの姿が変わつた。紫色の髪が赤に変わると起き上がった彼はその深碧の瞳を開いた。

「まったく。ルーカスは一度暴走すると歯止めが効かなくなるから面倒くさいだよなお」

やれやれと、呆れたため息を吐いたジークは二本の機攻殻剣ソード・デバイスを鞘に納めると立ち上がる。

「巻き込んで悪いなアルベルト。ルーカスの暴走に付き合わせて」

頭を下げて詫げるジークに、アルベルトはむず痒さを感じる。

「あ、いや、怪我とかしてないし平気だぞ。だからそんな謝らないでくれ」

「そうだな。まあ、お前を食っても不味そうだしな」

「ああん？ テメエ俺が親切にしてやったって言うのによお！ 俺の気持ち返しやがれ！」

照れながら言ったアルベルトに、ジークは興味を失った表情でそっぽを向く。それに、青筋を浮かべながらアルベルトは噛み付く。

「はいはい、悪かった——バカベルト」

「っ!? テメエ人をバカにしやがったな！」

「だってバカだろ？」

「俺はバカじゃねえ！ このアホーク！」

何故か無意味な争いを繰り返しているジークとアルベルトをルクスはなんとか止めようとする。

「ちよつと！ アイリを早く助けなきゃ」

「おつとそうだった。事件の黒幕を見つけたぞ」

そう言っつて、ジークは倒壊した古城の方に視線を向ける。そこには、吹き飛んだラビエルを岩場から眺めている《暗黒の召喚神》がいた。ジークの視線を追ってその異形の姿を見たアルベルトとルクスは驚き目を開いた。

「こいつ……幻神アピスか？」

「俺もこんな化け物は初めて見たからな。判断が付かない」

「でも、あれを倒せばアイリを助けられてこの事件も解決する」

三人はそれぞれの神装機竜の操縦桿を握る。しかし、

「礼を言おう。三幻魔を倒してくれてありがとう」

《暗黒の召喚神》から放たれたその言葉に、三人は踏み込んだ足を止めた。

「何を言っている？」

ジークが訝しげに問う。だが、異形は歪な笑みを浮かべたままだ。

「貴様たちが三幻魔を倒してくれたお陰で混沌の王をここに召喚する事が出来る。これで我が野望が成就するのだ！」

大仰に手を挙げた異形。しかし、アルベルトは剣先を異形へと向ける。

「テメエが何を召喚しようがどうでもいいが。アイリを返しやがれ！」

「いいだろう……この娘の役割は終わった。貴様らに返すとしよう」

異形はいつのまにか手に持っていたアイリをこちらに投げ飛ばす。

「アイリ……！」

落ちてくるアイリをルクスは空中で受け止める。怪我をしていないか顔を覗き込むと気絶しているだけで、外傷は何処にもなかった。心配していたが、無事なことにルクスとアルベルトは安堵する。ただ、ジークは違和感を感じていた。

「役割ってなんだ？」

ジークがそう異形に質問を投げかけると、異形は歪な笑みを作り答える。

「混沌の王を呼ぶには三幻魔の魂が必要なのだ」

「……つまり三幻魔を倒すことに俺たちの力を利用するために、アイリを人質に取ったわけだな」

頭が回るジークはすぐに異形が述べた事がわかった。それ故に――

「ルクス……アイリを安全な場所まで連れて行け」

「……うん、わかった」

何時も以上に警戒心を表情に出しているジークに、ルクスは命令に率直に従う事にした。

「行くぞ、アルベルト」

「ああ、こいつをぶっ飛ばせばいいだな」

ルクスがだいぶ離れたのを確認し、ジークとアルベルトは武器を構える。

「さあ、混沌の王の目覚めだ！我が心の闇よ、秘めた思いを今こそ解き放つがいい！出でよ！――混沌幻魔アーミタイル!!」

《暗黒の召喚神》がそう叫んだ瞬間、横たわっていた《幻魔皇ラビエル》が青く光り暗雲に向かって光の柱が伸びた。更に別の方角で黄色と

赤色の柱も雲に向かって伸びた。

「これが、三幻魔の魂!？」

アルベルトは驚愕に叫ぶ。だが、異変はまだ続いている。

《暗黒の召喚神》の異形の体が煙になって三本の光の柱の中心に飛んでいった。そして、三色の光と異形の煙が一つに混ざり合い形を成していく。

ラビエルの頭部、ウリアの顔を模した左腕、ハモンの黄金の翼、そして三体の身体が融合したかの様なその姿はまさしく混沌の名が相応しかった。

「■■■■■■■■■■ッ!!」

アーミタイルが吠えただけで、ジークとアルベルトは後ろに押し出された。

「《天空の虹彩》!!」

今までの敵とは比べ物にならないほどの圧力に、ジークは対抗するべく神装を発動し虹の輪の中に突撃する。輪を通過すると《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の追加装甲が転送され《オッドアイズ・ドラゴン》はその身に纏う。

「《虹 咆 哮》!!」

《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の珠が紅く光ると両手で握っている《V・スパイラルフレイム》にエネルギーが充電される。

ジークの動きを見て、アーミタイルは妨害をしようと動き出す。その前にアルベルトがジークの背後からとびだして先制攻撃をする。

「うおおおおおッ!」

《邪神竜剣》を振るいアーミタイルに斬撃を見舞う。動きが止まったのを見計らってジークは竜声でアルベルトに発射の準備が出来たと飛ばした。

「螺旋のストライクバースト!」

強化された《スパイラルフレイム》から放たれた黒い螺旋と紅い閃光はアーミタイルへと向かい、直撃しそれを示す黒い煙を上げた。

「……やったか?」

「いや——まだだ」

黒い煙からウリアを模した腕がジークとアルベルトを捕まえようと伸びる。だが、済んでのところでジークとアルベルトは上に跳躍してそれを避けた。

「ピンピンしてやがるな」

「倒れるとまでは思ってたが……まさかの無傷だと少し傷つくなあ」

アーミタイルから少し離れた場所に着地すると、出鱈目な頑丈さにジークとアルベルトは呆れ声を吐いた。

「あんな化け物をどうやって倒す？　なんか案でもないかジーク」

「……あるにはあるぞ」

アルベルトの問いに数秒置いてからジークは答え、竜声を使って誰かと簡単な会話を済ませます。

「よし、いまからルクスがこつちに戻ってくるから少し時間を稼ぐぞ」
「なんかわかねえけど……わかったぜ！」

お互いに自身の得物を構える。アーミタイルがウリアの腕を伸ばしたのを合図にジークとアルベルトは飛翔した。二人が立っていた場所をウリアの大顎が地形ごと喰らいついたのを見て、背筋に冷たい物を感じたがそれを振り切る様に《V・F・D》と《邪心竜剣》《グリードスファイア》を渾身のスピードでアーミタイルに叩きつけた。

「っ……!?!」

しかし、アーミタイルの身体は無傷のままだ。何事も無かった様な顔でアーミタイルはハモンの翼をはためかせて、ジークとアルベルトを暴風で吹き飛ばした。

地面に叩きつけられた二人は大岩にぶつかるまで埃の様に転がされた。立ち上がった二人の鼓膜に叩きつける雄叫びに、ジークとアルベルトは顔を上げその瞳に映り込んだモノに絶句しかけた。

アーミタイルの大顎に濃密度のエネルギーが集中していた。ジークの演算とアルベルトの直感で見えた数秒後の未来に、回避不能な熱線が飛んでくる事に気がつく。

「《幻影霧剣》!!」

ジークが自分とアルベルトの目の前に霧を発生させたのと同時に、

アーミタイルは熱線を放った。

??

島の一部分を消し飛ばす威力を持った熱線がジークとアルベルトを襲う前に、ジークは自身とアルベルトを守った。

ファントム・フォッグ・ブレード
《幻 影 霧 剣》——内と外を霧の剣で分け、相手の攻撃から守る特殊武装。無論、こちらからの攻撃も相手には届かない。良し悪いはあれど危機的状況を回避出来る事には変わらない。

「ハア……ハア……」

「避け……れたのか?」

額から大粒の汗を流すジークと、更地になった辺りを見てアルベルトは呆けた言葉しか出なかった。ファントム・フォッグ・ブレード
《幻 影 霧 剣》の維持に力を使い過ぎたジークは满身創痕である。それでも、アーミタイルは御構い無しに攻撃態勢に入る。

(くっ……!? 次の砲撃を回避するにはどうすれば)

アルベルトが最後の切り札で《デッド・ゾーン極限死竜》を使うか悩んでいると、背後に一機の機竜が飛んでくるのが見えた。

「ジークッ……!!」

满身創痕の親友の姿を見て、ルクスは悲痛な表情で降り立った。

「ル……ルクス?」

顔を上げることも精一杯のジークは、ルクスの顔を見ると白銀の大剣《ザ・ピーストV・F・D》を渡す。

「アイリはどうした?」

「アイリなら大丈夫だよ。ここから離れた場所に漁船があったから預けて来た」

「そうか……なら、巻き込む心配は要らなさそうだな」

ジークが立ち上がるようにしたが、フラフラの状態なのでアルベルトが支える。

「ここなら禁技を使っても大丈夫だ……全力でやってしまっただけ問題ない」

だが――

「おい……」

「そんな」

「……………くっそ」

三人の視線の先、《レ・ヴァアテイン終炎の剣》で切断した爆心地の中心、そこから立ち込める煙の中でアーミタイルはまだ立っていた。

しかし、流石に無傷とはいかずアーミタイルの身体は縦に両断されており現在進行形で再生をしている。

「ジークよどうする……もう策が」

絶望の中、縫るようにアルベルトはジークに打開策がないか聞く。

「僕とジークはもう戦う力が残ってない。アルベルトだけでも逃げられるなら」

「バカを言うな！俺はまだ戦うぞ。おい、聞いてんのかジーク。なんか策とか無いのか？おい！」

「……………」

「ジーク……？」

耳元で大声で呼ばれているのにも関わらず、ジークが反応しない事に訝しむアルベルトとルクスはジークの表情を見る。ジークの目は諦めた色をしておらず、何かを考える色をしている。

「そうか……わかったぞ」

カチリッ――

ジークの頭の中の歯車が噛み合う。絡み合った紐が一本の線になった。

「俺が《暗黒の召喚神》を攻撃してもあいつは死ななかった。だが、ここで言えるのはあいつ自身が本体じゃないとあいつがアーミタイルの核だ」

「うん……？つまり何が言いたいんだ？」

搔い摘んで説明したため、アルベルトはジークが何を言っているのか理解できなかった。

「いいか、俺とルクスが《暗黒の召喚神》を攻撃してもあいつはまったくの無傷だった。それは何故か――そもそもあの異形は実体を

持ってないんだ。だから俺達が攻撃してもすぐに戻った。アーミタイルもまた同じで、三幻魔を媒体としあの異形が核となることで形を成している。実体はあるが、核にダメージが無かったら何度でも再生をする事が出来る」

「じゃあ、どうやって倒せる。攻撃は効かなくて向こうから一方的に攻撃されるぞ」

「身体を再生する時には多くの力を使う筈だ。その時に核が実体化すると思う」

再生をしているアーミタイルの何処かしこに核が存在する。だが、目視で見てもそれは確認出来ない。

「……アルベルト」

ジークはアーミタイルの核を砕く方法を考えた末に、唯一この状況で可能な人物に託す事にした。

「お前がアーミタイルの核を砕け」

「……………」

予想が出来ていたのか、アルベルトは黙ってジークの言葉を待った。

「俺とルクスはもう戦う力が無い。お前の超直感なら核も割り出せるし、その《シン・サタン》ならアーミタイルの硬い外皮も貫けるかもしれない——やってくれるか、アルベルト？」

「……………」

ジークの言葉に、俯き続けるアルベルト。そもそも、アルベルトは異世界から来た向こう側の住人だ。こちらの世界の問題に首を突っ込んだとは言え、やり遂げる必要性は無い。

ただ、ジークとルクスはアルベルトの行く末を見守る事しか——

「ふふ、ふははははっ!!」

突然に俯いていたアルベルトが高らかに笑い出した。

「この『魔王』に頼み事か？ふんっ、いいだろうこの俺様があのバケモノを退治してくれる！」

「おう、『魔王（笑）』頑張れ」

めっちゃ元気なアルベルトと、冷静なジークのやり取りをルクスは

なんも言えない顔で見つめる。

「さあ、行くぜ！」

アルベルトが洗礼を発動すると、一部の髪の色が黒から青へと変わり、右目の瞳が、黄金へと変化した。

「デッド・ゾーン《極限死竜》全開!!」

一度停止してからエネルギー生成以外の全ての機能をシャットアウトしそこからフルパワーで幻想機核フォースコアを動かす。《シン・サタン》の性能の限界を突破させる。それに合わせてX型ブースターも変形して四枚羽が八枚羽に変わる。

「翔べー！」

アルベルトが《シン・サタン》に命令を送ると圧倒的な速度で飛翔した。

「グラトニーファング《暴竜牙撃》!!」

《セブンサイド七罪武神》が変形して右脚に装着し、竜の顎門を模したグリーブになった。

「超直感！」

少し先の未来を予測する。そこから、自分が必要な要素を手繰り寄せ一つの未来を視る。

「見つけたぞ。核はそこだな」

《グラトニーファング暴竜牙撃》にエネルギーを充填すると共に、強化された神装を展開。アーミタイルの眼前に紫色の魔法陣が描かれる。まだ再生途中のアーミタイルは回避行動を取れない。

「暴食しろ!! 《シン・サタン》!!」

八枚の羽が最大に加速し、亜音速で落下する。

「シン・エンドワールド《終焉罪竜》ツツツツ!!」

《シン・サタン》が紫色の魔法陣を潜ると《グラトニーファング暴竜牙撃》に神装の力が付与された。

「でいやあああああ!!」

邪竜の力を纏った蹴りがアーミタイルの中心にめり込む。

「終わり、だあああああ!!!」

竜の顎門がアーミタイルの身体を貫く。脚の先には禍々しい核を

ちやんと捉えていた。

「ば、馬鹿な……なぜ、なぜ我が負けた——」

徐々に亀裂が入る核から《暗黒の召喚神》の声が聞こえる。最後にアルベルトは異形に告げる——。

「お前は恐ろしく強い。正直、俺一人でお前を倒せる自身は無かった——だが、俺には仲間がいる」

ここまで粘れたのは、ジークとルクスの協力があつてこそ。確実な隙を作るためにルクスが決死の一撃を振るつた事も、アーミタイルからの攻撃を満身創痍になるまでジークがアルベルトを守つた事も全てこの瞬間のためである。

繋げた希望にアルベルトは全力で応えた。

「テメエは一人だが、俺は仲間と戦つてるんだ。それが、お前と俺の差だ!!」

パキイツ!!

バラバラにアーミタイルの核が砕け散つた。散り際に断末魔を響き渡らせながら。

「あの世で、自分の罪を償え」

こうして、三人の長い戦いが終わり。《ロスト・パラダイス失楽園》での任務も遂行した。